

建築家 吉川清作の生涯と作品

AFT Journal of Architecture and Urban Cultural History Extra issue:

The Complete Works of Seisaku Yoshikawa, Architect

Published in Dec. 1, 2017 / Written and edited by Yuto Ochiai / Published by ASKEN

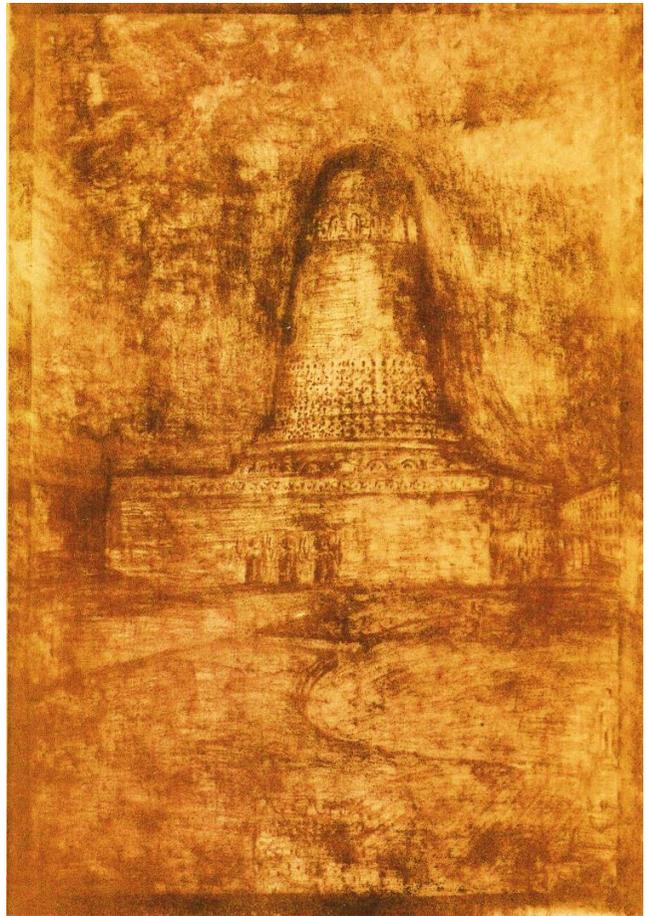
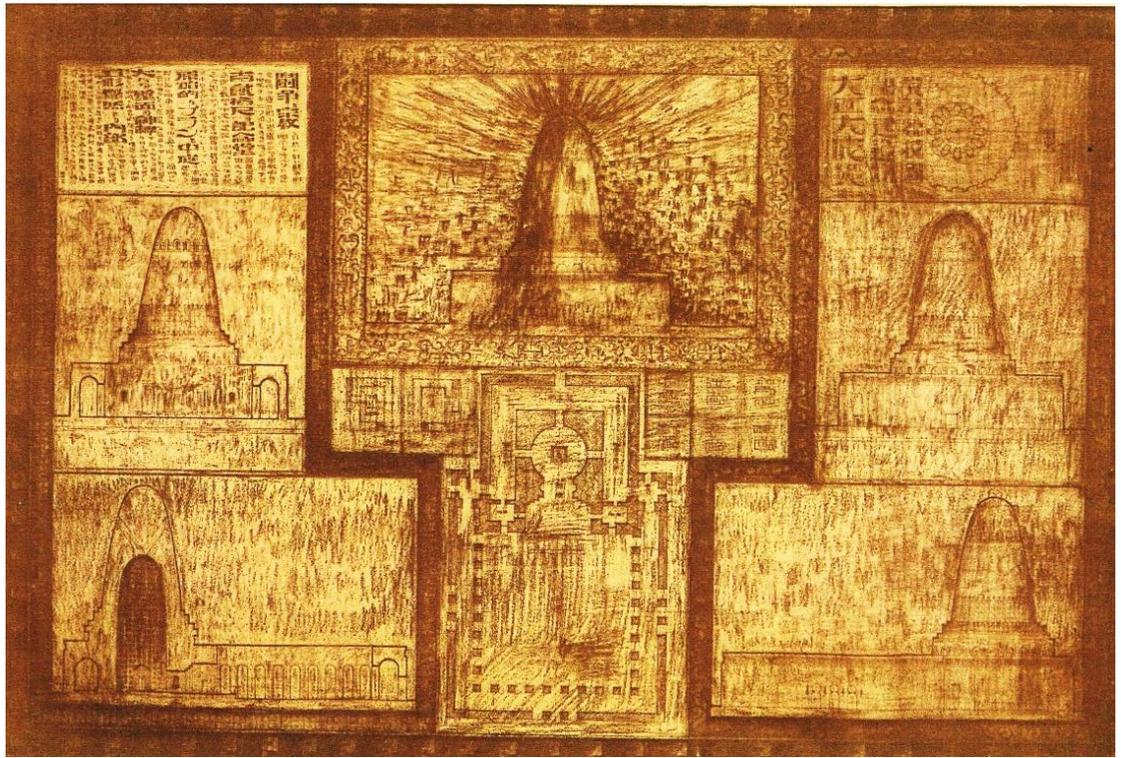
KBK Takama Bldg. 412, 1-1 Hayashikouji-cho, Nara 630-8227, Japan

E-mail: asunokenchiku@yahoo.co.jp / Twitter: @asunokenchiku

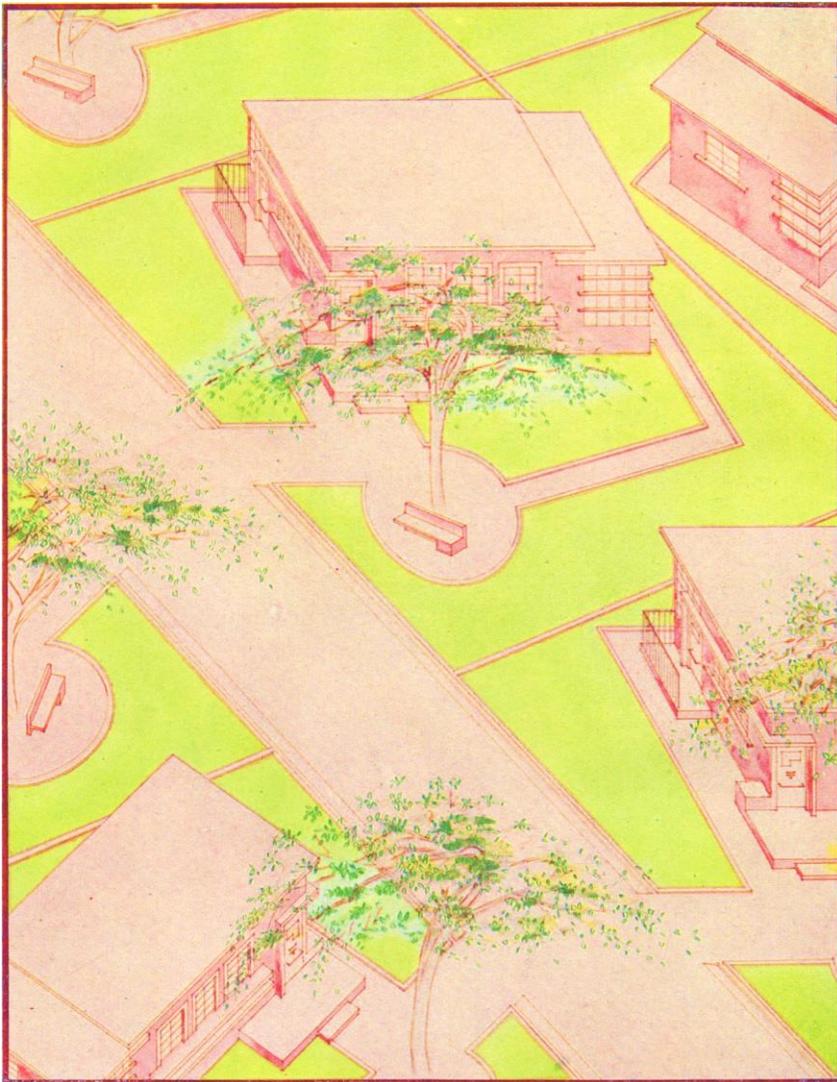
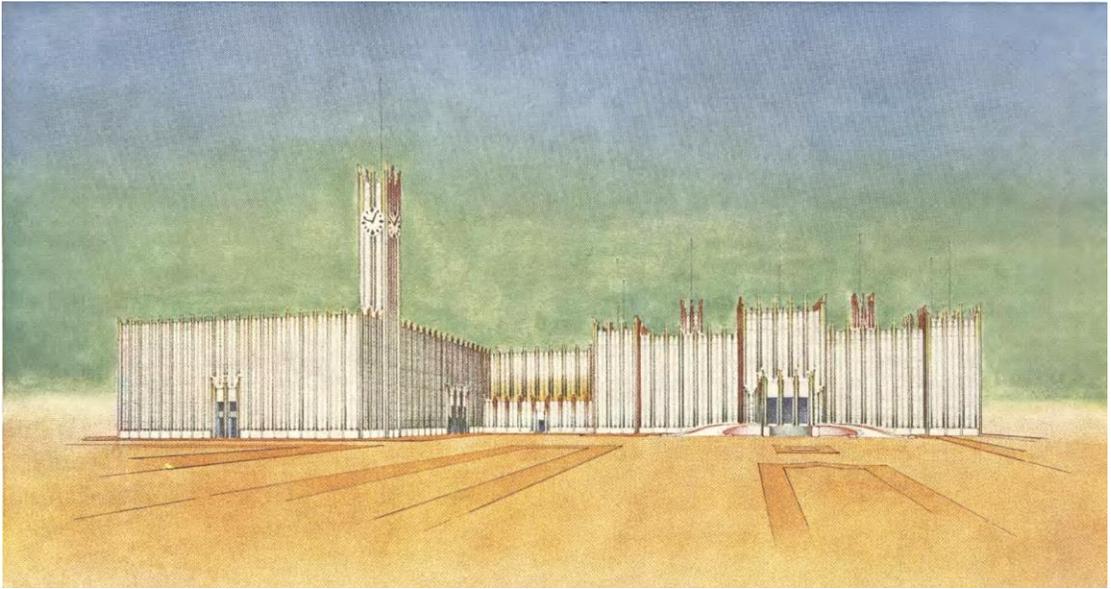
Website: <https://sites.google.com/site/aftkenchiku/>

Printed in Japan / Print ISSN 2189-5600 / OCLC No. 931926534

This book is licensed under the Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License. To view a copy of this license, visit <http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/> or send a letter to Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA.



口絵 1 大正大震災記念建造物競技設計 佳作
 入選案 立面・平面・断面図 (1925年)
 口絵 2 同 透視図



口絵 3 東京市庁舎建築設計懸賞競技2等当選案 透視図 (1934年)

口絵 4 朝日住宅設計競技乙種金賞入選案 透視図 (1929年)



口絵 5 紫カントリークラブハウスすみれコース（1961年） 現況外観（コース側より）



口絵 6 同 西側屋外階段



口絵 7 同 3 階特別
室（現 レストラン
倉庫 兼事務室）
口絵 8 N さんの家
（1955 年）

目次

はじめに.....	10
第1章：吉川清作の生涯について.....	11
第1節：生まれから独立まで.....	11
第2節：独立から戦中まで.....	12
第3節：終戦から晩年まで.....	13
第2章：作品各論.....	14
第1節：『現代の住宅』—1920年.....	14
第1項：上流住宅.....	15
第2項：邸宅.....	16
第3項：中流住宅.....	18
第4項：小住宅.....	19
第5項：貸住宅.....	20
第6項：小結.....	21
第2節：神田日活館、京橋日活館—1924年.....	22
第1項：神田日活館.....	22
第2項：京橋日活館.....	27
第3節：葵館—1924年.....	30
第1項：村山知義・荻島安二とは誰か.....	36
第2項：葵館の意匠からみる役割分担.....	37
第3項：三人はどのように出会ったか.....	41
第3項：三人はどのように出会ったか.....	43
第4項：葵館後日談—カラフルなレリーフ.....	47
第4節：大和郷の3住宅—1924年頃.....	49
第1項：大和郷について.....	49
第2項：加藤静夫邸（K氏邸）—1925年.....	50
第3項：佐藤三吉邸—1928年.....	56
第4項：米山米吉邸—1929年以前.....	57
第5節：大正大震災記念建造物競技設計（佳作）—1925年.....	58
第6節：銀座サイセリアとバー・サイセリア—1925年-1930年頃.....	60
第1項：店名について.....	60
第2項：店舗の変遷について.....	60
第3項：吉川と荻島の関与について.....	66
第7節：ジュネーブ国際連盟会館設計競技案—1927年.....	67
第8節：山の手美容院（吉行あぐり美容室）—1929年.....	68
第9節：朝日住宅設計（乙種金賞）—1929年.....	69
第1項：中小住宅建築設計競技.....	69
第2項：朝日住宅展覧会.....	74
第10節：東京市庁舎建築設計懸賞競技（2等）—1934年.....	82
第11節：吉川清作自邸（第1期～第3期）およびアトリエ—1935-1965年頃.....	84
第1項：吉川清作自邸（第1期、下の家）—1934年.....	84
第2項：吉川清作自邸（第2期、初代上の家）—戦中～1950年頃.....	87

第3項：吉川清作自邸（第3期、2代上の家）—1965年頃.....	87
第4項：吉川清作アトリエ（小屋）—不詳.....	88
第12節：渡邊隆邸（高木東六邸）—1935年.....	89
第13節：住宅—1935年頃.....	94
第14節：勝田康雄邸—1935年.....	95
第15節：軽鋼コンクリート造住宅（渡邊朱美邸）と『コンクリート住宅図集』—1950年.....	96
第1項：軽鋼コンクリート造住宅（渡邊朱美邸）—1950年.....	96
第2項：『コンクリート住宅図集』—1950年.....	99
第16節：ルーフガーデンを持つF氏邸（藤川一秋邸）および一虎園—1952年.....	101
第1項：ルーフガーデンを持つF氏邸—1952年.....	101
第2項：一虎園（一虎庵）—1952年.....	107
第3項：藤川一秋と吉川について.....	113
第17節：K氏邸計画案（小島多満子邸）—1954年.....	115
第18節：Nさんの家（中島篤志邸）—1954年.....	116
第1項：建築概要.....	116
第2項：女子建築研究所について.....	116
第19節：国立国会図書館建築設計競技案（2等）—1954年.....	119
第1項：設計競技に至る経緯.....	119
第2項：吉川の当選案について.....	119
第3項：基本設計料問題について.....	120
第20節：「乞食の家」（第5回建築サロン出品作品）—1955年.....	125
第1項：「乞食の家」について.....	125
第2項：「乞食の家」と国立国会図書館をめぐって—「建築の主体性」.....	127
第21節：紫カントリークラブハウス—1961年.....	128
第1節：紫カントリークラブハウスすみれコース—1961年.....	128
第2節：紫カントリークラブハウスあやめコース—1961年.....	129
第22節：その他の作品.....	134
第1項：報知新聞社住宅懸賞図案（1等入選案）、浅草デパートメント設計、銀座劇場新築設計—1929年以前.....	134
第2項：国際コンクール出品作品（住宅の合理化と小・中住宅）—1950年建築サロン出品.....	135
第3項：伊東の別荘—1961年以前.....	135
第4項：星野温泉の客室棟—時期不詳.....	135
第5項：藤山愛一郎邸—時期不詳.....	135
第23節：小結.....	136
第1項：葵館での協働.....	136
第2項：二重生活の克服.....	136
第3項：建築の主体性—国立国会図書館基本設計料問題と「乞食の家」.....	137
第3章：合理派建築会結成史.....	138
第1節：合理派建築会結成の前夜—山の手美容院.....	138
第2節：合理派建築会結成の瞬間—朝日住宅設計.....	138
第3節：『合理派建築』再読—設計施工への意欲.....	140
第4節：小結.....	141

第4章：吉川清作と人について	142
第1節：都市建築研究所の所員について	142
第2節：クライアントについて	143
第3節：文化人との付き合い—木曜会	144
第4節：小結	144
あとがき	145
参考文献	146
図版出典	151
吉川清作（都市建築研究所）作品リスト	153
初出一覧	161

凡例

- 一、本文中で史料を引用する際は、原則として旧字旧仮名遣いのままとした。ただし、脚注では、便利のため常用漢字・新仮名遣いに直したのものもある。
- 一、〔 〕は引用者が挿入した部分である。
- 一、省略は〔中略〕の形で示した。「……」は原文による。

はじめに

近年、日本近代建築史について、従来とは異なる側面からの検討が進んでいる。例えば、花田佳明による松村正恒についての研究¹、あるいは西澤泰彦による植民地建築家研究²、内田祥士による営繕論³などである。これらはいずれも、いわゆるスターアーキテクトの系譜には連ならないが、日本近代建築の発展を支えた建築家・建築技術者の存在に着目し、その果たした役割を明らかにするものである⁴。

一般に近代建築史を考える場合には、ともすると著名な建築家のことを想起しがちであるが、日本近代建築の発展を実質的に支えたのは、工手学校・工業学校などを出た中堅技術者であったろうことは、例えば建築学会住所姓名録に准員として記載されている膨大な会員を見れば看取できる。しかし、このような建築技術者についての考究は、その重要性に比していまだに不十分であるように思われる。

本書では吉川清作という人物を取り上げたい。吉川清作(1896-1978)は、正規の建築教育を終えずに、もっぱら独学で設計技術を身に着けた建築家である。戦前の東京市庁舎設計競技(1934)においては前川國男らを抑えて、戦後の国立国会図書館設計競技(1954)においては丹下健三・吉阪隆正などを抑えて、いずれも二等に入選している。また、MAVOでの活動で知られる美術家・村山知義らが関東大震災後に結成した芸術団体「合理派建築会」のメンバーであり、すなわち大正期の新興美術運動に参加した数少ない建築家の一人でもあった。しかしながら、その足跡については、本橋仁による村山知義に関する研究⁵のなかで触れられているのみで、一般に知られてこなかった。

そこで、本書では吉川清作の生涯およびその作品について総合的に検討するとともに、特に合理派建築会において吉川が果たした役割について明らかにしたい。

調査を進める中で、吉川清作を直接知る二名の方にお話を伺うことが出来た。お一人目は吉川清作の三男・敏夫氏の夫人である吉川清子さんである。お二人目は、吉川清作のクライアントであった渡邊隆氏の御令嬢で、吉川を戦前から知る渡邊朱美さんである。文献からはわからない吉川清作の出自や人となりについては、このインタビューによった⁶。

まず、第1章では吉川の生涯について概観する。第2章では、それぞれの作品について年代順に検討し、第3章では特に合理派建築会の結成経緯に着目して検討を行う。第4章では、クライアントや事務所といった吉川を取り巻く人物について述べる。

¹ 花田佳明『建築家・松村正恒ともうひとつのモダニズム』鹿島出版会、2011年

² 西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会、2008年、同『東アジアの日本人建築家：世紀末から日中戦争』柏書房、2011年など

³ 内田祥士『営繕論』NTT出版、2017年

⁴ このような視座は、村松貞次郎『日本建築家山脈』鹿島出版会、1965年(2005年復刻)が嚆矢といえるだろう。

⁵ 本橋仁『建築イデオロギーの意識的拡張：村山知義と合理派建築会』早稲田大学卒業論文、2008年

本橋仁、中谷礼仁「建築イデオロギーの意識的拡張：村山知義と合理派建築会について」『学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』日本建築学会、2009年、pp.229-230

⁶ 吉川清子さんへのインタビューは2014年12月6日、2015年1月30日の2回、渡邊朱美さんへのインタビューは2014年11月28日、同年12月2日、2015年1月30日、同年11月1日の4回、いずれも御自宅に伺って行った。

第1章：吉川清作の生涯について

第1節：生まれから独立まで

吉川清作は1896年2月7日⁷、石川県石川郡御手洗村字相川新（現在の石川県白山市）に生まれた⁸。生家は農家で、村の中では二番目の地位にあった。経済的にも裕福であったが事情により一家が離散し、清作は神戸に移住した。

この頃の経歴については明らかでないが、1912年（16歳）頃⁹には、兵庫県立工業学校（現在の兵庫県立兵庫工業高校・神戸工業高校）に入学した。県立工業学校には昼間部の他に夜間部があり、建築科、機械科、電気科の3科が置かれていた¹⁰。旧制工業学校は、14歳から入学できた¹¹ので、吉川の場合は最短の場合より2年程間があったことになる。吉川清子さんのお話によると、吉川清作は神戸時代、働きながら勉強していたということであるから、恐らく夜間部の建築科へ入学したのであろう。

しかし、吉川は2年で兵庫県立工業学校を中途退学してしまう。その理由については、課程がつまらなかったからだと言売新聞の記事¹²が伝えている。しかし実際には、吉川がちょうど在学中の1913（大正2）年に、修了年限がそれまでの2年から予科1年・本科2年の計3年に延長されたこと¹³が影響しているのだろう。

1914年、18歳の時に工業学校を辞めた吉川は上京し、曾禰中條建築事務所へ入所した。しかし際立って仕事熱心だったというわけではなく、「その間何度も首が飛んだり繋がったり殆ど独学で叩きあげ

⁷ 墓誌による

⁸ 「輝く金の・1万円 東京市庁舎設計当選発表」朝日新聞（朝刊）1934年6月2日 p.11」

⁹ このことについては、読売新聞（「新市庁舎設計当選者決る」読売新聞（朝刊）1934年6月2日 p.7）と前掲朝日新聞記事（「輝く金の・1万円」）において言及されている。前者には「兵庫県立工業に入ったが十九の時つもらないと辞めて」とあり、後者には「兵庫県立神戸工業を二年で中途退学」とある。まず、吉川が工業学校を辞めた年は記事と生年を照らし合わせて1914年2月～翌年1月であることがわかるが、入学年については上の記事からは明確に特定できない。後者の記事中の「二年で中途退学」を一番純粋に考えると、1912年の春に入学し、1914年の3月（2年生の終わり）に辞めたというのがもっとも理解しやすいが、第二の可能性として1913年の春に入学し、1914年4月～翌1月にかけての2年生かつ19歳の間に辞めたということも考えられる。どちらが正しいかは上記資料中からは判断できないが、とりあえずシンプルな方を取って1912年頃とした。なお、朝日記事は学校名を「兵庫県立神戸工業」としているが、そのような名前の学校はこの当時存在していなかった（神戸工業とつく学校は、1941年に兵庫県立工業学校が第一神戸工業学校と改称されたものが最初である）。恐らく当時から、兵庫県立工業学校を神戸工業と呼ぶことがあったのだろう。

¹⁰ 兵庫県立兵庫工業高等学校沿革（<http://www.hyogo-c.ed.jp/~hyogo-ths/intro/history.html>）2015年8月23日閲覧。

¹¹ 工業学校規定（明治三十二年二月二十五日文部省令第八号）第四条「工業学校ニ入学スル者ノ資格ハ年齢十四年以上学力修業年限四箇年ノ高等小学校卒業又ハ之ト同等以上トス但外国語ヲ試験科目ニ加フルコトヲ得」

¹² 「新市庁舎設計当選者決る」読売新聞（朝刊）1934年6月2日 p.7。以下、吉川に関する部分を抜き書きする。「二等の吉川清作君（三九）は、楽天的な天才肌の設計家、石川県生まれで兵庫県立工業に入ったが十九の時つもらないと辞めて東京に飛び出し曾禰中條建築事務所に十年程つとめたがその間何度も首が飛んだり繋がったり殆ど独学で叩きあげ気が向かなければ仕事をしない、でも大正十五年にはジュネーヴの国際連盟会館の設計に日本から応募した三人*のうちの一人だった、今もこれという仕事も持たず日本橋通り二ノーバーグラウスのマダム深川久子さんのところへ転げ込んでいる、かつて一等当選の一千三百円を一晩で飲んでしまったという無軌道家だ。」

* 近江榮によると、ジュネーブ国際連盟会館に応募した日本人は10名以上いたという（近江榮『建築設計競技』鹿島出版会、1986年、p.88）詳しくは第2章8節を参照。

¹³ 兵庫県立兵庫工業高等学校沿革（前掲）

が向かなければ仕事をしない」¹⁴といった様子であった。もっとも、この時期は建築家としての技量を磨いたという以上に、吉川にとって重要な出会いがあった時期である。仕事の上では、その後協働する村山知義を知ったであろう¹⁵こと、個人的には後に夫人となる飯尾楠美代さんと出会ったことである。

この頃は旧下谷区下谷龍泉寺町にある楠美代さんの実家に同居していた¹⁶が、長男の晴夫さんが誕生した頃（1925年頃）に本郷区駒込林町 105¹⁷（現在の東京都文京区千駄木 3丁目 26 付近）へ移住した。

第2節：独立から戦中まで

吉川は 1924 年頃には曾禰中條建築事務所を辞めたらしく、雑誌に個人名で作品を発表するようになる。これは、1923 年に発生した関東大震災からの復興需要に伴って、吉川のもとにいくつかの設計依頼があったことが契機らしい¹⁸。曾禰中條事務所に勤務していたのは 10 年ほどであった。

曾禰中條建築事務所を辞して数年後には次男の康夫さんが生まれた。しかし、吉川自身には放浪癖があり、あちこちを転々とする生活を繰り返していたらしい。1934 年に東京市庁舎設計競技で 2 等に入選したときの記事は、以下のよう



図 1 1934 年頃の吉川

に伝えている。

二等に当選した吉川清作氏は一昨年本社で募集した朝日村住宅設計に一等を取った建築家、石川県石川郡御手洗村字相川新の出身、兵庫県立神戸工業を二年で中途退学、十年程前には曾禰中條建築事務所に勤めていたことがあるが、その後放浪の生活を好み、この五月末日までは鎌倉材木座の別荘番をしていた変わり者、一日発表を待って上京日本橋通二丁目の酒場ガラスに居候して飲みたくなると下に降りてくる当年三十九歳の独身者、酒場の二階に訪ねると「二等とは残念、当然一等になると確信していましたが、一等が余程良かったものと見えます、僕のパトロンはガラスの女将です、一割の一千円を進呈するはずのところ三百円だけ差し上げるのがすくなくなりました」そばから女将が口を出す「この前に懸賞で千五百円取った時この人は一晩で飲んでまた元の貧乏になったんですよ、今度も案じられます」¹⁹

しかし、市庁舎コンペへの入選を機に身を固める決心をしたらしく、同年の 12 月にはその賞金を元手に²⁰鶴見の高台に自邸を新築し、家族を呼び寄せ移り住んだ²¹。

曾禰中條建築事務所を辞してから鶴見に移住するまでの間には、きちんとした設計事務所を構えていた様子はない。しかしながらこの間にも（後述するように）加藤邸、朝日住宅設計競技など、実作の設計やコンペへの応募を行っていたことが認められるので、恐らくその時々で図面を引いていたのだろう。

¹⁴ 読売新聞記事 1934:7（前掲）

¹⁵ 曾禰中條事務所がバラック装飾社の代表作「カフェキリン」を手掛けていたことからの推定。本橋 2008: 42。

¹⁶ この頃に長女・清美さんが生まれている（1922 年）。

¹⁷ 『朝日住宅図案集：懸賞中小住宅八十五案』朝日新聞社、1929 年、目次頁に記載の住所より。

¹⁸ 第 2 章 3 節を参照のこと

¹⁹ 「輝く金的・1 万円」朝日新聞記事（前掲）

²⁰ 「建築家・吉川清作氏の住宅」『住宅』20(222)、1935 年 4 月、p.230

²¹ 「放浪から転向「生活の設計」姿を消してゐた吉川清作君千円十五坪の家に」朝日新聞 1934 年 12 月 19 日 p.13

鶴見に移住してから終戦までは、自宅を事務所として仕事をしていたようである。また、自宅近くに小さなアトリエ（小屋）を持っており、そこに一人で籠っていることもあった。戦時中はその周りに畑を作り、カボチャなどを育てていた²²。

第3節：終戦から晩年まで

終戦から間もなく、吉川は自身の設計事務所である都市建築研究所を設立したらしく、1950年にはその名がみえる²³。都市建築研究所の来歴については定かでないが、最終的には東京都中央区銀座西4-3の不二家の入るビルの中2階に事務所があった。所員としては、吉川晴夫、遠藤正巳、吉島保、片岡靖忠、窪田保彦、岸本洋子、加藤友子、岩下綾子、田中温子などの名前が知られている（第4章1節参照）²⁴。

1955年には日本建築設計監理協会（現 日本建築家協会）の会員となっており、建築展覧会（建築サロン）の委員を務めていた²⁵。

1966年頃までは設計活動を続けていたものの、それ以後は事務所を長男・晴夫氏に譲り、設計からは引退した²⁶。その後は、自身の設計した横浜市鶴見区内の自邸で余生を過ごし、1978年3月15日に逝去した²⁷。



図2 晩年の吉川清作（自邸にて）

²² 吉川清子さんのお話による。

²³ 初出は「軽鋼コンクリート造住宅」『建築文化』1950年1月号 p.14。所在地は東京都中央区銀座西四の三となっている。もっとも、それ以前に伊藤谷蔵なる人物が東京で同名の事務所を運営していた（「伊藤谷蔵氏死去」読売新聞（夕刊）1943年8月4日 p.2）。吉川清子さんに尋ねたところでは、そのような話は聞いたことがないとのことであり、偶然の一致であろうと思われる。

²⁴ 各作品の雑誌記事より。作品一覧などを参照のこと。

²⁵ 「本会記事」『設計と監理』2(7)、1956年、p.36

²⁶ 吉川清子さんのお話による。事務所はその後まもなく閉鎖されたという。

²⁷ 墓誌による。

第2章：作品各論

本章では、吉川清作の個々の作品について順に取り上げ、検討を加える。現在、資料から確認できる吉川の作品は100程度ある²⁸。

第1節：『現代の住宅』—1920年

吉川清作による著作は、これまで2冊確認されている。そのうちの1冊がこの『現代の住宅』（大正9年、洪洋社刊）である。表紙には「工学博士大熊善邦先生閲 吉川清作君案 洪洋社編集局編」とあり、建坪で300坪を超える上流住宅から10坪未満の長屋まで、様々なスケールの住宅の図面が平面と立面をセットとして50余案が収録されている。図面の表記方法は概ね統一されており、同時期に書き下ろされたものらしい²⁹。時期としては曾禰中條事務所の所員時代にあたり、年代が確定できる吉川の作品としては最も古い。



図3 『現代の住宅』表紙

版元である洪洋社は大正から昭和戦前期にかけて、建築関係の書物を数多く出版していた出版社である。1912（明治45）年に創業した洪洋社は、ちょうどこの頃（大正9年頃）より社外の建築専門家を入れた雑誌・図書を多く出版するようになっていた³⁰。その代表的なものが『新住宅』という雑誌である（後に建築新潮と改題）。これは、住宅改良運動に寄与することを目的としたもので、編集顧問は大熊善邦と佐藤功一であった³¹。大熊は本書の校閲者、佐藤は報知新聞社懸賞「山の住宅」（昭和10年）の際に共に審査員を務め、どちらも吉川と関わりを持つことになる。

本節で取り上げる吉川清作の『現代の住宅』には前文や説明文などは付属していないので具体的な企画図は判らないが、基本的には建築専門家による一般向けの住宅設計の参考書として編まれたらしい。しかし、掲載案を通覧すると、平面計画上の現実的な要求より外観上の操作を優先するきらいがあり、一般人が住宅を設計するにあたって参考とするには、使い勝手はあまりよくなさそうである³²。結論を先取りすると、どちらかと言えば本書は、設計に際して直接役に立つような間取りを紹介するというよりも、和洋を折衷した新たな意匠の工夫・創案に力点が置かれていると言えよう（第6項参照）。

²⁸ 本稿末の作品一覧を参照のこと。星野温泉旅館のように、聞き取りから存在が知れるものの、内容が確認できないものもあり、正確な数は不明である。

²⁹ 第18案（<18>）のみ、透視図が付されるなど、他案とはやや異なる点があり、多少先行するのかもしれない（後述）。

³⁰ 大川三雄、川嶋勝「建築専門出版社・洪洋社の出版活動について：その1 編者と出版物の変遷」『学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』1997年、p.93

³¹ 「社外の建築専門家の活躍が活発になるのは、大正9年創刊の雑誌『新住宅』からである。編集顧問は大熊善邦と佐藤功一、寄稿者には今和二郎、蔵田周忠、森口多里、田辺泰のほか山本拙郎などがいた。この雑誌は住宅改良運動の一翼を担おうとするものであり、特に家政学的な側面から家庭の主婦層までが読者の対象であった。震災による休刊後の大正13年には『建築新潮』と改題し、帝都復興事業による一般社会への建築への関心の高まりを受けて、住宅に限らず建築全般を対象とするようになる。蔵田や森口などの、当時増加しつつあった海外渡航者による即時性の高い寄稿を多く掲載し、一方で日本国内における信仰建築運動を支える舞台にもなった。」（Ibid. p.94）

³² 例えば、この頃出版された『報知懸賞住家設計図案』（第22節1項脚注参照）と比べると、建物の規模を大から小まで取り揃えるところは同じであるが、『報知懸賞』がコンペ案と複数の建築家による実際の計画案を併せて掲載し、実用性を高める工夫がみられるのに対し、『現代の住宅』は①すべて同一の人物による、②架空の計画案を掲載している、という二点で大きく異なる。

とはいえ、本書に掲載された図面は、吉川が曾禰中條建築事務所時代に培ったものを読み取りうる唯一の資料として貴重である。以下、収録されている 50 余案のうち、主要なものについてみていきたい（紙幅の都合上、ご紹介できなかった案については、ご遺族の方の御厚意により『建築都市文化史誌 aft』第 1 号に復刻掲載されていますので、併せてご参照ください）。

第 1 項：上流住宅

上流住宅と題されたグループには 5 案あり、延床面積 310 坪～552 坪までの大規模住宅が収録されている。様式としては、4 案<1-3,5>（『現代の住宅』所収の各作品には題名が記されていないので、以下<ページ番号>の形で示す）が応接部分には洋館を、居住部分には和館を当てる、いわゆる和洋併置型とし、1 案<4>のみ、純洋風（ハーフティンバー）となっている。平面計画上は、各案共通して軸を若干振り、南に面した部分を雁行させている³³。門扉から車寄せへはいずれも正円形を組み合わせた車路でつながれているが、自動車の軌跡を考慮した様子はなく、あまり合理的な設計ではない（特に<3>の 8 の字型になっている部分などは、実際に自動車がこれに沿って走るとなると著しく不便であろう）。もっとも、1920（大正 9）年当時の自動車の保有台数は乗用・貨物用合わせて 8000 台に満たず、人力車の 11 万台、荷車や自転車の 200 万台に比べてまだ数も少なく普及の途上にあった³⁴から、吉川にとっては、まだあまり身近なものではなかったのかもしれない。

庭園部について見てみると、<1>は西洋館の前に幾何学式庭園を、和館の前に池泉を含む回遊式庭園を並べ、<3>においてもこれが基本的な方針となっている。しかしながら他の案は<1,3>ほど複雑ではなく、簡単な園路と植栽で構成されている³⁵。<4>については、木立の中に建つことを想定しているのか、そもそも後庭の計画をしていない。『現代の住宅』を出版した時点では、庭園への意識はあまり高くないようである³⁶。

さて、さらに詳しく見てみると、<1>は敷地の対角線を基準とした、線対称を意識して計画されている。しかしながら、これは厳密に守られているわけではなく、あくまで諸室の要求に従いながら、全体的

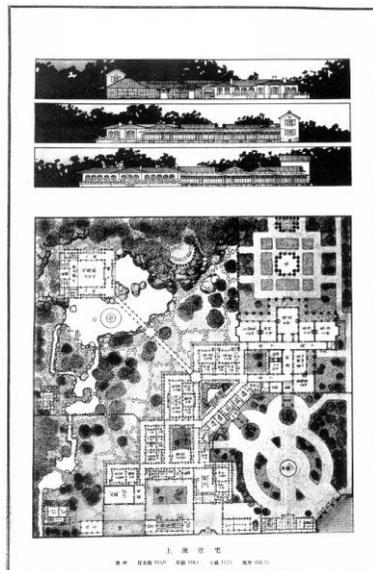


図 4 上流住宅<1>

³³ もっとも、<5>は軸を振ってはいるが、雁行の気は少ない。どちらかと言えば庭の独立性を守るために客間を張り出し、アプローチとの分離役を担わせたために起きたものと思われる。この手法の小規模なものは<23>にもみられる。突飛だが、古の寝殿造における中門廊が思い出される。

³⁴ 片山三男「明治・大正・昭和初期の道路交通史：二輪車を中心に」『国民経済雑誌』192(3)、2005年、p.44

³⁵ ただし和館の前の園路には飛び石が置かれており、建物との関係性に配慮してなかったわけではない。

³⁶ ただし後年の渡邊隆邸や、渡邊朱美邸では、パーゴラや池が設けられており、庭と建物との調和に配慮を払っている。この点に関連して、時代はかなり飛ぶが、晩年の吉川清作は庭の芝生の手入れを趣味としていたという話を御遺族の方から聞いた。

「それでお父様（清作）は芝生が大好きだね。〔中略〕だから、お庭もこういう感じで、それでお父様はお庭の芝生が命だって言ってました。それだけは覚えてます。芝生を青々とさせて、仕事としては草取りをして、芝生を青々とさせて、椅子に座ってのんびりとしているというのが、なんか、それが夢だったのかしらね。よくそういうことをしてましたよ。」（吉川清子さんへのインタビューより）

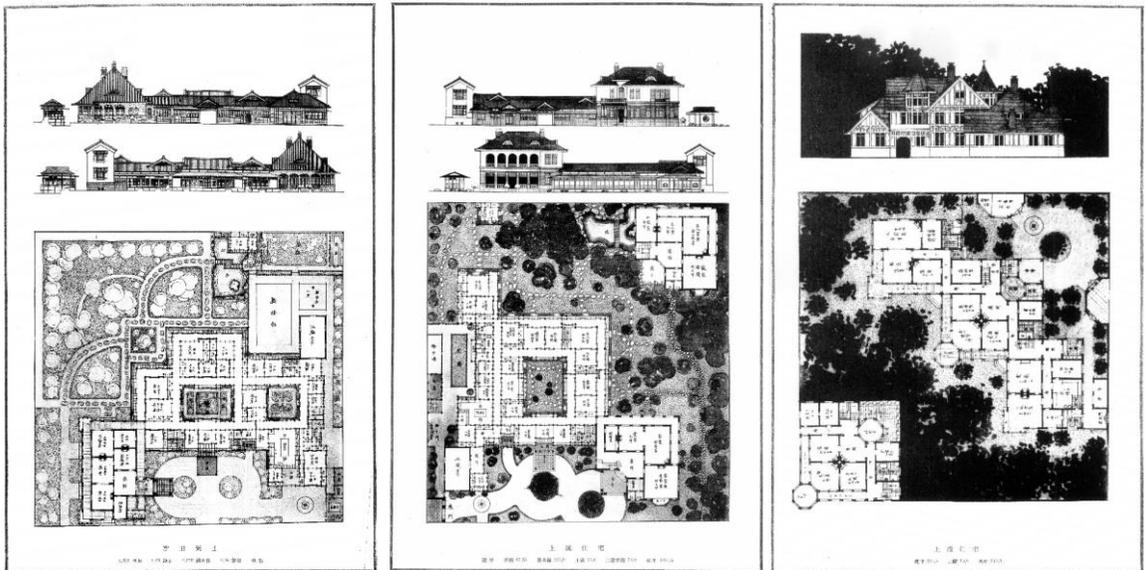


図5-7 上流住宅<2, 3, 4>

な棟の配置の仕方にもみ反映されている。また、南東の大座敷を頂点として棟が大きな三角形を構成していることも、この案の特徴である。また、三角形は中庭にも表れている。

<2>および<3>には、共通して大きな花壇が設けられているが、いずれも母屋の裏側であり、庭園の主要な要素とはなっていない。また、洋館のドーマー窓も共通してみられるが、<2>の方は端部を折り返した墓股を彷彿とさせる形状である。

<4>は門扉や自動車庫までを含め、全体でかなり厳密に線対称としている。ただし、階段の位置や窓の数などの細部は内部の要求を優先して、柔軟に変更している。

第2項：邸宅

「邸宅」と題されたグループには13案の作品が収められており、これは本書の中で一番多い。外観を基準とすると、このうち10案までが洋風の造りで、純和風は2案、和洋併置が1案と純洋風住宅がそのほとんどを占める。これは他のグループとも共通することだが、本グループにおいては特に現実的ではない案がみられる（特に<10,12>など）。洋風住宅は概して観念的であり、本宅というよりはヴィラという印象がある。線対称への執着は、ここではかなり徹底しており、内部まで及んでいる（<6,10,12,14>など）。ただ、<7,10,18>はスタイルこそ異なるものの、いずれもかなり洗練・統一された外観を持っており、この点は吉川の力量を伺わせるものがある。吉川は生涯海外に出ることがなかったとのことであり、これらの知識はいずれも、図書や写真などから勉強したものであるらしい。そう考えれば、洋風よりも和風住宅案（<16>など）の方が、内部構成に於いて複雑であり多様なのは頷けるところである。

以下、個々の案についてみよう。<7>は立面・平面ともに細かく書き込まれており、特に全室に家具が配置されているのは本書中これのみで、意欲の高さがうかがえる。

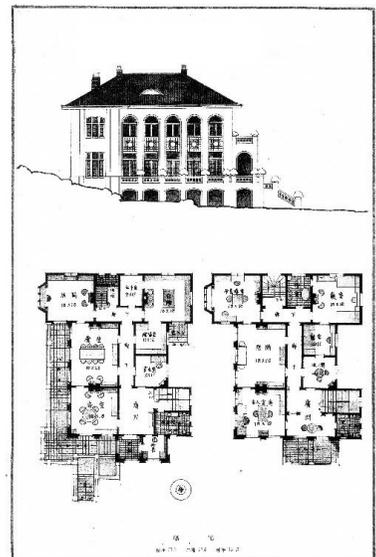


図8 邸宅<7>

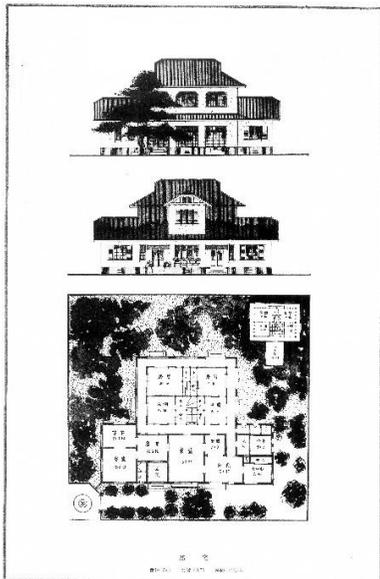
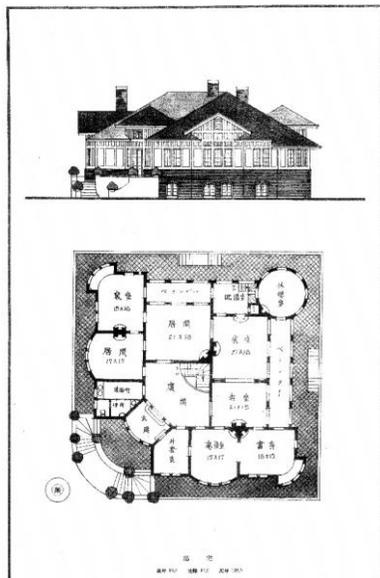


図 9-10 邸宅<8, 12>



<8>は北面から見ると洋風なのに対し、南側から見ると和風という風変わりな案で、吉川の独創性を感じさせる。

<12>は平面中に円形や曲線も取り入れたうえで線対称としているパズルの様な案だが、その影響を受けたのか他の「邸宅」には存在した浴室がこの案の中にだけは見られない。

<13>は三角形を強く意識した案で、中庭及び全体の構成にその傾向がみられる。ただ、上流住宅<1>

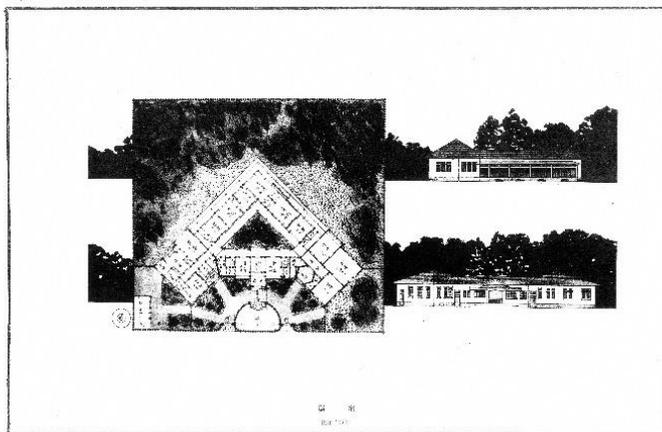


図 11 邸宅<13>

と同じように、これは導入の軸を振ることによって生まれたもので、全体がAの字をしていることを考えると、三角形にしようという意識が先にあったとは思われない。

<15>は洋風でまとめられているが装飾は多くなく壁もモルタル塗り風の平滑な表現で、他の作品とはやや異なる。他の和風住宅で試みた雁行配置を洋風でも行うことを狙ったものらし

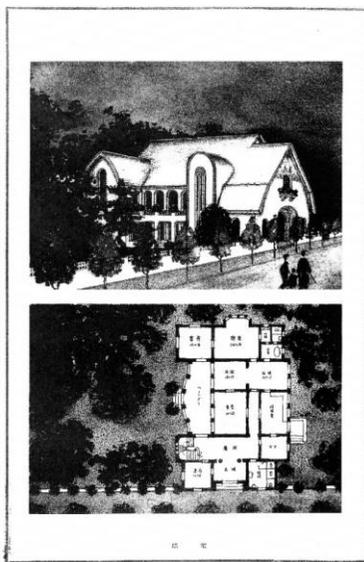
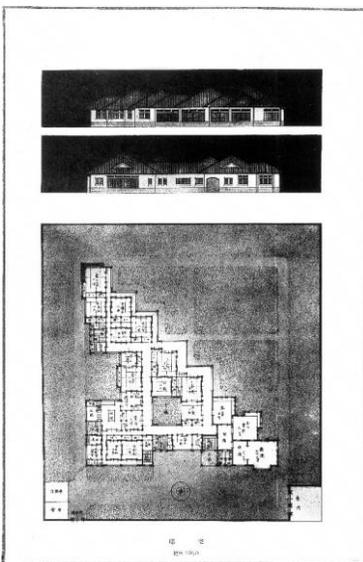
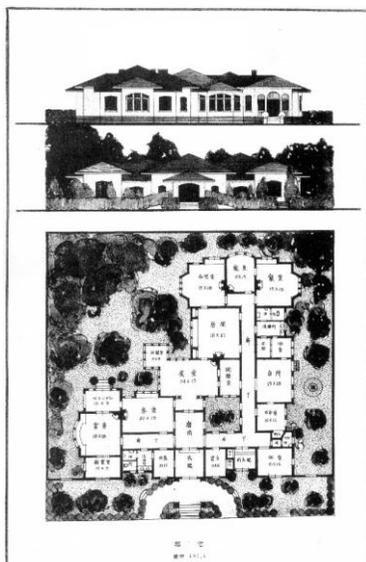


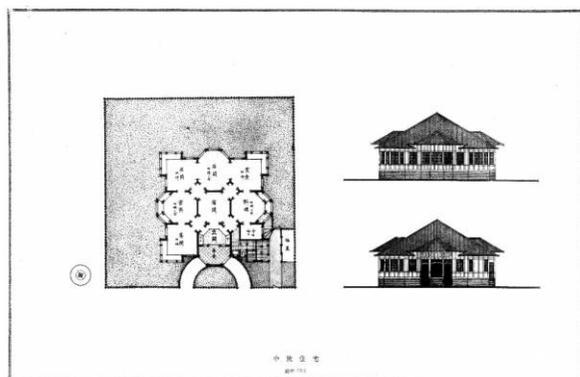
図 12-14 邸宅<15, 17, 18>

い。南北軸に対して線対称であるほかに、各立面もシンメトリーに持ち込もうとしている点は注目される。

<17>は内部の大半を和室としながら、外観を洋風でまとめたもので、南側が雁行配置となっている。

<18>は本書中唯一、透視図が添付されている作品である。平面図も他とは異なり手書き風で、これのみ制作時期が異なる可能性がある。透視図右下には親子連れと思しき3人の人物が描かれているが、後出する京橋日活館の透視図にも同じような人物画が表れる。大きなギャングレル（腰折れ）屋根が全体を統制しているが、それを貫く大きな縦長の開口部などは表現主義的である。本書が刊行された1920年は分離派建築会が発足した年であり、時代の風潮に先んじていたわけではないにしろ、吉川はかなり同時代的な意識を持っていたと言えよう。

第3項：中流住宅



「中流住宅」と題されるグループは9葉から成るが、<22>は甲・乙の2案が掲載されているので、実質的には10案が収録されている。規模は建坪で36~58坪である。これを外観によって区別すると洋風3案、和風5案、和洋併置型2案となっている。和風住宅にはL字を取るものも多く（<21,23,24,25,27>）、洋風住宅には平面もしくは立面上で幾何学的な形態を試みているものが多い。

主だったものを取り上げると、<19>は正方形平面の外観洋風でまとめられているが、平面計画上1階を壁式の洋風、2階を柱梁式の和風として階ごとに分けている点に特色がある。

<20>は八角形と正方形を組み合わせたヴィラ、あるいは隠居屋のようで、ほぼ完全な点対称となっている。

<22>は純和風でまとめた甲と、応接部を洋風とした乙の二案から成る。乙案はいわゆる和洋併置型に分類されるものであるが、洋館基礎の換気口を和館部分にも連続して設けるなど、正面側全体がやや洋風寄りにまとめられているのは、<8>で見られた外観統一の工夫と同じ系列のもので注目される。

<24>は、和洋併置型のひとつであるが、洋館部がフラットルーフとなっている非常に特異な案である。屋上には「露台」と表記があり、和館2階より出入りできるようになっている。手すり壁部分に植栽があり、その点で「屋上庭園」の試みの一種とも思われるが、吉川がどの程度意識していたかは不明である（藤森照信によれば、日本における「屋上庭園」の早い例は

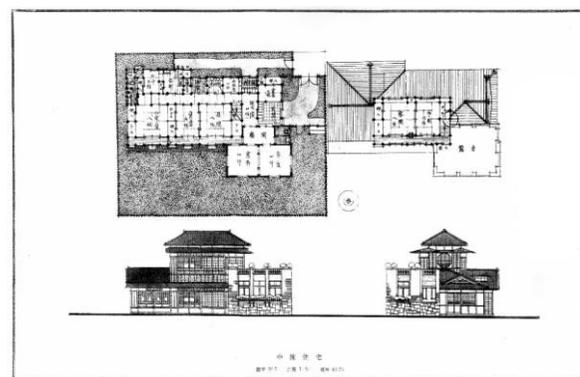
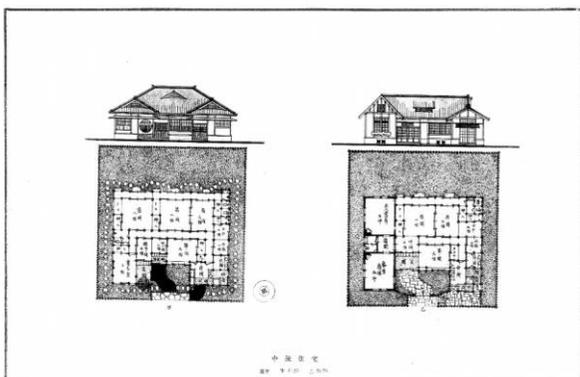


図 15-17 中流住宅<20, 22, 24>

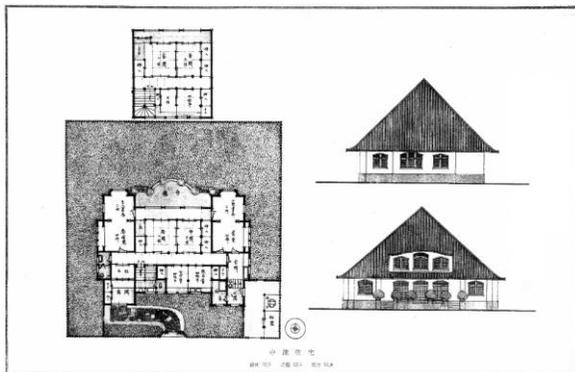


図 18 中流住宅<26>

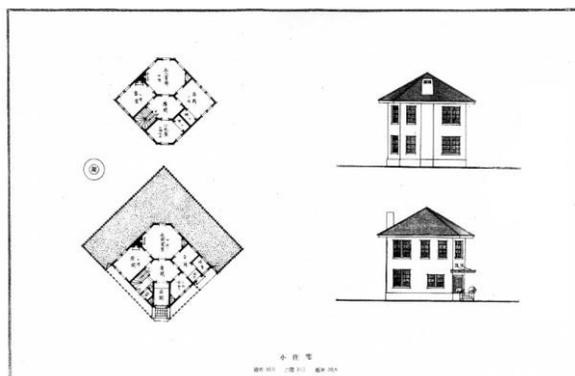
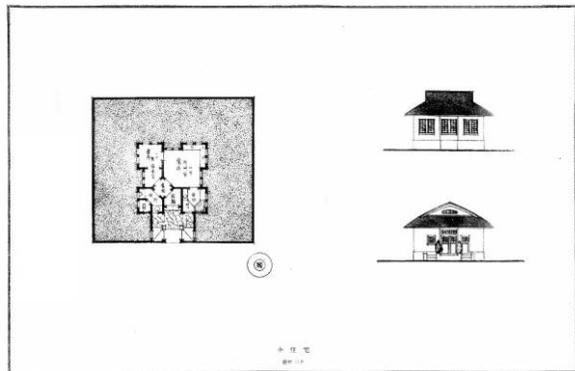
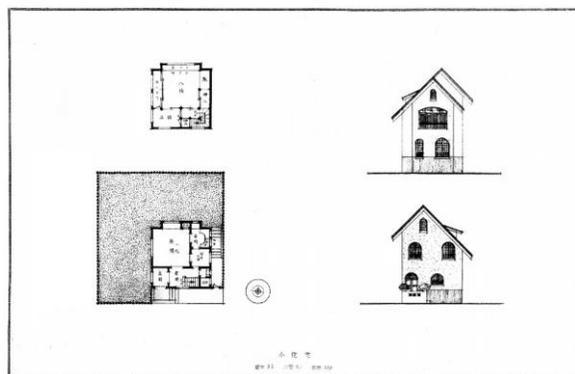


図 19-21 小住宅<28, 29, 30>

1915年の秋田商会に見られ、小規模には1933年に堀口捨巳が岡田邸で試みたが、本格的なものは戦後を待たねばならないという³⁷。吉川の本家はちょうど秋田商会と岡田邸の間に位置することになる。

<26>は<8>と同様に、外観を洋風で統一しつつ、内部に和室を含めた住宅である。著しく大きな宝形屋根（ただし平面は長方形であり、したがって屋根勾配は同一でない）である。<18>と同じく幻想的な印象を受ける。

第4項：小住宅

「小住宅」と題されたグループには11案が収録されている。面積としては建坪9.5坪～27坪までである。外観を基準とすると、純洋風のもものが6案、純和風のもものが3案、和洋併置が1案、面により様式を変えたものが1案である。

<28>は外壁を簡素な塗り壁とし洋風でまとめているが、<19>などと同じように内部は1階を洋間、2階を和室と階ごとに区分している。

<29>はむくりのついた入母屋屋根を持つ住宅で、壁は大壁となっているものの、外観は概ね和風である。一方で内部は完全な洋間となっており、和室を洋風の外観で包んだ<17>とは逆の構成を取っている。

<30>は<1,13>などと同じように45°に振った軸線を持つ案であり、外観はモダンにまとめられている。玄関に鉄線で支持された庇が出ているのは注目される。煙突に表現派風の微かな曲線が与えられていることも興味深い。

<32>は<30>と同じように軸を振り、平面計画の上では<19,28>などと同じように1階を洋間、2階を和室でまとめている。玄関の車寄せの上は露台になっており、植栽がみえる。庭側から見た立面を完全なシンメトリーとしている。

³⁷ 藤森照信『タンポポ・ハウスのできるまで』朝日新聞社、2001年、p.22



図 22-25 小住宅<32, 33, 35, 36>

<33>は<8>と同じように、面によって様式を変えたもので、南面が和風となっているのに対して、西面は洋風の塗り壁となっている。内部は和風の間取りとなっている。

<35>は<19, 28>と同じように外観を簡素な洋風でまとめた上で、1階を洋間、2階を和室と分けた例である。

<36>はこれまでもいくつか出てきた和洋併置型に属する典型的な例で、ベイウィンドウと切妻を持つ大壁の応接部に対して、寄棟・真壁の母屋が対置されている。

第5項：貸住宅

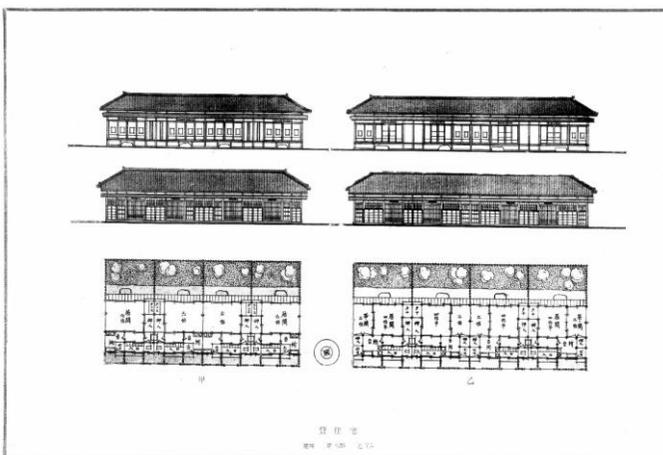


図 26 貸住宅<39>

「貸住宅」と題されたグループには12葉が充てられているが、<39>は甲乙の2案が掲載されているので、実質的には13案が収録されている。これらはいずれも長屋（タウンハウス）形式のもので、規模としては一戸あたり建坪6.25坪～18坪である。<39 甲・乙>は平屋建てであるが、それ以外はすべて2階建ての案となっている。様式としては和風のもの8案、洋風のもの5案で、和風のものやや多い。いずれも外部と内部は同一の様式で設計しており、これまで見られたような和

洋を混ぜ込んだり、部位で使い分けたりするような試みはなされていない。平面計画上について見ると、共通して堅実に設計なされている。「邸宅」や「中流住宅」では線・点対称にこだわり、幾何学的な平面をもつものを複数提案していたことを思うと、これは奇異に思われるが、長屋（タウンハウス）の場合は同一平面を繰り返す以上、必然的に立面はシンメトリーとなるので、あまりこだわる必要がなかったということなのかもしれない。

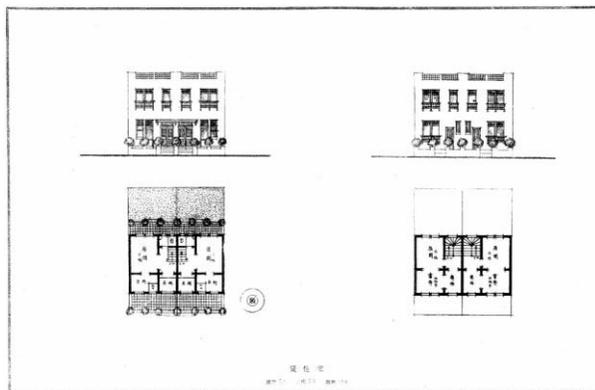


図 27 貸住宅<40>

個々の建物については、取り立てて取り上げるべきところは見られないが、<40>が全面的にフラットルーフとなっていることは注目される。陸屋根自体は<24>の応接部にも採用されていたが、全面的に採用したのはこれが『現代の住宅』の中で唯一である。パラペット部にクリンプ網で出来た手すり壁らしきものが見えることから、屋上の利用を想定していたのかもしれないが、ペントハウスや植栽の類が書き込まれていないので定かではない。

第6項：小結

本節では吉川の『現代の住宅』を概観した。これら五十数案を通して特徴的と思われる点を挙げたい。

まず、形態面では、モチーフとして三角形を多用する点が挙げられる。これは、後の日活神田館(1924)や伊東の別荘(1961以前)³⁸、紫カントリークラブハウスすみれコース(1961)などでも繰り返される(個々については後に分析する)。三角形は『現代の住宅』では平面計画に表れるもの(<1,13,17>など)がほとんどであったが、後の作品では立面を構成するモチーフとして表れている。これについては村山知義の三角アトリエ³⁹との連関も考えられるが、吉川の『現代の住宅』の方が時期的には先行している。

加えて、開口部において連続正円アーチを多用する点も押さえておきたい。本書中では、通常の矩形のものほかに、扁平アーチ(<1,2,14など>)、矩形の角の一部を落としたもの(<8>)など、様々なバリエーションの開口部が見られるが、特に洋風住宅において連続正円アーチをもつものが7案ある(<1,2,3,7,10など>)。これは後の神田日活館(1924)の客席側面においても用いられている。

しかし、最も重要な点は、本書中全体を通じて「様式混交」への意識が強くみられることである。在来の和風木造建築と外来の洋風建築をいかに調和させるか(あるいはどちらを重視するか)という問題は、明治期の議院建築における様式選択問題に端を発して、本書が刊行された大正期にも建築界の主要な問題として存在していた。これに対し、吉川は「和と洋を併置する」(<1,2,3など>)、「和を洋で包む」(<17,26など>)といった現代でも見られる一般的な方法から、やや珍しい「洋を和で包む」(<29>)、「面によって様式を変える」(<8,33>)といったアプローチまで実に多様な回答を試みている。様式混交が特に必要とされる場面として床面積が狭小な場合が考えられるが、本書においては比較的規模が大きく和洋併置型を採用しても差し支えないと思われる「邸宅」と呼ばれるグループでもこのような試みがみられる。このことは、これが本書において吉川が追求した一番のテーマであったことを示唆するものである。本書において実用面での利便性を欠く案が多いことも、そのような取り組みの結果として理解できるだろう。

³⁸ 吉川清作が個人で所有していた別荘。第22節3項を参照のこと。

³⁹ 本橋 2008:30

第2節：神田日活館、京橋日活館—1924年

吉川清作の作品のなかで、実現したことが確認できる最初の作品は、神田日活館・京橋日活館・葵館の日活系映画館三館である。これらはいずれも同時期に建設された。この仕事が吉川清作の手に託されることになった経緯は判然としませんが、恐らく1923（大正12）年の関東大震災からの大量の復興需要のなかで、曾禰中條建築事務所の気鋭の若手であった吉川に声がかかったものであろう。資料⁴⁰にはちょうどこの頃まで曾禰中條事務所に務めていたとある一方、これらの建物の発表は吉川の個人名でなされているので⁴¹、恐らく、これらの建物の依頼があったことを機に独立したのであろう。

第1項：神田日活館

神田日活館は、現在の神田神保町1丁目6番1号付近にあった映画館である。この建物については、藤森照信による解説があるので、まずはそれを引用しよう。

神田日活館 東京・神田。吉川清作設計。大正13年頃の建設。震災後のバラック建築。神田を代表する映画館であり、学生時代に入った記憶のある人も多いと思う。今は壊され、後にタキイ種苗のビルが建っている。設計者の吉川清作は、曾禰中條事務所出身の建築家である。⁴²

大通りに面した広場からみて、最初に目につくのは、エントランスを取り囲むように連続する三角形の破風であろう。三角形が吉川のひとつのモチーフであることは、前節において述べたが、ここにもそれが見られる。三角形はそのほかにも、切符売場のカウンター下、また外部の柱型を覆うタイルにも繰り返して用いられている。写真が不鮮明で断定はできないが、軒下の照明も三角錐のようである。

正面の破風に注目すると、2種類のレリーフが組み合わされている。一つは日活の「日」のように見えるが、もう一方は大きく崩されていてわからない。さんずいらしきものが辛うじて見え、残りは魚のような形をしている。これは「活」を左右対称形に直したものかもしれない。また、中央の破風のへこんでいる部分には、“N”（おそらく日活のN）を中心とした図形（文字の組み合わせ？）があるようだが、写真が不鮮明で読み取れない。

その他に、外周部の特徴という点では、建物上部に八角形に変形されたロンバルディアバンド風の帯が廻っていることが挙げられる。

内部は普通席（長椅子が平坦な土間に並べられている⁴³）と、特等席（1人掛けの椅子が段状に並べられている）に分かれている。普通席に席の指定はなく⁴⁴、全体では794人（普通席496人、特等席298人）⁴⁵を収容できた。壁に正方形の凹凸が繰り返されているのが目につくが、それを除けば内装は装飾も少なくシンプルである。外部で頻出した三角形のモチーフも、写真から特定できる範囲では、側壁の照

⁴⁰ 「輝く金的・1万円 東京市庁舎設計当選発表」朝日新聞（朝刊）1934年6月2日 p.11に「十年程前には曾禰中條建築事務所に勤めていたことがある」とある。

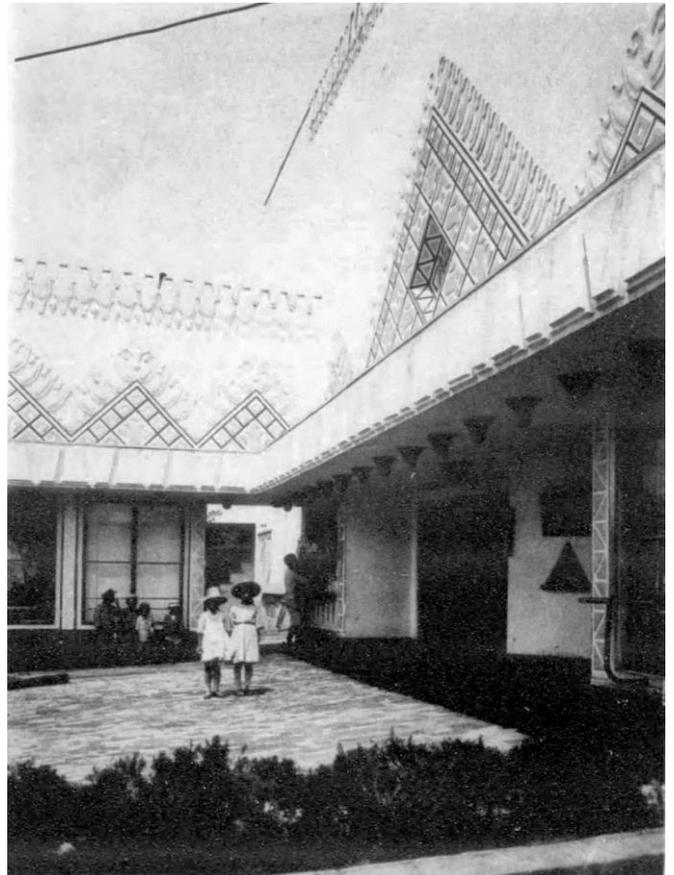
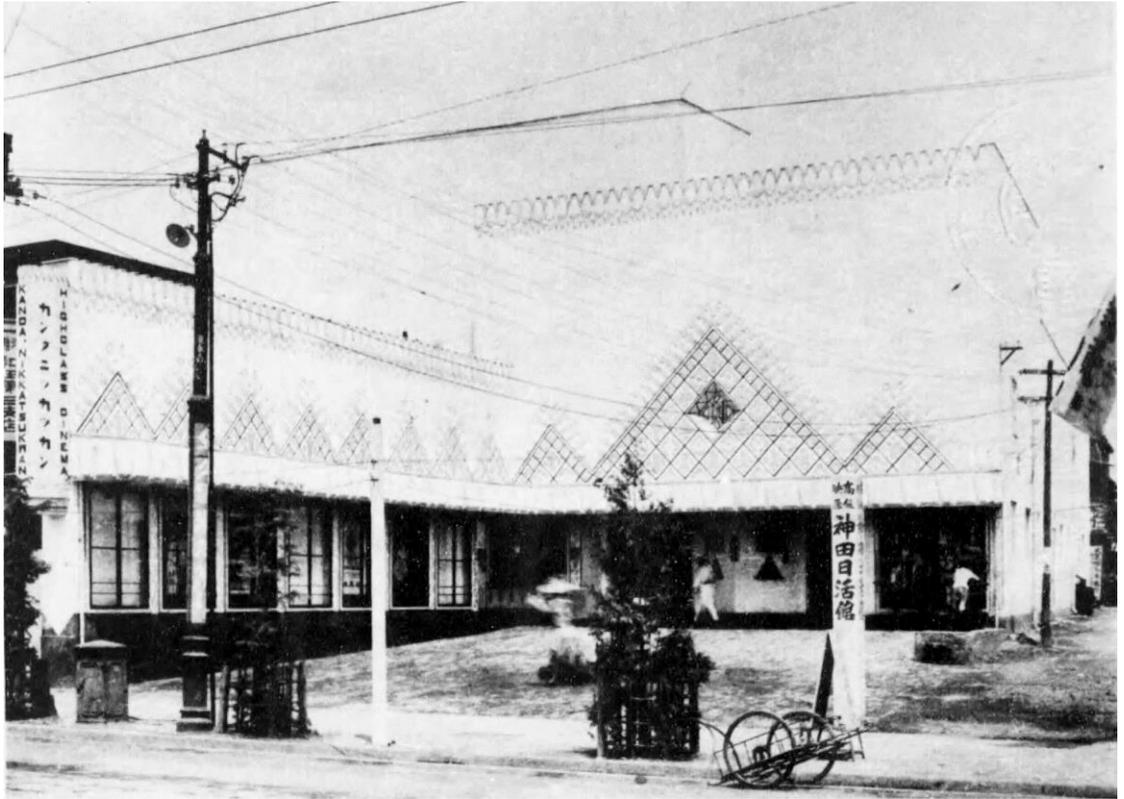
⁴¹ 『建築新潮』5(7),(8)、1924年、洪洋社、口絵

⁴² 藤森照信、初田亨、藤岡洋保『写真集 幻影の東京』柏書房、1998年、p.13

⁴³ 実際には多少の傾斜があったかもしれない。長椅子について藤森照信曰く「舞台上オーケストラボックスと演台があることから、“活弁”時代の映画館であることが分かる。映画草創期の形式を見せてくれるわけだが、座席がベンチ式というのはあんまりな感じ」とのこと（藤森ら1998:13）。

⁴⁴ 長椅子の脇の壁に「自由席」と書かれた札が掛かっているのが見える。『建築写真類聚 第14 活動写真館』洪洋社、1924年、口絵6

⁴⁵ 「神田日活館平面図」『建築写真類聚 第14 活動写真館』洪洋社、1924年、口絵1



神田日活館 (1924)

設計：吉川清作

施主：日本活動写真株式会社

施工：不明

竣工：1924（大正13）年5月

現況：非現存（1928年頃取壊）

図28 正面広場

図29 同



図 30 舞台側

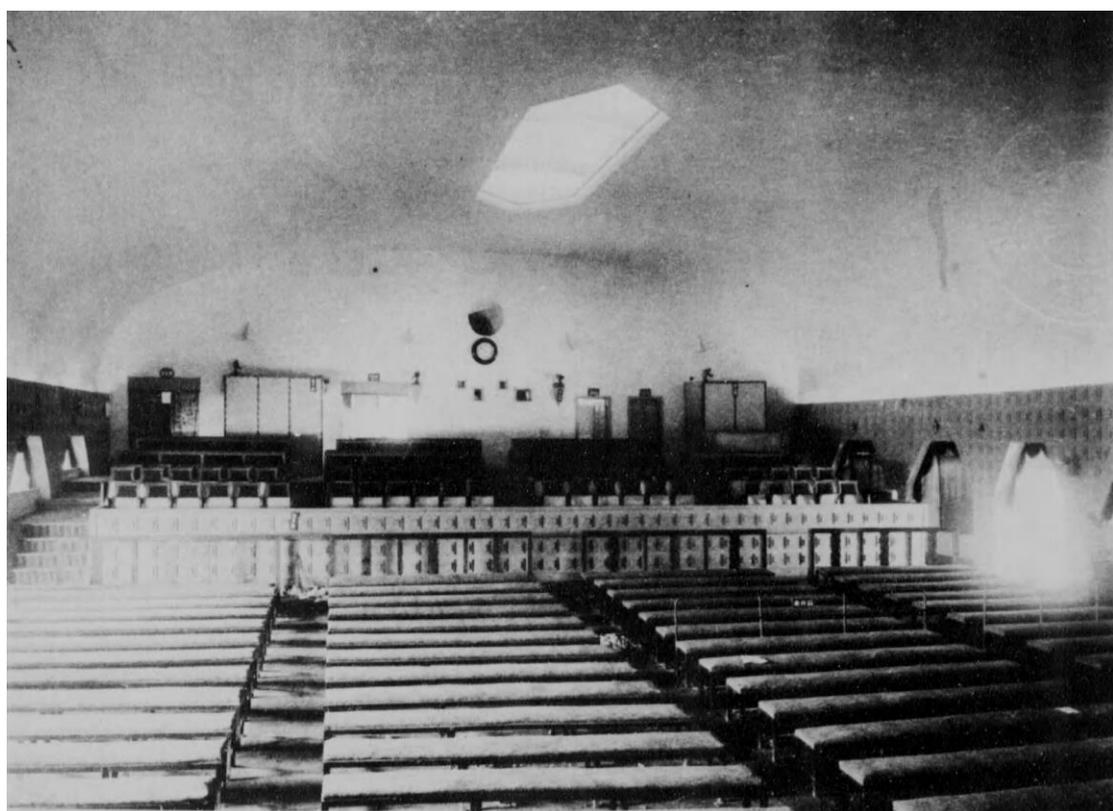
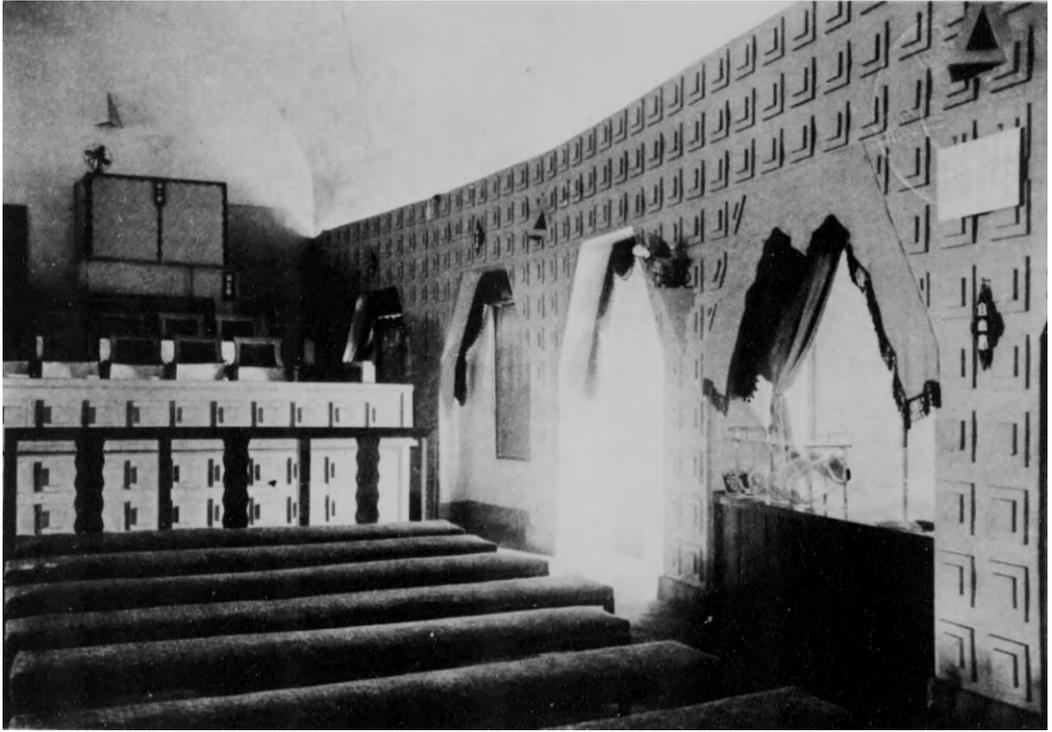


図 31 客席側（六角形の天窓がみえる）



皆さまの映畫殿堂が
神田に出現しました！

最も近代的な建築・理想的設備・良
い映畫・そして氣持のよい音楽と
説明を具へた藝術の大殿堂の出現を
待つてゐて下さつた皆様のために、
この神田日活館が生れました。

定豫館開日六十愈

高層西洋映畫
専門封切券

神田日活館

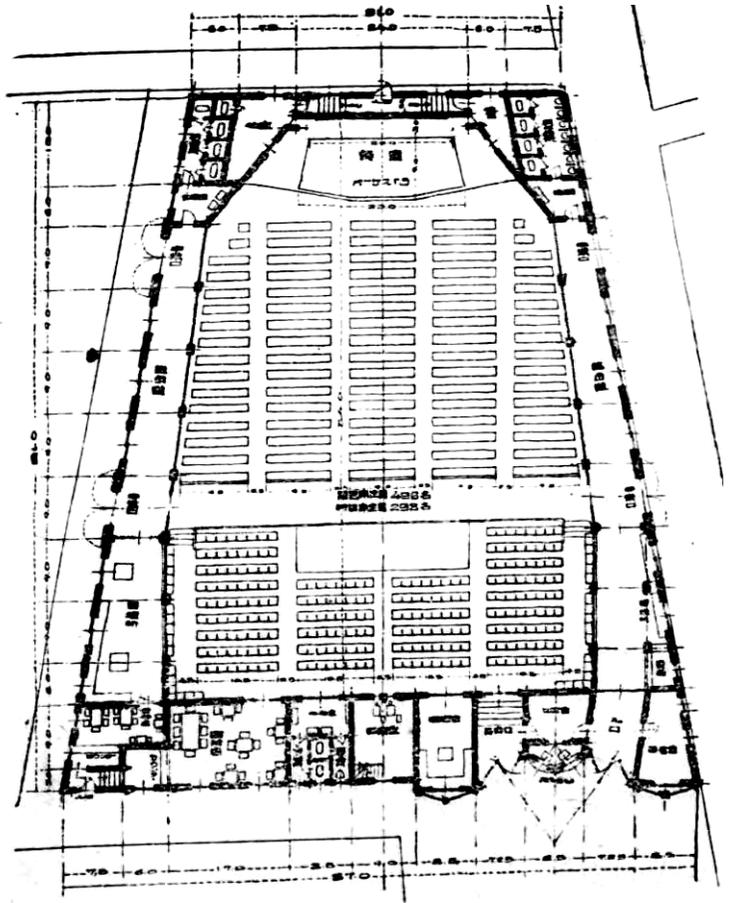


図 32 (上) 客席側面
 図 33 (右) 平面図
 図 34 (左) 開館の広告

明器具が三角錐状である程度である。一方で、客席の直上には縦長の六角形の天窓があり、これが内部の意匠的な中心をなしている。R の付いたシンプルな天井は、この天頂からの光を拡散するためであったと考えても良いかもしれない。事実、当時の写真を見ると、大空間であるために暗くなりがち天井部分をこの天窓がかなり救っているようだ。六角形というモチーフは、その後の K 氏邸（加藤邸、第 5 節第 2 項）においても用いられている。本橋は K 氏邸に見られる六角形の窓について、村山知義が 1925 年 8 月の『マヴォ 7 号』に翻訳掲載したエル・リシツキーの「要素と構成」の中に「〔正六面体の〕角の上に立ってゐるのを見るとダイナミックな六角形である」という記述があることを根拠として、ロシア構成主義に引き寄せて考えている（本橋 2008:39-40）。しかし、神田日活館において既に六角形のモチーフが見られることを考えると、吉川作品にみられる六角形を村山知義との関連で考えるのは難しいように思う。それよりも、震災後に多数建てられた幾何学的な意匠が目立つ「バラック建築」との同時代性を考える方が適当ではなかろうか。

吉川による神田日活館（初代）は、1928 年頃に RC 造の神田日活館（2 代目）に建て替えられており、実際に使われていたのは 4 年間ほどであった（建て替え後の神田日活館の設計者は不詳）。現在はタキイ種苗ビルが建っている。

第 2 項：京橋日活館

神田日活館と同じ 1924 年に建築された映画館。現在の京橋 3 丁目 7 番 6 号付近にあった。もとは第一福宝館という名称で、1910-12 年頃から営業していたが、震災により焼失したため 1924 年に吉川の設計により再建された。この時に京橋日活館と改称されたもの。1930 年頃に閉館した後は日活本社ビルとなり、現在は国立近代美術館フィルムセンターとなっている。規模は神田日活館より小さく、定員は 464 人（普通席 345 人、特等席 119 人）である⁴⁶。座席は神田日活館同様に、普通席がベンチ、特等席が 1 人掛けの椅子となっている。舞台向かって右が男子席、左が婦人席であった⁴⁷。

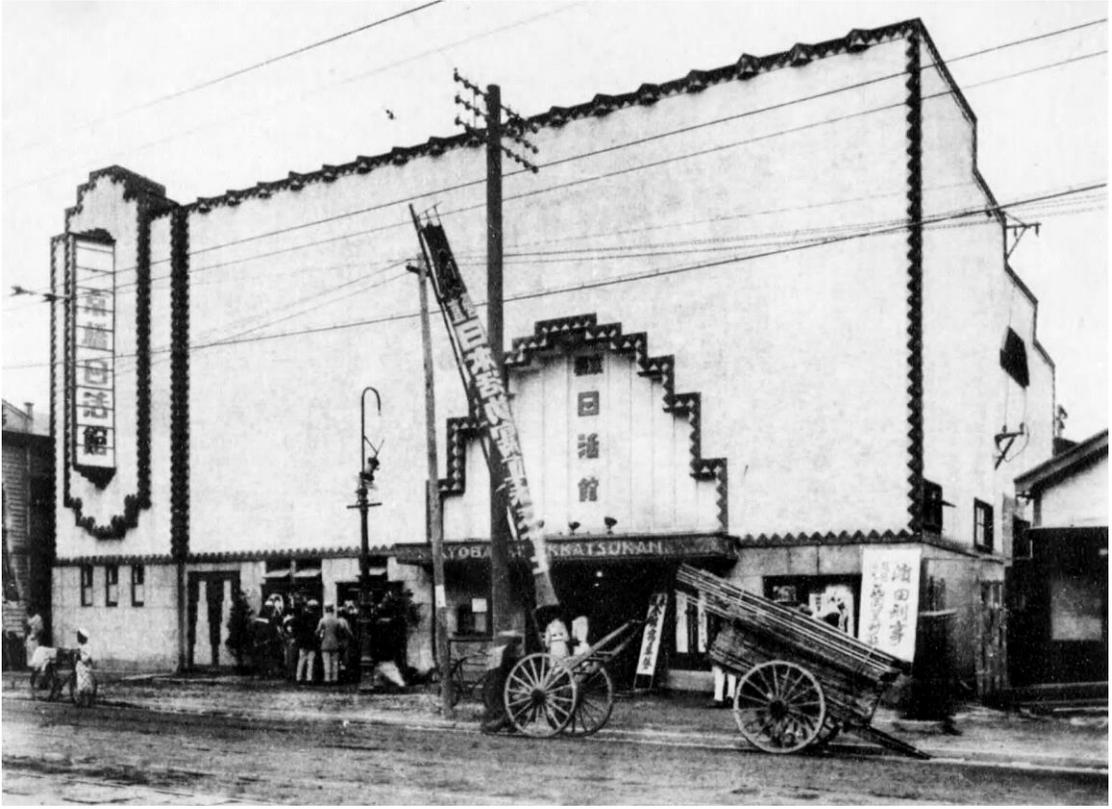
デザインはセセッション風⁴⁸で、内外共にキュービックなデザインになっている。外部は三角形のタイルで縁取られている一方、室内は球（もしくは立方体）を連続させたモールディングが付いているようである（写真が不鮮明で読み取れない）。この、外部には三角形の要素を配す一方、内部では別の形を使うスタイルは、神田日活館と共通している（神田では三角の破風と曲面の天井であった）。なお、京橋日活館については構想段階と思われるスケッチが残されている⁴⁹が、そこでも、外部では三角形の文様が執拗に繰り返されており、これが当初からの案であったことを思わせる。さらに、このスケッチで、館名と思しきもの（おそらく「京橋」「日」「活」「館」）が横書きされている部分の周りに六角形の縁取りがあることは、些細なことであるが、先の神田日活館と後の K 氏邸とのつながりを考える上で注目される。

⁴⁶ 「京橋日活館平面図」『建築写真類聚 第 14 活動写真館』洪洋社、1924 年、口絵 7。ただし、この図面と、実際の竣工時との写真を比べると、舞台周りや男子トイレ部分などで異同がある。

⁴⁷ 舞台下にそれぞれの札が掛かっているのが見える。「京橋日活館映写幕側」『建築写真類聚 第 14 活動写真館』洪洋社、1924 年、口絵 10。ちなみに京橋日活館について藤森照信は「演台の左右の構成に注目。左右の壁に次回上映予定らしい演題があるのは今の田舎の映画館につながるものだが、右の扇風機と左の盆栽は今の映画館にはつながらない」とコメントしている（藤森ら 1998:13）。

⁴⁸ 藤森ら 1998:13。特に内部のシャンデリアについては、セセッションとの関係性から検討することが可能であると思われるが、筆者の力不足に付きそこまでは能わなかった。

⁴⁹ 「京橋日活館配景図」『建築写真類聚 第 14 活動写真館』洪洋社、1924 年、口絵 8



京橋日活館 (1924)

設計：吉川清作

施主：日本活動写真株式会社

施工：不明

竣工：1924（大正13）年4月

現況：非現存（1930年頃取壊）

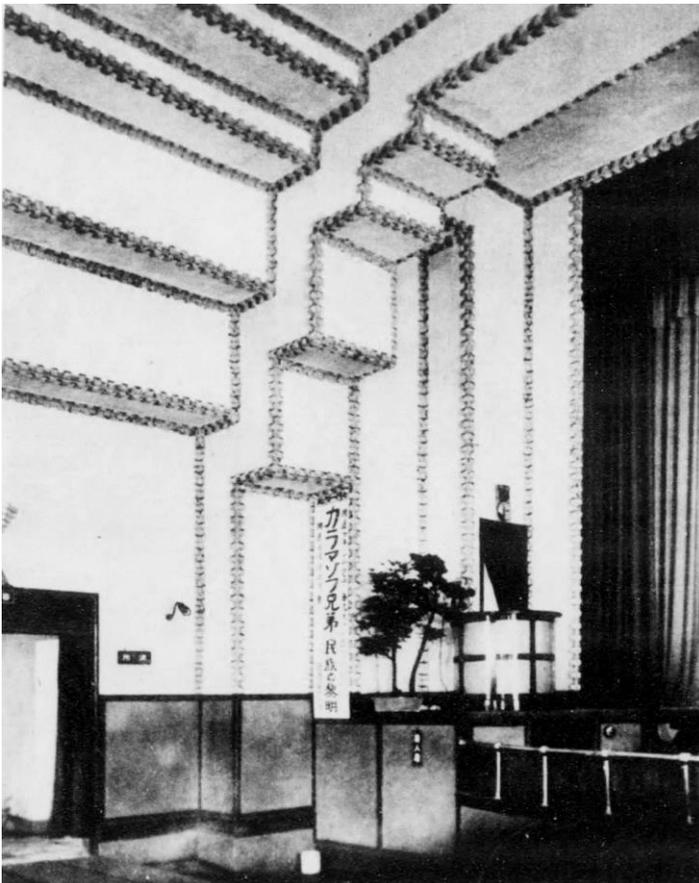


図 41 正面外観

図 42 舞台演壇

図 43 開館の広告

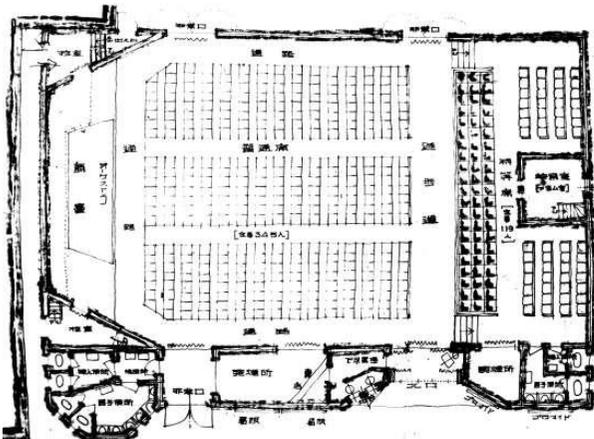
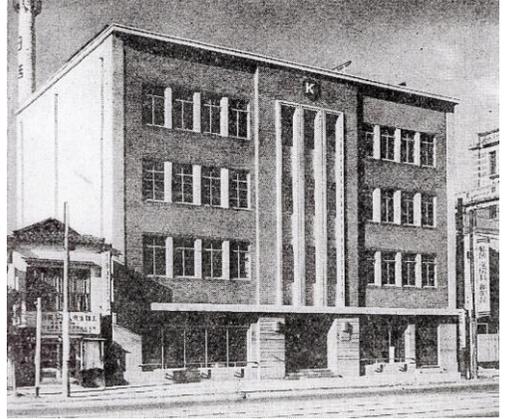
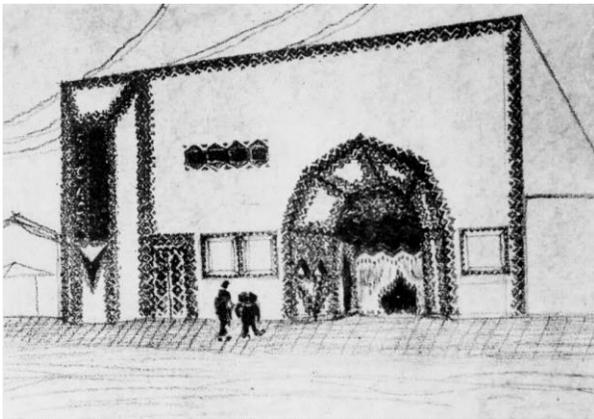


図 44 (上) 舞台全景

図 45 (中左) 吉川によると思われるスケッチ

図 46 (中右) 跡地に建てられた日活本社ビル

図 47 (下) 京橋日活館平面図

第3節：葵館—1924年

葵館は、神田・京橋日活館と同じく日活直営の映画館である。場所は溜池町30（現東京都港区赤坂1丁目1番17号細川ビル）付近であった。定員は475名と、神田日活館（794人）よりやや小さく、京橋日活館（464人）と同程度であった⁵⁰。もともとこの地には1913（大正2）年7月に開館した初代葵館が建っていたが⁵¹、1923（大正12）年9月1日の関東大震災により焼失してしまったため、吉川に再建が依頼されたものである。この二代目葵館は、同じく震災で焼失した神田・京橋日活館よりやや遅れて、1924（大正13）年10月17日に新築落成した⁵²。

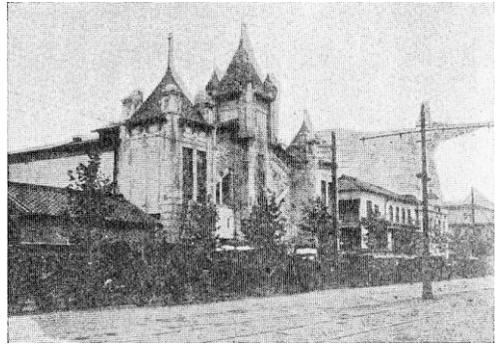


図48 初代葵館（1915年撮影）

しかしながら、その後の経営はあまり芳しくなかったとみえ⁵³、日活からの売却と直営化を繰り返し⁵⁴、最終的に1935（昭和10）年に閉館した⁵⁵。使用されていたのはおよそ10年間であった。

⁵⁰ 「映画常設館見聞さまざま その一 葵館」『キネマ旬報』（182）、1925年1月11日、p.34。神田・京橋日活館の定員数については前号参照。葵館の定員を421名とする資料もある（国際映画通信社編『日本映画事業総覧 昭和5年版』国際映画通信社、p.553）が、これは年代がやや離れているので、竣工直後の記事の方の数値を採った。

⁵¹ 『日活四十年史』日活株式会社、1952年、p.141

⁵² 1924（大正13）年10月11日付『朝日新聞』夕刊1面広告。神田・京橋日活館よりも竣工が半年ほど遅れた理由は定かではない。後述のように、日活は葵館を特に重要視し、誇りとしていたため、設計・施工に念を入れたのかもしれない。あるいは、次註に示すように葵館はそもそも儲かる館ではなく、収容人員も小さい館であるので、後に回したということなのかもしれない。

⁵³ きちんとした数字があるわけではないが、例えば開館直後の記事の一つに次のように記されている。「東京に於ける映画シーズンは最う盛りを過ぎた。各館を通じて昨今成績は著しく悪く営業車は非常に苦心である。優秀なる映画を封切して一頭地を抜かんとする精勤努力の苦心が鮮かに分るけれど、怎う言ふものか矢張り悪い。先週などは何處の高級館を見ても一日千圓を通過して七千圓の成績は得られなかった。誠に痛心事である。〔中略〕日活経営の三友館、神田日活館、葵館が怒濤の彼方へを上映し、目黒キネマが西班牙の踊子を封切してハリウッドを添え二流間には今尚ほ椿姫、戦争ネロ等が呼び物となってさえ此の成績だもの他は推して知るべしである。東京の映画界は全く不振の経路を余程下って来た。〔中略〕愛光輝くで千代田館が五百圓とは何たる惨憺であつたらう。戦争で一頭地を抜いた丈に一層に物哀れを感じず。僕は最う神田日活館や葵館の成績は書くまい。」（南條生「東京映畫瞥見」『キネマ旬報』（178）、1924年11月21日、p.30）。本文引用記事でも葵館は「別に儲けんでもいいのだ」という旨の日活関係者の発言が紹介されている。また、この頃には娯楽の中心が新宿・渋谷などの西側に移っていったという背景もある。

⁵⁴ 1928年5月直営廃止、1931年12月直営化、1932年12月直営廃止（『日活四十年史』上掲、pp.150-156）。1928年に売却された時の相手は不明だが、1930年時点での館主は市島亀三郎であった（国際映画通信社編『日本映画事業総覧（昭和5年版）』1930年、p.553）。一方で、1932年に売却された際の相手は日本興行株式会社であった。この会社は、1911（明治44）年に中小の映画館主が合同で設立した日本初の映画興行を目的とした株式会社で、設立当初より日活の（最初の1年は日活の前身のひとつである横田商会の）配給を受けており、日活と深い関係を持った企業であった。同社はこの時期に（葵館を含め）9つの常設館を買収しており、その代金は67万900円であったという（法貴顯貞「日本興行会社概論」『日活の社史と現勢』日活の社史と現勢刊行会、p.19）。最終的には1935年に会社ごと日活に買収された（下注参照）。

⁵⁵ 牛原虚彦『虚彦映画譜50年』鏡浦書房、1968年、p.195。『日活四十年史』には、なぜか葵館の閉館時期については記載がないが、1935年11月の欄に日本興行株式会社の買収に伴い葵館を含む9館を直営化したとの記事があるから（p.156）、葵館はその時に整理され閉館となったのであろう。



葵館(1924)

設計：吉川清作

施主：日本活動写真株式会社

施工：不明

竣工：1924年10月17日

現況：非現存（1935年閉館）

図49 外観(縦長窓の上部が開かれ
ホースが引き出されている。歩道
の柱には看板が立てかけてある。
左手には棚がある)

図50 外観(歩道上に奇妙な柱が建
っている。縦長窓は三角形に突出
している。窓から引き出したホー
スで散水している)





図 51 客席正面（各椅子には番号札が貼られている）



図 52 客席後背（左手のドアは洗面所に通じる。その斜め上に掛けられた札の文字は辛うじて「定員四百七十五人」と読める。三角形の照明が随所に見えるが、これは吉川によるものであろう。仕切りや後背のデザインと側面は明らかに異質で不調和である）

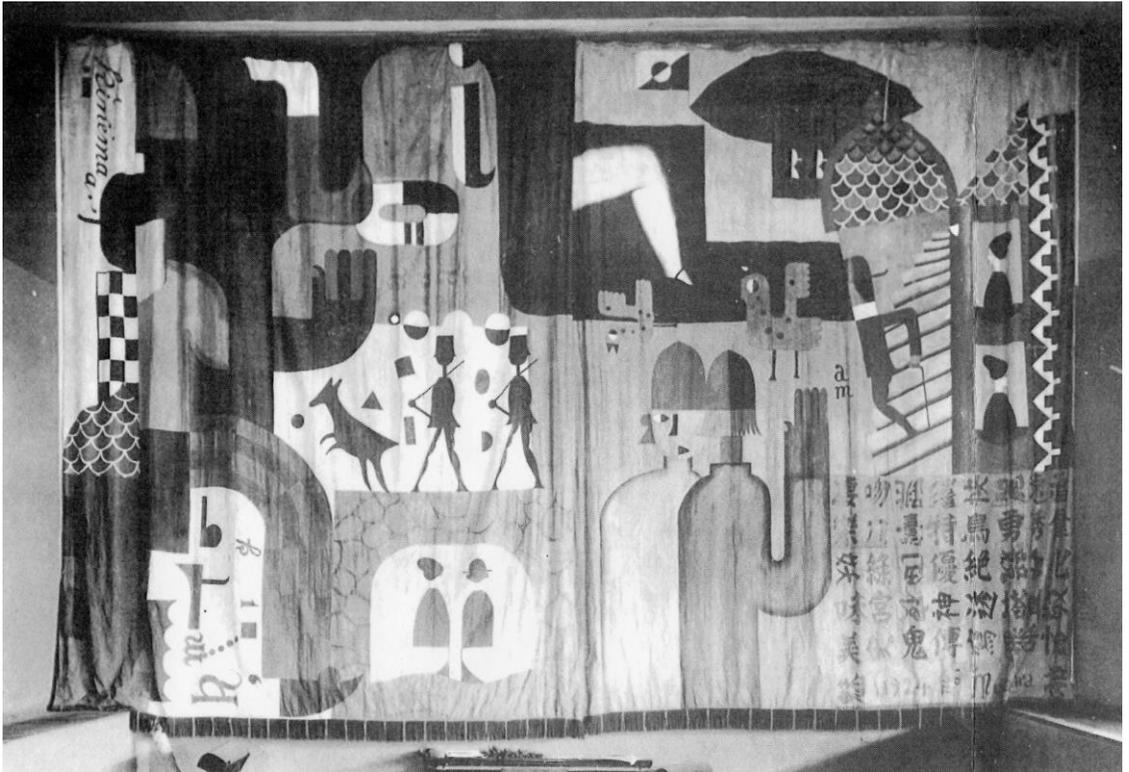


図 53 緞帳 (村山知義によるもの。右下の髪の毛の長い男が村山自身であるという (『演劇的自叙伝 2』 p.233))

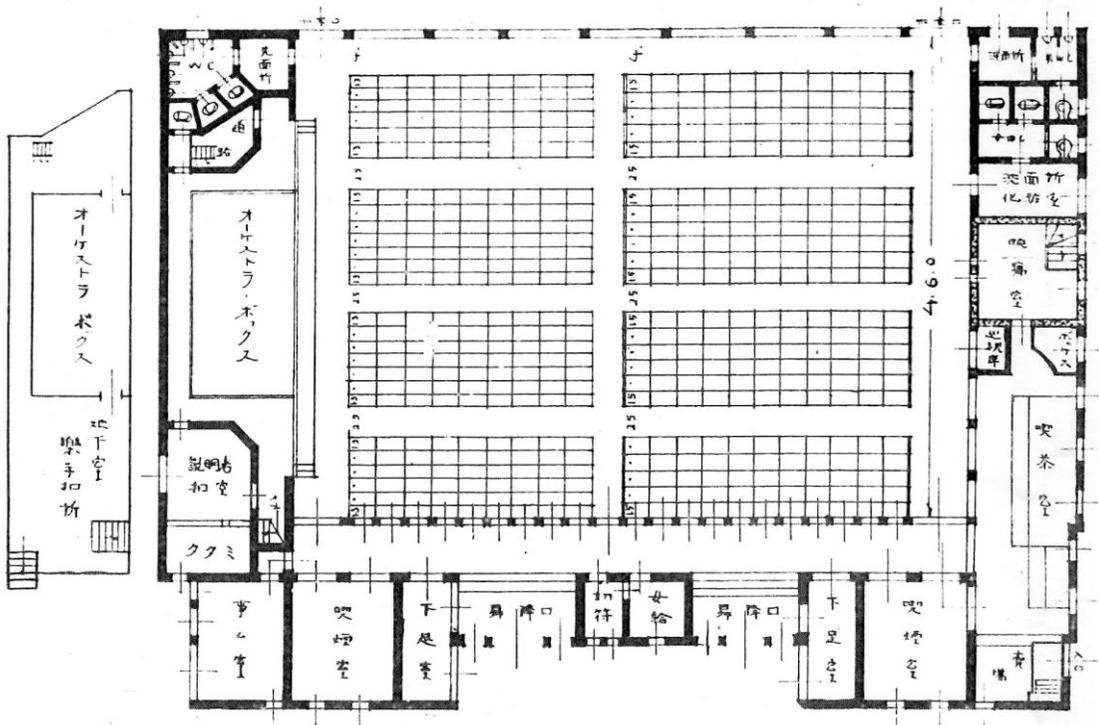


図 54 平面図 (右手外周の壁がボリュームに合わせて段々状になっている。下足室が設けられているが、この大きさでは十分に処理できなかったとみえ、開館後早々に土足制に切り替えられたらしい (本文中で引用したキネマ旬報記事参照))

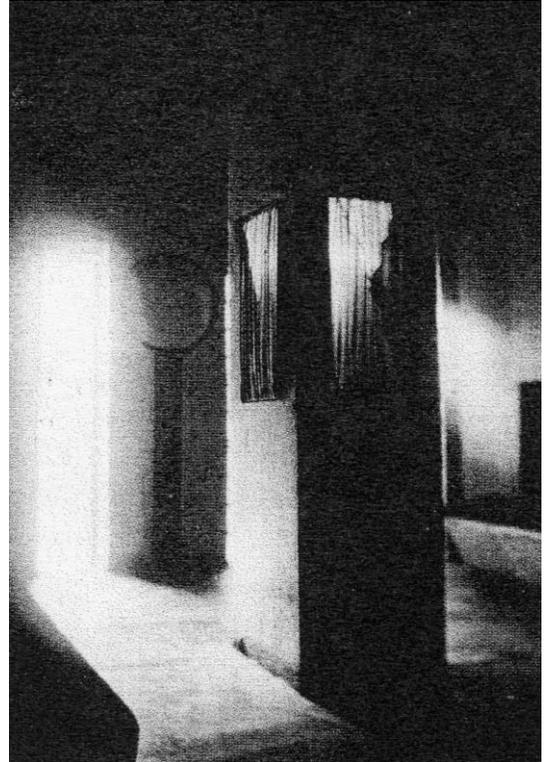


図 55-56 喫煙室（左が村山知義。ところで正面（図 50）では窓は棧で16分割されているのに、この写真では10枚になっている。どうも、道路側の縦長窓の下部6枚はフェイクであるらしい。平面図の入口部分に階段が見えるので、床が上がった分が伊達になったのであろう。そして、図 49 からこのうち上部6枚が開放できたことが知れる）

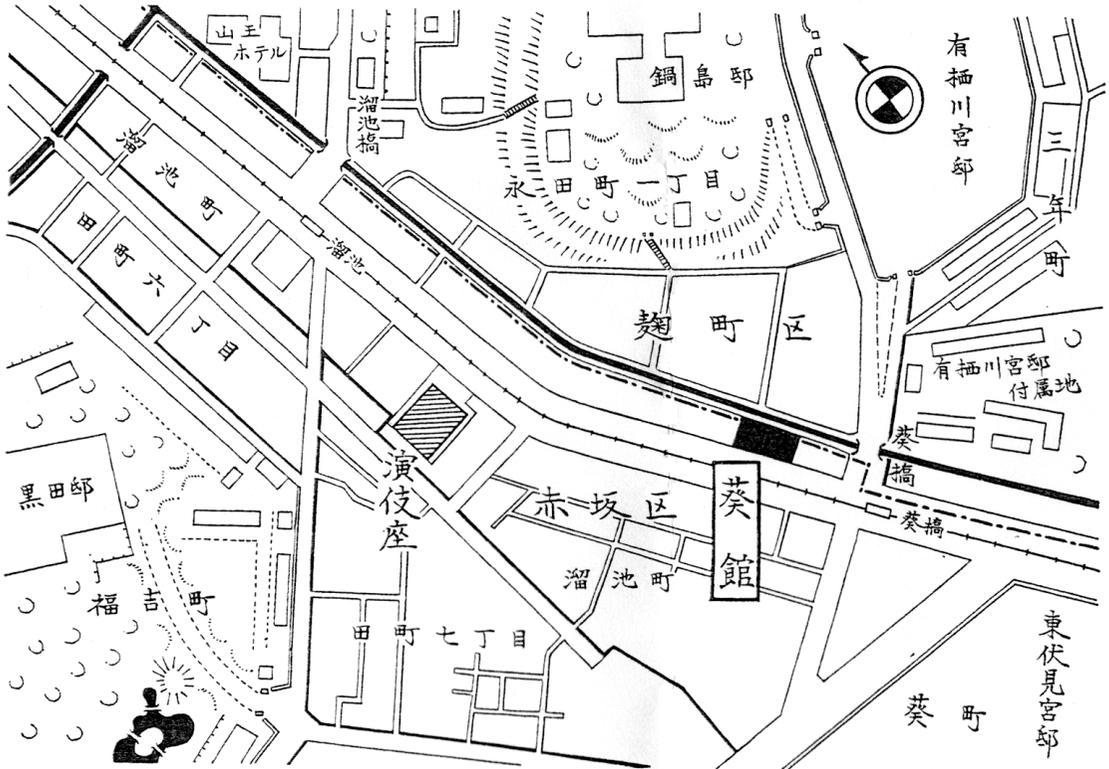


図 57 葵館所在地付近の地図

この建物は開館当初から巷の大きな話題となったようで、当時の雑誌記事では「バラック劇場の異彩」「新東京名所」などと評されている。当時の様子を知るのに好適と思われるので、長くなるがそれぞれの記事を引用しておこう。

映画常設館見聞さまざま その一 葵館（バラック劇場の異彩）

一昨年の震災の為に焼失以来長らく放任されて居たが昨年十月十七日新築落成開館した。日活の直営館。定員四七五名。主任は鈴木伊平氏。東京市赤坂区溜池町卅番地。

目下日活の外国映画封切館である。映画を知る者で葵館の名を知らぬものは少ない程に、此館は東京。否全国映画界に於ける昔からの一種の名物であつた。それは震災前の建物が映画劇場として感じの良いものであつた事や、場所の関係などからいつて観客に智識附級殊に外人や學生やそれから美しい人達などの多かつたことや、葵の徳川か徳川の葵かと云はれた程に説明者徳川夢聲君がその獨特の説明でファンを喜ばせて居た事や、色々な原因でそうなつたもので、此處には昔から日活が特別の力を入れて居たのである。現在西本日活営業部長が「君、あすこは別に儲けんでもいいのだ、日活にも斯んな高級な館があるといふことを誇れよばいんだ」と力んで居る程に慾を放れた理想興行振りを發揮して居るかどうか、それはまあ細く詮議立てはせぬとして、兎に角日活が一つの誇りとして現在も大切に居る事は事実である。復活後土地の利如何を第二として純然たる封切館としたに徴してもそれは解る。ファンの要望であつた外国映画の市内封切が此處で行はれる様になつた事なども偶然から味はれる興味を呼ぶ。

目下の建物はバラックには違ひないが萬事に相當の費用を惜しまず、特等一等は全部單獨椅子、粗末乍ら各等共絨毯敷きといふ本建築ならぬ常設館としては正に設備に於て一異彩を放つて居る。建築様式に於ては特に日活が震災後バラック映画劇場の建設に當つて他會社と全然特色を異にした設計を欲して招聘した吉川氏の手になつた物だけに、一見新時代の要求に依つて生まれた現代味豊かなものである感じを受ける事請合ひである。所謂看板の出し方から館内売店の装置迄新しい人々には此様式の効果は充分に賞味され得ると思ふ。尚各等全部靴草履はそのまゝ、下駄類全部下足の制度であつて之れも洋服連にはカヴァーの必要なくて喜ばれて居る。更には館内の裝飾や正面の幕模様にと誰でも一寸その平凡を脱し過ぎて居るのに驚くことであらう。これは二科會で知られて居るマボイスト村山氏の手になるもので、現在の映画劇場の裝飾に此派のものゝ仕様が適當であるかどうかには異論も多い事であらうが。兎に角素晴しく好奇の眼をそばだゝしめる。全く以て去る頃にその保守的態度を我々が始終難詰した日活が常設館裝飾を此派の美術家の手に依頼したことは正に驚くべき出来事である。決して宣傳をたのまれたわけではないが、地方の館の諸君など上京の際には一時間を割いて此の葵館の裝飾畫を一見したならば良いお土産の種となるであらう。⁵⁶

⁵⁶ 「映画常設館見聞さまざま その一 葵館」『キネマ旬報』大正14年1月11日 第182号 34頁。せっかくの機会なので続きも引いておく。「…(略)…お客扱ひといふ事は結局女給さんの評判記めいたものになるから遠慮したい。選抜宜しきを得たか、観客が上品だからか品の良い女給さんが多く嫌に化粧した奴や化物に近い様なのやキャアタタ騒ぐのが居ない事が気持ちよくて結構であるとだけ申し上げておく。それと下足の整理を一層敏活に行く様に工夫する事。心配になつた前の電車の音は案外軽微である。それから少々餘事だが開館後二カ月半に近い迄、売店が始まらないのはどうした事か。葵館といへば旬報社としては是非書き添えておかねばならないのは旬報社が未だ搖籃の貧弱時代に同情と理解を以て親切に階上の一室を明けて事務所として約一年半餘の間提供して呉れたのは葵館であつた。時移り人變るとも我々の葵館に対する懐しさと感謝の念は永く消えるものではない。現在の葵館に、その好意を

新東京名所「葵館」

十月二十二日夜。初めて新装の葵館へ行く。切符を買つて中へはいると（こゝでは土足が許されない）唯今奏楽中ですから、カアテンの外へ暫く待たされる。十数人の人が待たされてゐる。いやにきびしいなど思ひつゝ風變りな建物の壁に描いてある風變りな繪を眺める。中からは「ラトラビータ」の組曲がひびいてくる。實にいゝ音色だ。私はトラビータの曲が大へん好きである。

やがてそれが終わると、ようやく我々は場内へはいる事ができた。新築落成初興行の最終の晩で、ぎつしりの大入りだ。私はまづ正面の幕に驚いた。實に感じのいい、表現派だか構成派だか知らないが。珍奇といふだけでも十分私の目をよろこばせる繪がかいてある。ルシアンバレイの舞臺意匠にでもありさうな繪だが、幕としてこんなすばらしいのを見たのは初めてである。その次私には建物が頗る風變りで目新しいのを心地よく見廻した。そしてこれは素的だぞと思つた。震前にもなかつた高級常設館だと思つた。私は新東京景物詩の中へ、日比谷音楽堂や築地の劇場と共に、この葵館を加へなければなるまいと思ふ。これの設計者は、築地小劇場を設計した人ださうなが^{マア}57、見た目の感じではこちらの方がずつといゝ気分には思はれた。何しろ私はすっかり気に入つてしまつた。

〔中略〕はねて外へ出てから私は小屋の外観をつくづく眺めた。なかなか悪くない。たゞ客を澤山入れさへすればいいといふ頭で造られた活動館ばかりの中に、かういふものをこしらへた日活の新しさをほめてやりたい。この上の願ひには、この入れものにふさはしい内容をたへず番組の上に心がけてほしい事だ。58

これらの記事から分かるように、葵館は当時としては珍しい清新な意匠をもつ建物であつた。特にファサードのレリーフや、緞帳といった装飾面での新奇さが目立つが、これらは（記事内で触れられているように）吉川の手になるものではなく、彫刻家・荻島安二や美術家・村山知義によって制作されたものである。

まずは吉川と協働したこの二人がどのような人物であつたのかを簡単に確認しておこう。

第1項：村山知義・荻島安二とは誰か

村山知義は1901（明治34）年、東京神田に生まれた芸術家である。熱心なクリスチャンであつた母の影響でキリスト教に興味を持ち、第一高等学校卒業後、原始キリスト教を学ぶためにドイツに渡る。在独中から旺盛な創作活動を行い、帰国後の1923（大正12）年6月18日、門脇晋郎・大浦周蔵・尾形亀之

持つて呉れた日活當事者に、それからとりわけて當時の葵館の人々たる山崎政雄、鹿野千代夫、徳川夢聲の諸氏其他に深謝の意を此の機会に表明しておき度い。」

⁵⁷ この記述によれば1924（大正13）年に開場した築地小劇場の設計に吉川清作が関与していたことになる。しかしながら、主に設計に当たったのは「中榮一徹、浦田竹次郎の両氏」（三宅周太郎『演劇五十年史』鱗書房、1942年、p.305）とされており、吉川が関与したという他の資料はない。現時点では、吉川が築地小劇場の設計者であるといふのは寄稿者の勘違いだと考えるのが妥当であろう。

⁵⁸ 藤田草之助「映畫街散策」『キネマ旬報』大正13年12月1日 第179号 44頁



図 58 村山知義

助・柳瀬正夢と「大正期新興美術運動の代名詞、さらには日本におけるダダの代名詞」⁵⁹の存在である芸術団体「マヴォ (MAVO)」を結成した。

村山はかなり早い段階から建築への志向を持っており、ドイツ留学前の 1922 年頃には母と弟のために住宅（「たった千円の家」）を設計したほか、帰国後すぐに「たった千円の家」に増築する形で「三角アトリエ」を建設した。マヴォ第一回展覧会（1923）においては建築作品を同人の中で唯一出品したほか、関東大震災後の帝都復興草案展（1924 年 4 月 13-29 日）でも、建築作品を発表している⁶⁰。

一方の彫刻家・荻島安二については前村文博による簡潔な紹介があるので引用する。

1895（明治 28）年に横浜で生まれた荻島は、慶応大学予科在学中に彫刻の道を志し、朝倉文夫の門下生となった。1917（大正 6）年第 11 回文展に「自刻」が初入選して以後、帝展や二科展などで出品を重ねていく。当初の因習的な写実から脱し、大胆に抽象化された女性の頭部や胸部の塑像を多く手がけはじめて以降、頭角をあらわすようになってきた。彼の破格の作風はほどなく、マネキン作りに生かされることになる。1925（大正 14）年、京都の島津マネキンに請われて、日本で最初の西洋マネキンを制作し、その後もマネキンの原型作家として、時代の気分を反映するようなモダンガール像を多く手がけている。また、1924（大正 13）年に建築家の吉川清作と美術家の村山知義と協力して手がけた赤坂の映画館、葵館では、建物正面のレリーフで裸婦の躍動するイメージをリズムカルに表現し、大いに話題になったという。⁶¹



図 59 荻島安二

この二人と吉川が出会った経緯については後に検討するが、少なくとも葵館で協働する以前に直接的な面識があったことを示す資料はない⁶²。

第 2 項：葵館の意匠からみる役割分担

ところで、この三人のそれぞれの担当範囲は、村山の『演劇的自叙伝』の記述によれば、以下のようなものであった。

⁵⁹ 五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』スカイドア、1995 年、p.454

⁶⁰ 以上は本橋 2008:59-82 をもとにまとめた。村山知義の活動範囲は絵画から建築まで幅広いが、ここでは本稿に関係のある範囲の事項を記すに留めた。彼の活動の多様性と重要性からすれば不十分だが、村山やマヴォについては既に多くの論考がある（五十殿 1995: 453 以下など）のでそちらを参照のこと。

⁶¹ 前村文博「境界領域としてのフィギュール 清水三重と荻島安二」『構造社 昭和初期彫刻の鬼才たち展』キュレイトーズ、2005 年、pp.35-36

⁶² 本橋 2008:42 は村山知義が帝都復興創案展へのマヴォの出展にあたって中條精一郎宅を訪れていること、ブラック装飾社の「カフェキリン」（1923）が曾禰中條設計事務所によって設計されたことを挙げて、少なくとも吉川は村山や MAVO の存在は聞き及んでいたであろうと推測している。

一九二四年の夏⁶³、赤坂溜池の葵館という映画館の建築を、建築家の吉川清作、彫刻家の荻島安治と私の三人で引き受けた。吉川は建物全体の設計、荻島は正面の壁面の十二体の女の浮彫り、そして私は正面廊下の壁画、喫煙室と客席背面の設計と緞帳を受け持った。⁶⁴

葵館における三人の役割分担については、これまで概ねこの通りに理解されてきた。しかし、当時の写真をよく観察し、三人の作品傾向と比べると、事情はもう少し複雑であったらしいことがわかる。そこで、まずは、それぞれの建築作品に着目してみよう。

(1) 荻島安二の“帆型”

荻島安二は、通常のブロンズ彫像からメダル、マネキン、レリーフまで幅広い作品を手掛けているが、カフェや酒場の内装設計も行ってた。その数はブロードウェイ、サイセリア、シルバースリッパーなど、銀座近辺で20余りになるという⁶⁵。

そのうちの一つであるカフェ「マッターホルン」の客席の間仕切壁には、縦方向に引き伸ばされ、頂部が尖った四分円状の開き口があるのがみえる。また、写真が不鮮明だが、カフェ「ロリガン」のカウンターにある棚の端部にも、同様の曲線が取り入れられている。この荻島作品にみられるヨットの帆のような形状のことを、ここではとりあえず“帆型”と呼ぶことにする。

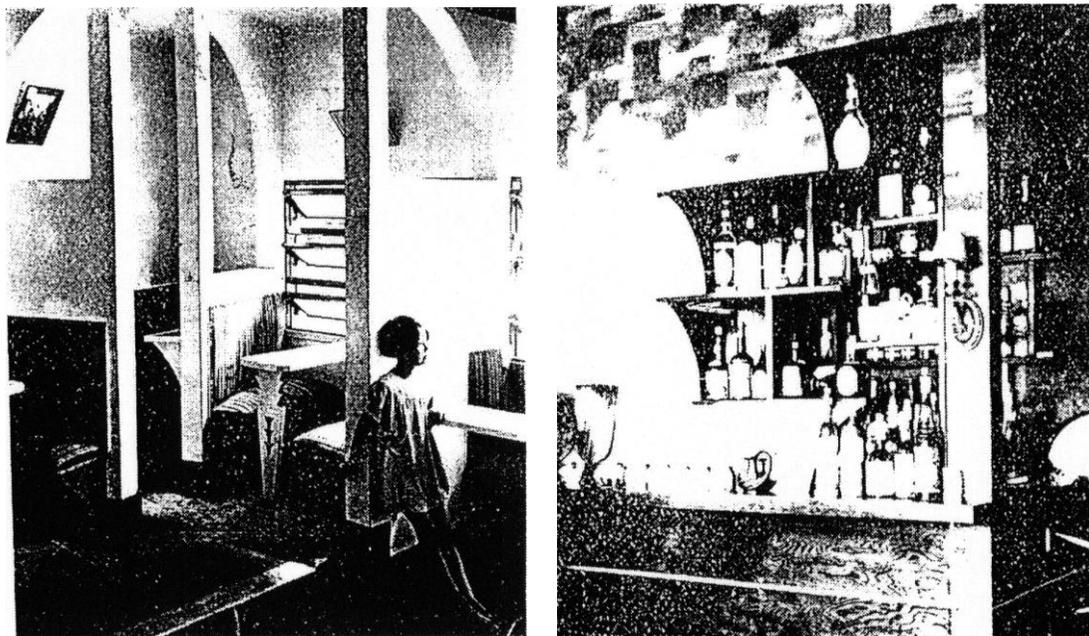


図 60-61 バー・カフェ マッターホルンの客席、ロリガンのカウンター

⁶³ 正確には、村山に声が掛かったのは10月のことである（五十殿 1995:525。これは、『演劇的自叙伝』が戦後になってから書かれたものであるために起きた記憶違いであろう）。

⁶⁴ 村山知義『演劇的自叙伝 2』東邦出版社、1971年、p.197

⁶⁵ 前村 2005:36。そのほかにロリガン、マッターホルンが『合理派建築』（前掲）pp.4-5 に荻島の作品として記載がある。

(2) 村山知義の“曲線”

一方で、先に紹介したように、村山知義も早い時期から建築設計に興味を持ち、いくつかの作品を残している。そのうち、葵館と同時期のものとしては、「公園内の休憩所」「愉快ナル本屋の設計」がある(ともに1923-1924年頃)。

このうち「公園内の休憩所」には、荻島の“帆型”に似た開口部が室内の間仕切壁に現れている。しかし、その頂部に着目すると、交点がほぼ扁平になっており、頂部を尖らせる荻島の“帆型”とは異なっている。

また、「愉快ナル本屋の設計」で用いられている曲線の中にも、L字の直角部を曲面としたようなものがみられる⁶⁶。これら村山の作品にみられるカーブを仮に“曲線”と呼ぶことにしよう。

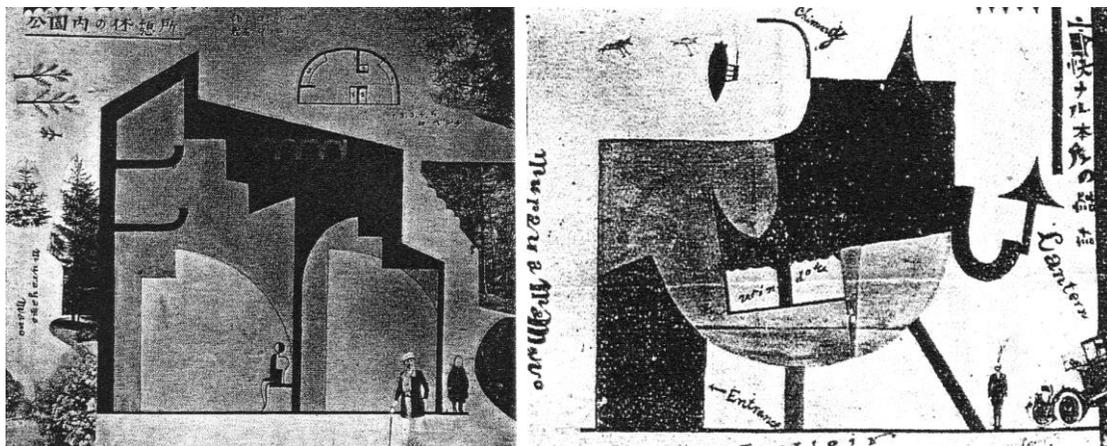


図 62-63 「公園内の休憩所」、「愉快ナル本屋の設計」

(3) 吉川清作の“正円”

吉川清作についてはどうであろうか。吉川の最初の作品集である『現代の住宅』(1920)では、開口部に正円連続アーチをもつものが多くみられた(このことは第1節6項で既に指摘した)。

その他に扁平アーチを持つものも数案あるが、同書の五十余案中には、荻島の“帆型”のような頂部の尖った四分円をもつものは見られない。“曲線”についても同様である⁶⁷。

(4) “帆型”をもつ客席後壁・仕切壁とロビーの柱

ここまで、三人の建築作品における曲線の使い方を確認した。ここからは、葵館の内部に着目する。

まず、村山知義による壁画が印象的な客席後壁についてみよう。一般には、これらは、全て村山知義の手になると言われてきた。例えば五十殿氏は

一方、〔客席〕後方の壁画は対照的に抽象的な文様で構成されている。円をモチーフとして、音符のように見えるかたちもあり、規則正しく並んだ開口部のかたちを締めくくるような直線

⁶⁶ 同作品中には、頂部を尖らせた曲線部分も見られるが、四分円を基本とする“帆型”とは異なり、ゴシック建築に見られるような、半円を基本とする尖頭アーチとなっている。

⁶⁷ 葵館以前の吉川の作品としては、神田・京橋日活館も挙げられるが、三角・四角・六角などの幾何学的なモチーフが多く、ここで比較できるようなカーブを持った細部には乏しい。

と曲線の組み合わせもある。また映写室のドアとそれに呼応する四分円のようなかたちをした暗色に塗られた映写のための開口部（さらにそれは客席後方の開口部や座席を分ける仕切りの開口部のかたちにも対応している）があり、細かな配慮をうかがわせる。

いずれにしても、バラック装飾のかなりダダ的な構成とは趣が異なることが納得できよう。商業的な仕事と言う制約があるにせよ、村山ははっきりと画風を変えたのである。その原因は何か。おそらくはこの年（一九二四年）『みづゑ』七月号と九月号に連載した構成主義論に端的にうかがえ、その造形思想に対する理解の深まりに由来しているように考えられる。⁶⁸

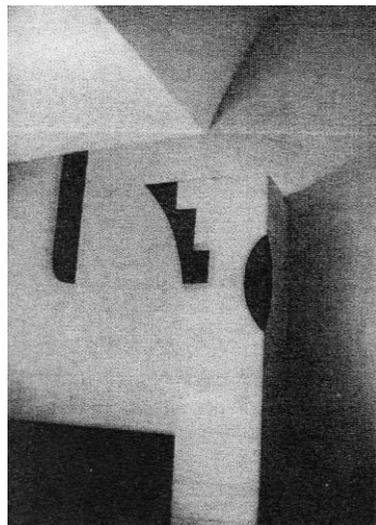


図 64 ロビーの柱型

として、客席後壁の開口部を含めて村山の手になるものと考え、それをダダから構成主義への転換として捉えている。

しかし、ここで五十殿氏が「四分円のようなかたちをした〔中略〕開口部」と呼ぶものは、我々が“帆型”と呼ぶ、荻島安二の作品に特徴的な造形に他ならない。先にみたように、同時期の村山の作品には、“帆型”に近い曲線は見られるが、どちらかといえば L 字の内側を滑らかにつなぐような曲線の作り方であり、接合の仕方が明らかに異なる。

このような視点にたつて葵館を見れば、客席後背の開口部やドア、客席間の仕切り、それにロビーの柱の頂部の造形は、いずれも“帆型”に分類されるものであり、荻島安二の関与を強く感じさせる。

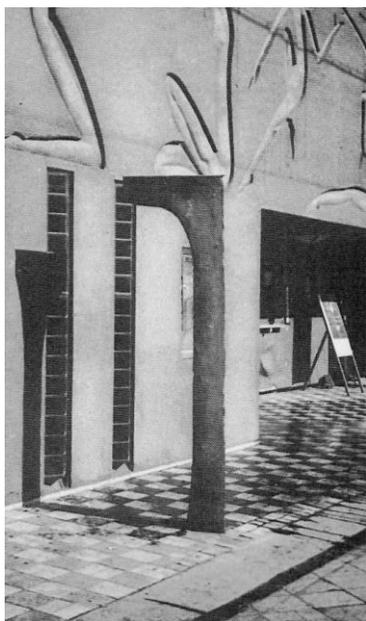


図 65 歩道上の柱型

(5) “曲線”をもつ歩道上の柱

一方で葵館の外に目を転じると、前面道路の歩道上に奇妙な曲線をもつ柱が立っている。当時の写真をみると、立看板を立てかけるために用いられていたことがわかる。この柱の頂部は、ちょうど L 字に 90 度曲がっており、内側は曲面となっている。

管見の範囲ではこの柱について触れた文献はなく、断定的に述べることはできないが、葵館と同時に作られたものとすれば、村山知義の作品にみられる“曲線”に近い。

(6) “正円”をもつ客席側面

葵館の客席側面上部には、連続正円アーチがみられる（図 51）。“正円”は先にみたように吉川の『現代の住宅』で頻出するデザインであり、後の K 氏邸(1925)でも門扉に使用しているのが確認できる。客席側面は、荻島の関与が考えられる客席後背部と比べると静的な印象を受け、これは吉川の手になると考えてよいだろう。

⁶⁸ 五十殿 1995:528（下線は引用者）

(7) 小結

以上をまとめると、葵館における三人の役割分担について、次のように言える。

- ① 荻島安二は正面レリーフ以外に、客席背面、客席仕切り、喫煙室柱などの造形に関与しているらしいことが推定できる。
- ② 村山知義は、緞帳、客席背面壁画、廊下壁画、喫煙室の装飾のほかに、正面歩道上の柱のデザインを担った可能性がある。
- ③ 吉川清作は、その余の建物全般を担ったものと思われる。例えば客席側面上部の連続アーチは、吉川のデザインになるものと考えてよい。ただし、写真から確認できない部分（廊下など）では、荻島安二・村山知義が担った部分がある可能性がある。

三人の作品にみられる“帆型”“曲線”“正円”の例と葵館での該当部分について次表にまとめた。

第3項：三人はどのように出会ったか

それでは、この三人はどのような経緯で出会ったのだろうか。管見の限りでは葵館以前に直接の面識があったことを示す資料はない。ただし、荻島安二は銀座サイセリアのレリーフを担当しており（後述）、この竣工と葵館の竣工のどちらが先だったかはあまりはっきりしない。葵館の仕事をする前に、吉川と荻島の間面に識があった可能性はある。しかし、ここでは仮に、三人は葵館で出会ったものとして、その経緯を想像してみたい。

(1) 最初の依頼

関東大震災によって失われた葵館の設計の仕事をまず請け負ったのは、もちろん吉川清作であっただろう。証拠があるわけではないが、葵館は神田・京橋日活館と同時に関東大震災によって失われたものであって、再建も同時に請け負ったとみるのが自然である。

しかし、事情は定かでないが、葵館の再建は後回しとなり、神田・京橋日活館が半年ほど先に竣工する。震災直後、娯楽に飢えた人々は映画館に殺到して空前の好況をもたらしており⁶⁹、この二館もかなり優秀な興行成績を上げたものと思われる。しかし、施主である日活からすると、その意匠にはやや物足りなさを感じたかもしれない。というのも、外部はともかく内部はかなりシンプルな造りだったからである（例えば、神田日活館の内部は白く塗らまわされた曲面天井と濃色の板で覆われた壁面のみによって構成され、また京橋日活館の内部も、モールディングが施されてはいたけれども、平滑な壁面が占める割合が多く、全体としては静的な印象を与えるものであった）。

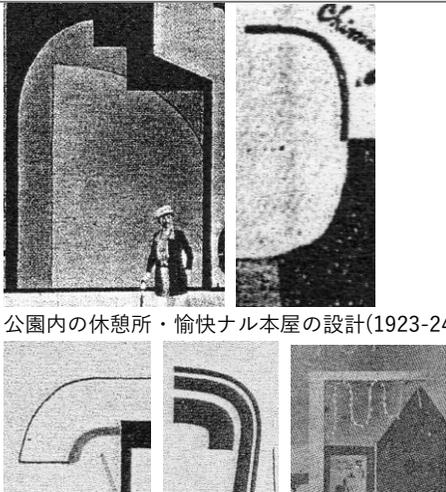
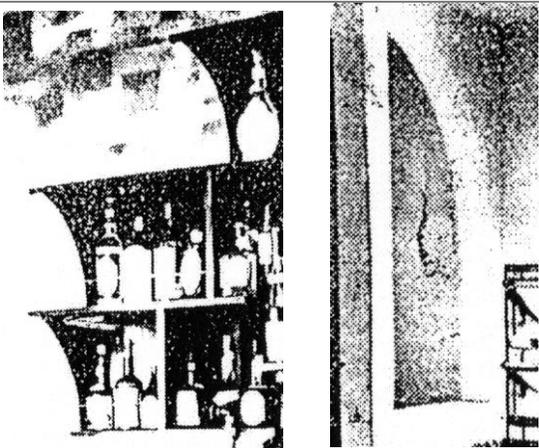
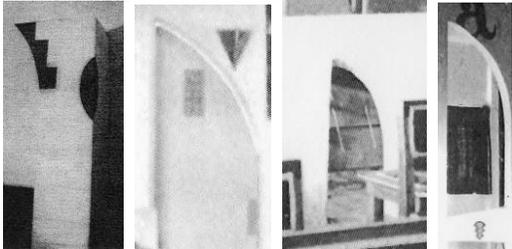
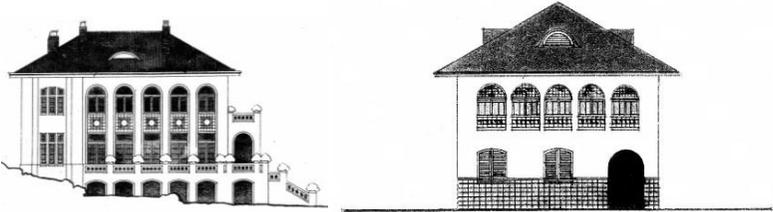
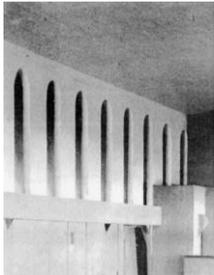
これに関連して、震災直後に『此際！』という言葉が新聞などの言説中で流行したという興味深い話がある。佐藤美弥⁷⁰によると、『此際！』とは「震災が白紙からの出発点を創出し、平常時では不可能な見直しが可能になり、それゆえ変革・改善の好機である、という感覚」に基づく様々な改善提案に付されたキャッチフレーズである。しかし、主には第一次世界大戦以降急速に発展した日本の都市生活を奢侈で浮薄なものと考え、震災を契機に「社会・生活の簡素化・科学化」を目指そうという主張の中で使われることが多かった。そしてそれは、「壊滅した都市としての東京」を復興する文脈では、もっぱら技術的な見地からの実用的な都市計画（端的に言えば不燃都市化）を行うことが第一に想定されていた。

佐藤はバラック装飾社、マヴォなどをはじめとする芸術団体が一緒に「復興」と結びつくことを目指したのは、『此際！』に代表される簡素化・科学化の波に対する反動ゆえであったと主張する。「芸術界の

⁶⁹ 『日活五十年史』日活株式会社、1962年、p.79

⁷⁰ 佐藤美弥『都市社会における文化活動の研究：両大戦期の創宇社建築界を中心に』一橋大学博士論文、pp.44-49

表1 村山知義・荻島安二・吉川清作の作品にみられる曲線と葵館

	村山知義	荻島安二
作品にみられる曲線の例	 <p>公園内の休憩所・愉快ナル本屋の設計(1923-24)</p> <p>自動車に施せる看板意匠・ラジオ用真空管(1928)、「朝から夜中まで」舞台装置(1924)</p>	 <p>ロリガンの酒棚・マッターホルンの仕切壁(1929 以前)</p>
葵館の部分	 <p>歩道上の柱</p>	 <p>ロビーの柱と客席后背のドア・通路仕切り・開口部</p>
	吉川清作	
作品にみられる部分	 <p>『現代の住宅』邸宅<7>・中流住宅<19> (1920)</p>	
葵館の部分	 <p>客席側面壁</p>	<p>画像出典：</p> <p>公園内の休憩所・愉快ナル本屋の設計(1923-24)…本書図 62-63、自動車に施せる看板意匠・ラジオ用真空管(1928)・「朝から夜中まで」舞台装置(1924)…村山知義研究会編『村山知義の宇宙：すべての僕が沸騰する』読売新聞社、2012年、歩道上の柱…本書図 65、ロリガンの酒棚・マッターホルンの仕切壁(1929 以前)…本書図 60-62、ロビーの柱と客席后背のドア・通路仕切り・開口部…本書図 52,64、『現代の住宅』邸宅<7>・中流住宅<19> (1920)…吉川清作君案『現代の住宅』洪洋社、1920年、客席側面壁…本書図 51(本書図の出典は巻末参照)</p>

上表は筆者作成・図はいずれも部分

社会的活動の活発化は、思想統制政策に対する反動というよりはむしろ、それを含めた精神的側面の変革への社会的関心の高まりを積極的に利用し『復興』の言説を同時に読みかえる戦術」であり「震災直後における文化界の、社会に対して反応を示し存在意義を高めようとする意思のあらわれだった」⁷¹。震災後は、特に灰燼と化した帝都の復興が最優先事項であり、また目立つものであったが為に、彼らは自らの主張を「復興」の文脈の中で示すべく「建築」と結びつくことを選んだのである。

このような視点を踏まえると、吉川が神田・京橋日活館に於いてセセッションというある程度装飾的な、しかし近代的でスマートな様式を選択したのは、『此際！』という合理化への要請と、芸術界の一員としての意識との狭間の中で揺れ動いた結果であると言えるのではないだろうか。

しかしながら、畢竟ひとつの娯楽施設である映画館の興行主としては、シンプルに過ぎる建物よりかは、より華やかで人目を引く建物を求めたであろうことは容易に推察できる。そこで、神田・京橋に引き続く葵館では、荻島安二が必要とされたのではなかろうか。

第3項：三人はどのように出会ったか

それでは、この三人はどのような経緯で出会ったのだろうか。管見の限りでは葵館以前に直接の面識があったことを示す資料はない。ただし、荻島安二は銀座サイセリアのレリーフを担当しており（後述）、この竣工と葵館の竣工のどちらが先だったかはあまりはっきりしない。葵館の仕事をする前に、吉川と荻島の間に面識があった可能性はある。しかし、ここでは仮に、三人は葵館で出会ったものとして、その経緯を想像してみたい。

(1) 最初の依頼

関東大震災によって失われた葵館の設計の仕事をまず請け負ったのは、もちろん吉川清作であっただろう。証拠があるわけではないが、葵館は神田・京橋日活館と同時に関東大震災によって失われたものであって、再建も同時に請け負ったとみるのが自然である。

しかし、事情は定かでないが、葵館の再建は後回しとなり、神田・京橋日活館が半年ほど先に竣工する。震災直後、娯楽に飢えた人々は映画館に殺到して空前の好況をもたらしており⁷²、この二館もかなり優秀な興行成績を上げたものと思われる。しかし、施主である日活からすると、その意匠にはやや物足りなさを感じたかもしれない。というのも、外部はともかく内部はかなりシンプルな造りだったからである（例えば、神田日活館の内部は白く塗りまわされた曲面天井と濃色の板で覆われた壁面のみによって構成され、また京橋日活館の内部も、モーディングが施されてはいたけれども、平滑な壁面が占める割合が多く、全体としては静的な印象を与えるものであった）。

これに関連して、震災直後に『此際！』という言葉が新聞などの言説中で流行したという興味深い話がある。佐藤美弥⁷³によると、『此際！』とは「震災が白紙からの出発点を創出し、平常時では不可能な見直しが可能になり、それゆえ変革・改善の好機である、という感覚」に基づく様々な改善提案に付されたキャッチフレーズである。しかし、主には第一次世界大戦以降急速に発展した日本の都市生活を奢侈で浮薄なものと考え、震災を契機に「社会・生活の簡素化・科学化」を目指そうという主張の中で使われることが多かった。そしてそれは、「壊滅した都市としての東京」を復興する文脈では、もっぱら技術的な見地からの実用的な都市計画（端的に言えば不燃都市化）を行うことが第一に想定されていた。

⁷¹ Ibid. pp.48-49

⁷² 『日活五十年史』日活株式会社、1962年、p.79

⁷³ 佐藤美弥『都市社会における文化活動の研究：両大戦期の創宇社建築界を中心に』一橋大学博士論文、pp.44-49

佐藤はバラック装飾社、マヴォなどをはじめとする芸術団体が一様に「復興」と結びつくことを目指したのは、『此際！』に代表される簡素化・科学化の波に対する反動ゆえであったと主張する。「芸術界の社会的活動の活発化は、思想統制政策に対する反動というよりはむしろ、それを含めた精神的側面の変革への社会的関心の高まりを積極的に利用し『復興』の言説を同時に読みかえる戦術」であり「震災直後における文化界の、社会に対して反応を示し存在意義を高めようとする意思のあらわれだった」⁷⁴。震災後は、特に灰燼と化した帝都の復興が最優先事項であり、また目立つものであったが為に、彼らは自らの主張を「復興」の文脈の中で示すべく「建築」と結びつくことを選んだのである。

このような視点を踏まえると、吉川が神田・京橋日活館に於いてセセッションというある程度装飾的な、しかし近代的でスマートな様式を選択したのは、『此際！』という合理化への要請と、芸術界の一員としての意識との狭間の中で揺れ動いた結果であると言えるのではないだろうか。

しかしながら、畢竟ひとつの娯楽施設である映画館の興行主としては、シンプルに過ぎる建物よりかは、より華やかで人目を引く建物を求めたであろうことは容易に推察できる。そこで、神田・京橋に引き続く葵館では、荻島安二が必要とされたのではなかろうか。

(2) 荻島安二の参加

荻島は葵館において、ファサードのレリーフのみならず、客席後背や、喫煙室の柱⁷⁵などの建築内部のデザインにも関与している(第2項)。しかし、吉川がちょっとしたレリーフやモーディングならば設計しうことは神田・京橋日活館において示されており、吉川が葵館のみ芸術家の協力を自発的に求めたとは考えづらい。荻島と日活との接点ははっきりしないが、日活側が荻島に内外の装飾を依頼したものと見てよいのではなかろうか。

荻島の担当部分は、後付けとは言わないまでも躯体とは関係の薄い部分に限られており、また、吉川が担当したらしい客席側壁の正円アーチと比べると異質である。このことは、荻島の参加が、設計や躯体工事のある程度進んだ時期に行われたことを示しているように思われる。その時期は、開館時期から逆算すると、1924(大正13)年の夏より早くはならないだろう。というのも、もっと早い段階から関与していたのだとすると、もう少し様々な箇所荻島らしいデザイン(“帆型”やレリーフなど)が現れてよいと思われるからだ。

(3) 村山知義の参加

しかし、帆型の開口が客席の後ろや通路の間仕切りに採用され、室内の単調さは多少救われたにせよ、西洋城郭風で華やかな先代の葵館と比較すると、装飾性に欠けることは否めない。ファサードは荻島による大きなレリーフによって幾分か救われるとしても、内部は依然としてシンプルである。日活の担当者は、工事途中の椅子も映写幕もない埃っぽいガランドウに立って、これで良いものかとハタと困ったかもしれない。彼が、神田日活館を借り受けたいと申し込んでいた青年美術家がいたことを思い出したのは、まさにそのような場面においてであろう。その青年美術家こそ村山知義である。

この頃 MAVO では盛んに展覧会を開いており、神田日活館でも連続展を開くことを計画していた⁷⁶。日活側に神田日活館の借り受けを申し込んだ正確な日付は明らかでないが、1924年9月以前のこど

⁷⁴ Ibid. pp.48-49

⁷⁵ もししたら柱の写真に写り込んでいる上部のR天井の部分も担当しているかもしれない。

⁷⁶ 五十殿 1995:523

た⁷⁷。これは結局何らかの事情で流れてしまうのだが、おかつば頭の青年とその奇怪な作品のことは、担当者の印象に強く残ったことであろう。葵館の緞帳を描いてほしいという依頼が村山にあったのは、まさにその直後の10月のことなのである⁷⁸。

村山は緞帳について「活動写真館であるから思ひ切つて愉快ではでなものにした」と記している⁷⁹が、それは日活側からの要求でもあっただろう。しかし、葵館の開館したのは10月17日だということだから、村山に残された時間は1か月もなかった。本当の直前であり、日活側の焦りがうかがえる。

依頼があつてからの慌ただしさについては、村山が『アトリエ』1925年2月号に寄せた文章が一番よく伝えている（原典に当たれなかったので孫引きする）。

緞帳は幅四間（七・三メートル）、高さ三間（五・五メートル）で、それを中央から割って左右へ引くことにした。切らないままのダックという布を、丁度四間に三間の日活本社⁸⁰の会議室の床に敷きつめて私は仕事にかかった。これをみんな油絵具で塗りつぶすのである。コムポジョンは何分にも活動写真館であるから思い切つてはでなものにした。〔中略〕

私はこれを一人で四日間で仕上げるつもりでかかった。ところが生のままのダックはすっかり裏へ絵具を通り抜けさせてしまう。一尺四方塗りつぶすのだから余程の力と絵具と時間とがいる。といって膠などを引こうものなら、緞帳がゴワゴワと音を立てて三角や四角になって巻き上がるということになる。それに暇もないしするから〔ママ〕、やっぱり何も塗らないでじかに描くことにきめて（すると加藤の思い出話で下塗りしたとあるのは思い違いらしい）ベルリンから買って来たトモ大きなパレットにテレピンで絵具をどんどん溶いて太い筆でこすって行った。街の外は東京駅である。左手は永楽町の交差点で、交通巡査が一日中手を振っている。東京駅の方から空の人力を曳いて来た馬が何に驚いたか俄かに狂奔して馬子をはねとばし、撒水車をひっくり返し、交通巡来〔ママ〕を轆き倒して、ガードの煉瓦塀にガシャーンと衝突して止まる。人が黒山のように集まって大騒ぎをして、巡査を自動車に乗せて病院に運んで行く。隣の部屋は試写室でひっきりなしに映写機のハンドルを廻す音がする。便所へ行く途中でちょっと覗くと早川雪舟の「バタイユ」を試写している最中である。幕の上に四つん這いになって一生懸命になっていると、ドアを開けているいろんな顔が入れ変わり立ち変わり覗いては、変な顔になって引込む。昼になるとガード下のめし屋へ鰻丼を食いに行つて精力をつける。夕方のラッシュアワーになると、永楽町のガードをくぐって東京駅の方へと生気のない人間の波が物凄く流れ始める。そこで私も筆を洗つて窓をしめてその人並みの中へ流れ込む。

こうして三日たった。肩と腰とががずきずきと痛み出し、チューブのからが部屋の隅にうず高くなってきたが、まだ半分も出来ていない。村上さん（日活の係の人。葵館は日活が建てたのだ）が来て心配そうな顔をする。さすがの私もへこたれて四日目からはマヴォの連中二三人に

⁷⁷ 『マヴォ』第3号（1924年9月発行）にその旨の予告が掲載されている。

⁷⁸ 五十殿 1995:525。村山は後年、葵館での協働の依頼があつた時点を「一九二四年の夏」と記憶している（『演劇的自叙伝2』p.197）。10月では夏という印象は薄いだが、これは9月の連続展の企画との関連でそう記憶していたのだとすれば納得がいく。

⁷⁹ 『演劇的自叙伝2』p.233

⁸⁰ 日活本社は震災により焼失してしまったため、一時的に牛込神楽坂の牛込館に移転した後、1923年12月8日に、日活ビルディング建設のため確保していた丸ノ内の敷地（麹町区永楽町二ノ二）に建てたバラックに移転した（「日活の假移轉」『キネマ旬報』（147）、1924年1月1日、p.13）。村山が葵館の緞帳を描いたのは、この永楽町のバラックにおいてである。

手伝いを頼むと、仕事は進むが自分の思うように行かないので気がいらいらする。絵具代が予定以上の額に達する。営業部長が来て、いかにも関心しない絵だという顔をして出て行く。それでもとうとう一週間目には出来上る。そして高島屋が黄色い裏と赤い総をつけに、車にのせて持って行く。

今度は溜池の現場に行くと、まだ僕達が手をつけられる程には工事は進んでいない。開館の日はどんどん迫ってくる。荻島君は正面の足場の上で、高さ八尺（二メートル半）長さ十四間（二十五メートル半）の面に十人ばかり⁸¹の裸の踊子の浮彫りをつくっている。吉川君は手拭いで頬かむりをして工事の指揮をしている。愈々開館にもう三日間というときになって、やっと正面廊下の壁に布が張られた。そしてその上へ私は一日半で六つの小壁画を描いた。王様が獺に行く、王妃が別れを惜しむ。城の中では宴会があって、舞姫が踊っている所。

愈々開館が明日に迫ってしまった。手の空いているマヴォの人達皆に来て貰って、喫煙室二つ、カフェー、観覧席の後ろの壁へペンキで描き始めた。喫煙室は全部布が張ってあるから良かったが、其他は壁が塗り立てなのでペンキがのらない。しかし乾くのを待ってはられないから、深更迄かかって、不成功を知らながらもひとまず塗ってしまった。骨を折った緞帳が正面につるされ、スポットライトがパッと当てられた時はさすがに嬉しかった。ずいぶん大きな仕事をしたものだと思いを高くしたのだが、この間友達の間で見た外国の雑誌にピカソが自分で描いたラッシャン・バレエの『道化』の緞帳の上に坐っている所があったが、とても大きなものらしいので凹んでしまった。⁸²

（4）小結

葵館はこのようなあわただしさの中で開館の日を迎えた。吉川清作と荻島・村山の間に直接の面識があったかは、何度も述べるように定かでない。荻島と吉川は、この頃に銀座サイセリアで協働しており⁸³、知り合いであった可能性はある。ただし、吉川と荻島が葵館に参加した時期には間があるようであり（2）、村山が参加したのは1924年の10月に入ってからのものである（3）。ここから、葵館に参加する契機としては、三人の直接の交友関係を仮定するよりも、日活もしくはその周囲の紹介を考える方が適当なようである。

⁸¹ 筆者が写真で数えてみたところ11人のようであった。

⁸² 『演劇的自叙伝2』pp.233-235所収。初出は 村山知義「私の画生活 大正十三年度の二つの仕事」『アトリエ』1925年2月号。

⁸³ 第6節参照。

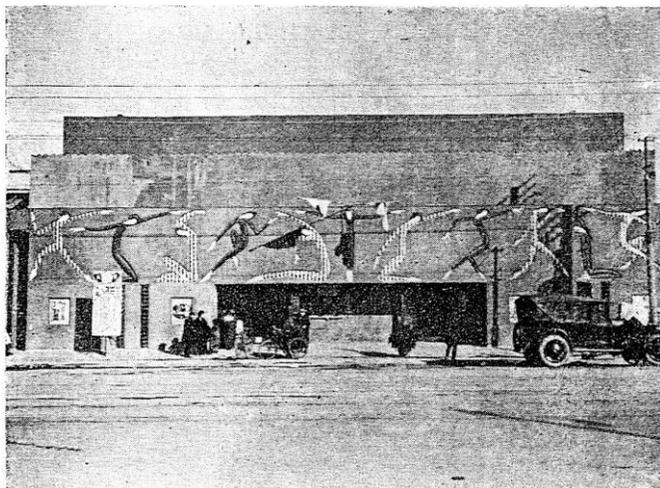
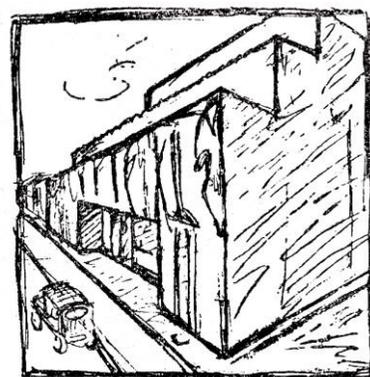


図 66 “服を着せられた”葵館のレリーフ



図 67 昭和 10 年頃の葵館（下半分が竣工時より明るい色に塗り替えられているほか、歩道上にあった立看板用の柱がなくなったようだ。公開中の映画は「うら街の交響楽」（監督 渡辺邦男）と「麦秋」（同 King Vidor。）



A Week From September 25th.

PROGRAMME

図 68-69 村山による aoi weekly の表紙、図 70 aoi weekly 挿絵

第 4 項：葵館後日談—カラフルなレリーフ

神田・京橋日活館から続いた吉川と日活の縁は、葵館の竣工を境に切れてしまう⁸⁴。荻島安二も同様のようである。日活との関係が一番長く続いたのは村山知義で、葵館のプログラムである“aoi weekly”の表紙や、ポスターなどを 3 年間にわたって担当していた。

ところで、後年撮影された葵館の写真の中には、正面レリーフがストライプ柄などに塗装されているものがある。竣工当時の姿とかなり異なるが、これは裸婦像を公の場にさらすことが不道德とみなされたために、やむなく“服を着せた”ものであるらしい（詳細は第 6 節 2 項で触れる）。

⁸⁴ ただし、戦後に計画された K 氏邸計画案（小島多満子邸, 1954）は、日活社長を務めた堀久作の自宅の斜め後ろが敷地であった。堀久作が日活に入社したのは 1934 年のことなので、神田・京橋日活館、葵館とは重なっていないが、不思議な縁を感じる（第 17 節参照）。

表 2 神田日活館・京橋日活館・葵館 関連年表

西暦(元号)	神田日活館	京橋日活館	葵館
不明	佐藤三吉邸となる。明治期の大火により2回焼失するも再建される		
1910(M43) ~ 1912(T1)頃		合資会社福宝堂により第一福宝館として建設される	
1912(T1).9.10	M パター商会・吉澤商会・横田商会・合資会社福宝堂が合併し日本活動写真株式会社(日活)が設立される		
1913(T2).7			西洋城郭風の初代葵館が開館する
1923(T12).9.1	震災により佐藤三吉邸焼失。佐藤は本郷曙町の一川一秀邸に避難	震災によりこの2館を含む日活直営16館が焼失する	
1923(T12).9 ~ 1924(T13)頃?	佐藤三吉から日活に土地が売却される(?)		
1924(T13).4.1		吉川の設計により再建される。京橋日活館と改称する	
1924(T13).5.16	吉川の設計により神田日活館が竣工・開館		
1924(T13).10.17			吉川の設計による二代目葵館開館
1928(S3).2	日本興行株式会社に買収される		
1928(S3).5			直営廃止
1928(S3).12	RC造への建替え工事起工(吉川の初代神田日活館取り壊される)		
1929(S4).6	二代目新築開館		
1929(S4).8			日本興行株式会社に買収される
1930(S5)頃		日活新社屋建設のため取壊される	市島亀三郎に売却される(?)
1931(S6).1.30		新社屋ビル竣工	
1931(S6).12			日活直営化
1932(S7).12			直営廃止(日本興行株式会社に売却?)
1935(S10).11	日活が日本興行株式会社を買収。神田日活館・葵館が日活直営館となる		
1935(S10)頃			閉館
1936(S11).12	直営廃止		
1952(S27).4		日活本社が日比谷に移転する	
1968(S43)頃	閉館。タキイ種苗に売却される		
現在	タキイ種苗ビル	東京国立近代美術館フィルムセンター	細川ビル

『日活四十年史』『日活の社史と現勢』『佐藤三吉先生伝』『日本映画事業総覧』などを基に筆者作成

第4節：大和郷の3住宅—1924年頃

第1項：大和郷について

大和郷（やまとむら）は大正期に開発・分譲された住宅地で、現在の東京都文京区本駒込6丁目（および豊島区巢鴨1丁目の一部）にあたる。国指定特別名勝の庭園「六義園（りくぎえん）」に隣接しているため自然に恵まれており、現在でも大規模な邸宅が整然と建ち並ぶ様子が見られる。もともと当地は、江戸時代には柳沢家・前田家・藤堂家・安藤家などの屋敷が置かれていた場所であった（六義園はこのとき柳沢吉保によって、柳沢屋敷内に築造されたものである）。しかし、明治になると、次第に荒廃が目立つようになり、1878（明治11）年に三菱財閥の祖である岩崎弥太郎がこの一帯を買い取り、別邸を営んだ⁸⁵。その余は原野のまま放置されていたものの、1921（大正10）年頃になって、岩崎家の三代当主である岩崎久弥が宅地として開放することを決め、佐野利器にその計画が依頼された⁸⁶。藤谷陽悦氏によると「佐野利器は、生活改善同盟会の『生活改善調査委員長』を務めており、住宅問題には大きな関心を寄せており、ここを将来的に他の模範となるような住宅地にしたいという強い希望を持っていた。したがって、ここをしっかりと計画するばかりでなく、自らも大和郷に住居を定めて、将来的にも通用するような田園住宅地にしようと考えた」のだという⁸⁷。

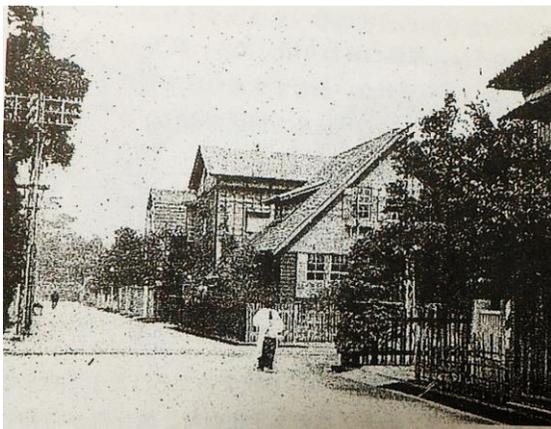


図71 戦前の大和郷（第3区、正面が六義園）

宅地は翌1922（大正11）年5月から同年末にかけて、3回に分けて分譲された⁸⁸（分譲に際しては一般向けの広告が行われることはなく、三菱系の社員以外の購入者は佐野が自ら集めたという⁸⁹）。しかし、これから上屋の建築が本格化する前の1923（大正12）年9月1日に関東大震災が発生した。大和村⁹⁰に当時居住していたのは38戸のみで、直接的な被害は大きくなかった⁹¹ものの、大和郷外で被災した人は多く、これを境に3割程度の地権者が入れ変わった⁹²。

吉川が大和郷に三軒の住宅を設計したのは、ちょうどこの震災直後の時期のことである。その存在は、1929（昭和4）年秋に発行された合理派建築会のリーフレットに、「佐藤邸」「米山邸」「加藤邸」—「小石川 大和村」とあることから知られる。この作品一覧には荻島安二や村山知義の作品も区別せずに掲載さ

⁸⁵ 藤谷陽悦「大和郷住宅地の開発」『郊外住宅地の系譜 東京の田園ユートピア』鹿島出版会、1987年、pp.134-135

⁸⁶ 一般社団法人大和郷会 会史編纂委員会『大和郷遠近物語 大和郷会90年のあゆみ』一般社団法人大和郷会、2015年、pp.11-14

⁸⁷ 藤谷陽悦「田園の100年」『建築雑誌』114(1447)、1999年12月号、p.27（括弧内引用者註）

⁸⁸ 『大和郷遠近物語』（前掲）、p.17

⁸⁹ 藤谷:1987の註18

⁹⁰ もともと当地は大和「村」と称しており、住民組織の名称も大和「村」組合であった。震災後の1925（大正14）年に、社団法人化するにあたって、「村」では行政区分としての町村と混同される恐れがあるため、「郷」に替えた上で「むら」と読ませることにしたという。（『大和郷遠近物語』（前掲）、p.23）

⁹¹ 『大和郷遠近物語』（前掲）、p.21

⁹² 和田清美「戦前期住宅地開発の展開とその特質 日暮里渡辺町、駒込大和郷の事例を中心として（その一）」『応用社会学研究』（26）、立教大学社会学部、1985年、p.151

れているが、「K氏邸（加藤邸）」は『建築写真類聚』及び『建築新潮』に吉川清作の作品として写真付きで掲載されており⁹³、残りの二者も吉川の作品とみてよいであろう⁹⁴。

第2項：加藤静夫邸（K氏邸）—1925年

加藤邸（『建築新潮』発表時はK氏邸）は、大和郷の第6区175番地（現在の東京都文京区本駒込6丁目4-22付近）にあった住宅である。大和郷会の名簿⁹⁵によると、当地に居住していたのは加藤静夫（1880-1934）という人物であった。加藤は東京帝国大学で電気工学を学び、電機学校（現東京電機大学）の校長を務めた人物である⁹⁶。一時期、三菱造船所に勤めていたことがあるというので、その縁で大和郷に住むことになったのであろう（大和郷の居住者は、前述のように三菱の関連企業の役員が多かった⁹⁷）。加藤は震災前から当地を所有している⁹⁸が、吉川との縁ははっきりしない。

加藤邸については、前述のように『建築写真類聚』と『建築新潮』に写真と図面が掲載されており、その全容を知ることができる。外観についてみると、六角形の窓がまず目につく（神田日活館においても、六角形が天窓として現れていた。第2節1項参照）。これは本橋が指摘するようにロシア構成主義との関連が考えられる⁹⁹が、建物の装飾的細部や室内の飾り棚などを見ると、セセッションやライト風の部分もみられる¹⁰⁰。あるいは写真に見える二階の出窓などは、非常にサッシの割付けが細かく、それだけを取り出してみれば中国もしくは朝鮮風ともとれる。

玄関の子扉には大きく詩句が記されている。写真が不鮮明で読みにくいので、目を凝らすと「□鶯不□□柏之茂」と読める。これは詩経 天保六章中の「不鶯不崩如松柏之茂（鶯けず崩れず松柏の茂るが如く）」という一節を抜き出したものらしい。国の繁栄や長寿を願った言葉であるという¹⁰¹。

室内では家族室と応接室の境に設けられた暖炉が出色である。上部に煙突がある気配はなく装飾とみられるが、二室を突き抜けているのは珍しい。また、多孔質の石材を柱として縦長に用い軽妙な雰囲気を作り出す一方、それと対比的にマントルシェルフ（上部の棚）が巨大なものになっている点も特異で、通常のプロポーションはかなり崩され、不安定感が強調されている。

その他、家族室と台所の間にはハッチ（配膳口）が設けられているのが見えるが、これは大正の後期以降、中流住宅で流行したものである¹⁰²。

⁹³ 『建築写真類聚 第4期 第21回 文化住宅』 洪洋社、1924年、pp. 101-111、『建築新潮』6(2)、1925年2月号、口絵

⁹⁴ 事実、本橋らもそのように見ている（本橋ら 2009:229 表1）

⁹⁵ 一般社団法人和郷会蔵、発行日不明。

⁹⁶ コトバンク デジタル版 日本人名大辞典+Plus

<https://kotobank.jp/word/%E5%8A%A0%E8%97%A4%E9%9D%99%E5%A4%AB-1066012>, 2016年9月17日閲覧

⁹⁷ 和田清美「戦前期住宅地開発の展開とその特質」（前掲）、pp.151-152

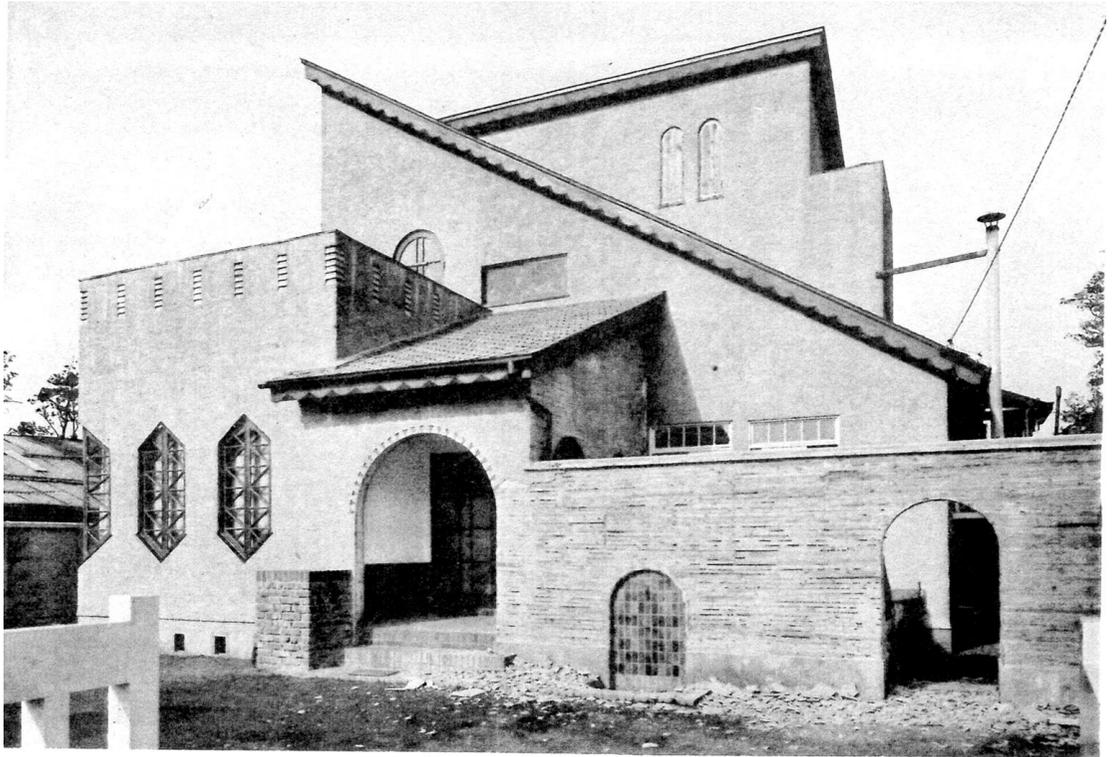
⁹⁸ 「大和村組合区域一覧図」1922（大正11）年12月21日（『大和郷遠近物語』（前掲）に所収）

⁹⁹ 本橋 2008:40

¹⁰⁰ 「〔加藤邸には〕震災復興当時の影響が色濃く反映されている。菱形格子の窓、庇のギザギザ模様、これらは震災直後に流行したセセッション、表現派のデザインの一部である。内部は食堂が椅子式で、家具や大谷石の暖炉もどことなく洒落ている」（藤谷「大和郷住宅地の開発」（前掲）、p.149）。ところで、ここで藤谷は設計者を曾禰中條事務所としているが、この頃にはすでに吉川は曾禰中條建築事務所から独立していた。

¹⁰¹ 小林一郎『経書大講 第7巻 詩經中』平凡社、1938年、p.34

¹⁰² 山岡真澄、丹羽和彦「明治末期から大正期中流住宅案にみられる『ハッチ』について」『日本建築学会中国支部研究報告集』21、1998年、p.488。ハッチは家庭内における女中の存在と無縁ではないだろうという同氏の指摘は重要である。



加藤静夫邸 (K 氏邸)

設計：吉川清作

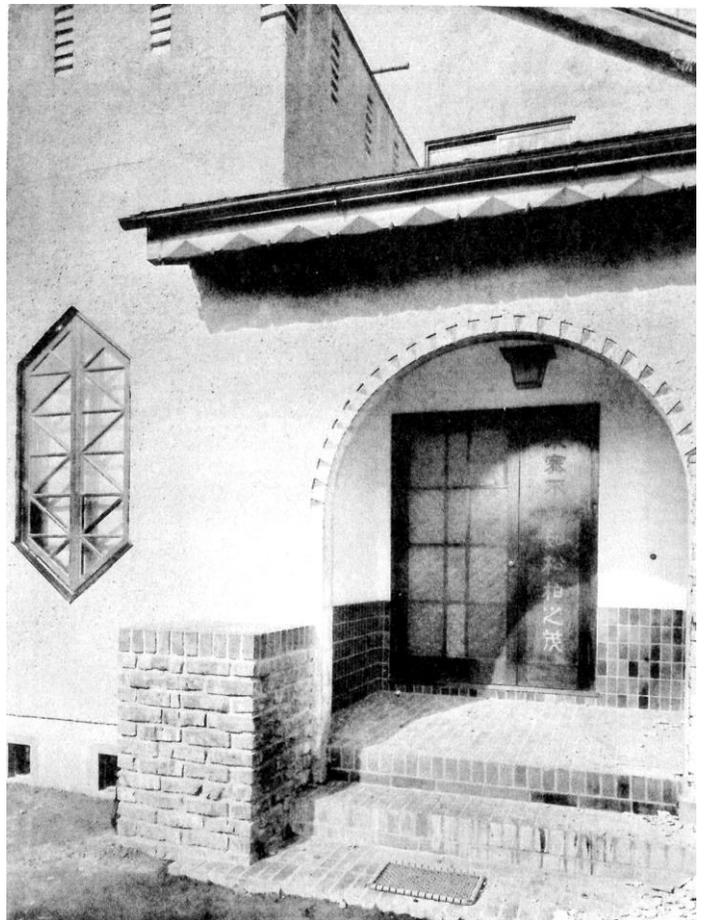
施工：未詳

竣工：1924（大正13）年頃

現況：非現存

図 72（上） 外観（様々な要素が折衷され複雑な様相を呈している。左下に見えている柵は道路側の門扉。玄関右の壁龕状になっている部分は散水栓と思われる）

図 73（右） 玄関（左の煉瓦積みのは用途が明らかでないが、壺などを置くために作られたのであろう。玄関扉には詩経の一節が記されている）



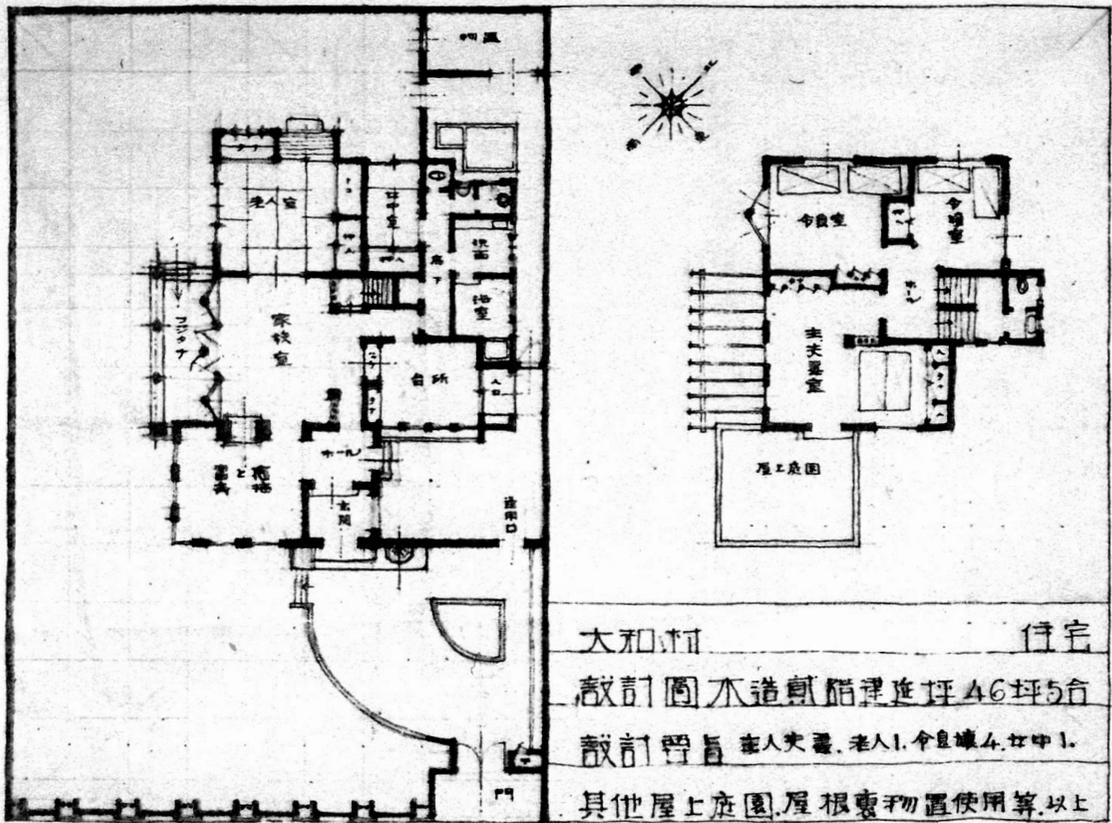


図74 平面図 (図面では、応接室の上は屋上庭園と記されているが、図1を見ると、出入口になるはずの部分が丸窓になっており、実際に屋根の上に出られたか定かでない)

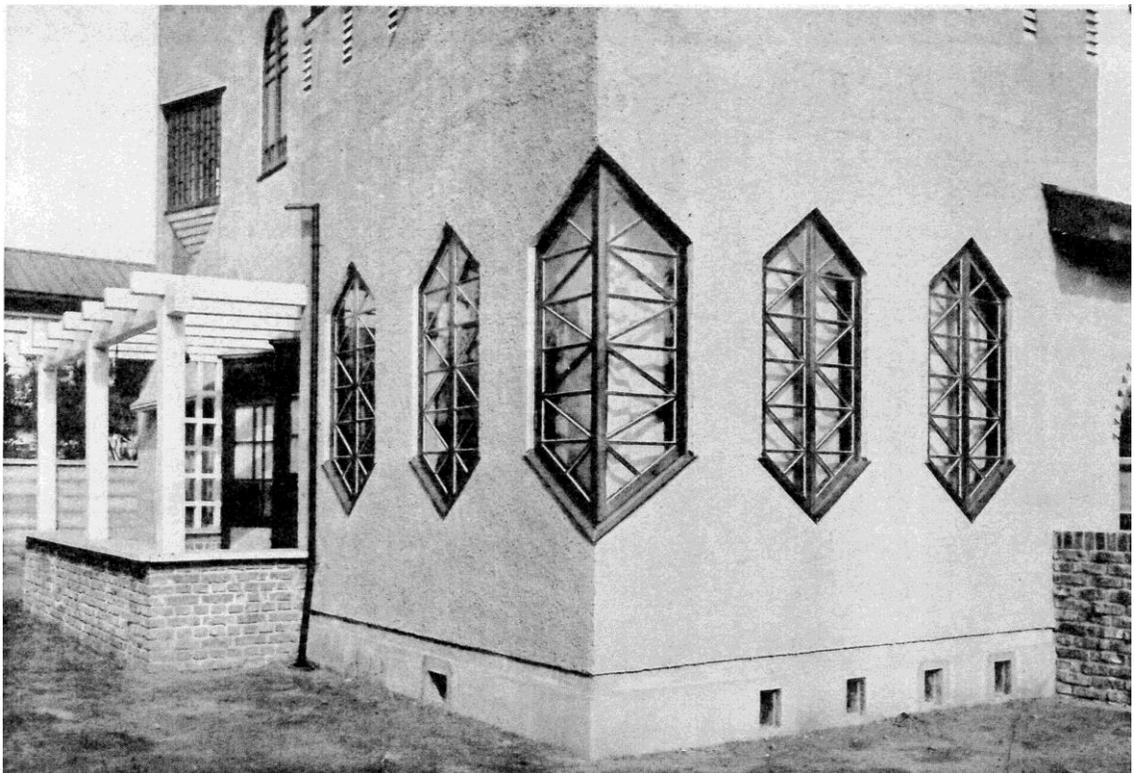


図75 応接室の窓とテラス

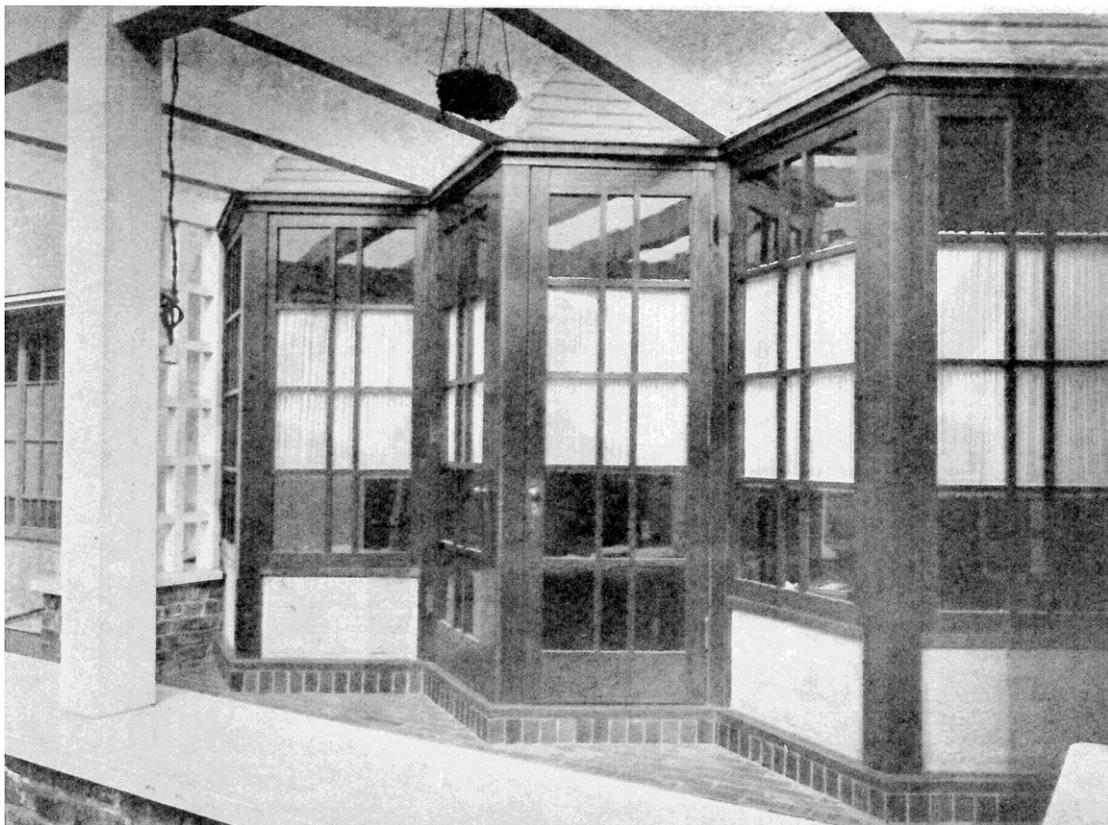


図 76 テラスのパーゴラ（藤棚）と雁行する窓



図 77 家族室（テラス側。暖炉は伊達だが向こう側まで突き抜けているのは珍しい）



図 78 家族室（老人室側。上部に神棚が見える）



図 79 家族室（応接室側。台所との境にハッチ（配膳口）が見える）

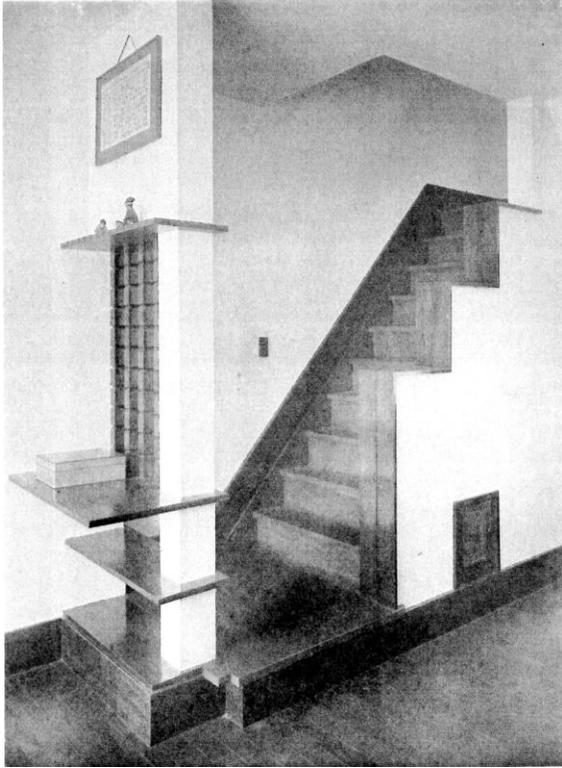
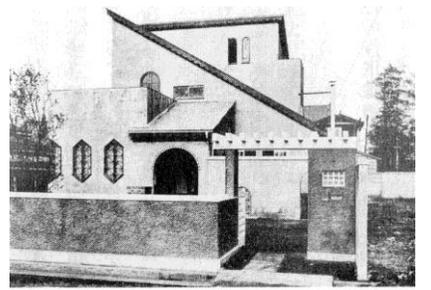


図 80 (左上) 階段 (ライト風である)
 図 81 (右上) 二階主人室の書棚
 図 82 (左下) 一階応接室 (暖炉を介して
 家族室が見えている)
 図 83 (右下) 外観 (門扉の形状がわかる)



第3項：佐藤三吉邸—1928年

佐藤三吉邸は、第10区229番地（現東京都文京区本駒込6丁目6-19付近）にあった住宅で¹⁰³、1928年に竣工した¹⁰⁴。

施主の佐藤三吉は1858（安政4）年、大垣藩戸田采女正の家臣の三男として生まれ、大学東校で医学を学んだ後、東京帝国大学教授、同医科大学学長などを歴任した人物である¹⁰⁵。佐藤は元々長く神田に住んでいたが、震災後に大和郷に移り住んだ。その旧宅跡が吉川の手掛けた神田日活館の敷地である¹⁰⁶。『佐藤三吉先生伝』によると、彼は明治年間を通じて二回の大火に遭い、その度に当地で家を再建したものの、震災でも家が燃えてしまったので辟易し、大和郷に引っ越すことにしたという¹⁰⁷。吉川との縁は、この時に生まれたのであろう¹⁰⁸。

大和郷の佐藤邸は次のような姿をしていた。

邸内及邸宅を囲んだ土塀は凡て参州の瓦ぶき、その上から越年の松が力縄に吊られてのぞいて居る。松の枝越しに隠見する二階建の日本家屋や、階上階下の硝子戸に小春日が反映する風姿は、清楚を好み日本人の魂に深く呼びかけるものがある。

門を這入つて右手の塀にからむ這葛が繁るあたりに、雪囲いの水道蛇口が見える。真夏訪問する人達の心を慰涼する心づかひでもあらう。それから玉川砂利を十歩余り踏んだ処にポーチがあつて、ポーチには肉肥りのギリシャ乙女が水盤を捧げて膝まづいて居る。

〔中略〕玄関内の広間は塵一つなく拭き磨かれ、鮮やかな代赭色の光沢を放つて居る。その正面衝立の右寄りに、佐藤博士の二つの寿像がどつしりと据え置かれてあつた。ステンド・グラスから流れ込む陽が寿像の上に降りそそぎ、一種異様の荘厳さを漾して居る。

少女に導かれて、応接間へ通る。これはまた極めて明るい文化セットからなる一間である。

109

〔大和郷の佐藤邸は〕冠木門のある二階造りの立派な建築で、玄関からロビー風の広間があり、洋風の応接室が続き、奥には畳のお座敷と次の間等がありました。色々の樹木や石のほか、秋には菊の花がいつばい見事に咲いたようであります。¹¹⁰

ここから、佐藤邸は基本的に和風にまとめられた二階建ての建物で、応接部分のみ洋風の意匠を持っていたことが知られる。



図 84 佐藤三吉

¹⁰³ 大和郷には当時複数の佐藤という人物が居住していたが、本文中で後述のように、佐藤三吉は神田日活館の建った敷地を所有していた人物であり吉川と関係が深く、吉川の設計した佐藤邸は佐藤三吉邸で間違いと思われる。

¹⁰⁴ 一川一秋「佐藤三吉さんの思い出」『佐藤三吉先生伝』佐藤三吉先生記念出版委員会、1961年、p.427

¹⁰⁵ 上田武夫「佐藤三吉—日本最初の外科医の泰斗」『郷土にかがやくひとびと』岐阜県、1970年、年表

¹⁰⁶ 山本松次郎「忘れ得ぬ臨終のお言葉」『佐藤三吉先生伝』（前掲）、p.157

¹⁰⁷ 緒方規雄「故佐藤三吉先生を追憶する」同書、p.230

¹⁰⁸ そのほかに米山米吉からの紹介があった可能性もある（本項中で後述）。

¹⁰⁹ 紫龍二「大和村文山庵」同書、pp.59-61

¹¹⁰ 本名文任「佐藤先生の思い出」同書、pp.323-324

ところで佐藤三吉は、先述のように帝国大学教授・医学博士であるほか、貴族院議員を務めたこともある名士である。その旧宅の跡地に映画館を建てたという縁だけでは、私邸の設計を依頼される理由として少し弱いとも思われる。

ひとつ気になるのは、日本興行株式会社の米山米吉（後述）と佐藤三吉がともに岐阜県大垣市の出身であるということ¹¹¹である。もしかすると、両者は同郷のよしみで常日頃から懇意にしており、その縁で仕事を紹介されたのかもしれない（米山と佐藤は親戚であった可能性もある¹¹²）。

なお、佐藤邸は戦災により焼失したとのことである¹¹³。

第4項：米山米吉邸—1929年以前

米山邸は大和郷の第7区209番地（現 東京都文京区本駒込6丁目8-25付近）にあった。施主の米山米吉は日本興行株式会社の取締役を務めていた人物である¹¹⁴。日本興行会社は、葵館（第3節）で触れたように、吉川が設計した神田日活館・京橋日活館を買収した会社であり、最終的には日活に吸収されているなど、日活との縁が非常に深い会社であった。大和郷会の名簿には他に米山という人物はおらず、米山邸のクライアントは米山米吉で間違いないだろうと思われる。しかしながら、どのような住宅だったのかは残念ながら未詳である。

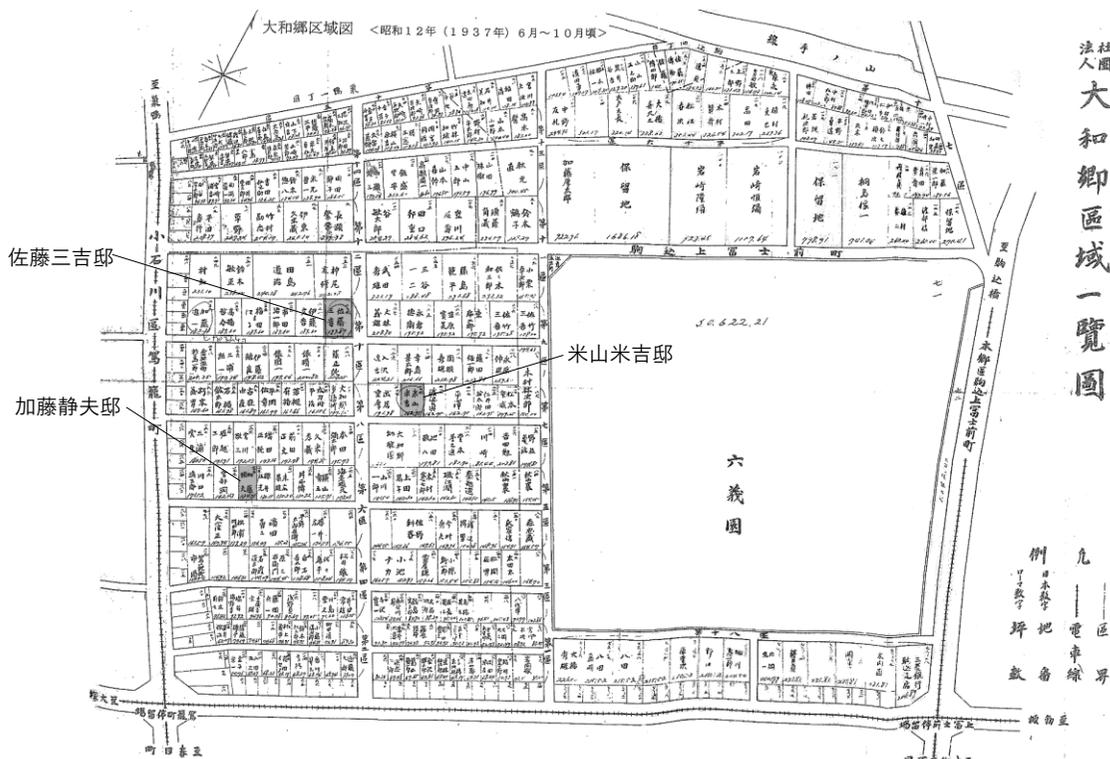


図 85 大和郷区域一覽図（昭和12年頃）と3住宅の推定敷地

¹¹¹ 大和郷会『人名録』昭和9年頃

¹¹² 『佐藤三吉先生伝』の寄稿者の中に、米山美雄・米山志都子という人物がおり、その語るところによると、佐藤三吉は美雄の伯父にあたるという。また、彼らはともに、佐藤三吉の近くに住んでいたらしい。もしかすると米山美雄（もしくは志都子）は米山米吉の親類かもしれない。

¹¹³ 三正会「座談会 寛厚の長者 佐藤先生」同書、p.246

¹¹⁴ 『人名録』（前掲）

第5節：大正大震災記念建造物競技設計（佳作）—1925年

1923（大正12）年9月1日に発生した関東大震災は、10万人を超える死者を出す未曾有の大惨事であった。両国の陸軍被服廠跡にも多くの人々が避難したが、折からの強風にあおられて火炎流が発生し、多数の犠牲者が出た。今日、当地に建つ東京都慰霊堂は、震災の死者の霊を慰めるために建立されたものである¹¹⁵。

この設計者は建築史家・建築家として名高い伊東忠太であるが、当初は、この建物は「大正大震災記念建造物競技設計」と題されたコンペに付されていた¹¹⁶。

吉川清作はこの設計競技に応募して佳作に入選している。募集要項¹¹⁷によると、主催は東京震災記念事業協会で、1925（大正14）年2月28日正午が締め切りであった。審査員は「東京震災記念事業協会理事 岡田忠彦」「工学博士 塚本靖」「工学博士 伊東忠太」「東京美術学校長 正木直彦」「工学博士 佐藤功一」「工学博士 佐野利器」「東京市公園課長 井下清」の7氏であった。

応募案のうち一等から佳作までは洪洋社から刊行された『大正大震災記念建造物競技設計図集』中に収められている。吉川清作の応募案もこの中に含まれている¹¹⁸。

図面は透視図・断面図・詳細及配置図の三葉から成る（透視図および断面図は口絵1,2を参照）。うち断面図中に説明文と思われる文章があるものの、ほとんどつぶれて判読しがたい。読み取れる範囲で翻刻したものが以下である。

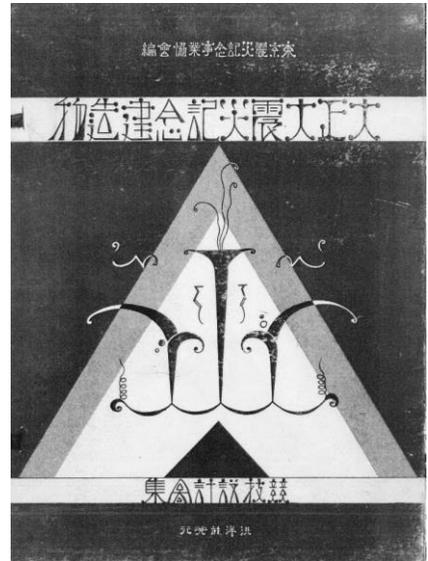


図 86 大正大震災記念建造物競技設計図集

闘争と宗教/百式拾尺の記念堂/原始的なプランと中庭/大なる壁面の神秘/□形□然たる内部

自然に対し闘争的暗示を與よなど□之残習の霊□□□□崇巖にして宗教的なこの相反する二つのものを一つに表現する百式拾尺の雄大なる記念堂の敷地の中央に建設し周囲は芝生式記念公園となす記念堂は四百式百式拾五坪の中庭を合せ六百式拾五坪にしてプランは堂の周囲は廻廊を設立前に静寂なる中庭を取った簡明に心□□□□□なもので崇巖な気品を出し厚い壁と外部の大なる壁面を以て神秘的な□□を□□□□同時に耐震的強度を増進し堂の□□は□□□□たる□は学的□□を□めるの中央の記念記録と納骨を□置し閣（18字程度不明）また前面の□壇に使用し中庭は約千四百人が□席を（16字程度不明）焼物を応用す□□□□（□は読字不能、改行無視）

まず配置についてみると、説明では、「中庭は約千四百人が□席を」と述べている。配置図をみると、建物を敷地北方に寄せて正面に参道を設け、廻廊を取りまわして大きな中庭を取っていることが大きな特徴となっている。これは募集要項に「記念建造物ニハ遭難者ノ遺骨ヲ納メ祭典ハ宗教的ノ儀礼ニ依ルコトアルヘキヲ以テ此点考慮セラルコト」という記述があることを強く意識したものである。

¹¹⁵ 高野宏康『『震災の記憶』の変遷と展示：復興記念館および東京都慰霊堂収蔵・関東大震災関係資料を中心に』『年報 非文字資料研究』第6号、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2010年、p.38以下

¹¹⁶ 設計競技に付されるに至る経緯については前註（高野2010:38以下）が詳しい。

¹¹⁷ 東京震災記念事業協会編『大正大震災記念建造物競技設計図集』洪洋社、1925年所収

¹¹⁸ 本書中でなぜか吉川の場合だけが別色で刷られている。

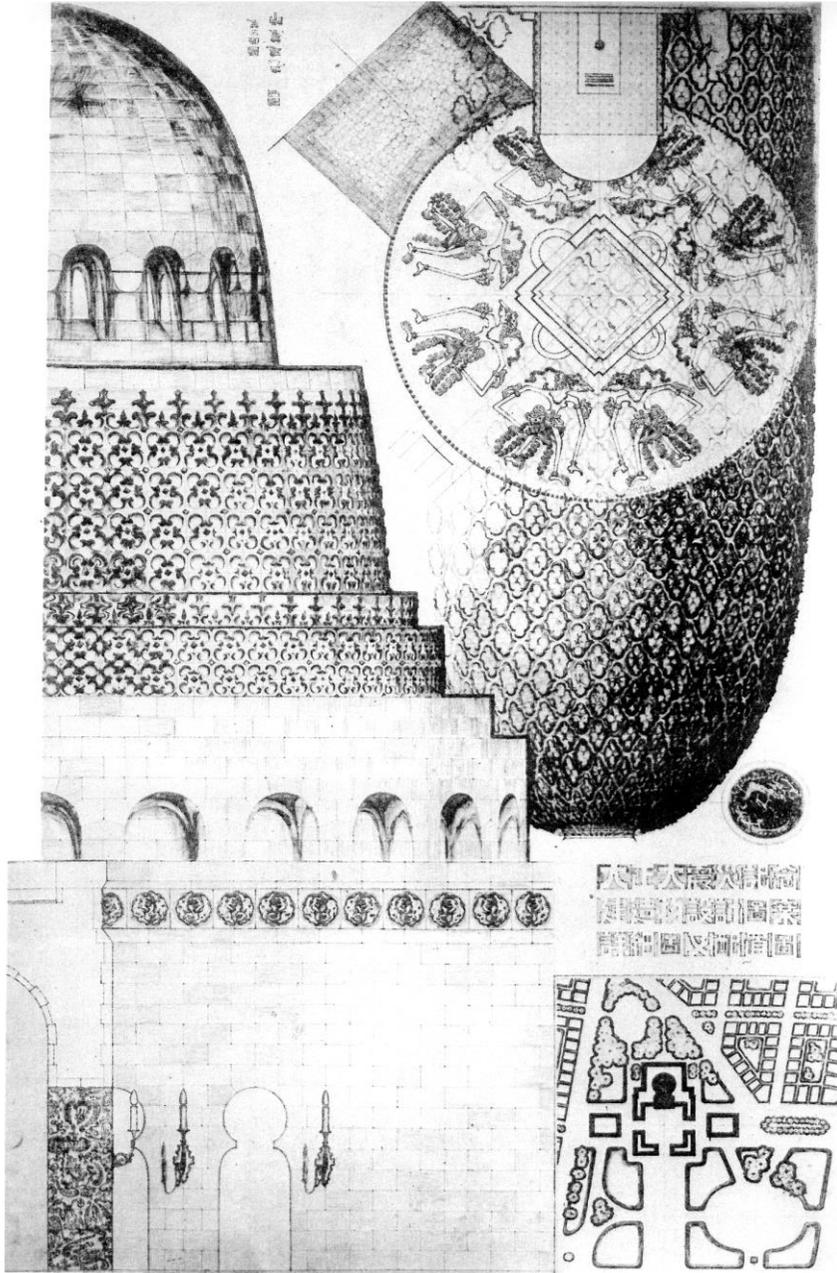


図 87 大正大震災記念建造物競技設計 佳作入選案 詳細図及配置図

堂部分は紡錘状をした中央部に、廻廊から延長された閉鎖的な廊下がり取りつく構造となっており、外部から見ると矩形の廻廊と円状の塔が対比的に扱われている。

様式的にみると、全体としては石本喜久治の「涙凝れり（ある一族の納骨堂）」に近いような、分離派的（広義の表現主義的）な手法が全体を制御しているが、細部意匠を見ると開口部はイスラム調であり、堂内の床面には来歴の不明な 8 体の神像が配置されている。ここからも、『現代の住宅』（第 1 節）でみたような様式混交への意識が強うかがえる¹¹⁹。

古典調の作品は、その後もジュネーブ国際連盟、東京市庁舎などで繰り返されるが、本作は特に様式混交を追究した点において特異である。

¹¹⁹ 第 4 節 1 項で取り上げた K 氏郎についての本橋の意見を踏まえれば、デザイン上のルーツとしてロシア構成主義を考へることは非常に興味深い。例えば（時代は下るが）1935 年のソビエト宮殿設計競技（第二次）では、円柱状の中央部と矩形の低層部という組み合わせが複数みられるし（ゴロソフ案、イオファン案、ヴェスニン兄弟案など）、後に取り上げる紫カントリークラブハウスすみれコースなどは、全連邦農業博覧会におけるベラルーシ・パビリオン（当初）とよく似ている。この件について十分な検討を行うだけの知識を持ち合わせていないので、詳細に立ち入ることは避けるが、一点だけ述べておくならば、それを単なる様式上の模倣もしくは影響関係とみるべきではなく、吉川とロシア構成主義の間には共通の問題背景が存在したのであろうということが当然想定されなければならない。（参考：本田晃子『天体建築論：レオニドフとソ連邦の紙上建築時代』東京大学出版会、2014 年、pp.153-154, 268）

第6節：銀座サイセリアとバー・サイセリアー1925年-1930年頃

サイセリアは、ライオンなどと並んで、大正・昭和戦前期の銀座を代表するカフェである。オーナーは、実業家の渡邊隆という人物であった。渡邊は吉川清作と1920年代から非常に親しい仲であったらしく¹²⁰、自邸を含む複数の設計を依頼している。吉川にとっては戦前期の最大のパトロンであり、終戦後も長く親交があった(第12節)。吉川が、サイセリアの店舗の設計を担ったことを示す直接的な史料はないが、デザイン面で関与することはあったらしい。また、葵館で協働し後に合理派建築会を共に結成する荻島安二もよく出入りしており、店舗設計にかかわっていた(第3項)。

サイセリアについては、その知名度もあって文献史料に比較的恵まれているが、途中で複数回の移転があったらしく、その変遷は必ずしも明らかでない。今回、筆者は幸運にも、渡邊隆氏のご令嬢である渡邊朱美さんにお話を伺うことが出来たので、それをもとにサイセリアの変遷を整理したい。

第1項：店名について

本題に入る前に、店名の由来について触れておきたい。サイセリアの由来については、インターネット上でギリシャ神話の女神アフロディーテの別名 Cytherea に由来するのではないかという指摘¹²¹がなされていた。この点について、1940年頃のバー・サイセリアの広告には、「サイス(美と愛の女神)がほほ笑みながら何處からかのぞいて居ます」という記述があり、確からしい。



図88 バー・サイセリア広告(マッチ箱?)

第2項：店舗の変遷について

(1) 渋谷サイセリアー1926年頃まで

美術史家の安藤更生は『銀座細見』(1931)の中で、サイセリアを次のように紹介している。

サイセリヤ¹²² 狭いといつて、嘗てのサイセリヤ位狭い家はなかつたらう。近所のお客にノベツお尻をブツケられながら飲んで居なければならぬのだ。〔中略〕こゝはもと美しいマダム

¹²⁰ 1950年の雑誌記事において「三十年来の親友」と紹介されている(「輕鋼コンクリート造住宅」『建築文化』(38)、1950年1月号、p.14)

¹²¹ LSTY 「「サイセリヤ」の由来について、僕が至った結論」『啓蒙かまと新聞』
<http://lsty.seesaa.net/article/235164980.html>、2018年3月21日閲覧

¹²² サイセリアについては、史料により「サイセリヤ」「サイセリア」など表記にゆれがみられる。また、英語表記にもゆれがあり、「SAISERIA」「SAISERIYA」「Cyce Eria」の3種類がみられる(表2)。

表2 店名表記の変遷

	日本語表記	英語表記	典拠
1929(昭和4)年	酒場 サイセリア		店舗写真(『合理派建築』)
1930(昭和5)年	バー サイセリヤ		地図(『復興大銀座地図』)
1935(昭和10)年	〔バー〕サイセリヤ	Bar Saizeria	店舗写真(田中1997)
1930-1945年頃	バー・サイセリヤ	Cyce Eria	広告(図88)
1945-1953年頃か?	クラブ サイセリヤ	CLUB SAISERIYA	マッチ箱(『空に補助線を……』)
1953(昭和28)年	サイセリア		地図(『アルス・グラフ』)

が自分でサービスして居たので人気があつた。以前は澁谷の方でやつて居たのだが、五六年前に今のところではじめたのである。主人は美しい髪を長くした藝術家である。狭い平面を實に巧みに利用してあるが、決して不愉快でない。落ち着いた感じを得られる。もとはデコレーションに多少インチキ的なところがあつてそれがまたいゝのだつたが、近頃はやゝ本格的だ。先づ銀座に多くないカフェリツテレエル¹²³の一つである。その歴史から云つても銀座のバアの先輩格だ。酒もかなりよく集めてあり、主人が自分で酒場をやつて居る。¹²⁴

これによれば、サイセリアはもともと渋谷の方にあり、それが銀座に移転してきたという。安藤が冒頭で触れているところによれば、「近所のお客にノベツお尻をブツケられながら飲んで居なければならぬ」ほど小さな店だった。『銀座細見』の出版年から逆算すると、サイセリアが渋谷から銀座に移転したのは1925-1926年頃ということになる。移転の理由は不詳だが、関東大震災(1923)が契機となったことが考えられる。この渋谷時代のサイセリアのことを本稿では「渋谷サイセリア」と呼ぶことにする。渋谷サイセリアの開業時期や旧所在地などは未詳である。

(2) 銀座サイセリア—1926年頃-1930年頃

一方の銀座移転後の店舗は、渋谷サイセリアほどではないが、先の安藤の文章によれば「狭い平面を實に巧みに利用してある」というから、やはり小さな店であつたらしい。当時の別の文章でも、サイセリアは「銀座一の狭い店であるが、落ち着いた感じを得られる」¹²⁵と紹介されている。この銀座の店舗のことを本稿では「銀座サイセリア」と呼ぼう。

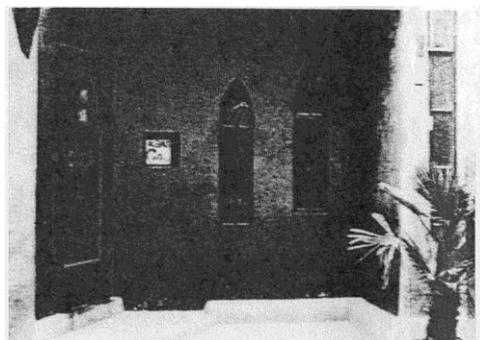


図 89 銀座サイセリア エントランス

年代順にみると、もともとは「サイセリア」だったものが、後年「サイセリヤ」となったようである。欧文表記の「Saiseria」「SAISERIYA」は、日本語の「サイセリア(ヤ)」をローマ字で表記したものらしいが、「Cyce Eria」は欧文での一般的な表記ではない。使われていた時期が長かったこともあって、一般的には「サイセリヤ」と表記することが多いようだが、本書では文献初出時の表記と、由来が「Ctherea」であることを重視して「サイセリア」とする(ただし引用文中では原文に従う)。

¹²³ 「カフェリツテレール(文学カフェ)とは、人々がコーヒーなどを飲みながら、文学について語ったり、アイデアを交換したり、俳優の朗読を聞いたり、エロチックなショーを見る店のこと(“Un café littéraire est un lieu de réunion où l'on parle de littérature, échange des idées, écoute des extraits de livres lus par des comédiens, assiste à des spectacles érudits tout en dégustant un café, ou autre boisson.”) Wikipedia(フランス語版) “Café littéraire”, https://fr.wikipedia.org/wiki/Café_littéraire, 2018年3月19日閲覧

¹²⁴ 安藤更生「銀座細見」『文学地誌「東京」叢書 第12巻』大空社、1992年、pp.132-133。本文は以下のように続く。「近頃はもうマダムは出て来ない。そして、その代りに名高いお京さんがサービスして居る。お京さんは夢二好みの痩せた美しい人である。右の顎に大きな黒子一つあるのが特徴だ。お京さんの聲、これはよく問題になるが、決していゝ聲ではないが不思議に煽情的な聲である。銀座のダンディ共がみんなお京さんに惹かれるのは、あの黒眼勝ちの終始潤んで居るやうな眼と、大きな黒子とこの聲とのせいだらう。お京さん一時は月取千圓と云はれた。實に日本に於ける最高のチップ取り(お京さん済まない。變な言葉だが、月給取りに對する言葉だと思つて呉れ給へ)である。最近には山田順子女史が来て、サービスに活躍してゐる。こゝでは昔からエプロンをつけたり、着流しのまゝにしなないで、いろんな上つ張りを着せてある。マダムが店に出て居た頃もさうだつたし、お京さんも、それからもう一人の文子さんも、着てゐる。文子さんなど支那服まがひの上つ張りがよく似合ふ。」

¹²⁵ 村嶋歸之「カフェー考現学」『大正昭和の風俗批評と社会探訪：村嶋歸之著作選集第1巻』柏書房、2004年、p.140

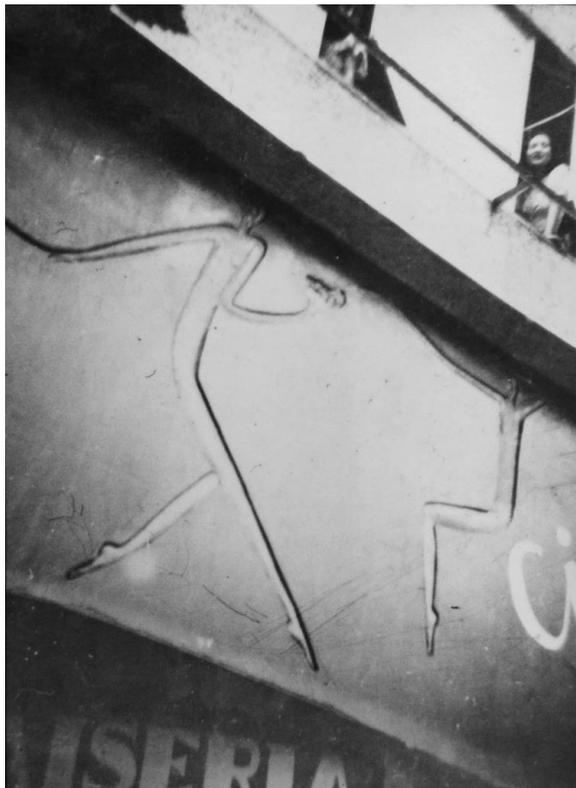


図 90 銀座サイセリア 正面、図 91 同 ファサードのレリーフ？

銀座サイセリアについては、『合理派建築』（1929）に写真が掲載されており、その外観を知ることができる。入口を斜めに建物に食い込ませてエントランスポーチとし、横には尖頭アーチをもつ縦長の開口部が上下にずらされて配置されている。設計は荻島安二による。

ところで、前村 2005:36 では、このファサードには荻島の手による扁平で膨大なレリーフがあったらしいが未詳とされている。今回、渡邊さんが保管していた写真の中に、これらしい写真があった。二人の裸婦像がファサード上部に大きく彫り込まれており、荻島による葵館のレリーフによく似ている。渡邊さんのお話でも、これは確かに荻島によるものだという。

葵館のレリーフが人々の口頭に上り複数の写真が残されているのに対し、銀座サイセリアのレリーフの写真は、目下のところこの 1 枚が残るのみである。その理由は、銀座サイセリアのレリーフが竣工後の早い時期に撤去されてしまったためらしい。渡邊さんの話によると、ある日築地警察署の警官がやってきて、裸体の陳列はいけないと指導されたために外さざるをえなかったのだという。

このことから、葵館のレリーフが、昭和初年に入ると突如塗装された理由が推察できる。おそらく葵館の裸婦像も、銀座サイセリアのレリーフと同様の理由により不道徳とみなされたために、やむなく「服を着せられてしまった」のである。そうやってみると、なるほど、葵館の彼女らに施された塗装は、確かにストライプや無地の服そのものである（第 3 節 4 項参照）。

銀座サイセリアの旧所在地や閉業時期は明らかでない。

（3）バー・サイセリア—1930-1945 年頃まで

ところで、銀座にはもう一つサイセリアと呼ばれる店があった。それが「バー・サイセリア」である。場所は銀座 5 丁目 3 番地（現在の東京都中央区銀座 5 丁目 4-7 付近）で、並木通りに面した 1 階部分を開放



バー・サイセリア

設計：吉川清作か？

施工：未詳

竣工：1930-1935（昭和5-10）年頃

現況：非現存

図92（上）遠景（田中一郎撮影、1936年）

図93（中）サイセリア前の花売り娘（濱谷浩撮影、撮影年不詳）

図94（下）サイセリア前の子どもたち（濱谷浩撮影、1935年）

図95-98（次頁）サイセリアの女給たち（店内にて）



的なガラス張りとしたモダンな建物であった。1930（昭和5）年発行の地図に名前が見えるが、竣工年は定かでない（1935年に撮影された写真（図94）があるので、この頃までには完成していたらしい）¹²⁶。

バー・サイセリアの外観写真は複数残っており、その姿を鮮明に知ることが出来る。銀座サイセリアとは一転して、大変大規模な店舗で、正面は間口の2/3以上を開け放してガラススクリーンとしたモダンなつくりであり、外壁はモルタル塗りのような平滑な仕上げになっている。

内部の写真は乏しいものの、数枚が渡邊さんの手元に残っており、ファサードと同様のガラススクリーンがみえるほか、民家調ともとれる表面をはつた非常に太い柱があったらしいことがわかる¹²⁷。もともとは1階のみで営業していたが、客が収まりきらなくなったために3階まで客席として利用するようになったという。

渡邊朱美さんのお話によると、最盛期のサイセリアでは、女給を200人ほど雇用していた。採用するときには、前の並木道に希望者の列がずっと伸び、中には自身の熱意を示すため、履歴書を血で書く人もいたという。

作曲家の高木東六(1904-2006)¹²⁸の文章の中に、当時のサイセリアの様子が活写されている。

銀座の中央通りに面して、「タイガー」が、裏通りに「サイセリヤ」というカフェがあつたはずである。当時のカフェは、こんにちのバーとキャバレーを合せたような性格の存在だつたと思う。ぼくは、稀にこのカフェに行つた。もちろんそんな高級な歓楽境へ行ける身分ではなくいつも先輩か、誰かに連れて行かれたのであるが。ある晩、ぼくはかなり悪酔いして、吐けど吐けど苦しんだことがあつた。そのとき、ぼくの背中をさすつたり、うがいをさせたり、口を拭つたりして懸命に介抱をしてくれる女給（当時はホステスとは言わなかつた）がいた。その誠実さは、いかに酔つばらつていようとも、嘘か本当かは、微妙に正しく感応し響き伝わってくるものである。彼女の態度は、正にホンモノの親切だつた。

カフェはラストタイムとなり、ぼくはテーブルに顔を伏せていた。彼女はぼくをやつと車にのせて、ぼくの頭を自分の胸にもたせかけて、やさしく抱いてくれるのだつた。おつぱいの柔らかさ、温かさが、耳と頬へじいんと沁み透つて、しびれるような感能である。ぼくはその時点で殊更にオーバーな酔態を演出しながら、苦しいさ中に悦楽を味わつた。車はある小路で止まつた。

「あなたとても一人では帰れそうもないわ。こん夜はあたしの家へ泊つていらつしやいね、ね」

このささやきは甘かつた。ぼくはなぜか、「いや帰る、大丈夫帰れるから、ではさよなら」心にもない言葉が飛び出してしまうのである。

「だめよ、ムリよ、ではちよつとあたしの部屋で休んでいらつしやい。酔をさましましょう、ね」

そう言われていながら、ぼくは帰つたのだ。おそらく、「清潔な立派な学生さん」というところを、彼女に見せたかつたからに違いないのだ。その理由は彼女がたいそう、美しくひどく音楽のファンであることが分つていたのであろう。いいところを彼女に見せたいという見栄に過ぎなかつた。いま考えると、返すがえすも惜しまれる一夜であつた。¹²⁹

¹²⁶ 「復興大銀座地図」昭和5年4月（赤岩2015:66-67）に名前がみえる

¹²⁷ ただし、これらの写真にはキャプションがついていたわけではないので、特に民家調の太い柱があるものは、他の店舗の写真かもしれない。

¹²⁸ 高木東六は、後に吉川が設計した渡邊隆邸を譲り受け自邸とする。

¹²⁹ 高木東六「銀座とぼく」『銀座百店』（179）、1969年10月、pp.33-34

当時のカフェ文化が偲ばれる。バー・サイセリアがいつまで営業していたかは不明であるが、戦後の地図にはバー・サイセリアの名前は見えなくなる。銀座5丁目は戦災でほぼ全ての街区が焼失しており¹³⁰、バー・サイセリアも空襲被害を受けたために営業をやめたのだろう。ちなみにこの頃、渡邊朱美さんは千葉県我孫子に疎開しており難を逃れている。

(4) クラブ・サイセリアー1945-1953年頃まで

終戦前後の詳しい経緯は不詳であるが、サイセリアは終戦直後に銀座7丁目2番地（現在の銀座7丁目8番地付近）に移転して営業を再開したらしい。それが「クラブ・サイセリア」である。すずらん通りの「そば屋よし田」（現在でも6丁目に移転し営業中）の正面で、終戦後しばらくは、店の一部を「パンニ」という進駐軍向けの土産物店に間貸ししていた¹³¹。

渡邊朱美さんの話では、終戦後長く続けていたわけではないというが、1953(昭和8)年発行の地図までは名前が見えるので、この頃までは営業を続けていたようである。当時のマッチ箱が知られているが、店内写真などは残されていない。



図 99-100 クラブ・サイセリアのマッチ

第3項：吉川と荻島の関与について

渡邊朱美さんのお話によると、荻島安二と吉川清作は、ともに渡邊隆氏と懇意にしており、よくサイセリアに出入りしていたらしい。内外のデザインにも関わっていたといい、先に見たように銀座サイセリアの設計は荻島安二による。その他の関与は明確ではないが、バー・サイセリアは吉川の設計ではないかといい、確かにモダンな外観は当時の吉川の設計した住宅群（第11-14節を参照）とよく似ている。

¹³⁰ 『東京都35区区分地図帳 戦災焼失区域表示』（赤岩 2015:87 所収）

¹³¹ 『銀座15番街 加盟店紹介』 http://www.ginza15.jp/inter_166.html、2018年3月26日閲覧

第7節：ジュネーブ国際連盟会館設計競技案—1927年

第一次世界大戦の反省から国際連盟が1919年に設立されたが、本部の場所はしばらく定まっていなかった。当初はロンドンで会合が行われていたが、1923年に設計競技を開催することが決定され、Society of Swiss Engineers and Architects(S.I.A)のガイドラインに準拠したプログラムが設定された。募集規約は1926年4月に起草されたのち同年7月に公表され、1927年1月25日に締め切られた(ただしその後も応募案が少しずつ到着し、最終的に同年4月まで待って審査が行われた)。結果が公表されたのは同年5月5日のことであった¹³²。

本設計競技の開催は日本でも大きく取り上げられた。特に建築学会は、本設計競技の開催が告知されると、その60ページ以上におよぶ募集要項と抄訳を希望者に有償で頒布したほか、1926年9月16日には東京の帝国鉄道協会講堂で長野宇平治らを弁士として、国際連盟の意義やコンペ規定についての講演会を行った¹³³。

本設計競技は、近江によると「日

本からは10名を超える応募者があったといわれるが、長野宇平治と中村順平、下田菊太郎の三名のみが確認されている」¹³⁴。しかし、読売新聞記事¹³⁵によれば、吉川も日本から応募した一人であった。

応募案は『合理派建築』中に掲載されているので、その内容を知ることができる¹³⁶。まず、平面についてみると、議場を中心として必要諸室が配置され、東側には寝殿造りを思わせるような翼廊が南北に張り出している。

立面は新古典主義風にまとめられ、中央には塔が聳え立っている。これまでの作品にみられるような過飾的な趣向はなく、国際機関にふさわしい威厳を与えることが意図されているようである。

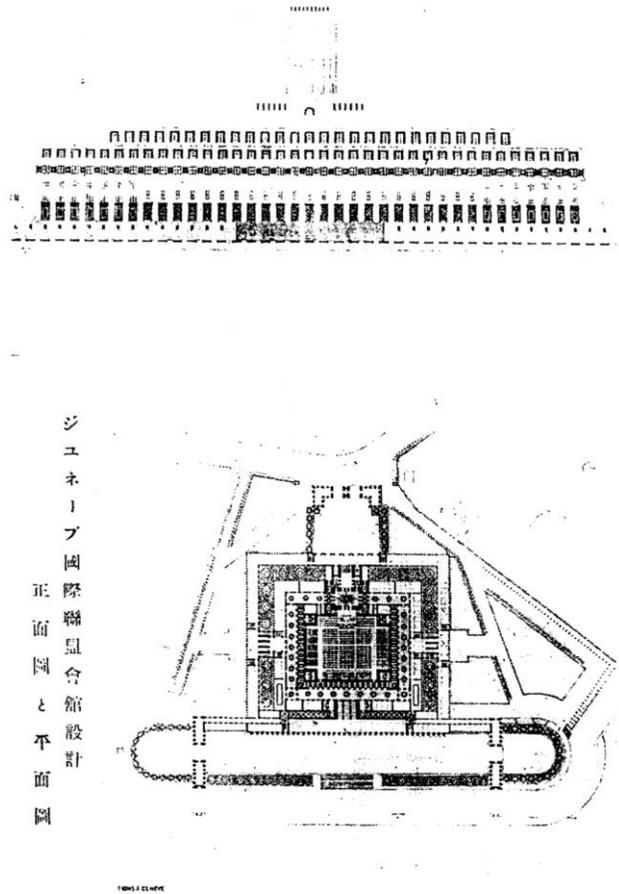


図101 ジュネーブ国際連盟会館設計 吉川清作案 立面図・平面図

¹³² 以上の経緯は Cees de Jong and Erik Mattie, *Architectural Competitions:1792-1949*, Taschen, London, 1994, pp.261-262 による。募集要項の公表年月は近江 1986:88 による

¹³³ 「国際連盟會館建築競技設計に就いて」『建築雑誌』40(488)、1926年10月号、p.979

¹³⁴ 近江 1986:88

¹³⁵ 「新市庁舎設計当選者決る」読売新聞(朝刊)1934年6月2日 p.7

¹³⁶ 合理派建築会 1929:7

第8節：山の手美容院（吉行めぐり美容室）

—1929年¹³⁷

山の手美容院は、市ヶ谷駅前にあった美容室である。施主は作家である吉行エイスケの妻で、美容師であった吉行めぐり(1907-2015)という人物で、木造・緑色のモルタル塗りの建物であったが、戦時中に建物疎開のため取り壊された¹³⁸。

これは一般に村山知義の設計になると考えられており、『合理派建築』でも村山の作品として取りあげられている¹³⁹。デザイン面では、自由に配置された円形や長楕円の窓、鋭角部の曲面ガラスなど、吉川には見られない自由闊達な意匠が目立つ。本作の意匠は村山知義が決定したことは疑いようがない。

一方で、本橋は本作に吉川が“請負師”として関与していたとみている¹⁴⁰。この見立てに直接の根拠はないが、確かに、村山に近い建築関係者は吉川しかいなかったようであるから、吉川が技術的側面での協力を行った可能性はある。

だが、この作品は、それが単に吉川が関わった可能性がある作品であるということ以上に、その存在が、合理派建築会の結成の素地を用意したのではないかと思われる点で、重要な意義をもっている（詳しくは第3章第1節で検討する）。

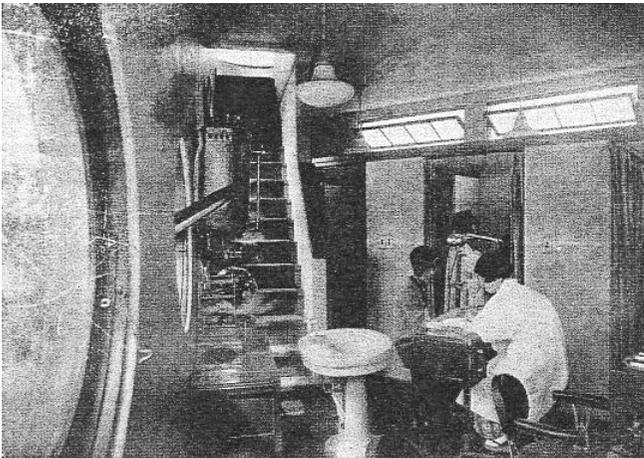
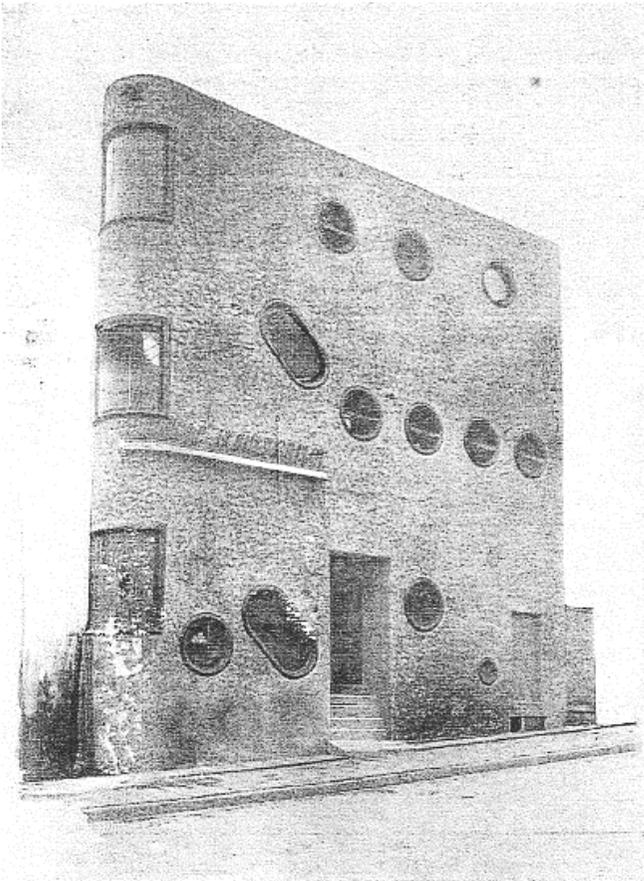


図 102-103 山の手美容院（吉行めぐり美容室）外観・内観

¹³⁷ 本橋ら 2009:230 は竣工年を 1926 年とするが、一般には 1929 年を取ることが多いようである（村山知義研究会編『村山知義の宇宙：すべての僕が沸騰する』読売新聞社、2012 年、p.125）。

¹³⁸ 本橋 2008:36

¹³⁹ 合理派建築会 1929:3

¹⁴⁰ 同前

第9節：朝日住宅設計（乙種金賞）—1929年

第1項：中小住宅建築設計競技

「昭和新時代の新様式を見出さん」¹⁴¹ このような非常な意気込みをもって、東京朝日新聞社は1929年2月、中小住宅を対象とした設計競技の開催を告知した。しかも、「優秀なるものは之を紙面に公表し且つ実施するものとす」¹⁴²という、実施コンペであった。

競技顧問には中條精一郎を迎え、審査員を大沢三之助、中村傳治、堀越三郎、石本喜久治、村山長拳、鈴木文四郎および成澤金兵衛の7名が務めた。

課題は設計規模および予算により2種類あり、6-7人の家族を対象とした中規模住宅を建築費5000円以内で設計する甲種と、3-4人の家族を対象とした小規模住宅を建築費3000円以内で設計する乙種に分かれていた（敷地はいずれも東京近郊の50坪内外）。応募は同年4月25日正午に締め切られた。500案の応募があり、85案が入選した¹⁴³。

吉川はこのコンペで乙種金賞を得た。説明文によると概略は以下のようなものであった。

【建物坪数】 十二、三七五坪

【建築費】 二千八百四十圓

【敷地坪数】 四十九坪

【構造】 全部鉄筋コンクリート

【高さ】 地盤から屋上部まで九尺七寸五分

【壁厚】 外壁五寸内部間仕切三寸八分

【屋根床】 平均四寸、防水アスファルト塗、二重鉄筋構造

【床】 厚二寸五分上モルタル塗、コルクおよびタイル張

【仕上】 内部はリシン塗（一部壁紙張、色はウス桃色）

外部は一部モルタル他しつくい塗、水製〔ママ〕ペンキ塗仕上

【窓および出入口】 窓はステイルサツシュ、外出口は鋼製

内部出入口は木製ペンキ塗

× × ×

▼「小さい」といふ事と「單純化」といふ事が設計の主意特徴としては「鉄筋コンクリートである事」と

「室を決定的の室【B】と臨時試用の室【A】とに分けた事」の二つである

【A】は一日二十四時間を隨時圖面記中の目的に共用し

【B】は決定的の室で他のものには使用しない

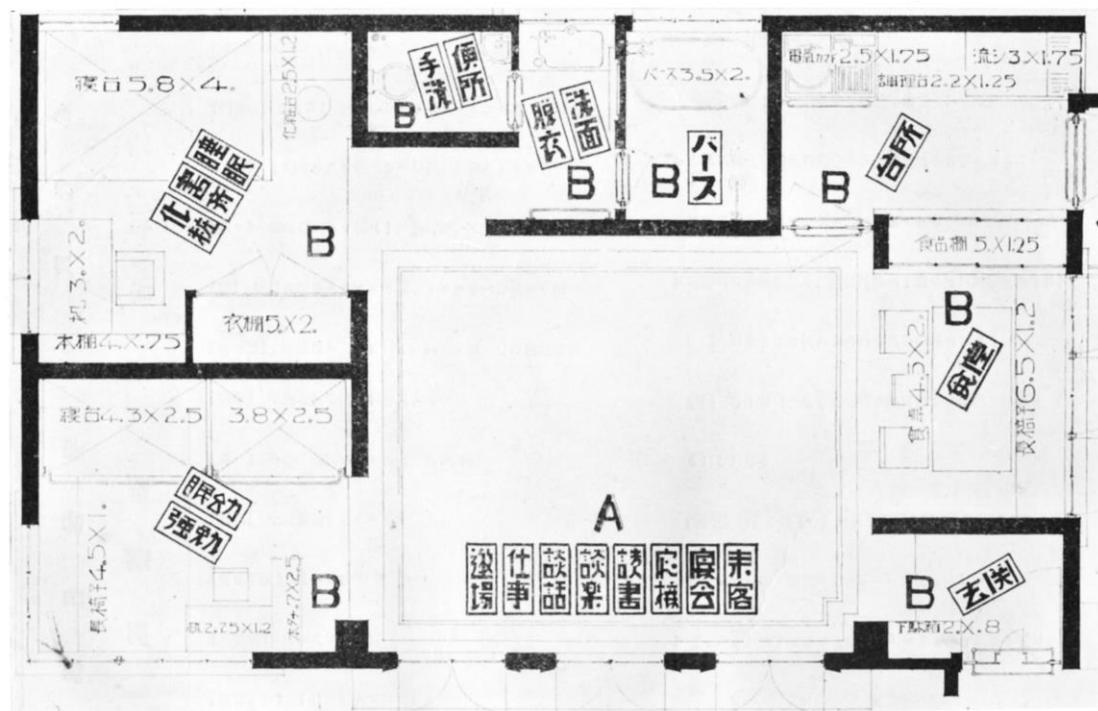
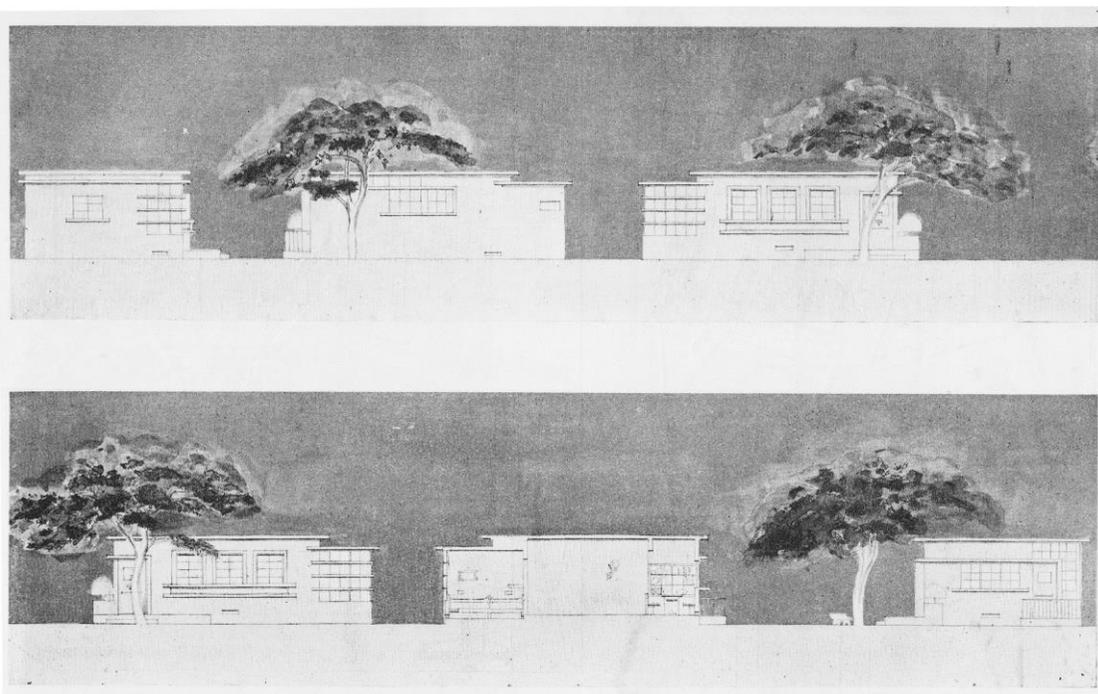
▼盜難又は非常のため、近隣五軒を一組として電鈴装置をなす庭園は採光と衛生を主とした芝園とする¹⁴⁴

¹⁴¹ 「序」『朝日住宅図案集：懸賞中小住宅八十五案』朝日新聞社、1929年

¹⁴² 「中小住宅建築設計競技詳細規定」同書

¹⁴³ 同前および同書「凡例」

¹⁴⁴ 「朝日住宅四號型」同書、p.23



朝日住宅設計 応募案 (乙種金賞)

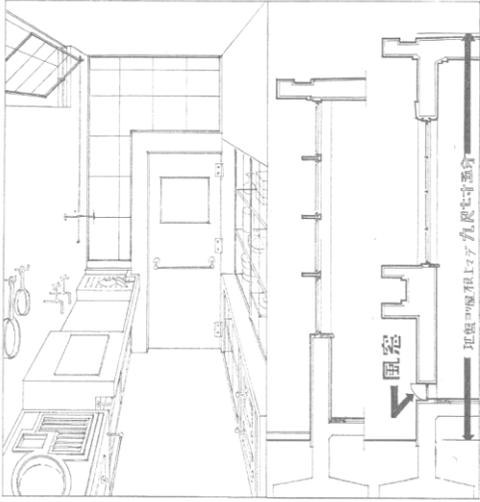
設計：吉川清作／1929 (昭和 4) 年

図 104 (上) 立面図、図 105 (下) 平面図

次頁：図 106 (上) 計画設計俯瞰図、図 107 (左) 台所見取図・配置図、図 108 (右) 計画設計配置図

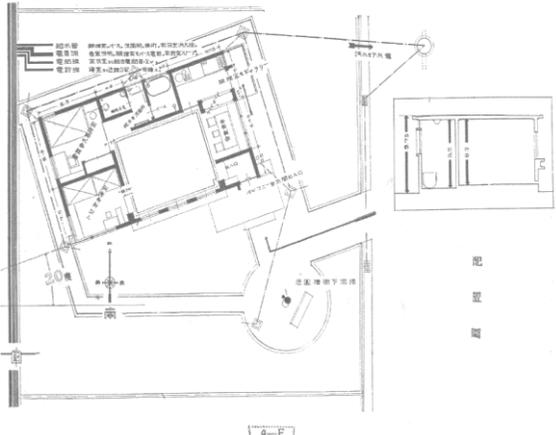


朝白新聞社競技
近代化住宅區 計劃設計俯瞰圖

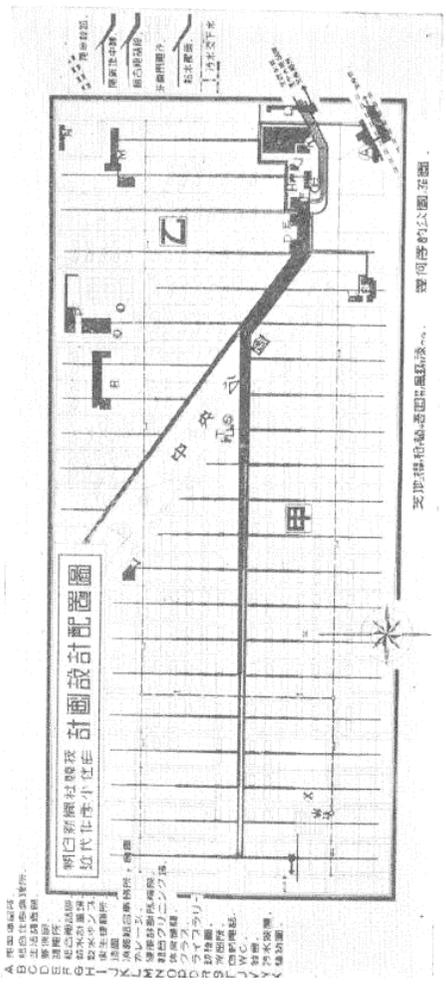


圖取見所畫

圖計配



圖間房



朝白新聞社競技
近代化住宅區 計劃設計配置圖

- A 門前空地
- B 住宅區
- C 住宅區
- D 住宅區
- E 住宅區
- F 住宅區
- G 住宅區
- H 住宅區
- I 住宅區
- J 住宅區
- K 住宅區
- L 住宅區
- M 住宅區
- N 住宅區
- O 住宅區
- P 住宅區
- Q 住宅區
- R 住宅區
- S 住宅區
- T 住宅區
- U 住宅區
- V 住宅區
- W 住宅區
- X 住宅區
- Y 住宅區
- Z 住宅區

圖何的公園區園

平面をみると、「来客」「談話」などの複数の用途に使われる居間【A】を中心として、その周りに寝室、食堂などの諸室【B】が配置され、廊下を一切取らないのが大きな特色となっている。

近江榮は、朝日住宅と、同時期に開催された同潤会による「五室以内の新住宅」コンペを、昭和初期の住宅コンペの双璧と評価した上で、前者に「居間中心型」が多いのに対し、後者には「中廊下型」が多いと指摘する。

昭和四年、朝日新聞社と大阪毎日新聞社の企画になる二つの住宅コンペは、再び居間中心型の復活として挙げておくべきだろう。とくに朝日新聞社による「中小住宅」コンペと、二年後の昭和六年同潤会による「五室以内の新住宅」コンペとは、昭和初期における住宅コンペの双璧となった。いずれ劣らぬ信頼すべき背景のもとで審査員も厳選されたようであり、とくにこれらコンペの成果が『朝日住宅』および『五室以内の新住宅』と銘打つ当選図案集となって刊行され、それぞれ版を重ね、社会的に大きな影響が認められるものとなった。

朝日新聞社主催のコンペは、当時の企画としては、さすがに一流ジャーナリズムの実力を示し、ほとんどその運営に注文を付け加える余地がないほど理想的で、応募案の著作権まで正しく認めている。この規定に溢れる先進性は、当然の結果として入選案は圧倒的に居間中心型が多く、合理主義的色彩が濃厚であった。それに反して、同潤会主催のコンペの場合は、すでに朝日新聞社のすぐれた先例がありながら、入選案はきわめて保守的で現実的であり、とくにコンペによって衆知を求めるまでもない程度で、ほとんどの入選案が中廊下型を採用していた。¹⁴⁵

ここで、吉川案を検討するならば、それが特に近江のいう合理主義的色彩の強い「居間中心型」を体現するプランとなっていることが看取できる（例えば、台所と食堂の間の食器棚は両面から使えるようになっていいる）。また、配置についてみると、東西軸を20度振った上で北に寄せ、庭を広く効率的に使う工夫が見られる。

しかし、吉川案の一番の特色は、その構成にある。その案は「小住宅は組合住宅の組織以外に許されない」¹⁴⁶という考えのもとに、甲種・乙種の住宅群に加え、公共施設を配した住宅地の全体設計を行うという非常に意欲的なものであった¹⁴⁷。敷地外の設計まで及んだ入選案は他になく、この点は高く評価されたものと思われる¹⁴⁸。

掲載された「計画設計配置図」をみると、甲乙を分ける中央公園を中心に、「郵便局」「組合電話局」「消費組合事務所・倉庫」「クラブ」「ライブラリー」「幼稚園」「派出所」「WC」「植物園」「健康診療所・病院」「汚水装置」と非常に多様な施設が計画されている。特にインフラまで気を使っている点は注目されてよい（「組合電話線・給水・汚水下水」などのルートまで記入されている）。

このように、組合での総合的な住宅地設計の重要性を訴えるのは、ハウードの田園都市思想などに影響されたというよりも、大和郷の仕事（第4節）の中で学んだことが大きかったであろう。大和郷は、理想的住宅地として当初より組合組織が設けられ、下水や電話・電灯線の地中埋設が計画されていた（実現したかどうかは不明）。また、大和郷倶楽部という社交施設を持ち、各種会合に部屋を貸し出していたほか、

¹⁴⁵ 近江 1986:134-135

¹⁴⁶ 「朝日住宅四號型」（前掲）

¹⁴⁷ 甲種住宅も計画設計配置図内に見えるが、乙種と同様に設計図面を添付していたかどうかは定かでない。

¹⁴⁸ 住宅地の計画図を掲載するために、『図案集』のなかで吉川案のみ1頁多くなっている。

燕楽軒というレストランを設けて会員の用に供していた。また、朝日住宅と同年の 1929 年には幼稚園（大和郷幼稚園）を創立している¹⁴⁹。吉川は当然、このような動向を知っていただろう。

ところで、吉川案のなかに「教会」が設けられているのも、興味を引く事実である。吉川清子さんのお話によると、吉川はクリスチャンではなかったが、聖書は何冊か持っており、読んでいたかもしれないという。

当選図面は 1929 年 5 月 17 日から 30 日にかけて朝日新聞本社 5 階展示会場で公開された。吉川の 4 号型は特徴の多いものとして特に注目を集めたという¹⁵⁰。

¹⁴⁹ 以上は『大和郷遠近物語』（前掲）、pp.13, 27-28, 41 による。大和郷幼稚園は今日まで存続している。

¹⁵⁰ 「すぐ参考に、八十五の住宅案」朝日新聞（東京）1929 年 5 月 17 日（朝刊）11 頁

第2項：朝日住宅展覧会

先述したように、朝日住宅は当初から実施が前提とされていたコンペであった。当選案のうち金賞・銀賞となった16案は、ただちに工事に移された。場所は北多摩郡砧村（現在の東京都世田谷区成城）である。竣工した住宅は、1929年10月25日から11月24日まで「朝日住宅展覧会」として一般に公開され、後に実費で分譲されることとなっていた。コンペの締め切りは同年4月であり、施工にかけられる時間は、コンペ終了から長くて6か月ほどしかなかった¹⁵¹。吉川の朝日住宅4号型は、特に急造であり、1ヶ月で建築された。この住宅については、吉川の回顧文があるので、引いておこう。

大震災直後、朝日新聞社主催の中小住宅図案を懸賞募集した際応募して、当選した案を東京郊外成城学園の朝日村に建設した。

20数戸の住宅の内の住宅はの中で唯一戸のコンクリート住宅であった。その時は、作者自らそのコンクリート住宅を施工せねばならぬ破目になった。それは3k×4kの12坪の小住宅で予算は当時の3000円であった。工事に着手してから完成する迄1ヶ月の期間しかなかったが1ヶ月後の展覧会までに庭の芝生、台所道具、夜具まで見事に完備し展覧会でも異彩をはなち十分効果をあらはした。その時のコンクリートの主体構造も、最近建設省で試作されつゝあるコンクリート造りの4階建アパートの構造と同じく、梁や柱型のない所謂版構造であった。工費も庭の芝生からブランコ、コンクリート歩路まで作つて、総経費3,000円で出来たので、現在ではその約100倍として30万円位となる。坪当たりになると3万円以内となり、建築期間は1ヶ月で十分といふ経験があるわけである。¹⁵²

吉川の朝日住宅4号型が建設されたのは、現在の成城5丁目10-7付近である。入選案とは異なり、西と南で接道する角地が敷地であるために、入選案からはプランが反転しているが、それ以外はおおむね入選案通りに建設されたようである¹⁵³。

鉄筋コンクリート造の住宅は16案の中で唯一であり、吉川自ら語るように、相当の衆目を集めたい。当時の記事がその盛況ぶりを伝えている。

小田急成城学園前に開會中の本社主催朝日住宅展覧會は連日異常の人氣を呼び二十日まで入場者四萬人を突破する盛況で

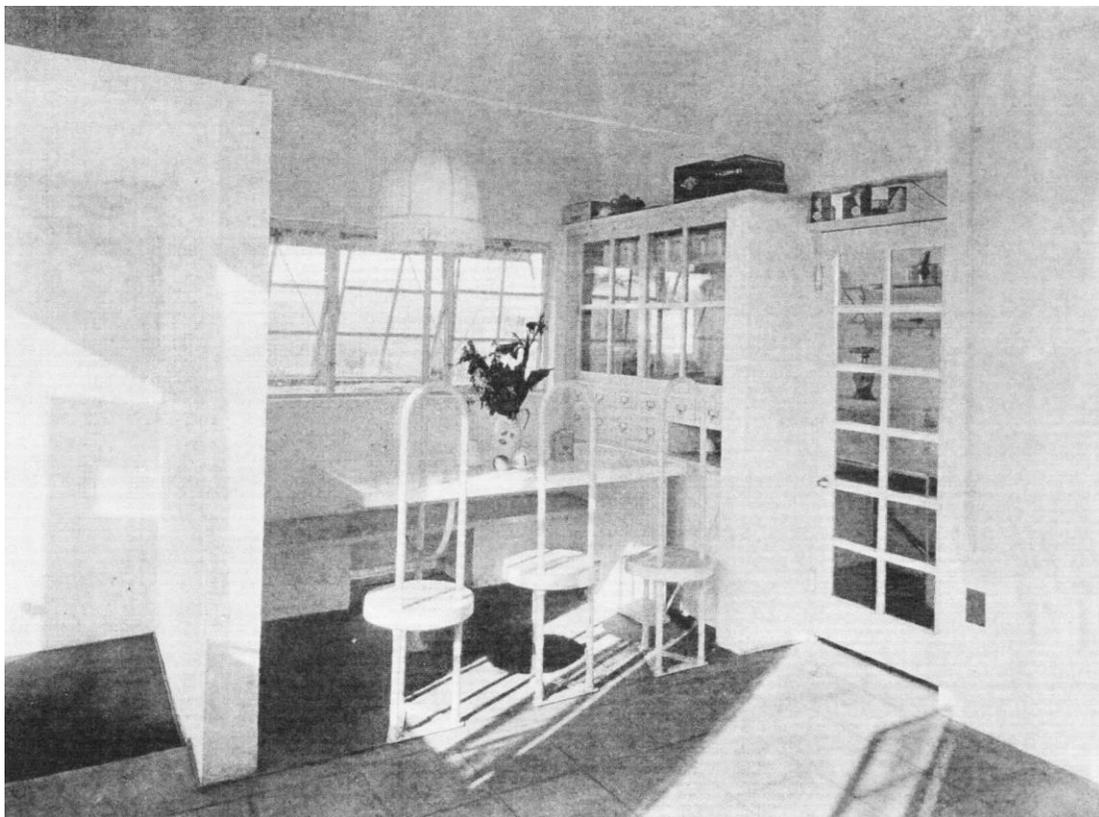
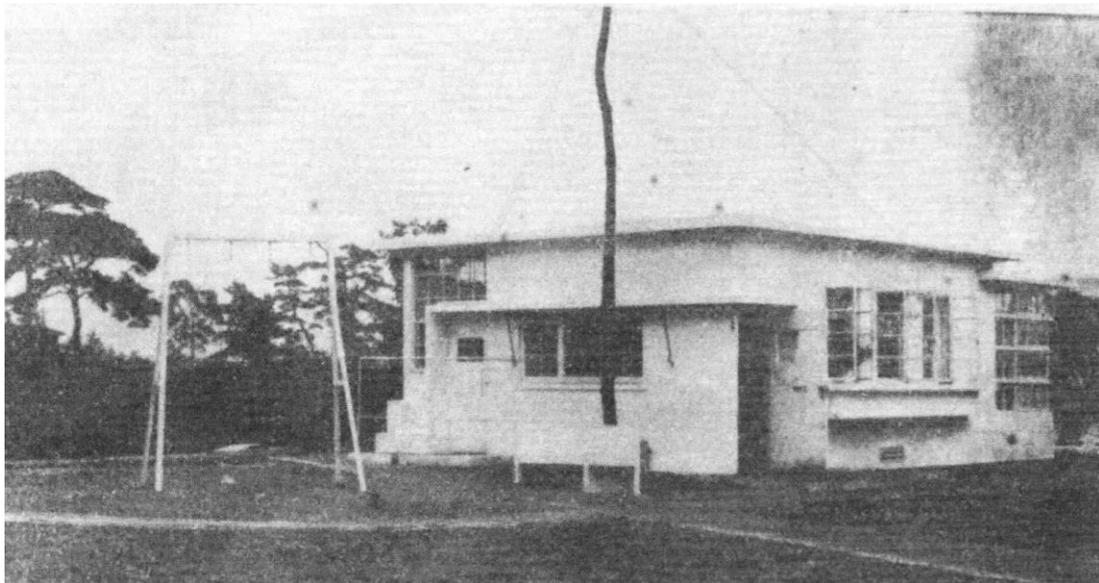
昨今は女學生の團體見學で大賑ひを呈してゐる、城内には三井紅茶の無料接待所があり三越、松坂屋、松屋さん百貨店設計出品の家具、ヴィクター、コロンビア出品の蓄音機奏樂もあり新宿秋元植木店の庭園設計は外人間に好評を博してゐる

住宅は十六戸のうち九戸賣約、三戸建増しの申込があつた、評判の鉄筋コンクリート建の第四號型は濟南在住の一讀者が逸早く賣約してしまつた

¹⁵¹ 朝日住宅展の経緯は藤谷陽悦「成城学園前住宅地と『朝日住宅展覧会』」『住宅建築文献集成第17巻』柏書房、2011年、pp.556-557による

¹⁵² 吉川1950:59。なお、実際には朝日住宅展覧会への出展数は16戸、吉川の4号型の建築費は3500円（+給排水雨水及便所工事費及コンクリート通路ベンチ等259円、電気費200円）であった。（「朝日住宅展」『アサヒグラフ』1929年11月6日pp.16-17）

¹⁵³ ただし、外構については、コンペ案にあったベンチはブランコに置き換わっており、桜の木も見当たらないなど、多少異なる部分がある。



朝日住宅 4号型 (乙種金賞)

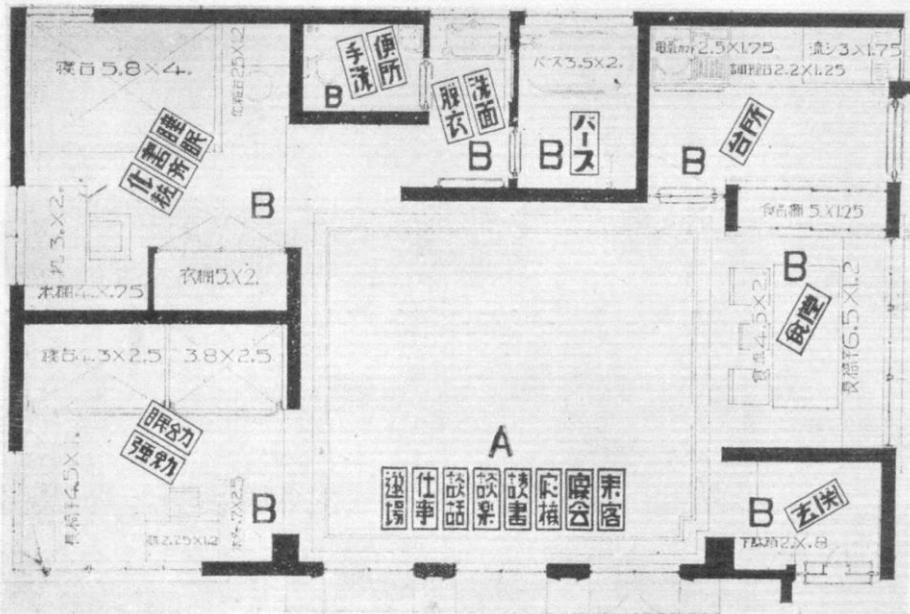
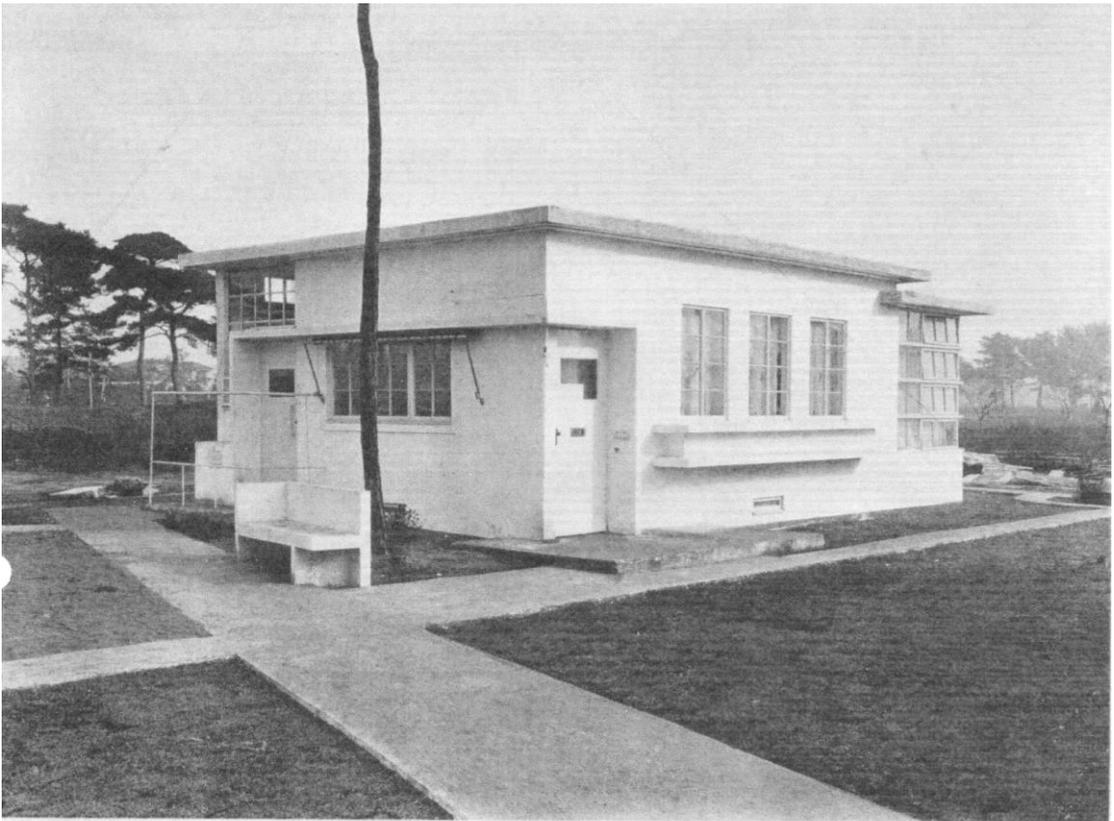
建築・庭園設計：吉川清作

電気設計・施工：合理派建築会

竣工：1929 (昭和4) 年

図 109 (上) 南西よりみる、図 110 (下) 食堂

次頁：図 111 (上) 南西外観近影、図 112 (下) 平面図 (竣工案とは東西が反転している)



圖面平と觀外型號四宅住日朝

氏作濟川吉 計設
前園學城成線治急田小 置位

建築畫報第二十一卷
第一號第十三圖

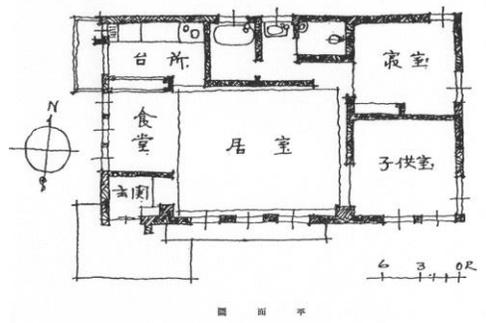
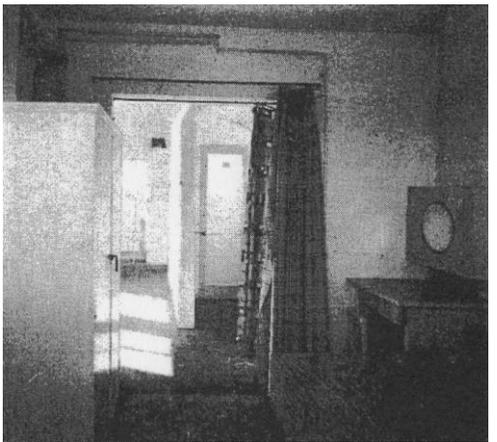
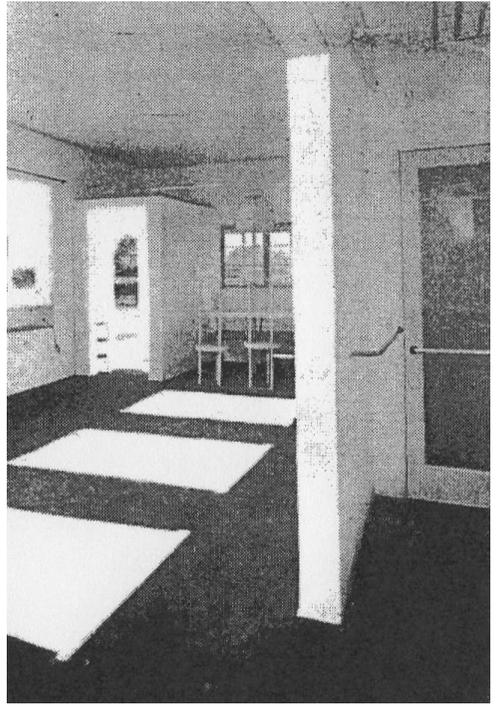
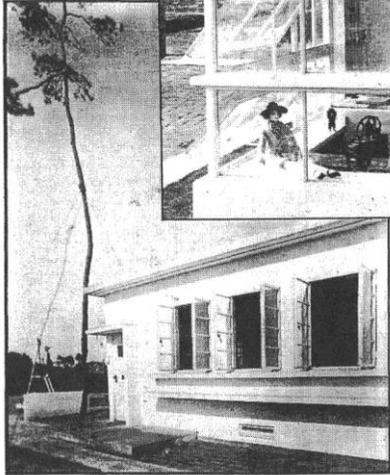
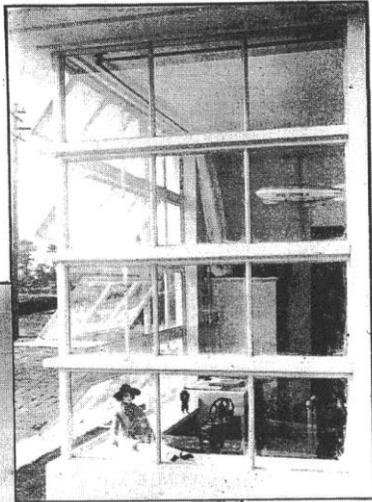


図 113 (左上) 食堂、図 114 (左中) 居間、図 115(左下) 外観遠景
 図 116 (右上) 寝室前から食堂をみる (右手のドアは脱衣所)、図 117 (左下) 平面図 (竣工案)

(上) 子供室(東出図)



(下) 東壁、窓枠、階段、読書、談話、談話、仕立、遊び場を兼ねる、作者の所好圖書使用の壁のフレンチ・ウィンドウ。



図 118 (左) 子供室と南側外観、図 119 (右上) 朝日住宅及成城学園都市分譲地賃地案内図(地図中央上部の街路中に朝日マークの6個並んでいる部分が朝日住宅地)、図 120(右下) 朝日住宅敷地配置略図(4号型は左上の角地にある小さな長方形建物)

尚坪四銭の地代、一年半の小田急定期パスなどの特権は展覧會會期中の申込に限られてゐる、會期は二十四日限り、入場無料¹⁵⁴

その他に、専門家・一般を問わず、多数の展覧記の中で4号型について触れられている。例えば、朝日住宅3号型を購入した櫻井忠温という人物は次のように述べている。

さて建ち上がった家はいろいろで、所謂『文化住宅』といふ名のものかどうかよく分からないのですが、この頃よくあるとんでもない型の家から見ると、左程飛び離れてもみず、どちらかといへば地味な家が多いやうに思ふのです。尤もこれは家の外観をいふのですが、審査員も珍型を避けたのではなかつたらうかと思ふのです。

最初十六軒の家が立並んだ時、これこそ世にも珍しき型の家といふものは一軒も見當らなかつたやうです。尤も第四號住宅のやうに『演出家村山知義、彫刻家荻島安二、建築家吉川清作』と銘打つた合理派建築會の作品と云ふ様なものもないではありませんが、これとても、奇妙奇天烈といふわけには行かないやうです。

一體に地道なこじんまりした家といふことが、朝日住宅の特長〔ママ〕ではないかと思つてゐます。¹⁵⁵

¹⁵⁴ 「朝日住宅展売約続々」朝日新聞(東京)1929年11月21日(朝刊)7頁

¹⁵⁵ 櫻井忠温「朝日住宅の住心地：気軽な家」『朝日住宅写真集』pp.2-3(内田青蔵編『住宅建築文献集成第17巻』柏書房、2011年、pp.524-525)

また、『婦人之友』に掲載された記事では、4号型が非常に好意的に紹介されている。

完全に耐震、耐火的な家です。そして今まで三尺と一間の割合でなければならぬかの如く考へてゐた住宅のスペースを、一寸の無駄のないやうに考へてあります。また時間の観念において、無駄な時間を消費せぬやう、室を最小限度に狭くしてあります。ですからこの家には決して必要以外の家具、道具の存在を許しません。必要な家具——物入れ抽出などは全部作りつけになつてゐて、しかもカーテンの棒、机の脚などを電気の配線管に應用してある等、住宅として全部が総合的に出来上がつてをります。

窓や扉には一分も隙もありませんから、温度の調節は自由に出来ますし、室中の床を全部水で洗ふことも出来て経済的且つ衛生的です。カーテンに洋服地を應用してあるのも思ひ付きですし、食堂の抽出しに「來客茶器」「皿」等名が入れてあるのも行きとゞいた用意だと思ひます。¹⁵⁶

一方、『建築画報』1930年1月号に掲載された『『朝日住宅』合評會』という記事では、吉川の四号型をめぐつて喧々譁々の議論が交わされた。その中では、気候・生活上の問題から批判的な意見が強かったが、新しい住宅像の実験として肯定する意見もみられた。

津田〔鑿〕 ……次はコンクリートの家（第四號型）の軒先から華嚴の瀧見^{マツ}たいに雨水が壯觀に落ちて来る、自然は偉大の力を示すな屋根の勾配の關係で運悪く入口に落ちて来るのは困つたことである、あれは丸窓をやめても庇を附けた方が良くはしないかと思ふ且つ御用商人と取引窓の上に庇^{マツ}しがほしい最も此頃大抵武装はして居るが野天はひどい。

〔中略〕

山田〔醉〕 ……支那人の買つたコンクリートの家等は支那人でも日本の氣候ではあの家に住むことは出来ない¹⁵⁷。建築家の常識をもつてするならば斯んな家は當選す〔ベ〕きものではない。（四號型）

藏田〔周忠〕 あれは進歩的な一つの提案として見るべきだと思ひます、あれは全體を通じて建築の經濟的標準型を主張する上に不完全であるが我々には大變良い刺激だと思ひます。

山田 それは住宅であつては困る、住宅はさういふものでないと思ふ、住宅は我々の慰安場所である、それが脅威を感じずるやうな住宅は價值はないと思ふ。

吉田〔享二〕 まづ四號あたりは新しいところは認めなければならぬ。

山田 日本の氣候を没却して居る、日本の住宅では日本の氣候を没却して建つべきものじゃない。

藏田 唯狭いといふことは經濟的な點からばかり見てゐるのでしょう。

吉田 唯図面で見ると實に面白いと思つたのですが出来たのを見て實際意外に感じました床がひくいからでしよふが。

¹⁵⁶ 「朝日住宅四號型」『婦人之友』23(12)、1929年12月号、p.5

¹⁵⁷ 今日の観点からすると不適当な表現であるが、史料としてそのまま引用する。

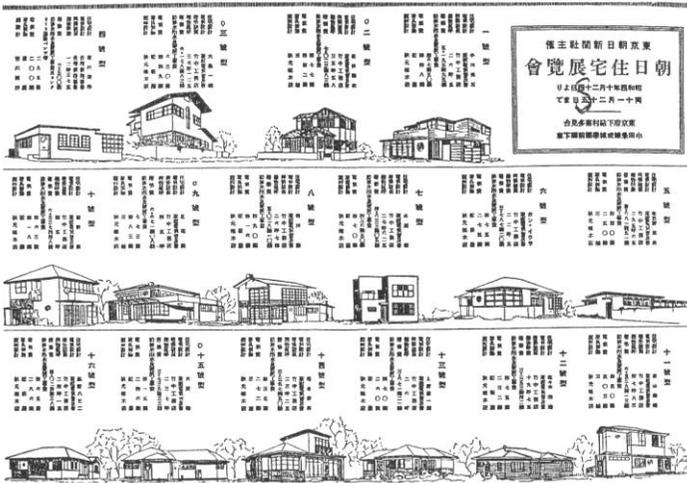


図 121 朝日住宅展覧会出品住宅案内

山田 あの小児室等に夏の陽が入つて見たまへ、これは住宅の考へを全然没却したことである。斯ういふ風な安建築はさういふことは問題でないと思ふ、吾々が健康的に住へるといふことが最も必要だろうと思ふ、それには日本の氣候を考へてくれなければならぬと思ふ。

蔵田 局部の考へのなほ研究を要すると思はれるところは澤山ある。

山田 私のいふのはそんな小さいところではありませぬ。

吉田 でもこれは新しい若い夫婦等には適當でないかと思ふ。

山田 あの臺所で強い夏の夕陽があたつて居るところでたとへ元氣な若夫婦でも實際に料理が出来るものか。

蔵田 それは寧ろ細部の考へであつて……。

金井 (佐久) 素人の私は口をさしはさんで悪いですがプランの「アイデヤ」から見て誠に良いと思ふ併し常識的に見れば水族館の様で住宅には適しないと思はれますが考へ方としては面白いと思ふ。

山田 本當に住まはせるといふことからいへば住む人が可愛さうだ。

内藤 (益二) 西陽の入る所にガラス張りの戸棚がある、それに皮肉にも玉子が入れてある。

山田 あいふ家は日本では困る、氣候のよいロスアンゼルスあたりなら宜からうが……

金井 生活の根拠である部屋を廣くとつてみんながこの部屋を中心として生活の出来るやうにと考へたのは慥に進歩的でせうな。

蔵田 同じ型のものを澤山造るといふことをまづ考へてみます (朝日住宅図案参照) さうすれば非常に安くつくのですからあれが長屋のやうに出来れば經濟だといふやうな考へ方から出発してゐると思ひます、ですから室内のとり方が如何にも狭く、建てる向きによつて方角の條件は變りますが、室は最も切りつめた處をねらつてゐるやうです。

内藤 それでは子供が出来れば他所へ移るんですな、三歳四歳の子供はあのベットに寝られない。

山田 あれは氣候のよい生活の簡素な外国に向く家ですよ。¹⁵⁸

これらの記事を読むと、一般の人々がモダンな新住宅を比較的素直に受け入れている一方で、専門家の間に深い亀裂が存在していることがうかがえる。

蔵田周忠は、対談中の発言からもわかるように、中でも4号型に好意的であった。藤谷陽悦は別の蔵田の言を引いた上で、「生活改善から合理主義」への移行を体現する存在として朝日住宅を評価している。

¹⁵⁸ 『『朝日住宅』合評會』『建築画報』21(1)、1930年、pp.11-14

一方、最小限住宅を思わせる四号住宅（吉川清作）・七号住宅（土浦信〔子〕）はかなり好気
の目を持って迎えられている。〔中略〕

また村山知義と合理派建築会において活動を共にした、吉川清作はこの朝日住宅におい
て鉄筋コンクリート造の最小限による小住宅を提案している。その間取りはバウハウスが
実験住宅として計画した「アム・ホルン」(A. Meyer & G. Marcks & G. Mueche, 1923年)など
の最小限のプランを半分に切断ような形であり、居間の隣(周囲)には食堂・台所・寝室な
どを隣接させている。蔵田周忠はこの住宅について「全然特異なプランと構造とである。
室は図で見たよりも小さい。問題はこの特色ある家全体の考へ方にある。大量生産を想像
する標準型としてこのプランは承認されていい。たゞ材料と構造の點はかすに実験の時と
もつてしなければならない」¹⁵⁹と注意深く見守っているから、明日への期待をつなぐ住宅
として提案され、そして世間からも注目されていたことが考えられる。

このように朝日住宅においては和洋折衷住宅だけを理想として実施されたわけではな
かったことが考えられる。〔中略〕住宅の外観では陸屋根・アールデコ・木製カーテンウォ
ールなど、当時の新興建築に共通するモダニズム・デザインが展開されている。すなわち
生活改善から合理主義へと移行するモダニズム住宅の登場をそこに見ることができるので
あり、朝日住宅の展覧会がその時代の一端を担っていたことは興味深い。¹⁶⁰

吉川の4号型は前田実愛という人物が買い受け、美容室(前田美容室)を開業していた。“白い、小さ
い、変な家”として多くの地域住民の間で記憶に残る存在であったが、早くに壊されたという¹⁶¹。1956年
の航空写真ではその存在が見えるが、1963年の航空写真には見えないので¹⁶²、この間に取り壊された
ものらしい。

ところで、当時の雑誌記事には、4号型の関係者が次のように記されている。「四號型 / 設計者 吉
川清作 / 電気設計 合理派建築會 / 建築請負 合理派建築會 / 家具装飾 松屋 / 庭設計 吉川清作」
¹⁶³。他の15棟の建築工事はすべて竹中工務店が、電気設計は家庭電器普及会が請け負っているにも関わ
らず、吉川の4号型のみはいずれも合理派建築会の担当となっている。合理派建築会とは、聞きなれな
い名前だが、葵館で協働した吉川・村山・荻島らをメンバーとして結成された建築団体である。その経緯
を直接的に示す史料はないが、この朝日住宅展覧会が契機となったらしい(詳しくは第3章第2節で検討す
る)。

¹⁵⁹ 蔵田の評価は次のように続く「これに住はれる方は特に実験をする心がけを持つて結果をお聞かせ下さい。寒暖
の點、湿度の點、音響の點、心理の點、等々。我々はこの家の如き考案が大量に建てられる事を希望すると同時に、
明日への期待を実験の報告につなぐ。」蔵田周忠『『朝日住宅展』を見る』『朝日住宅写真集』p.16(内田2011:538所
取)

¹⁶⁰ 藤谷2011:558-559

¹⁶¹ 山崎晶子、鯉坂徹、松田宏、土谷耕介、小幡一隆「成城地区における近代住宅と街並みの保存再生に関する研
究」『住総研研究年報』(30)、2003年、p.71

¹⁶² 1956年米軍撮影USA-M324-299、1963年国土地理院撮影MKT636-C11-5(航空写真はいずれも国土地理院地
図・空中写真閲覧サービス所収写真)

¹⁶³ 「朝日住宅展」『アサヒグラフ』(前掲)、pp.16-17

第10節：東京市庁舎建築設計懸賞競技（2等）—1934年

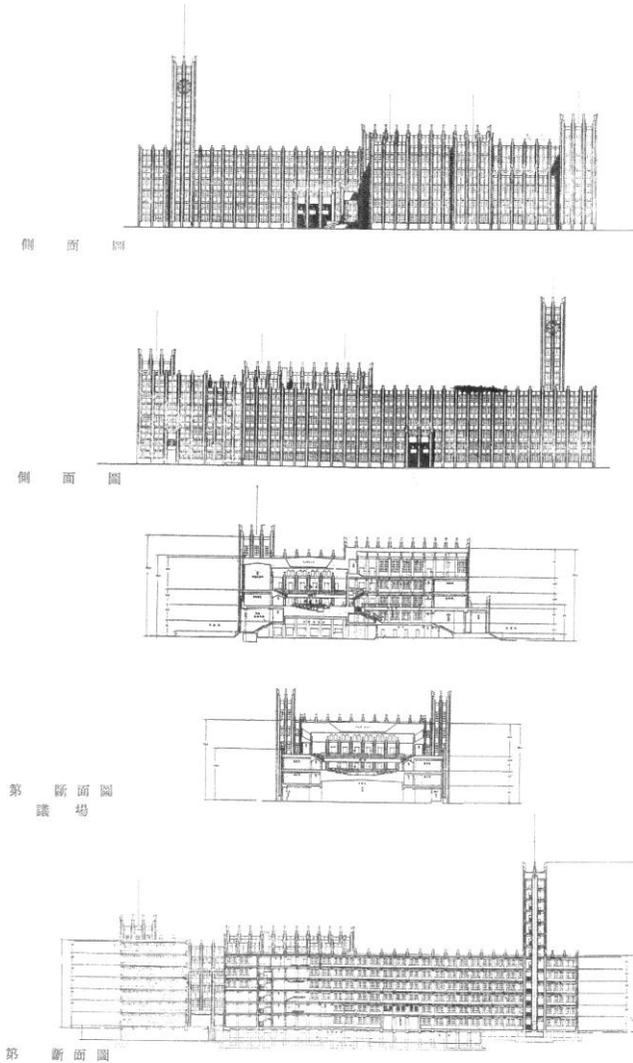


図122 東京市庁舎建築設計懸賞競技（2等入選）立面図・断面図

東京市は1933年、かねてからの懸案であった新庁舎を月島第4号埋め立て地（現在の晴海地区）に建設することを決定した。市庁舎を都心から離れた臨海部に建設することについては強い批判があり、建築学会でも位置を再考するよう意見書を提出するなどの動きがあったが¹⁶⁴、これを顧みることなく1934（昭和9）年2月1日に東京市庁舎建築設計競技が実施され、応募は同年5月10日午後10時に締め切られた。応募総数は166通（さらに締切後に5通）であった。

審査結果は同年6月1日付で公表され、吉川清作は2等に入選した¹⁶⁵。その説明書には以下のように記されている。

二、平面計画に関する説明

イ、外観により既にプランの大體の一を表示す。

決議機関部「市會部」——執行機関部「事務局」との二大區別。

正面に於ては直角的に出入口の對示せる即ちそれである。

ロ、その二つの中間部に市長、助役、會議、食堂、電話等の諸室並に諸機關室「地中階」の配置。

三、建築意匠

イ、日本建築の壹つの根源たる「本堂と塔」の相對、對立關係が引起す強き美觀

を正面に適用す「正面玄関と高塔」が即ちそれである。

ロ、水面に垂直を画くべき清明なる直線。

ハ、單純なる垂直線の連立もプランの變化せるアウトラインによる陽光の陰影即ち生ける色彩を意匠とする。〔中略〕

七、設計の建築

イ、「現在に於て（新築せんとする）平面に、外景に「完全たる」建築。

ロ、然してなほ将来（増築）を劃せる建築。

ハ、決議部（市會）執行部（事務）の單純なる表明建築。

¹⁶⁴ 「会告 東京市庁舎新築位置に関する意見書」『建築雑誌』48(580)、1934年1月、広告頁

¹⁶⁵ 「東京市庁舎建築設計競技審査報告書」『東京市庁舎建築設計懸賞競技入賞図集』東京市、1934年、pp.1-2

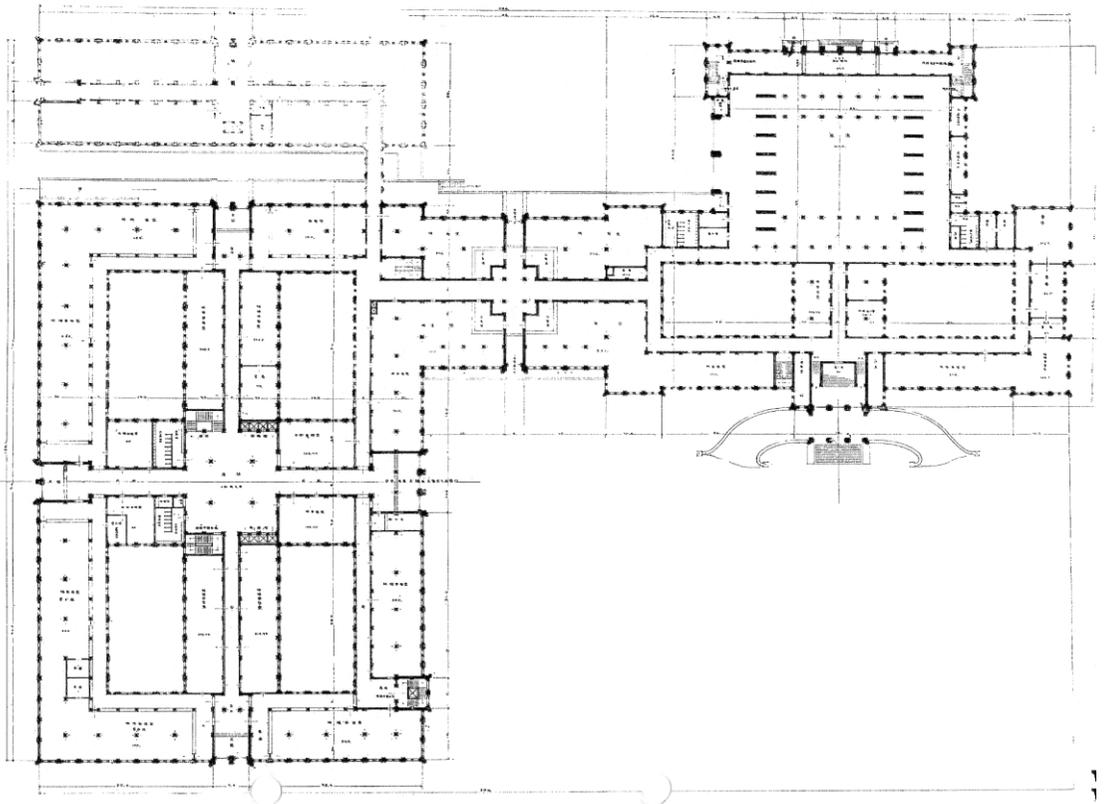


図 123 同 1 階平面図

二、来るべき時代を表す立体垂直線の建築。¹⁶⁶

本コンペは、それまでの設計競技において度々みられたような募集要項中での略平面図（参考平面）の提示がなく、平面そのものから応募者の創意に任せられていた。吉川は、その解答として、まず議会棟と事務棟を分離することを基本方針として出発している。

ここで興味深いのは事務棟で、「田」の字型の平面をとり、中央をエレベーターホールとして動線を集中させている¹⁶⁷。

全体についてみると、各棟の平面はシンメトリーにまとめながら、高塔を中心からずらして付すことで、その単調さを破っている。垂直線を強調した外観と相まって、非常に動的な印象を与える。（口絵3）

これは、それまで吉川が設計した公共施設は厳密な左右対称形をとるものが多い¹⁶⁸ことから考えると特異であり、新しい構成を試みたものであったと思われる。

本コンペは最終的に実施されなかったものの、1等賞金が1万円（2等7000円）という大規模なコンペであり、新聞記事で度々取り上げられるなど注目度も高かったようである（例えば、同年に募集された静岡県庁の賞金は1等でも4000円であった¹⁶⁹）。吉川は本コンペの賞金で、鶴見に自邸を建設している（第1章第2節）。

¹⁶⁶ 「東京市庁舎建築設計競技入選図設計説明書」同書 pp.13-14

¹⁶⁷ 「田」の字型平面の採用と、中心部への動線の集中は、日本近代における庁舎建築の発展史の中で特異な事例のように思われるが、筆者の力量不足につき検討は能わなかった。

¹⁶⁸ 例えば国際連盟会館競技案、震災記念建造物競技案など

¹⁶⁹ 「懸賞募集」『建築雑誌』48(587)、1934年8月、広告頁

第11節：吉川清作自邸（第1期～第3期）およびアトリエ—1935-1965年頃

吉川清作が横浜市鶴見区に移り住んだのは1934年12月のことである¹⁷⁰。その後、吉川は戦後まで終生鶴見に住んでいた。

自邸はその間に3回建てられた。いずれも吉川自身が設計したものである。それぞれ第1期～第3期として区別する。

第1項：吉川清作自邸（第1期、下の家）—1934年

吉川が鶴見に建築した最初の自邸は、朝日住宅のような純モダニズム風の白い箱であった。これは朝日新聞上で紹介された¹⁷¹ほか、『住宅』1935年4月号に写真が掲載されており、その全容を知ることができる。

まず平面をみると、広い居間を中心として、北に台所および風呂・トイレが、東側1階に子供室、2階に夫婦寝室が設けられている。居間は吹き抜けとなっており、南側に大きなガラス面が設けられている。台所と食堂の間の食器棚は両面から使えるようになっている（これは朝日住宅でもみられたものである）。総じて平面は、朝日住宅4号型よりも整理されており、「居間中心型」をさらに発展純化させたものといえるだろう。

しかし、吉川がこの住宅において集中的に取り組んだのは「デザインのプランではなく、コストのプラン」¹⁷²であった。吉川は、それまでの住宅が座式と立式（和式と洋式）の二重生活に苦しみながら、それを乗り越えられなかった理由は、「その清算の最も合理的『点』が発見され得なかつた事にある」と考えた。すなわち「実際畳の上の起居に慣れた大人や老人に立式（椅子式）の住宅を興へても住居に堪えられないのだ、それと反対に若い人々はその住宅を欲して居るのだが、それを作る金を持たぬという悲劇の中にある」¹⁷³。

そこで吉川は、座式と立式の対立を調停する「点」を求めるのではなく、まだ柔軟な思考を持つ若者が購入できる安価な合理的住居を作ることにより、これを乗り越えようとした。それが「結婚住宅」という取り組みである。

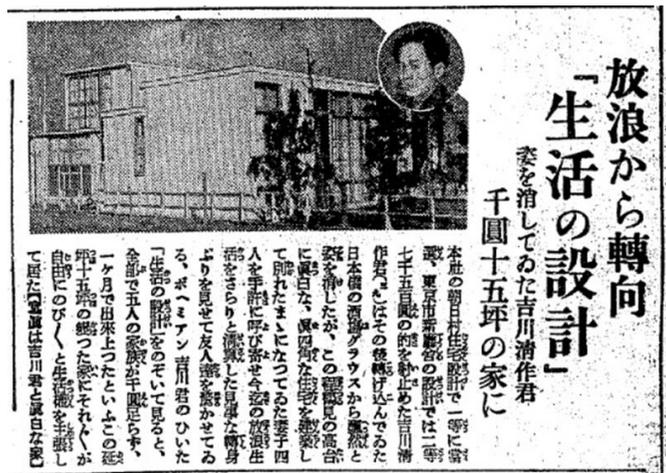


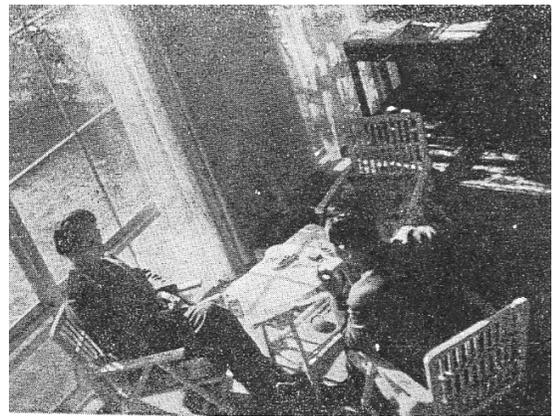
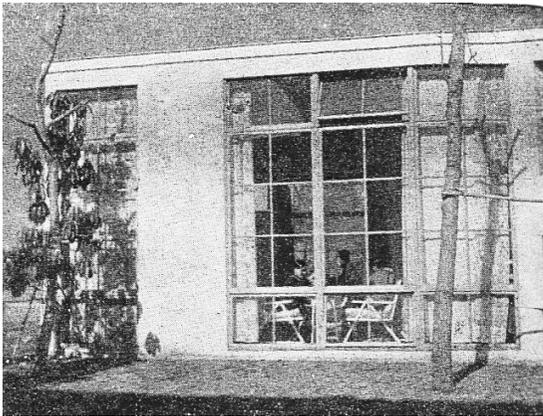
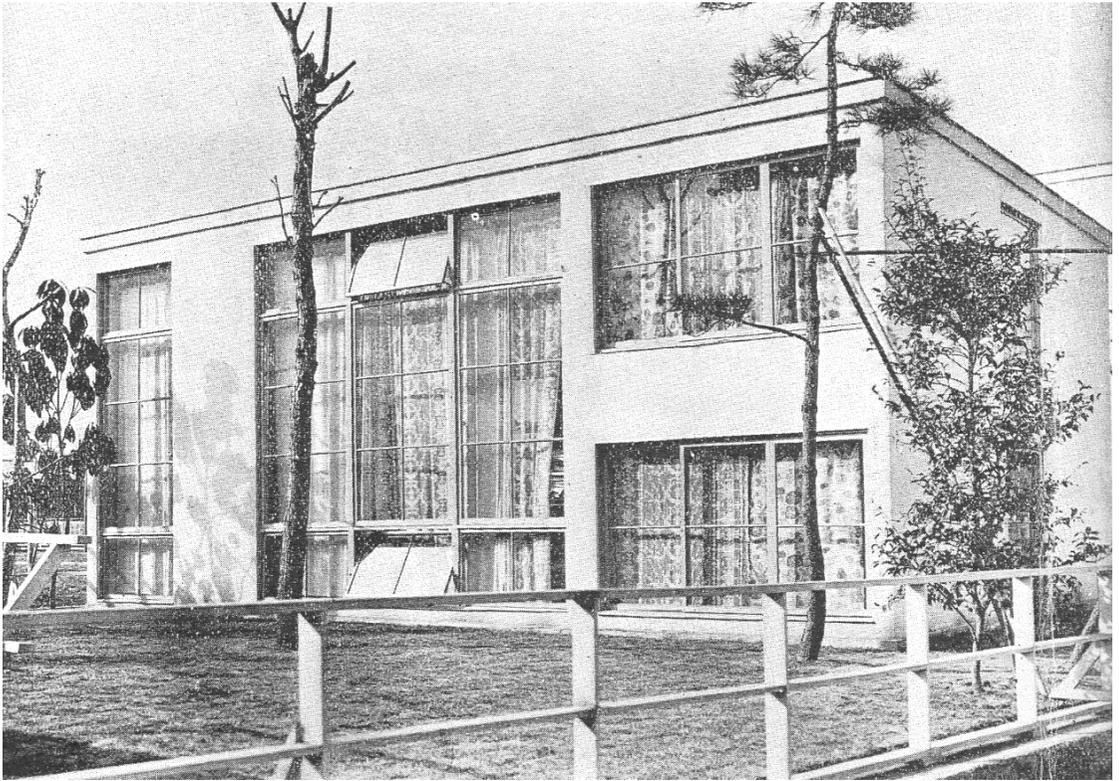
図124 朝日新聞記事「放浪から轉向『生活の設計』 姿を消してゐた吉川清作君、千圓十五坪の家に」（1934年12月19日）

¹⁷⁰ 第1章第2節参照

¹⁷¹ 「本社の朝日村住宅設計で一等に当選、東京市新庁舎の設計では二等七千五百円の的を射止めた吉川清作君（三九）はその後転げ込んでいた日本橋の酒場グラスから飄然と姿を消したが、この程鶴見の高台に真白な、真四角な住宅を建築して別れたまゝになっていた妻子四人を手許に呼び寄せ今迄の放浪生活をさらりと清算した見事な転身ぶりを見せて友人達を驚かせている、ボヘミアン吉川君のひいた『生活の設計』をのぞいて見ると、全部で五人の家族が千円足らず、坪十五坪の変った家にそれぞれが自由にのびのびと生活圏を主張して居た」（「放浪から轉向、『生活の設計』、姿を消してゐた吉川清作君、千圓十五坪の家に」朝日新聞（東京）1934年12月19日（朝刊）13頁）

¹⁷² 本橋 2008:42

¹⁷³ 吉川清作「結婚住宅の提唱」『住宅』20(222)、1935年4月号、p.269



吉川清作自邸（第1期）

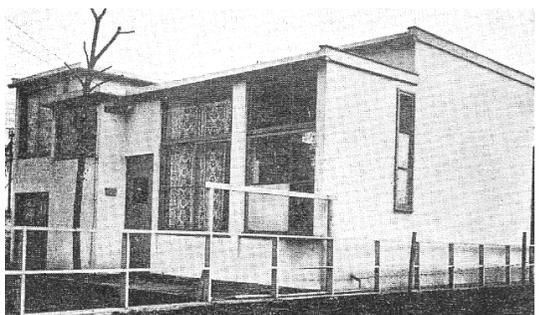
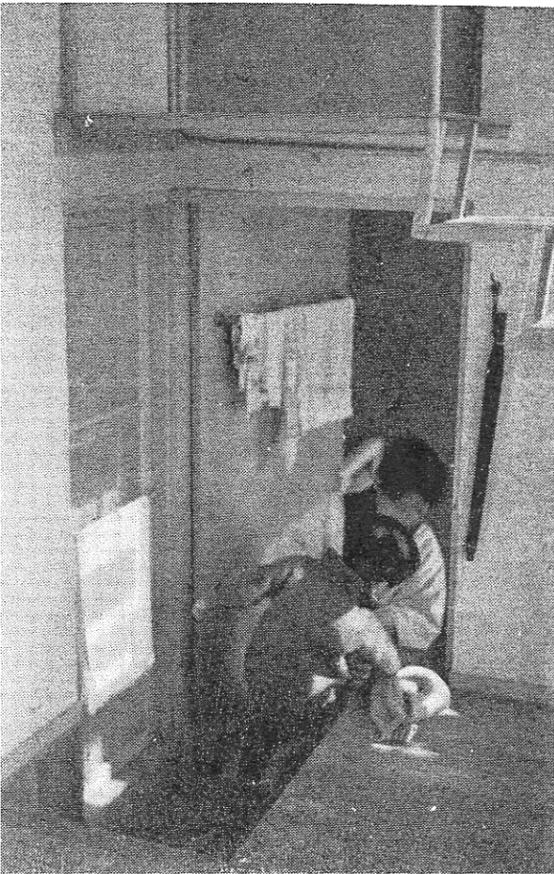
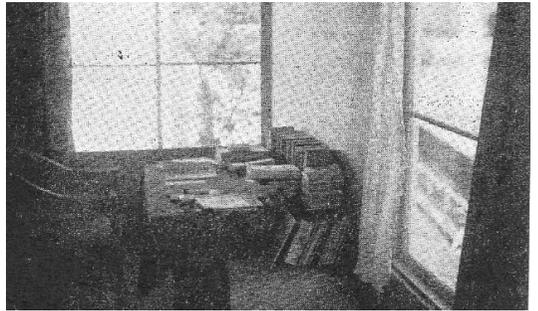
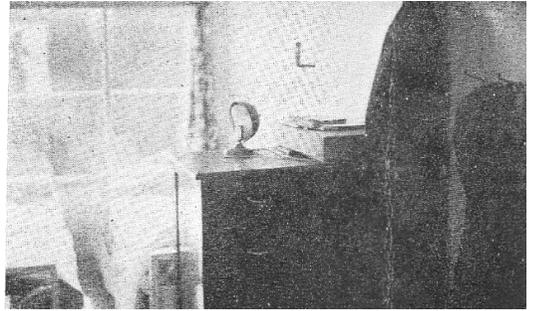
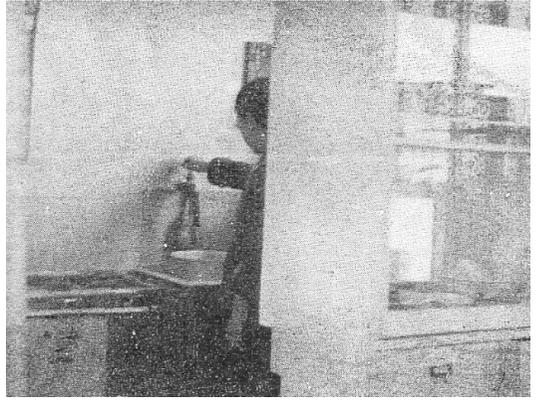
設計：吉川清作

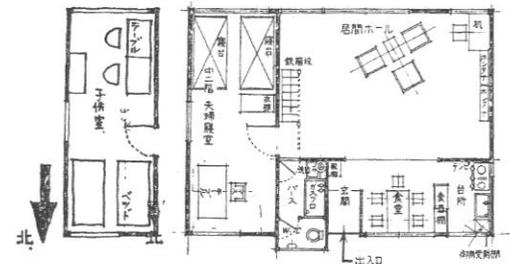
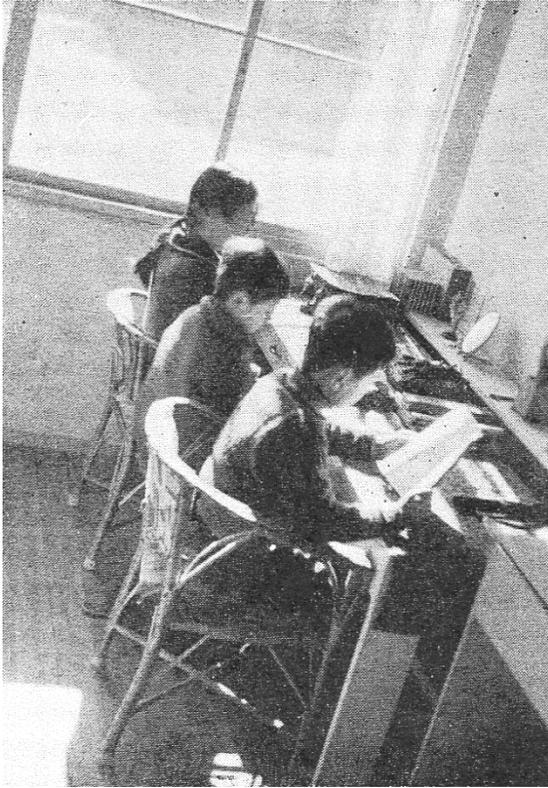
施工：不詳

竣工：1934（昭和9）年

図 125-128 吉川清作自邸（第1期）内外観（左下は吉川清作と楠美代夫人）

次頁：図 129-135 同（右中下は長男の晴夫さんと次男の康夫さん）





平面図(二百分の一)(夫婦寝室は中2階にあり、子供室はその下にある)
建坪 .12.5坪

「今は恰度結婚季節の半で、各デパートメントストアには五百圓や壹千圓の新婚調度品や、式服が私共の眼をそとつてゐる。その飾られたる調度品が如何に現代の文化に不適當なもので、百年一日の如く畳の上の置物であり、その高價な式服がタツター一日の使用物である。

結婚生活の幸福は、只一日の結婚式にあるのではなくて、結婚生活の日々の生活そのものにあることは言ふまでもあるまい。そこでその結婚費用、つまり式費、式服、披露費、新婚調度費等に消費する、その金で結婚住宅を作る。」¹⁷⁴

図 136 同 子供室内観 / 図 137 (右上) 平面図

第 1 期自邸は、そのような住宅のモデルとして建設された。建設費は外構まで含めて 1000 円以内で、これは東京市庁舎設計競技の賞金 7500 円のうちから支出された¹⁷⁵。

この住宅は、第 2 期自邸に吉川らが移り住んだ以降もしばらく残っており、画家 (氏名不詳) に貸し出されていた。その後、第 3 期自邸が建設された頃に売却された¹⁷⁶。

第 2 項：吉川清作自邸 (第 2 期、初代上の家) 一戦中～1950 年頃

詳しい時期は不明だが、吉川は戦中～1950 年頃のどこかの時点で、鶴見の高台に敷地を得て移り住んだ。その時に建設されたとみられるのが、第 2 期自邸である。その姿は明らかではないが、吉川清子さんのお話によれば、第 1 期自邸と同じような白いモダニズム風の住宅であったという。

第 3 項：吉川清作自邸 (第 3 期、2 代上の家) ー1965 年頃

第 3 期自邸は、1965 年頃に建築された。敷地は第 2 期自邸の隣である。鉄筋コンクリート造の 3 階建てで、4 本の太い柱により床スラブを支え、外壁はコンクリートブロックによるカーテンウォールとなっていた。傾斜のある敷地に建っており、1 階は半地下となっていた。2 階 3 階にはベランダが回り、1 周できるようになっていた (ただし後年に増築したため回れなくなった)。

¹⁷⁴ 吉川 1935:269

¹⁷⁵ 「建築家・吉川清作氏の住宅」(前掲)

¹⁷⁶ 吉川清子さんへのインタビューによる

内部は段差が一切なく、玄関を開けるとドアもなく、そのまま室がシームレスにつながっていた。各階は完全に独立しており、1階は下の道から、2階は庭から、3階へは外部階段でアクセスした。外部階段には手すり子がなく、昇降の際にはヒヤヒヤしたという（後年フェンスが取り付けられた）。2階と3階には御影石を積み、板を渡した高さ80cmほどの飾り棚があり、吉川はそれが自慢であった。晩年の吉川は主に1階に籠り、食事の時だけ上がってくるような様子であったという。この建物は2012年頃に取り壊され現存しない¹⁷⁷。



図 138 吉川清作自邸（第3期）

第4項：吉川清作アトリエ（小屋）一不詳

吉川は鶴見駅近くに仕事場を持っていた。渡邊朱美さんのお話によると、木造2階建てで、場所は現在の神奈川県横浜市鶴見区豊岡町24付近であった。東京へ向かう京浜東北線の車内からその姿がよく見えたという。所員の姿を見かけることもあったといい、設計の仕事をここでしていたらしい。ただ、吉川の手によって設計されたものかどうかは不詳である。また、戦前戦後にかけてのかなり長い間現存していたというが、詳しい時期は明らかでない。

¹⁷⁷ 同前

第12節：渡邊隆邸（高木東六邸）—1935年

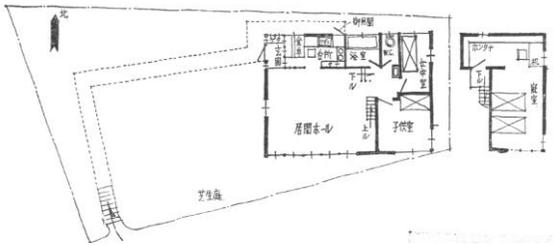


図 139 (上) 渡邊隆と西竹一 (左)

図 140 (中) 高木東六と母かつ (昭和 30 年代後半、
吉川設計の旧渡邊邸にて)

図 141 (下) 渡邊邸 平面図

サイセリアのオーナーであった渡邊隆と吉川は、戦中から戦後に至るまで非常に懇意にしていた。渡邊はもともと銀座に住んでいたが、新婚を機に吉川に住宅を依頼し、鶴見に移り住んだものらしい。渡邊邸は雑誌に発表されており、その全容を知ることが出来る。当時の記事には、次のように解説されている。

「銀座サイセリアの主人 渡邊隆氏夫妻の新婚の住宅である。作者は新婚住宅の提案者吉川清作氏 場所は鶴見の高台にある段状の住宅地である。即ち北から南に向つて段状に下つてくる坂に建てられたものである。各戸は完全な採光と日照に恵まれてゐることは云ふまでもない。」¹⁷⁸

平面は基本的に吉川清作自邸（第1期）と同じであるが、子供室を小さくし女中室を取っている点、アプローチの方向および食堂の有無など、細部が少し異なっている。

渡邊朱美さんは幼少の一時期をこの住宅で過ごしており、当時のことをよく覚えておられる。聞き取りによると、施工したのは青木工務店で、2階へ上がる階段は雑誌で紹介された際の写真では手すりがついているが、もともとはついていなかった。南面のガラスサッシは、台風の際などには大きく弓なりにたわみ、非常に怖かったという。朱美さんは父に言われて内側から必死で押した。雨仕舞も良くなく苦勞は絶えなかったらしい。吉川自邸とも距離的に近く、吉川が訪ねてくることもしばしばあり、よく渡邊隆氏と夜明けまで語り合っていた。渡邊家は野球選手

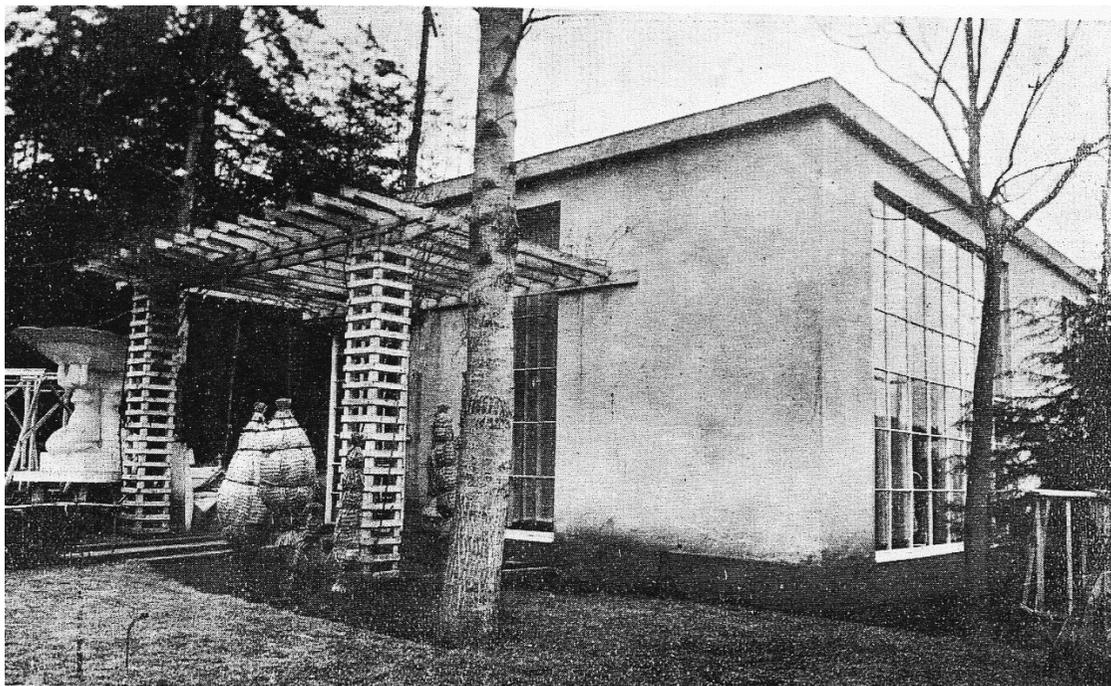
のヴィクトル・スタルヒンの母（エレキドル）とも懇意であり、よく洋服を縫ってもらっていたという¹⁷⁹。

渡邊邸は、1952（昭和27）年頃に作曲家の高木東六¹⁸⁰が買い受け、高木邸としてしばらく使用されていたが、今は取り壊され現存しない。

¹⁷⁸ 「渡邊氏邸」『住宅』20(222)、1935年4月、p.234

¹⁷⁹ 渡邊朱美さんへのインタビューによる

¹⁸⁰ 高木東六は、若い頃にサイセリアに行ったことがあり、その思い出を語っている（第7節第2項参照）。鶴見に移住したのは同地に住んでいた佐藤美子（ソプラノ歌手）の紹介によるもので、昭和27年のことであった（高木東六『愛の夜想曲』講談社、1985年、p.231）



渡邊隆邸（高木東六邸）

設計：吉川清作

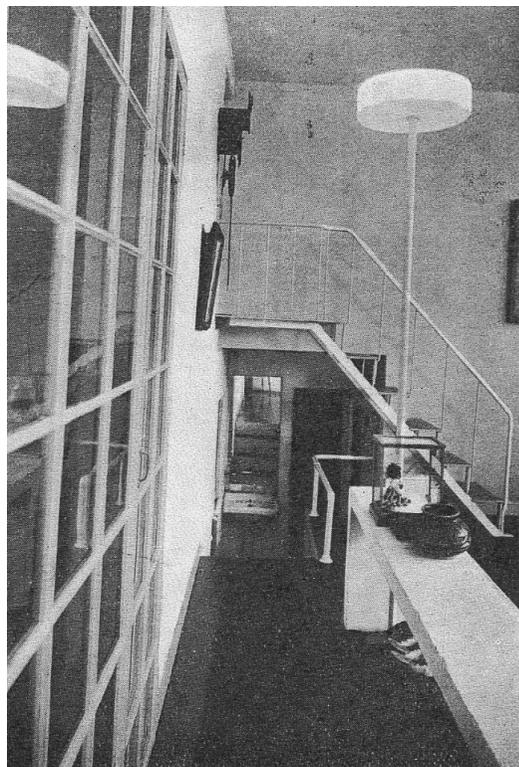
施工：青木工務店

竣工：1935（昭和10）年頃

図 142（上） アプローチ外観

図 143（下左） 玄関室

図 144（下右） 居間階段



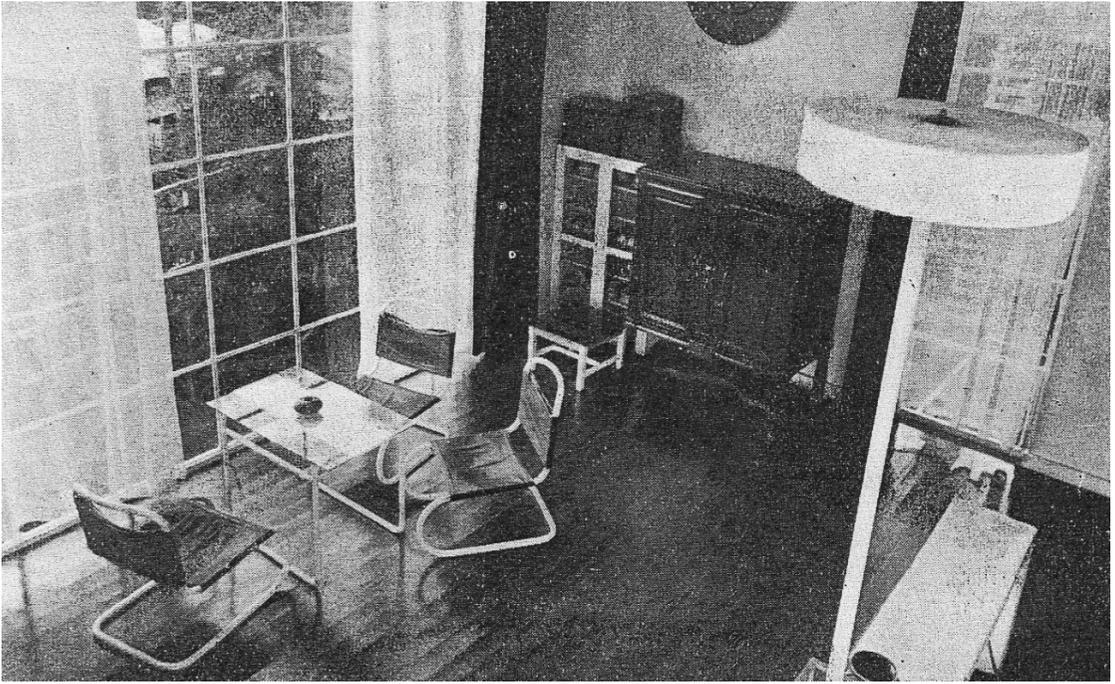


図 145 居間を見下ろす



図 146 庭から見る



図 147 アプローチ（西側）からみる



図 148 台所 / 図 149 居間内観（階段に手すりがついておらず、竣工後間もない写真らしい）



図 150 (上) 寝室 (写真の女性は渡邊隆氏夫人の良久さん)

図 151 (左) 居間にて (良久さんと朱美さん)

第13節：住宅—1935年頃



図152 住宅（吉川的设计になるか）

吉川は1935年頃には、先の自邸・渡邊隆邸を含め、鶴見駅近辺にモダニズム風の住宅を相当数建てており、付近は一種の吉川村の様相を呈していた¹⁸¹。吉川清子さんの手元に、その一部と思われる写真が残されている（図157）。撮影地は自邸（第2-3期）の近くであり、これも吉川作品であるという。平滑な壁面、大きなガラス窓などの意匠は渡邊邸・第1期吉川自邸と共通しているが、立面構成はやや複雑になるほか、デザインの洗練されている様子がうかがえる。時代的には多少下るか。現存しない。

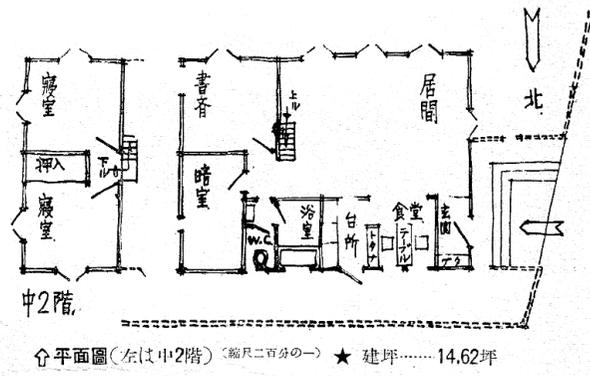


図154（左） フォトタイムス藝術賞牌

図155（上） 勝田康雄邸 平面図

¹⁸¹ 「建築家・吉川清作氏の住宅」（前掲）

第14節：勝田康雄邸—1935年

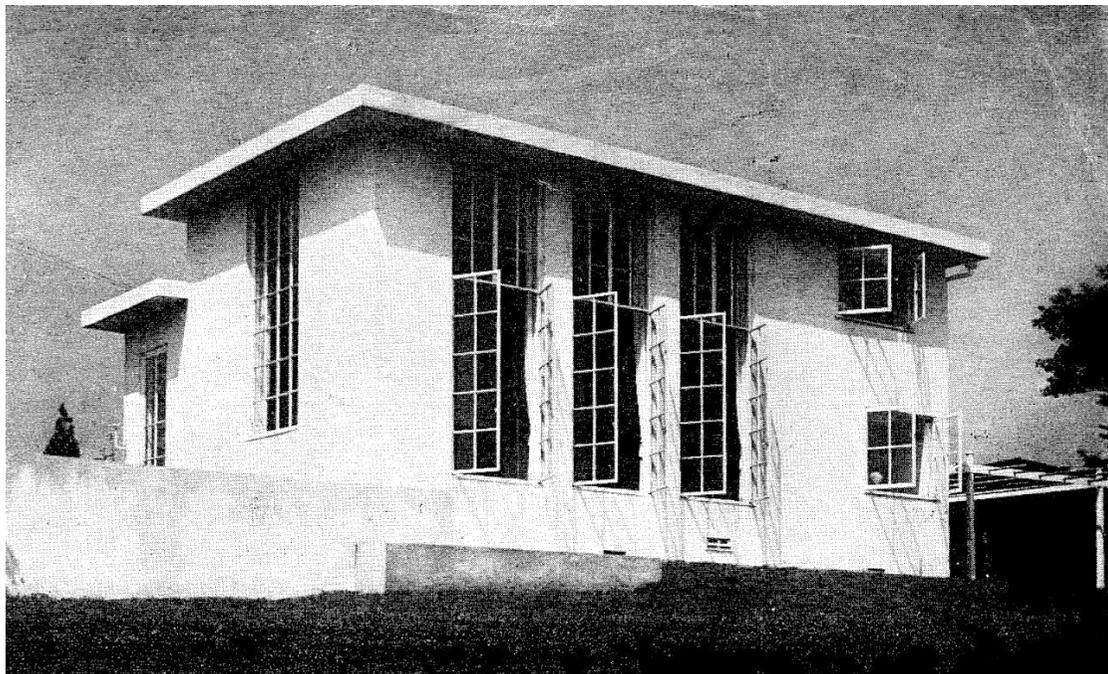


図 153 勝田康雄邸

勝田康雄（1903-?）は、広島県呉市出身で、東京写真専門学校を卒業した写真家である。オリエンタル写真興業、アルスなどで写真雑誌の編集にも従事していた¹⁸²。吉川が、勝田康雄邸を手掛けたのは、自邸（第1期）、渡邊隆邸などと同時期である。勝田邸はその外観写真と平面図が『住宅』1935年10月号に紹介されており、その概要を知ることが出来る。付されている説明は次の通り。

「勝田氏邸 東京府砧村／設計 吉川清作 / 寫眞家勝田康雄氏の住宅である。その構成は本誌4月号掲載の吉川邸及び渡邊邸と同様である。只割合にガラスの壁の部分が少ない事と、寫眞家としての必要から、暗室を巧みに子供室の部分にとつてある事が變つてゐる。」¹⁸³

吉川と勝田の関係は定かではない。しかし、村山知義と勝田康雄はともに1929年結成の「国際光画協会」のメンバーであり、独逸国際移動写真展の招来のため協働した¹⁸⁴ほか、勝田が編集を担っていた雑誌『フォトタイムス』では、村山知義の舞台装置についての記事¹⁸⁵を掲載していた。また、同誌では優秀者に贈るメダルのデザインを荻島安二に依頼している（図159）¹⁸⁶。さらに、『住宅』に掲載されたものと同一の勝田邸の外観写真が渡邊朱美さんの手元に残されており、渡邊隆氏との関係があったことも推察される。

所在地である「東京府砧村」は先の朝日住宅展覧会の開催地でもある。筆者はその会場近辺が敷地ではないか考えて調査したが探し当てることは能わなかった。現存の有無を含めて不詳である。

¹⁸² 東京都写真美術館監修『日本の写真家』日外アソシエーツ、2005年、p.121

¹⁸³ 「勝田氏邸」『住宅』20(233)、1935年10月号、p.329

¹⁸⁴ 国際光画協会は1929年結成。金子隆一「新興写真研究会についての試論」『東京都写真美術館紀要』(3)、2002年、p.14

¹⁸⁵ 堀野正雄「仕事(1)」『フォトタイムス』7(1)、1930年1月号、pp.116-118

¹⁸⁶ 「フォトタイムス芸術賞牌 荻島安二作」『フォトタイムス』8(4)、1931年4月号、広告。荻島安二の知り合いには写真家の木村伊兵衛もいた（深水正策「荻島安二の輪郭」『みづゑ』(412)、1939年5月号、p.531）。

第15節：軽鋼コンクリート造住宅（渡邊朱美邸）と『コンクリート住宅図集』—1950年

終戦後、吉川清作は都市建築研究所という設計事務所を立ち上げた（第1章第3節参照）。最初に発表された作品は1950年の「軽鋼コンクリート造住宅」という薄肉の壁式コンクリート造住宅であった。この発表の直後に、吉川は第二の作品集となる『コンクリート住宅図集』を彰国社より刊行している¹⁸⁷。

第1項：軽鋼コンクリート造住宅（渡邊朱美邸）—1950年

この「軽鋼コンクリート造住宅」は、寝室と台所兼居間から成るシンプルな建物であり、敷地は神奈川県横浜市鶴見区東寺尾町である。先の渡邊隆邸の増築として設計された¹⁸⁸。

渡邊朱美邸は竣工後70年近く経つが、いまだに現存している数少ない吉川作品の一つである。南側に小部屋が増築され、一部開口部も改修されていたものの、西面の掃出窓および東の小窓はオリジナルらしいスチールサッシのままであった。前面の池および橋も保存されている。

本住宅が建築されるに至った経緯は、雑誌記事のなかで吉川が対談風に記している。

A…『吉川君！ 坪三萬圓でコンクリートの7坪位の住宅を建ててくれ』

B…『^{ママ}眺美さんの家か？ 家具や装飾は別だらうな？』

A…『椅子テーブルだの敷物だの窓カーテンなどのものがあるから』

B…『防火的なら窓・出入口もスチールサッシュでなくては意味がないから、小さな建物でも現在坪三萬圓では一寸無理だが、設計家として一つの実験をする意味で、貴重な機会を生かして見よう』

A…『坪當り三萬圓七坪の小住宅といふ以外は、間取り、室の形、窓の大きさ、出入口の位置や仕上まで一切君にまかせる。これが条件だ』

このような談合の上で出来上つたものが、圖及び寫眞に表はれた建物である。尤も、これはA、Bに更に施工者の着實であり、良心的な援助が加はつた實驗的努力のたまものであつた。¹⁸⁹

同文中で、吉川はこの住宅が「試作的建築」で「實驗的住宅」であると特徴をたびたび強調している。その目標は安価な不燃住宅を提供するという点にあった。この住宅の主眼がコスト面にあったことは、都市建築研究所の作品集『コンクリート住宅図集』におけるこの住宅の題が「テスト住宅その2…経済的に…」とされていることから明らかであろう。

都市建築研究所員である吉島保も、この住宅において試みられた構造上の工夫に加え、マスプロダクションや組合方式を導入すれば通常よりも安く不燃の鉄筋コンクリート造住宅が手に入れられるようになると述べている¹⁹⁰。

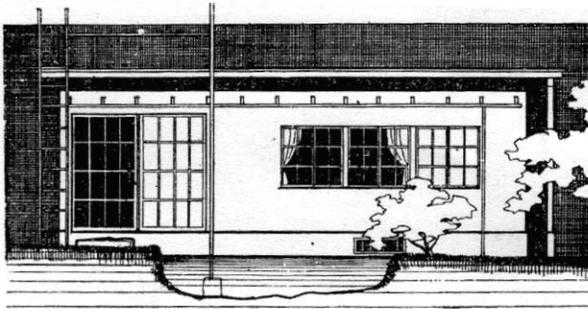
このようなローコストへの意識は、組合方式による住宅供給を提案した戦前の朝日住宅(1929)や、「結婚住宅」の提案(1935)を彷彿とさせ、それが吉川清作の主要な方法であることを感じさせる。それは、村山知義も少なからず持っていた共通の志向だったようである（本橋 2008:43）。しかし、吉川の場合におけるローコストは、必ずしも最終的な目的ではなく、あくまでそれぞれの時代における問題を解決するための手段であった。すなわち、朝日住宅は、スプロール化を続ける東京において健康的な住宅地を形成

¹⁸⁷ 都市建築研究所『コンクリート住宅図集』彰国社、1950年

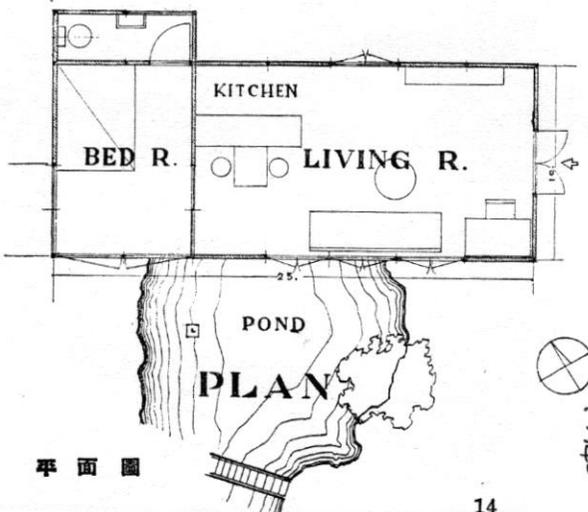
¹⁸⁸ 「軽鋼コンクリート造住宅」（前掲）

¹⁸⁹ 「軽鋼コンクリート造住宅」（前掲）、pp.14-15

¹⁹⁰ 「軽鋼コンクリート造住宅」（前掲）、p.16



立面圖



平面圖

軽鋼コンクリート造住宅

(渡邊朱美邸)

設計：吉川清作・吉島保

施工：青木工務店

竣工：1950（昭和25）年

図156（上）竣工時外観

図157（左中）立面図

図158（左下）平面図

図159（右中）現況外観（2014年）

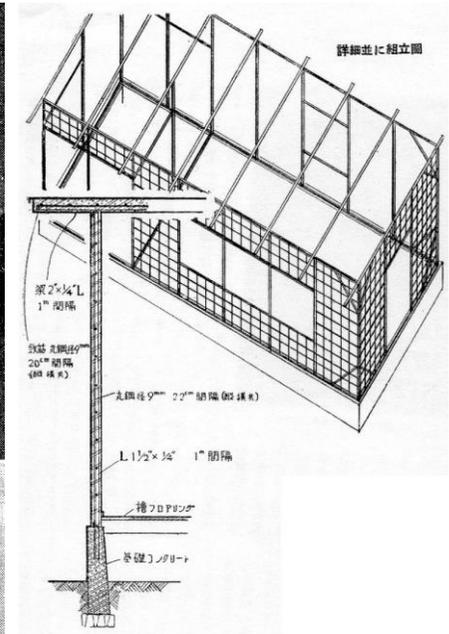
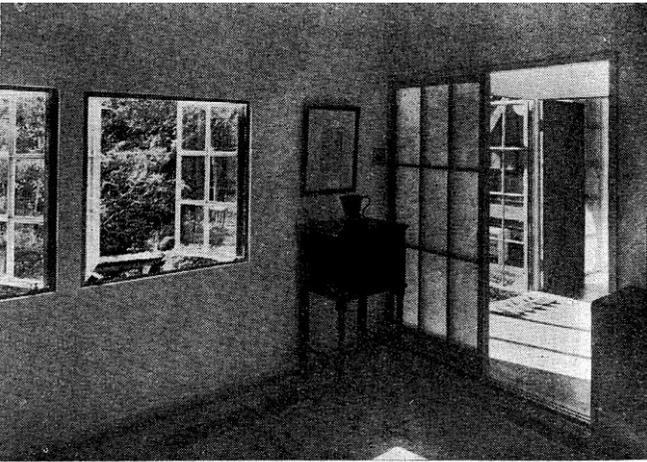


図 160 (上) 居間内観

図 161 (左中) 同

図 162 (左下) 同 (台所があるはずの場所だが、見当たらない)

図 163 (右中) 詳細図並に組立図

するための提案であり、結婚住宅は「家族本位よりも夫婦本位」¹⁹¹を目指し旧弊を断つことを狙ったものであった(第9節第1項)。一方で、コンクリート造住宅の提唱は、住宅の不燃化の必要性を戦中に痛感したことと、戦後の木材資源の枯渇に対応することが主眼であった¹⁹²。

吉川は時代に応じたそれぞれの問題に対して現実性のある解決を与える手段として、ローコスト化に取り組んだのである。

第2項：『コンクリート住宅図集』—1950年

『コンクリート住宅図集』は1950年に彰国社より出版された図面集で26の住宅の平面・透視図などが収録されている。出版の経緯について、吉川はあとがきで「彰国社からコンクリート造の個々の住宅図集を吾々の研究所で、まとめてくれと頼まれたので、若い研究所員の最も時宜にかなった良いテーマだと思つたので快諾した〔中略〕外国の雑誌や新刊書から引き出しても、わが国の住宅の参考にするにはあまりピントが合はないし、良心的に気持ちの上でも、許されないので、全部新しい設計図を作ることにした」と述べていることから、収録作品は基本的に本書のために書き下ろされたものと思われる。ただし、そのうち1つは先の「軽鋼コンクリート造住宅(渡邊朱美邸)」として実現したもので、写真も併せて掲載されている。

個々の案の設計者名は明記されていないが、1950年4月にはこのうちの2案が個人名で雑誌に発表されている¹⁹³ほか、いくつかの図面には「M.EN(遠藤正巳であろう)」「Hy(吉川晴夫であろう)」などのイニシャルがみえる¹⁹⁴。イニシャルや雑誌掲載記事などから推測できる範囲では、吉川清作と吉島保の名前で雑誌に発表されている2の渡邊朱美邸を除いて、一つの作品の中について複数人が関与したと思われるものはない。数としては、遠藤正巳のサインを持つものが目立つ。遠藤はその後も、個人名で複数の作品を発表するなど、活発に設計活動をしていたようである(第4章第1節を参照)。

デザインについてみると、かなり多様であるが、海外作家の影響が多くみられる。例えば「8連続するメートル」は、有名なヴァイセンホーフジードルングのJ.J.P. Oudによる連続住居(1927)やウィーン派のH.A.フェーテルの作品¹⁹⁵によく似ており、あるいは「20空中住宅」の十字柱はミースのチューゲンハット邸に、骨のような柱はコルビュジェのスイス学生会館を想起させる。

その他にも、室内にアールト風の寝椅子が置かれている(「11五つの寝室をもつ MODERNE HOUSE」)など、類例には事欠かないが、これらは「あとがき」の中で触れられていたように、海外のコンクリート造住宅の実例を参照し、それを日本向けに(つまり小規模な住宅作品として)翻案紹介することに主眼をおいていたためであろう。

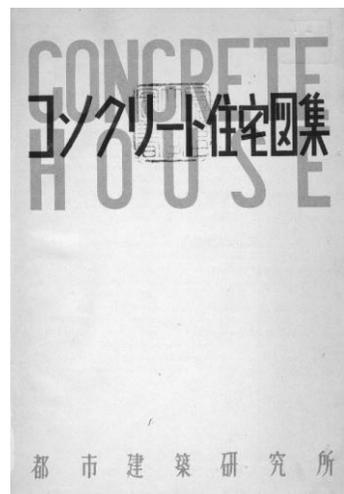


図164 『コンクリート住宅図集』

¹⁹¹ 吉川清作「コンクリート住宅について」『コンクリート住宅図集』彰国社、1950年、p.61

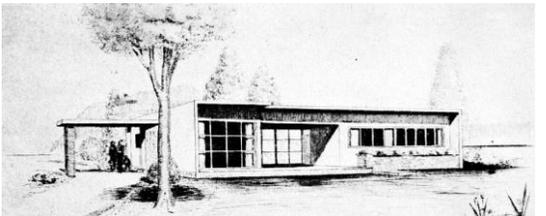
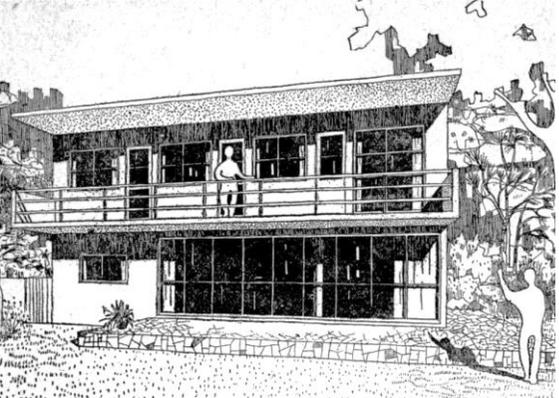
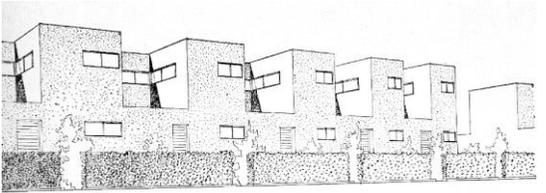
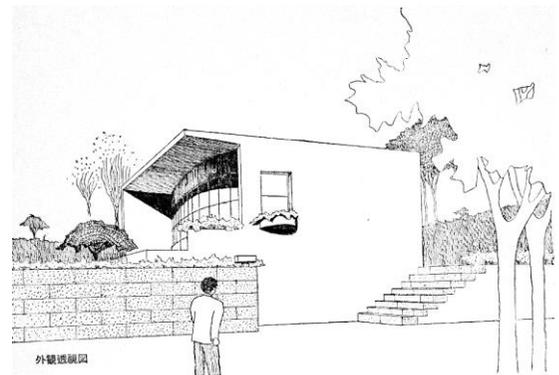
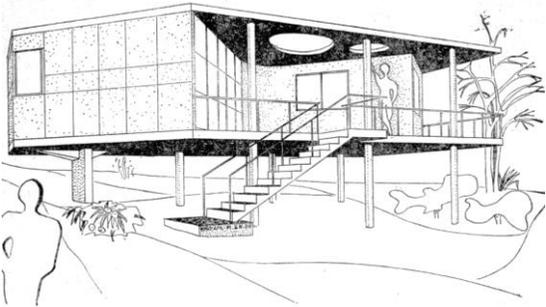
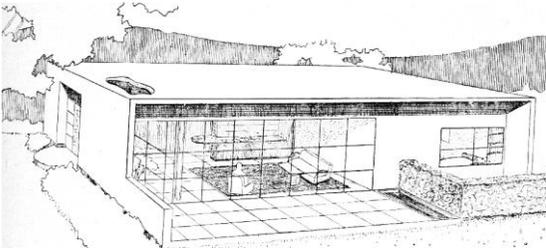
¹⁹² 同前 p.60

¹⁹³ 片岡靖忠「アウトドアリビングを持つ住宅」、吉川清作「新コンクリート住宅」『建築文化』1950年4月、pp.32-33

¹⁹⁴ これらから、個々の所員が関与していたと認められる作品を整理すると、次のようになる(番号は原書中の作品番号、括弧内はイニシャル)。

吉川清作(SY)：1、2/ 吉川晴夫(Hy)：17、24/ 遠藤正巳(M.En、M.EもしくはE)：4、5、6、7、13、18、19、20、21、23、25/ 片岡靖忠：22/ 吉島保：2/ 不詳：3、8、9、10、11、12、15、16、17、26

¹⁹⁵ 『住宅』1935年1月号、p.62



『コンクリート住宅図集』
(彰国社、1950年)

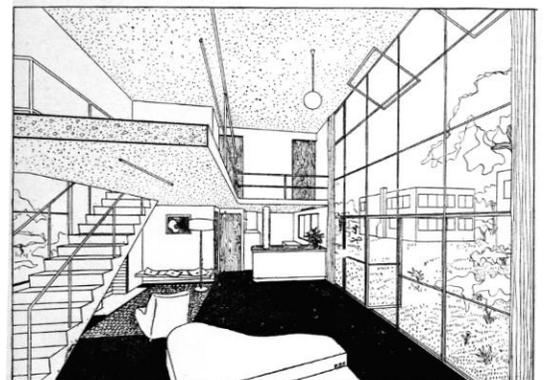


図 165-173 (左上から下へ) 「5 プランタムのある住宅」「19 空中住宅その1」「8 連続するメートル」「11 5つの寝室をもつ MODERNE HOUSE」「22 アウトドアリビングを持つ住宅」「21 ギャラリーとテラス」
図 176-178 (右上から下へ) 「1 テスト住宅その1(新コンクリート住宅)」「4 道より高い土地にある住宅」「13 四つの寝室をもつ住宅」

第16節：ルーフガーデンを持つF氏邸（藤川—秋邸）および一虎園—1952年

第1項：ルーフガーデンを持つF氏邸—1952年

ルーフガーデンを持つF氏邸（藤川—秋邸）は、戦前戦後を通じて、吉川が手掛けた住宅として詳細が判明しているもののうち、最も大規模なものである¹⁹⁶。施主の藤川—秋については第3項で触れることとして、まずは建物について検討する。

藤川邸は、モダニズムを基調とした瀟洒な鉄筋コンクリート造3階建（+屋上階）の住宅である。敷地は大きな高低差があり、1階部分は半地下となっていた（これは、後の吉川自邸（第3期）につながるものとして注目される）。1階は来客用のサロン、2階にリビング・食堂が、3階に寝室が、屋上階は書斎および屋上庭園となっている。

この住宅については、吉川清作による詳細な説明が残されているので、それを引こう。

設計者のことば

この住宅は敷地がAとBの二つの土地で、その二つの土地は高低27尺も差違のある土地であつた。この甚しい高低のある二つの土地に、一つの住宅を構想する事が、設計の第一の条件であつた。27尺の低い土地の方に門となる要素があり、高い土地に通用口となる要素があつた。設計の第一条件が、既に立體的である上、更にその住宅に居住する30歳台の若き會社重役という、社交性と職務、及び居住者の構想等を、設計者は感知し、思い切り良く立體的な住宅の設計を進めた。

〔中略〕

一個の住宅としてこの様に立體的にする事は、老人や病弱の子供のある家族の場合は、不向きであるが、普通の場合この立體住宅は必然的に活動的で、又必然的に衛生的住宅となる。これは又コンクリート住宅の特徴でもある。これは新しき時代を代表する住宅の一つである。¹⁹⁷

ここから、吉川が、高低差のある敷地条件に対して、鉄筋コンクリート造の特徴を生かした立体的な構成によって解決する点に、特に注力していたことが知られる。

残された写真を見ると、室内は比較的シンプルにまとめられているものの、クルミ板張りの壁面、天井の間接照明（いずれも居間）、造り付けの飾り棚（客室）などを要所に設けるなど、親しみが持てる空間づくりへの工夫がみられる。

また、外観デザインは、白い壁面にベランダを設けクrimp網の手すりを付けるなど、モダニズム住宅の常套的なデザインを踏襲しているが、内玄関のある東側の腰は石張りとして、やや和風な面持ちを見せている。これは雨はねなどの実用面を考慮した結果でもあろうが、『現代の住宅』（第2節）においてみた様式混交への意識が垣間見られるようで興味深い¹⁹⁸。また、円弧を描いた伸びやかなアプローチや、木を囲むように設けられたベンチなど、外構計画においても配慮が行き届いており、敷地と一体となった建築設計が実現していることがわかる。

藤川邸は、以前の吉川自邸・渡邊邸・勝田邸や『コンクリート住宅図集』にみられる住宅から比べると、壁・柱への石の使用など、表現の純粋性という観点からはやや後退している。しかしながら、これら

¹⁹⁶ ただし、第23節で触れる藤山愛一郎邸も、実業家の邸宅として相応の規模があつたものと考えられるが、その詳細は明らかでない。

¹⁹⁷ 「ルーフガーデンを持つF氏邸」『建築文化』1952年7月号、p.15

¹⁹⁸ 吉川は『現代の住宅』の中で、和洋を面によって使い分ける試みをしていた（第2節）。



ルーフガーデンを持つ F 氏邸（藤川一秋邸）

設計：都市建築研究所

（吉川晴夫・窪田保彦・岩本篤・田中温子）

施工：岩本建設株式会社

家具：大林工業株式会社

竣工：1952（昭和 27）年

図 174（上） 外観

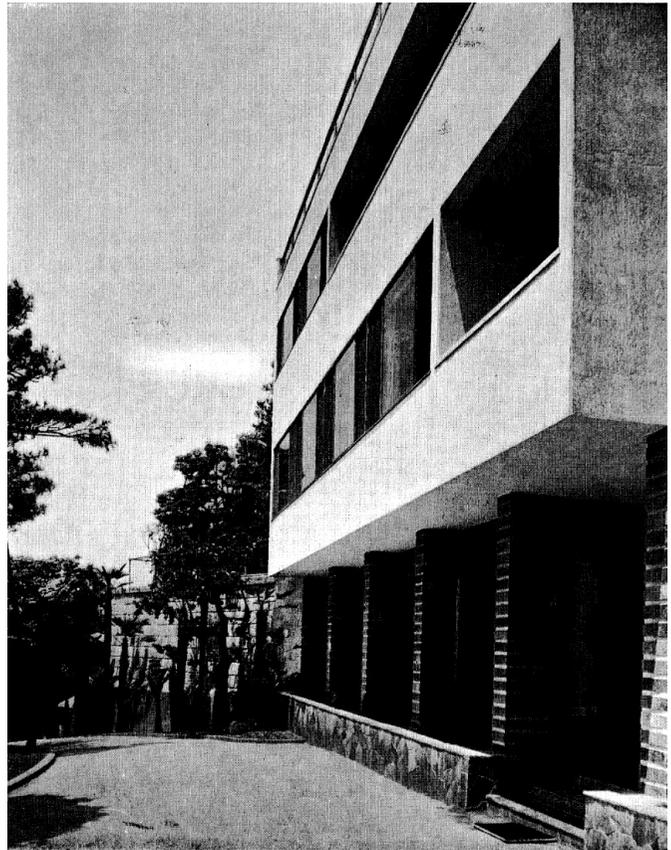
図 175（右） 入口付近外観

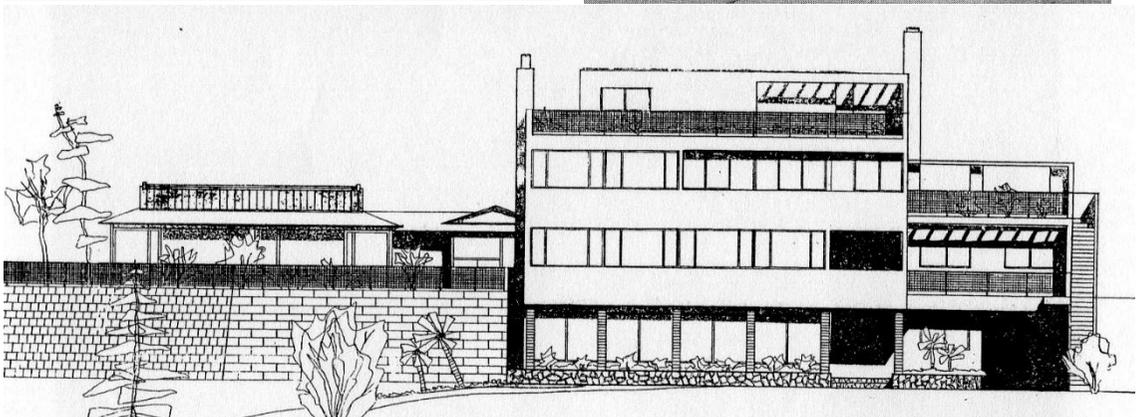
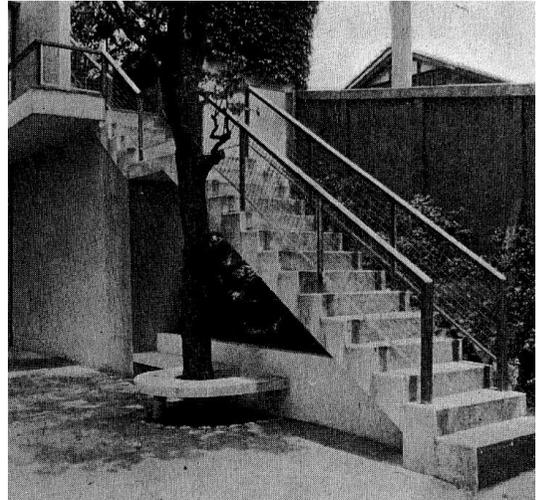
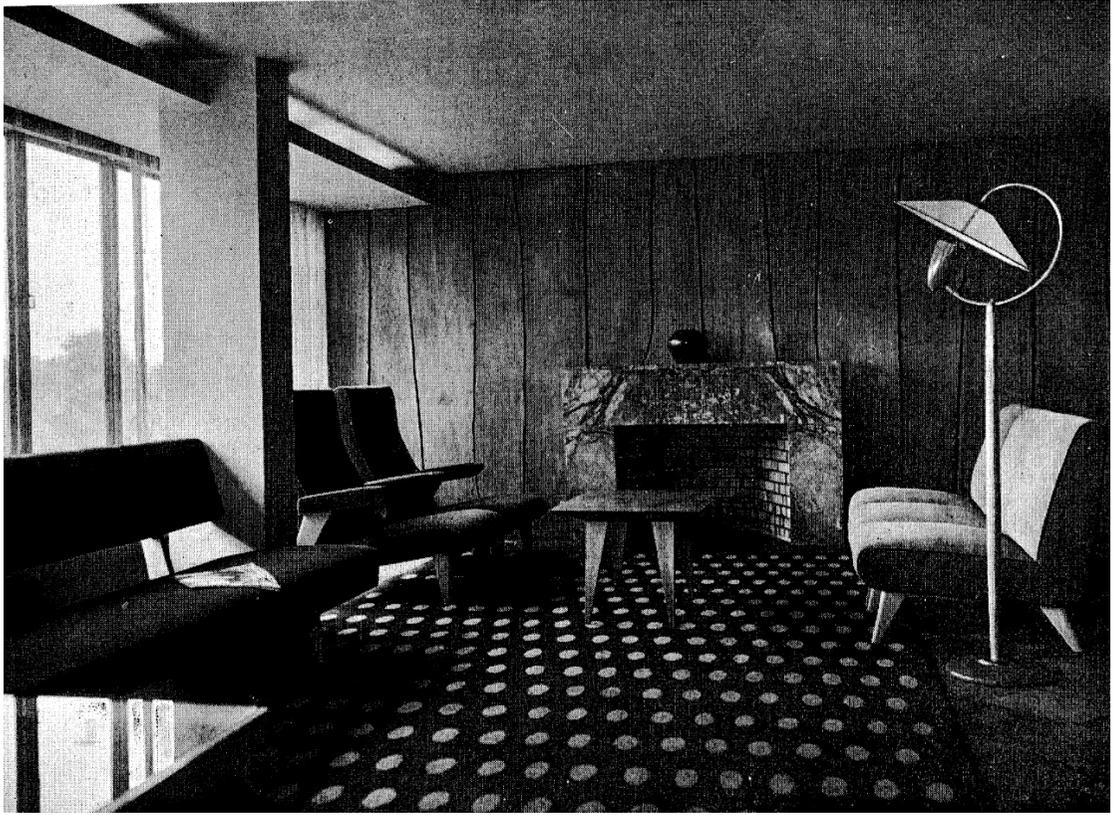
次頁：図 176（上） 居間西面

図 177（中左） 食堂

図 178（中右） ガレージから 2 階へ通じる階段

図 179（下） 南側立面図





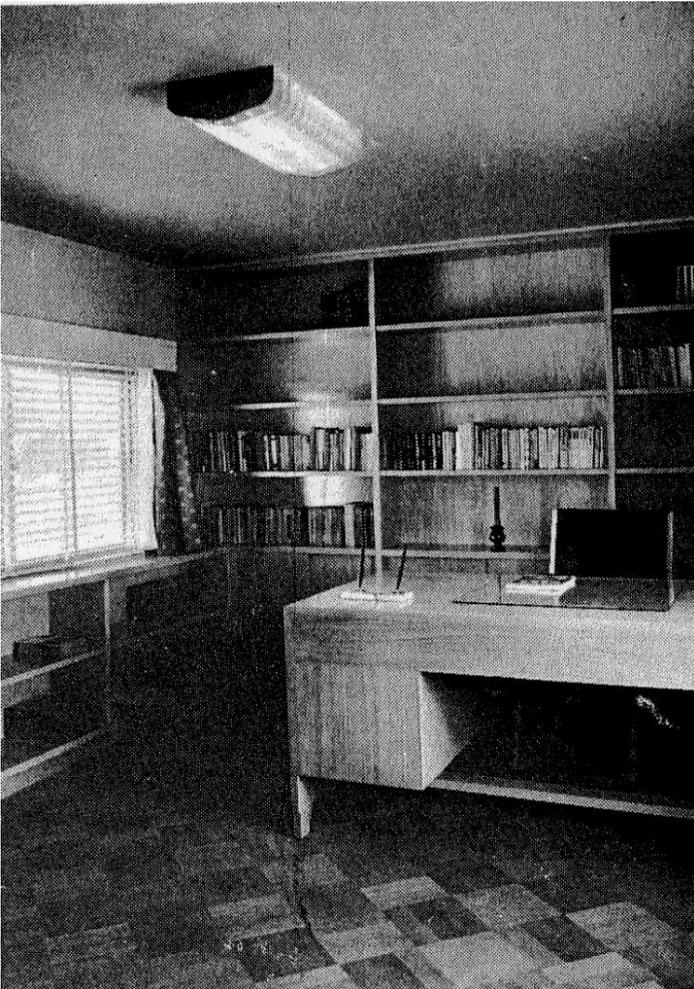
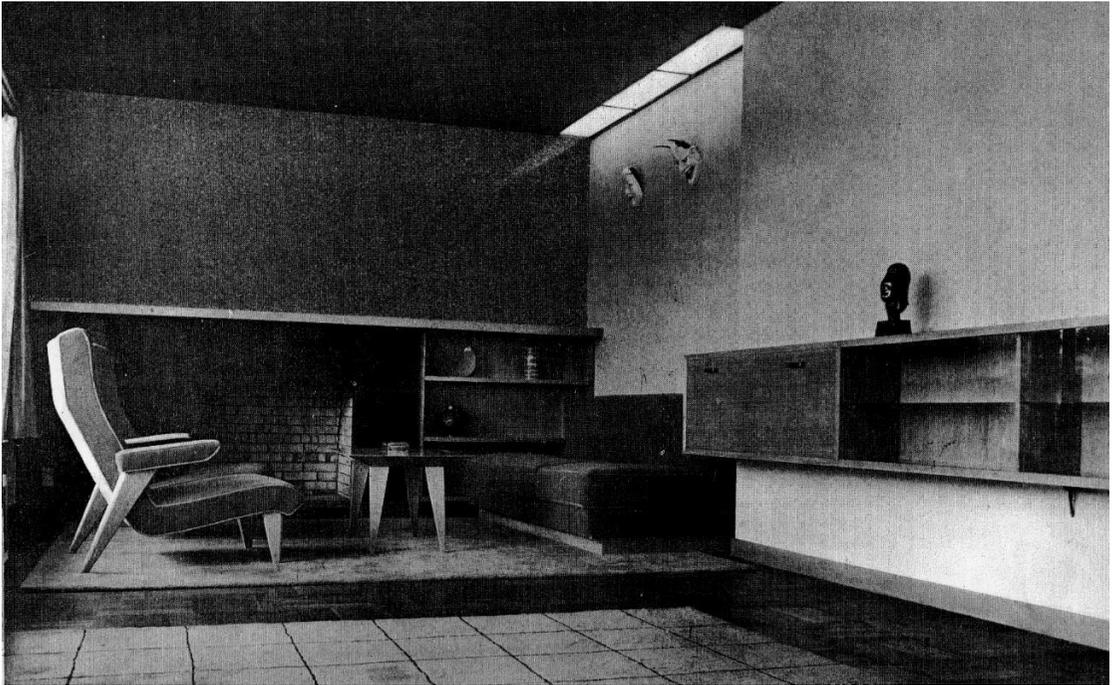


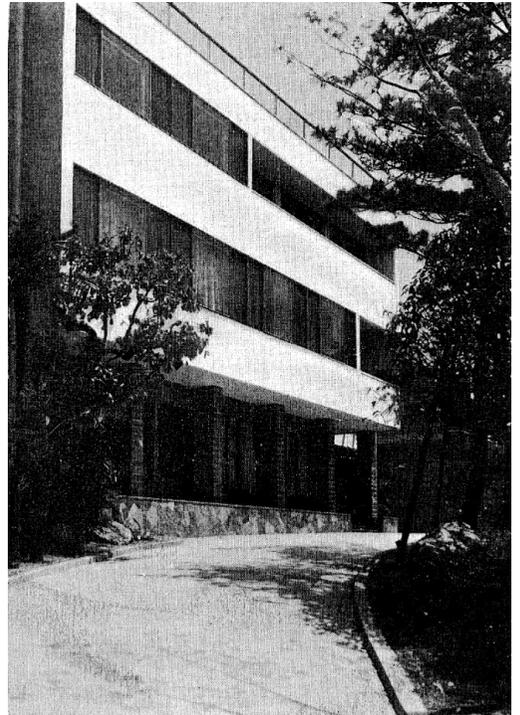
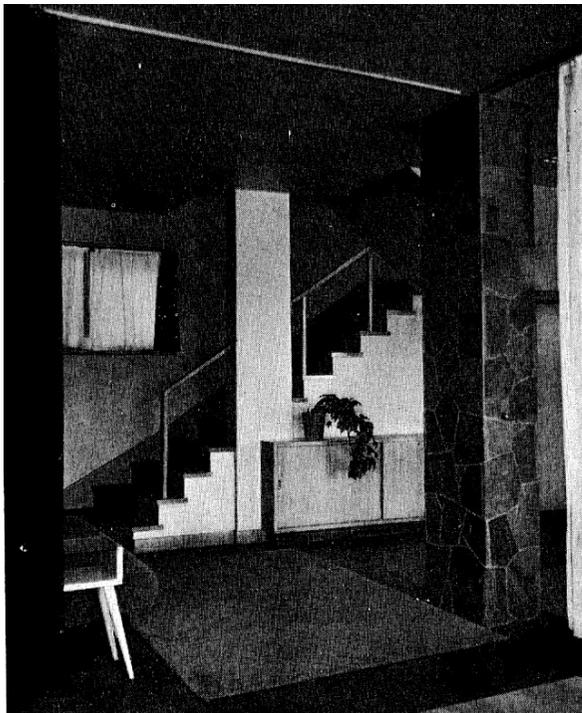
図 180 (上) 1 階客室

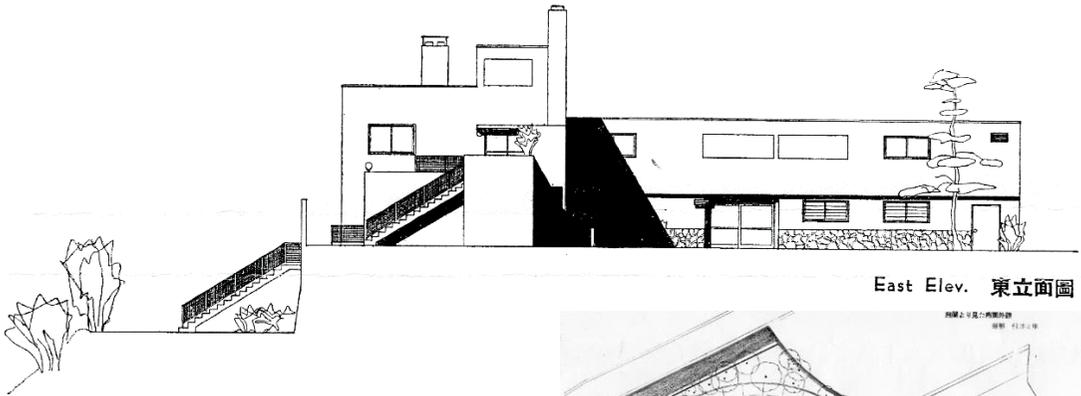
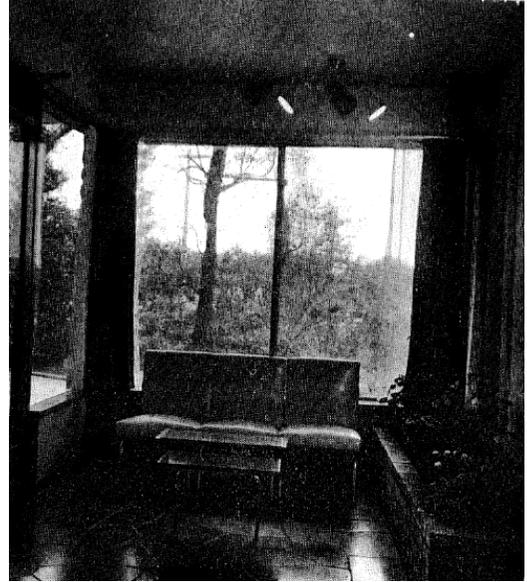
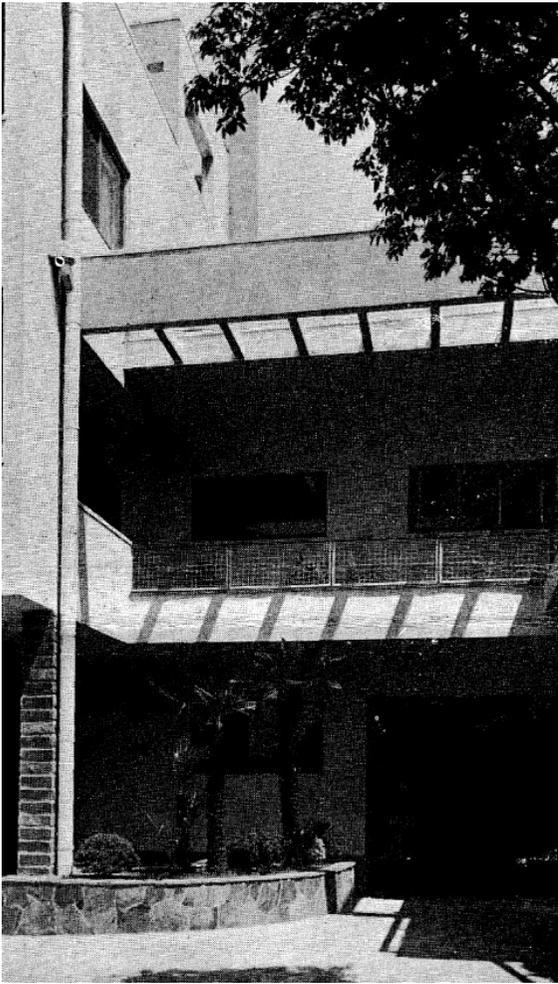
図 181 (左) 書斎

次頁：図 182 (上) 内玄関

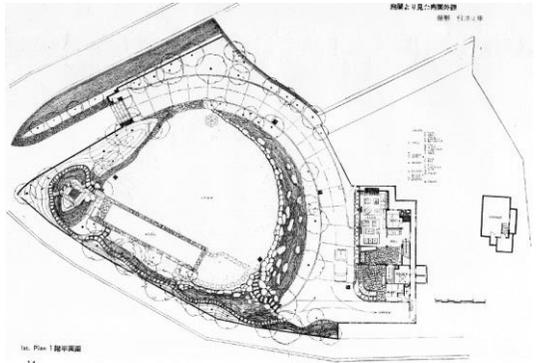
図 183 (左) ホール

図 184 (右) ガレージへのアプローチ





East Elev. 東立面圖



- 図 185 (左上) 南側玄関
- 図 186 (右上) 南側玄関内部
- 図 187 (右中) 南側玄関外観
- 図 188 (中) 東立面図
- 図 189 (右下) 1階平面図兼配置図

は、コルビュジェがエラズリス邸において見せた乱石積のような、多様な素材によって構成されるより豊潤な空間の創造の試みとしても捉えられるだろう。

設計担当者の名前としては、吉川晴夫、窪田保彦、岩本篤、田中温子の4名が挙げられており、吉川清作はその調整役を担っていた。

この建物の設計の細部と現場は研究所の吉川〔晴夫〕・岸本・田中君の擔當で、若い人々の熱情で完成したといつてもよい。若い建築家達は何よりも斬新な建築を造ることを希望するので、吉川清作氏はこれを調整することが一つの仕事になつたと言っているが、若い人達の建築意欲には感心していたようであつた。この建物で、岸本氏の擔當したといわれる色の配合は非常に好感を以て迎えられし、住む人にもよろこばれているようである。¹⁹⁹

藤川邸の場所については、『建築文化』誌上には赤坂としか書かれていないが、特徴的な周辺道路が平面図に書き込まれているため、敷地は容易に判明する。場所は現在の東京都港区赤坂7丁目5-27付近であつた。

1963年の航空写真（国土地理院撮影 MKT636-C9-18）ではその姿が見えるが、1979年撮影の航空写真（同 CKT794-C12B-11）には見えず、この間に取り壊されたようである。現在はパインクレスト赤坂という大規模マンションが建っている。

第2項：一虎園（一虎庵）—1952年

一虎園は藤川邸の敷地内に建てられた和室棟である。藤川邸の「増築」として紹介されており、本邸からはやや遅れて竣工したらしい²⁰⁰。

平面を見ると10畳と6畳の座敷および茶室が中心となっており、浴室・台所・女中室が付属している。納戸押入などの収納スペースには乏しく、あくまで応接の用に使われたものと思われる。茶室の名は一虎庵である。この建物についても吉川の言があるので引いておく。

庭

住居の設計ばかりでなく、日本建築の究極の完成と美は、その建築物の周囲、つまり庭の考慮の如何でありそこにつきるものだ。従つて、日本建築の設計の最上の楽しさもそこに、即ち「庭」にある。この庭も室生犀星が、心憎いまでの關心を文章を以て表した言葉、「庭というものも行きつく所に行きつけば、見たものは整えられた土と垣根だけであつた。」これは至言である。

〔中略〕

私は、この日本座敷と庭の設計に一年の年月を要して、こゝにあつた樹木や石の排除につとめ、その庭の設計は、周囲は4尺高のコンクリート打の塀、その中の土は少しの窪みもなく整えて、そこに最も細密性の芝生も敷きつめて、その芝生は毎日短く刈り込み、木陰もなく、木の葉一枚落ちていない。青く廣々とした庭、そこに二本位自然な作り過ぎない枝のまばらな赤

¹⁹⁹ 「ルーフガーデンを持つF氏邸」（前掲）、p.19

²⁰⁰ 「一虎園」『建築文化』1953年11月号、p.6。同書には着工：昭和27年9月、竣工：昭和23年3月とある。これは着工と竣工が入れ替わってしまったのだろうが、年月がすべて入れ替わってしまったのか、年だけ間違えているのか、着工と竣工の文字列だけ入れ替わってしまったのか定かでない。

松、茶室の前には、コンクリートの四角な池、その一隅にこれもコンクリート蹲踞、これが唯一つ庭に蔭を落す。こんな庭を目標にして、座敷の設計と庭作りを進めたのである。

畳

タタミのある建築の設計は、建築家に悲しみと喜びを與える。悲しみは建築家の思想であり、喜びは日本人の本能である。

タタミは、近代建築はもとより、住居からも次第に消えて行く。タタミの住む人に與える愛情は、盲目の母の愛情である。私も夏の日日、きびしい暑さで、身體がだるく疲れて来ると、襖や障子を明け放した、廣廣とした青ダタミが戀しく、タタミに寝そべり度く、その郷愁が深くなるが——タタミの不健康と不合理を忘れる事が出来ない。ことにタタミの小住宅に至ると、ミゼラブルである。そこは怠情に流れ規律を織り出す生活を作らないからである。このタタミの建築も、住居の主體を離れて特殊な建築、つまり客室、料亭、數寄屋建築、旅館、茶室等の設計となると、日本の建築家の本能的な喜びと熱意を感じる。

結び

京瓦、京壁、赤松柱、檜の切目縁と檜張りの廊下、低い一直線の軒裏、軽くて單純化した屋根の形態、雨戸の無いサッシュの硝子戸、白い紙障子、コンクリートの塀、少しの赤松の植木と敷石、敷きつめた芝生、茶室に供待・コンクリートの四角い池と水盤、こた等をつとめて省略し圧縮して、その響音と階調による日本建築の新しい一つの典型を作るべく 2ヶ年の日資を費した。²⁰¹

庭と建物の設計に 1 年を費やしたという作者の言の通り、構成は非常に巧みである。外壁は大壁としながら、南面は独立柱による開放的なつくりとなっている。全体はしっかりとした和の意匠の中にありながら、コンクリート製の矩形の池²⁰²を設け、切り石を直線的に配置するなど、清新な意匠を見せる。

また、ガラス戸を切目縁の外に設け、地盤面から軒下までの開口を実現したところも作者の独創が光る（この大開口を実現するために、この部分だけ鉄骨梁を挿入しているのも工夫である）。

このような創作が可能であったのは、吉川曰く「住居の主體性から離れて特殊な建築」となり得たからである。「住居の主體性」の意は読み取りにくいだが、これは住宅においては「主体」すなわち居住者を考慮しなければならないがゆえに不自由ということであり、裏返せば、付属屋においては「主体」を考慮しなくて済むゆえに自由に構成し得たということであろう。

これまで吉川は二重生活（立式と座式）を、『現代の住宅』で様式混交により、「結婚住宅」では「主体」に若者を置くことにより、克服しようと試みてきたが、これらとはまた別種の（「主体」を考えない）創作がここで行われているのである（「住居の主体性」については「乞食の家」を考える上でも援用する、第 20 節参照）。

ところで、藤川邸の所在地について、1960 年発行の住宅地図²⁰³を参照したところ、「藤川」および「青年アジア協会」という名称が記載されていた。藤川一秋の伝記²⁰⁴によれば、藤川は青年アジア協会の設立者で会長を務めていた。青年アジア協会は「アジア各国の青年の理解と親睦を深め、その協力によっ

²⁰¹ 「一虎園」（前掲）、pp.7-10

²⁰² 矩形のプールで和洋を調停する意匠は、堀口捨巳の岡田邸(1933)に先例がある。

²⁰³ 東京住宅協会『港区北部』1960 年

²⁰⁴ 古田保『藤川一秋 犬丸徹三 波多野元二 奥村政雄伝』東洋書館、1955 年、pp.79-80



一虎園（一虎庵・藤川一秋邸増築）

設計：都市建築研究所（吉川清作・窪田保彦・近藤洋子）

施工：直営（大工棟梁 齋藤周三郎・左官 松村政吉・建具 佐藤周三・サッシ ヌ 不二サッシ ヌ・屋根瓦 花川一英・植木 丸山林蔵）

着工：1948（昭和23）年3月

竣工：1952（昭和27）年9月

図190（上）母屋から見る、図191（下）南側外観

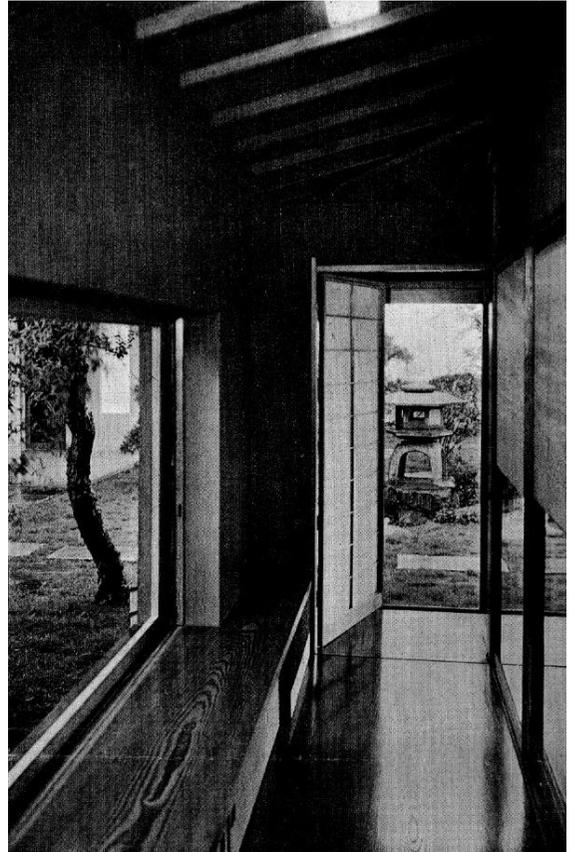
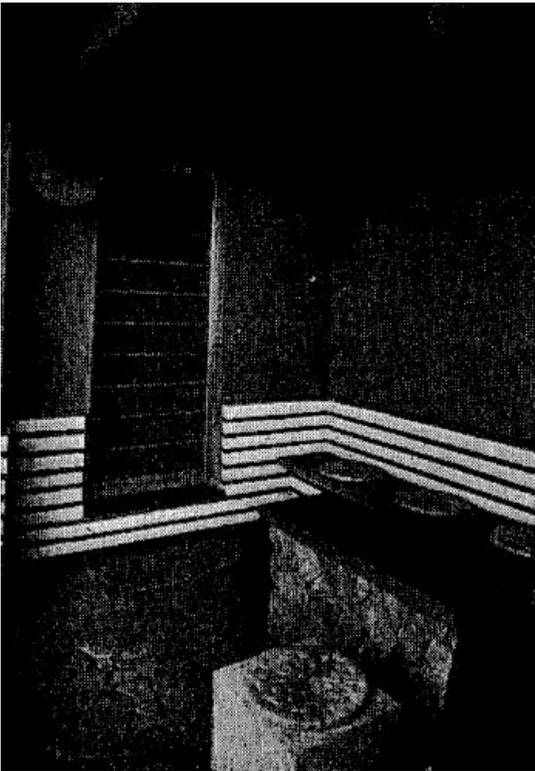
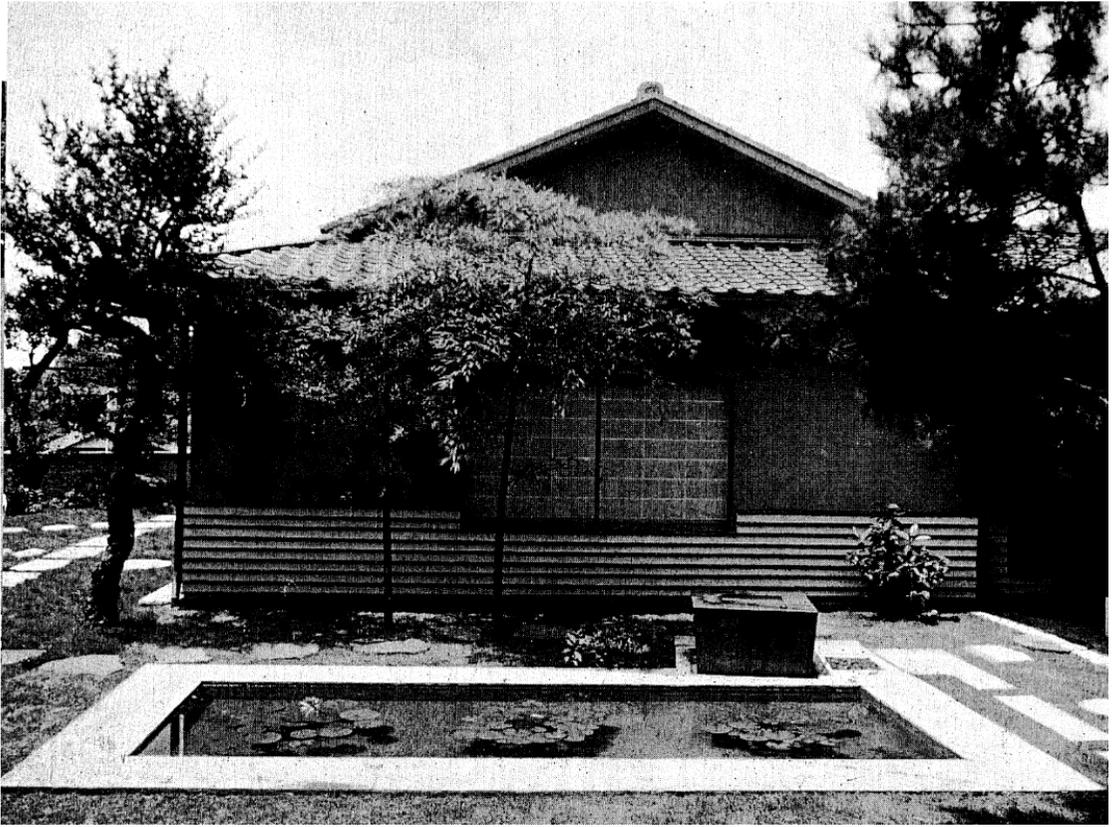


図 192 (上) 矩形の池、図 193 (左) 茶室待合
図 194 (右) 座敷脇廊下

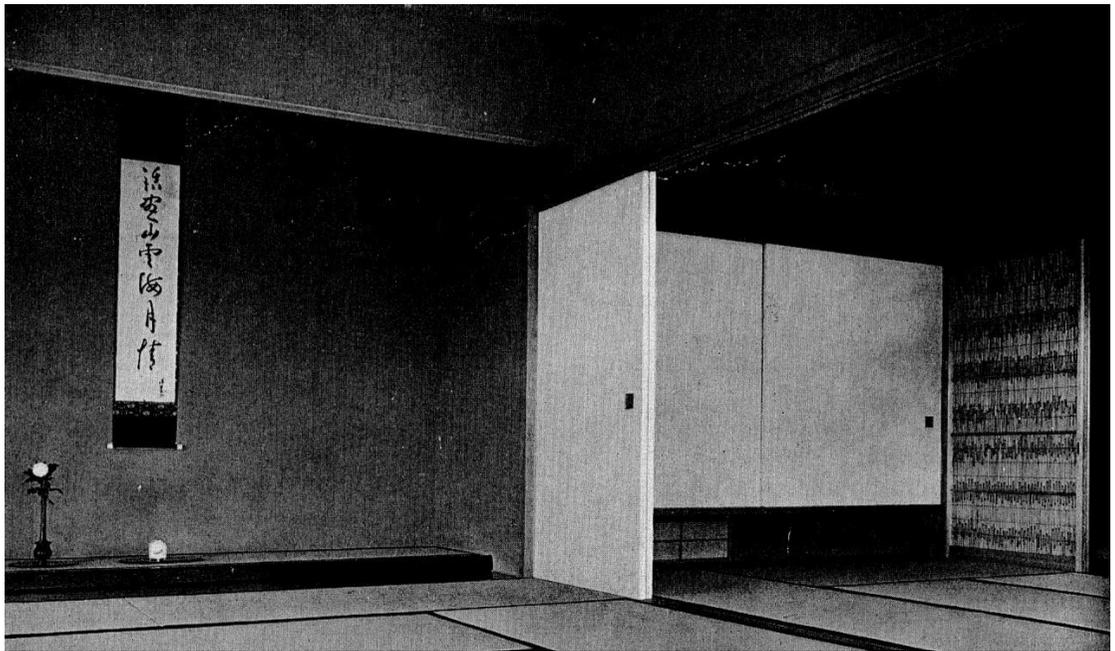


図 195 (上) 茶室部分をみる

図 196 (中) 座敷

図 197 (下右) 東立面図・南立面図

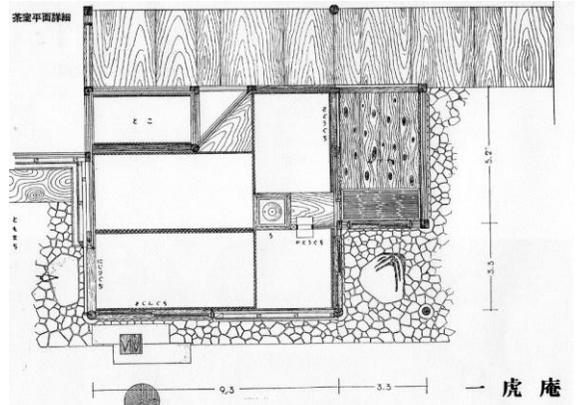
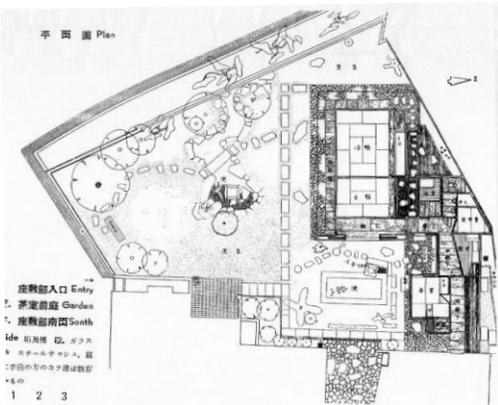
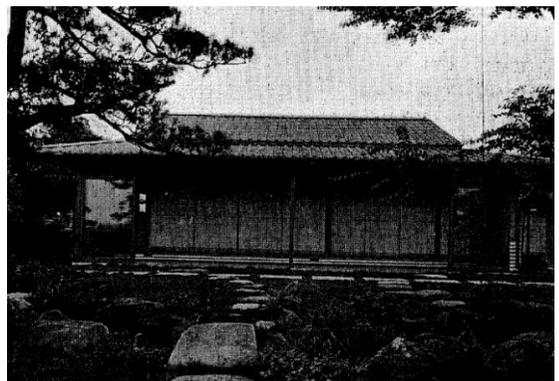
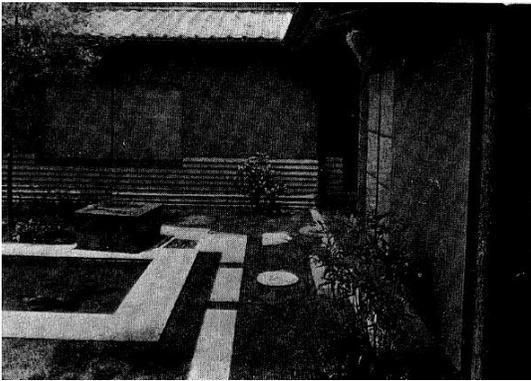
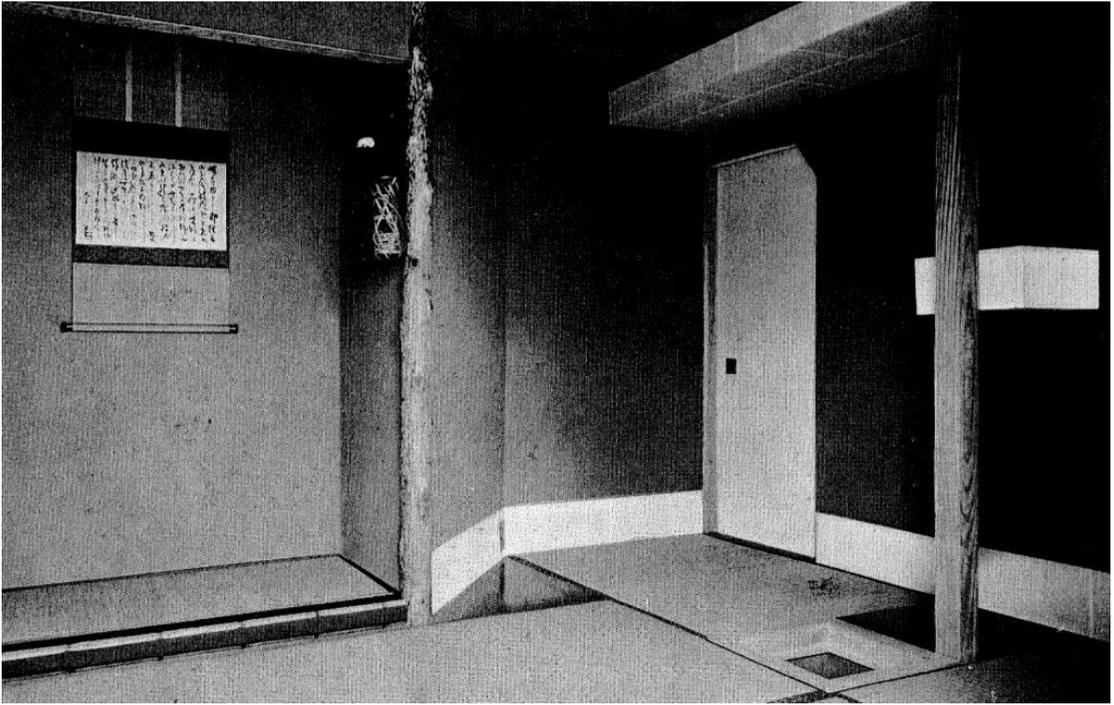


图 198 (上) 一虎庵、图 199 (中左) 茶室前庭、图 200 (中右) 座敷部南面、图 201 (下左) 配置图兼平面图 图 202 (下右) 一虎庵平面图

てアジアの文化的、政治的、政治的發展に寄与することを目的とする」²⁰⁵もので、講演会や交流事業などを行っていたようである²⁰⁶。

1953年に国際学友会の大会が開催され、東南アジアの学生が来日したとき、藤川は竣工間もない自邸に彼らを招待し、もてなしたという²⁰⁷。一虎園は恐らく、普段は藤川の個人的な応接間として使われると同時に、そのような行事の際の会場としても利用されていたのであろう。

第3項：藤川一秋と吉川について

これまで、施主の藤川一秋については触れてこなかったが、およそ次のような人物であった。

藤川一秋

1914-1992 昭和時代の経営者。

大正3年9月14日生まれ。愛知県、報知新聞社をへて、昭和14年東京シャリングにはいり、宮製鋼所と合併した東都製鋼で22年社長となる。39年東都系企業を合併してトビー工業をつくり社長。49年参議院議員（自民党）。平成4年8月17日死去。77歳。愛知県出身。中京商業卒。²⁰⁸



図 203 藤川一秋

吉川は1934年～1935年にかけての報知新聞社懸賞「山の住宅」で審査員を務めているが、藤川が報知新聞社に入社し総務局に配属されたのもこの頃であり²⁰⁹、この時に出会ったものと思われる。

この後に竣工し、吉川の作品中最大のものとなった「紫カントリークラブハウス」も、藤川が仲介して実現したものらしい（第21節）。

ところで藤川の伝記を読んでいると、それ以上に、二人が似たような経歴をたどっていることに驚く。あたかも吉川清作の伝記を読んでいるかのようである。いくつかの例を挙げよう。

（1）地方出身

藤川は愛知県額田郡豊富村字鳥川の農家の生まれ、吉川は石川県石川郡御手洗村字相川新の生まれである。山間部と臨海部という違いはあるが、どちらも都会からは遠い。特に鳥川は戸数わずか60戸ほどの小集落であった（古田1955:19）。

²⁰⁵ 古田1955:79

²⁰⁶ S・カンドウ述『文化の普遍性について：東西意識の超克（青年アジア協会叢書1）』青年アジア協会日本本部、1955年

²⁰⁷ 古田1955:81

²⁰⁸ 「藤川一秋」『デジタル版日本人名辞典大辞典+Plus』（コトバンク所収）n. d.、2014年11月5日閲覧、<http://kotobank.jp/word/藤川一秋-1105190>

²⁰⁹ 「藤川一秋略歴」（古田1955:10）

(2) 天才肌

少年時代の藤川は「乱暴者の一秋だが、学校の成績はずば抜けていた。うまれつき頭脳がすばらしくよく、教室以外では全然、勉強などしたことがないのに、一年から檜山本校の高等科を卒業するまで、終始平均九十七、八点、一番で通した。村はじまって以来の神童だった」(古田 1955: 25)。また、報知新聞社時代には「とにかくあんなに要領がよく、すばしこい男はなかった。仕事の手順だって、あらかじめ考えてやるのか、どンドン片づけてしまう。子供のような顔をしているくせに、いいプランを考え出した。それがいつもの射ている」(古田 1955: 43) と評されたという。

一方の吉川も「楽天的な天才肌の設計家」²¹⁰と評されている。

(3) 突然の上京

藤川は愛知県庁に最下級の役人として入庁したが、学問の必要性を感じて同時に中京商業学校の夜学部でも勉強をしていた。しかし、県庁で下級役人として過ごすことに将来性のなさを感じており、20歳の夏の夕方、県庁を出た彼はふらふらと名古屋駅に向かい、着の身着のまま電車に乗り込み上京してしまう(古田 1955: 11-15)。

一方の吉川も兵庫県立工業学校の建築科²¹¹に通っていたが「十九の時つまらないと辞めて東京に飛び出し」²¹²てしまった。両者とも、学業や仕事半ばではあったが、自らの可能性を切り開くために新天地へ出奔したのだった。

(4) 我の強さ

天才肌の人間は、我が強く、周囲と折が合わないことが多いようで、藤川は、少年時代から気に入らない教員に対しては徹底的に反抗したほか、報知新聞社に入社してからも癪にさわるがあると欠勤することが度々あったという。ある時は13日も欠勤した上、芸妓を連れて多摩川へ遊びに行こうとしたところを重役に目撃され、きつく叱責された(古田 1955: 44-46)。しかし「こんな失態をたびたびでかしながら、松下〔藤川の旧姓〕はいつも不思議にクビにはならなかった。これも小学校時代と同じで、やはり彼が有能な社員だったからであろう。謀反気と血の気の多い悍馬で、気に食わないこと面白くないことがあれば、ヘソを曲げて徹底的に反抗するが、仕事をさせればよく働いてカンがするどく、じつに重宝な人物だった」(古田 1955: 46-47)。

一方の吉川も「東京へ飛び出し曾禰中條建築事務所に十年程つとめたがそのあいだ何度も首が飛んだり繋がったり殆ど獨学で叩きあげ気が向かなければ仕事をしない」²¹³人であった。

このように、吉川清作と藤川一秋はその生立ちや、上京までの経歴が良く似ている。報知新聞社懸賞を通して出会ったとき、不思議とウマが合ったであろうことは想像に難くない。それが、藤川の信頼を得て、自邸の設計を任されることにつながっていったのだろう。

²¹⁰ 読売新聞記事(前掲)

²¹¹ おそらく夜学部であったろう(第1章第1節参照のこと)。

²¹² 読売新聞記事 1934:7(前掲)

²¹³ 同上

第 1 7 節：K 氏邸計画案（小島多満子邸）—1954 年

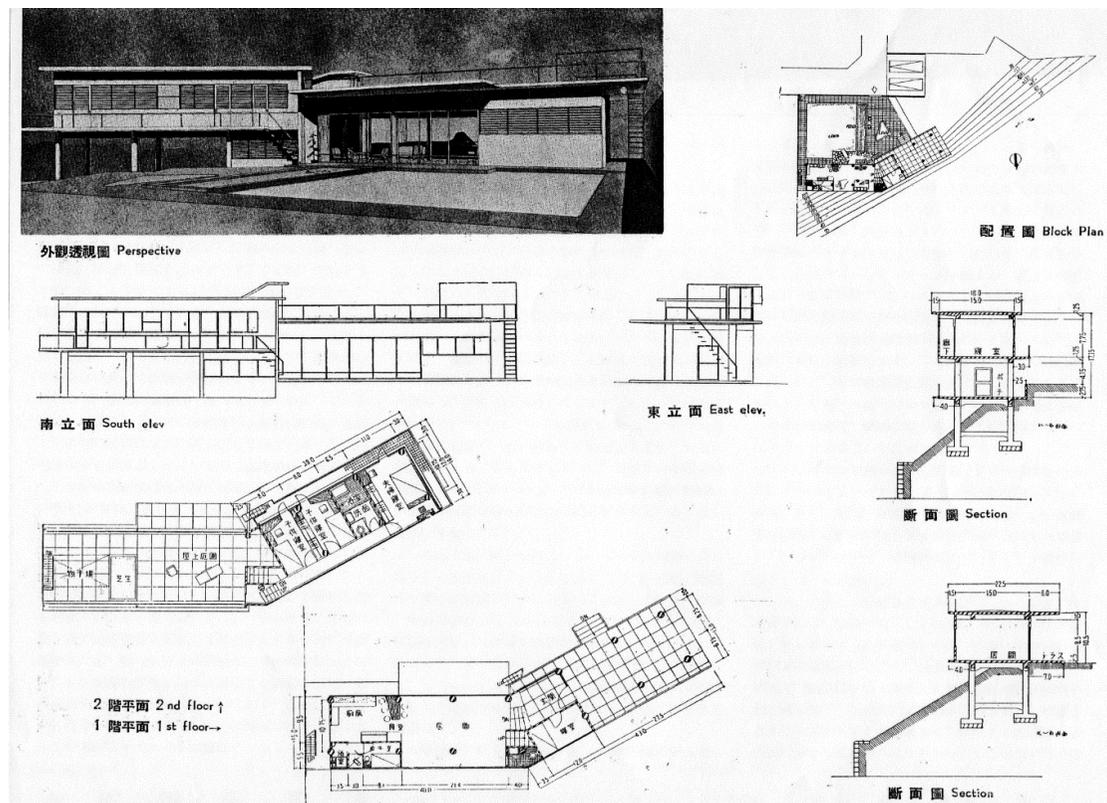


図 204 K 氏邸計画案

K 氏邸計画案は、『建築文化』1954 年 4 月号に発表された小住宅の計画である²¹⁴。敷地については「麹町の或る高台」とのみ記されているが、敷地形状をもとに調査したところ、現在の東京都千代田区一番町 29-3 にあたることが分かった。登記簿によると、当地は 1953 年から 1978 年まで小島多満子という人物が所有していた。当時の住宅地図には小島研究所と記載されているが、事業内容は不明である。その後売却され、現在は進興ビルディングとなっている。

隣地に居住していた方にこの計画案を見せ尋ねたところ、当地にあったのは特に変哲の無い住宅であり、このようなモダンなものではなかったという回答が得られた。このことから、吉川による K 氏邸計画案は、実現しなかったものと思われる。

ところで、小島邸のすぐ裏手には、堀久作(1900-1974)²¹⁵が居住していた。堀久作は日活に 1934 年に入社したのち、長年にわたって社長を務めた人物である²¹⁶。吉川が神田・京橋日活館および葬館を手掛けたのは 1924 年なので時期は重なっていないが、偶然としては興味深い。

²¹⁴ 「K 氏邸計画案」『建築文化』1954 年 4 月号、p.2

²¹⁵ 「堀久作」『20 世紀人名辞典』（コトバンク所収）、<https://kotobank.jp/word/堀+久作-1654550>（2017 年 11 月 1 日閲覧）

²¹⁶ 『日活』現代企業研究会、1962 年、p.86

第18節：Nさんの家（中島篤志邸）—1954年

第1項：建築概要

Nさんの家（中島篤志邸）は、東京都世田谷区赤堤にあった住宅である。敷地は現在の赤堤3丁目12付近にあたる。施主の中島篤志氏は若いエンジニアであり、新婚にあたっての新居として建築された²¹⁷。

新婚住宅は戦前の自邸・渡邊邸から続く吉川の主要なテーマであるが、その理由について、ここで吉川自身の手で簡潔に整理されている。

住宅の中でことさらに新婚者の住宅に建築家として関心と熱意を持つのは

A その住宅は社会生活の単位、新しい一家庭の出発点であるのと

B 従つてその住宅は若人の住宅であり、これからの生活をめざし、古い住宅観念を清算し、新しい時代の生活を慎重に考察した上、大膽に飛躍する住宅即生活の切替の機会を建築家に與えるためである。

それは最小限の小さなスペースの住宅で、その中に最大限の近代科学的機能を織り込んで、次代の生活の満喫をめざし、不燃的、活動的、合理的であり、夫人をして家と掃除のドレイより開放し若さと美しさの永続性を與え、社会の新たな一員としての出発点を作る住居であり、新しい生活を作るチャンスである。²¹⁸

要約すれば、若い人であれば柔軟に新生活になじむことができるが故に生活改善の好機であるということであり、これは「結婚住宅の提唱」（1935）より一貫した論理である（第11節第1項参照）。

敷地は100坪ほどで、建坪20坪の木造・平屋建てとなっている（口絵8）。中央には水回りを集めたコアがあるが、これは増沢恂のコアのあるH氏のすまい（1953）に影響を受けたものであろうか。庭には赤荻賢司（1932-1990）による彫刻が置かれていた。近隣の方によると1984年頃に取り壊されたといい、現在は別の戸建住宅が建っている。

第2項：女子建築研究所について

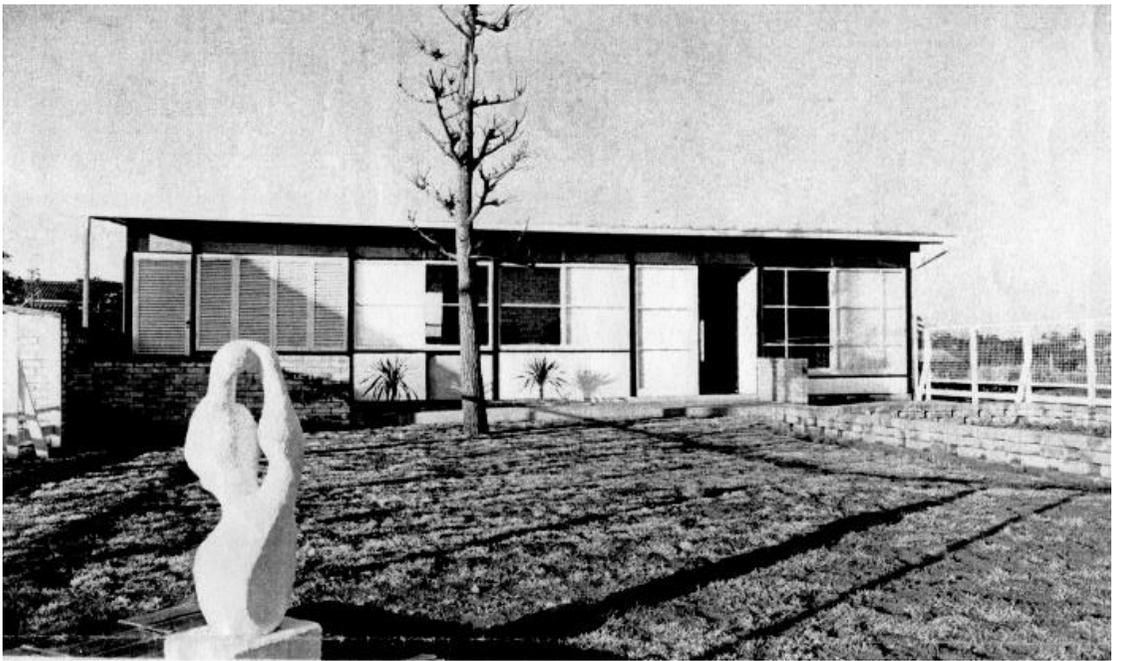
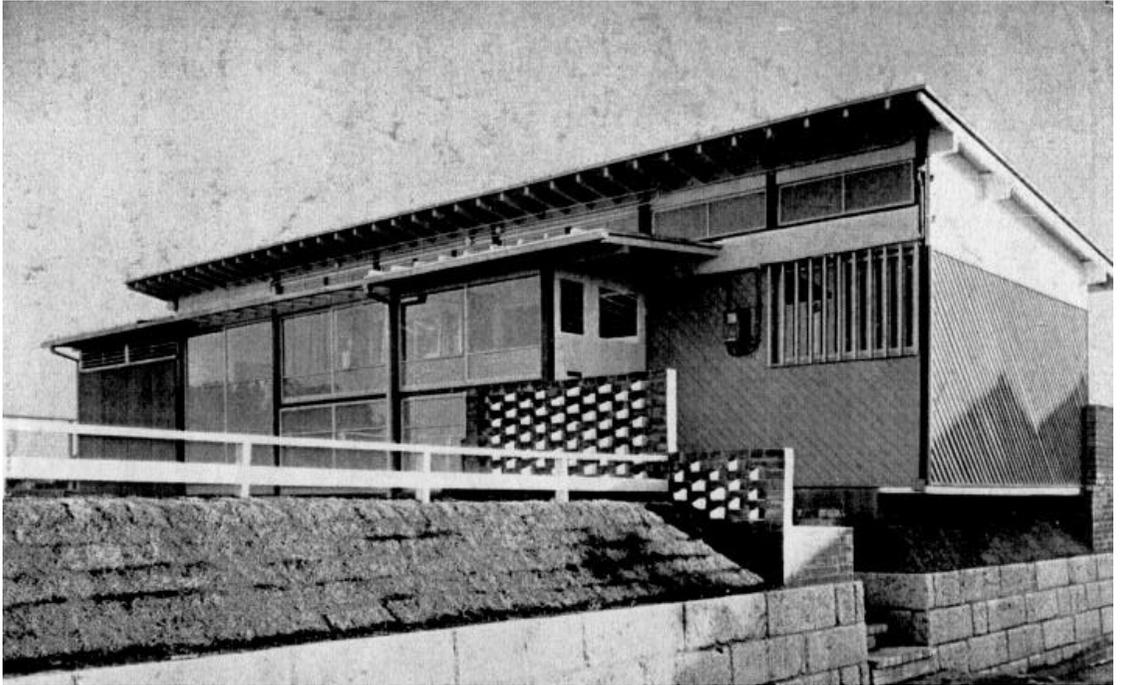
本住宅が雑誌上に発表された際には、設計担当者として、岸本洋子、加藤友子、岩下綾子の三人の女性と、指導担当として窪田保彦の名前が挙げられている²¹⁹。吉川清作は「女子建築研究所」という組織を持っていたといい²²⁰、これがその実作に相当するのではないかと思われるが、確証はない。吉川清子さんおよび渡邊朱美さんへのインタビューのなかでも、詳細は判明しなかった。

²¹⁷ 「Nさんの家」『建築文化』（99）、1955年2月号、p.1以下および登記簿による。ゴルフ場経営者の中島篤志とは別人。

²¹⁸ 同前

²¹⁹ 同前

²²⁰ 神代1955:3で触れられている。



Nさんの家（中島篤志邸）

設計：都市建築研究所（担当 岩本洋子・加藤友子・岩下綾子・指導 窪田保彦）

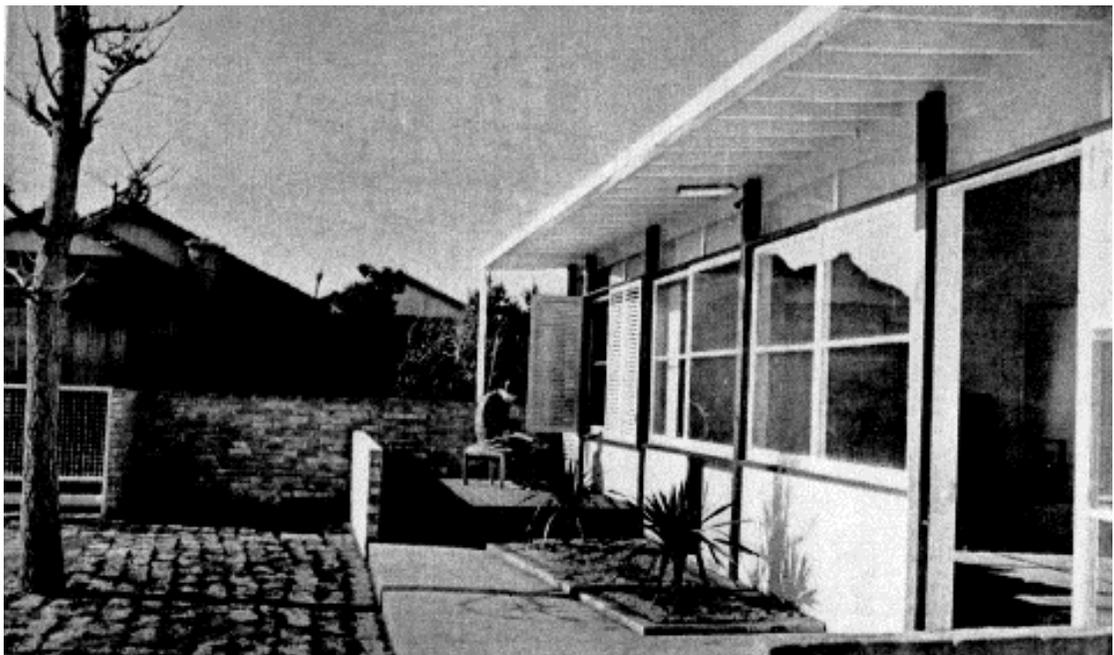
施工：不詳

竣工：1955（昭和30）年頃

図205（上）北から見る、図206（中）南側外観、図207（下左）敷地現状（2015年頃、低い石垣のみ残る）



図 208-210 (上) 内観、図 211 (下) 南側テラス



第19節：国立国会図書館建築設計競技案（2等）—1954年

第1項：設計競技に至る経緯

国立国会図書館はそれまで存在していたいくつかの公的図書館を統合して、1948（昭和23）年に発足した。しかし、その庁舎は三宅坂の参謀本部跡、赤坂離宮などに分散しており、特別な本建築をもたなかった。

建設されるべき本建築については、同年に制定された国立国会図書館建築委員会法に基づき設立された、館長、両院の図書館運営委員長、建設院総裁などによる建築委員会が建物規模や敷地選定を管掌することとなっていた。

敷地は当初、三宅坂の参謀本部跡が想定されていたが、国会議事堂との景観上の兼ね合いからドイツ大使館跡に変更され、1952（昭和27）年から計画地内に含まれる民用地の買収が進められた。

1953（昭和28）年9月に一般からの設計競技を行うことが決定され、同年10月に内田祥三を委員長とする専門委員会が組織された。募集要項は専門委員会内での検討の上、同年11月に公示された。

この募集要項に対し、吉阪隆正が書信によって「①懸賞金額の決定基準 ②入選者の著作権の問題 ③入選者の設計関与の問題 ④国際懸賞競技規定等との関係」について国会図書館宛に問い合わせ、また『新建築』にその問題点を指摘したことから、いわゆる建築著作権運動が沸き起こった。建築家有志によって設立された建築著作権確立準備委員会には日本建築設計監理協会および建築設計事務所員懇談会（所懇）も同調し、新建築などの建築メディアもこれに賛同する姿勢を示したことで、建築著作権確立運動は建築界一丸となつての大運動となった。この運動は結局のところ、要項の解釈変更と募集期間延長という形で妥結が図られ、1954（昭和29）年6月末に審査結果が発表された。²²¹

第2項：吉川の当選案について

応募された122案のうち、審査員による鑑査・投票を経て21案が最終候補に残された。第1回目の投票では、吉川清作率いる都市建築研究所案と大高正人率いる前川国男建築設計事務所のMIDO同人案が、ともに7票ずつ獲得し同票となった。再投票が行われた結果、MIDO同人案が8票、都市建築研究所案が6票となり、MIDO同人案が1等に、吉川案は最終的に2等に入選した²²²。

吉川案については、説明文の一部が雑誌に紹介されているので、それを引く。

平面 図書館の平面型は、十²²³字型のプランでその中央が書庫、書庫の周囲は廊下、その廊下の外側を各室が一周する。簡明直截な平面構成の7層建である。只講堂と展示場は東の方に低く延びて構築する。

立体 東西南北共に同一型の風貌である。

屋上 最上層部は2段型の立体構成で、屋上突出物は整理され、その簡明なアウトライン内に納結する。

意匠 簡明なるアウトラインを有する外観はその四方向に於てガラスとコンクリートの並立する20米高さのリズミカルな表現である。

²²¹ 本項の内容はすべて国立国会図書館編『国立国会図書館三十年史』国立国会図書館、1979年、pp.66-81による。

²²² 同前 p.79 および『建築設計競技選集 1945-1960』メイセイ出版、1995年、p.121

²²³ 原典ではLを4つ角合わせにした記号。

灰白色のコンクリートの円柱、透明なるガラス、スチールのサッシュはメタリコン²²⁴で金色を表わす。²²⁵

平面計画についてみると、中央書庫式とすることはコンペの所与条件²²⁶であり、MIDO 同人案と大きな違いはない。最終的には、個々の細部というよりも、吉川の古典主義的な外観を受け入れられるかがネックになったのではないだろうか。

審査員や設計競技の経過をめぐっては、発表後も様々な観点からの批判が相次いだ²²⁷が、吉川も「審査について」という小文を寄せて、審査期間が20日間しかなかったことに苦言を呈している。

従来、日本の虚偽設計の審査は短時日に決定し、これが実施の場合、その入選設計図が不適合となることが多い。

これは、一つは審査の短時日にあり、一つは審査員の実施面の認識の不足にあると思われる。審査員の殆どが大学の教授達であつて設計と監理を職業とする実際的建築家が入つてみないからである。

〔中略〕

今度の国会図書館は35億の国民の血税^{ママ}を使つて成り立つ建算であり、国民全体の共有物であるので、この審査決定には国民の輿論を勘案してこそ、審査の本道であつたと思はれる。それには1ヶ月くらいの審査の熟考期間を与へるべきであつた。

それでこそ国民一般の生活から浮き上がった紙上設計図でなく、実施設計図に到達するものとする。 ²²⁸

しかしながら、吉川が特に問題視し憤つたのは、その後の基本設計料をめぐる問題についてであつた。

第3項：基本設計料問題について

一般的には、国会図書館設計競技をめぐっては、建築著作権の確立をめざす観点から取り上げられることが多いが²²⁹、その争点は、先に見たように、審査期間の短さ、審査員の保守性、書庫配置の妥当性など多様であつた²³⁰。特に、大高らMIDO 同人が当選者に決定した後に噴出した、設計者の参与方法と基本設計料をめぐる応酬は、建築家側と国会図書館・大蔵省との間に深刻な断絶をもたらすに至る大きな問題であつた。

²²⁴ メタリコン(Metalikon)とは「金属を溶融し之を高圧瓦斯又は空気を以て物具の表面に吹きつけ以て金属被覆を行う」手法(川上義弘「金属溶射被覆(メタリコン)に就て」『鉄と鋼』10(3)、1924年3月号、p.2)

²²⁵ 「国立国会図書館懸賞競技設計入選案」『建築文化』1954年8月号、p.22

²²⁶ 建築著作権の軽視と並んで、書庫の位置が事前に決められていることへの反発も大きく、野生司義章らは地下低層書架の利点を力説し*、あるいは吉阪隆正のように落選覚悟で自由なプランを試みた例もあつた。

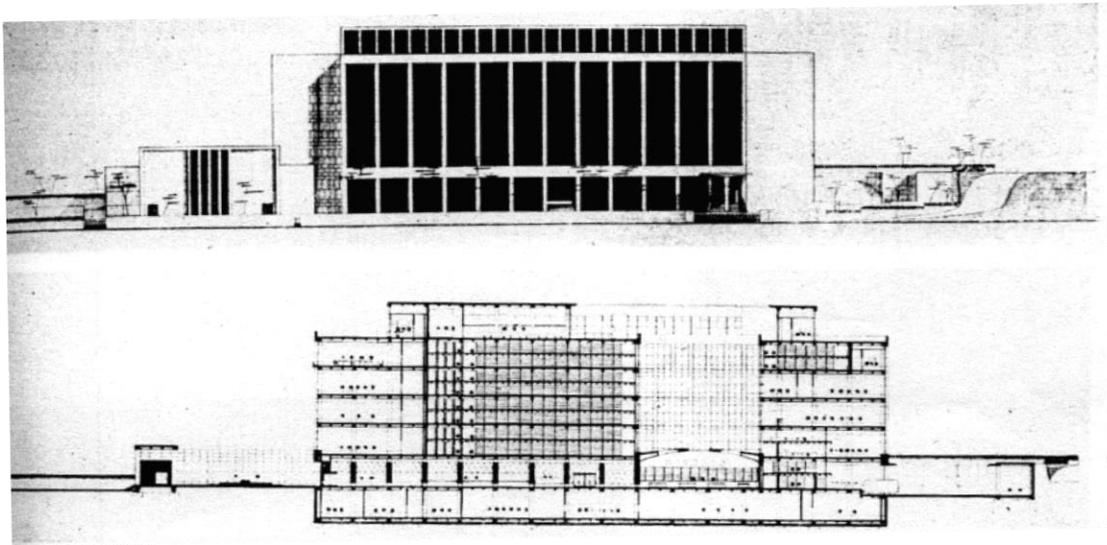
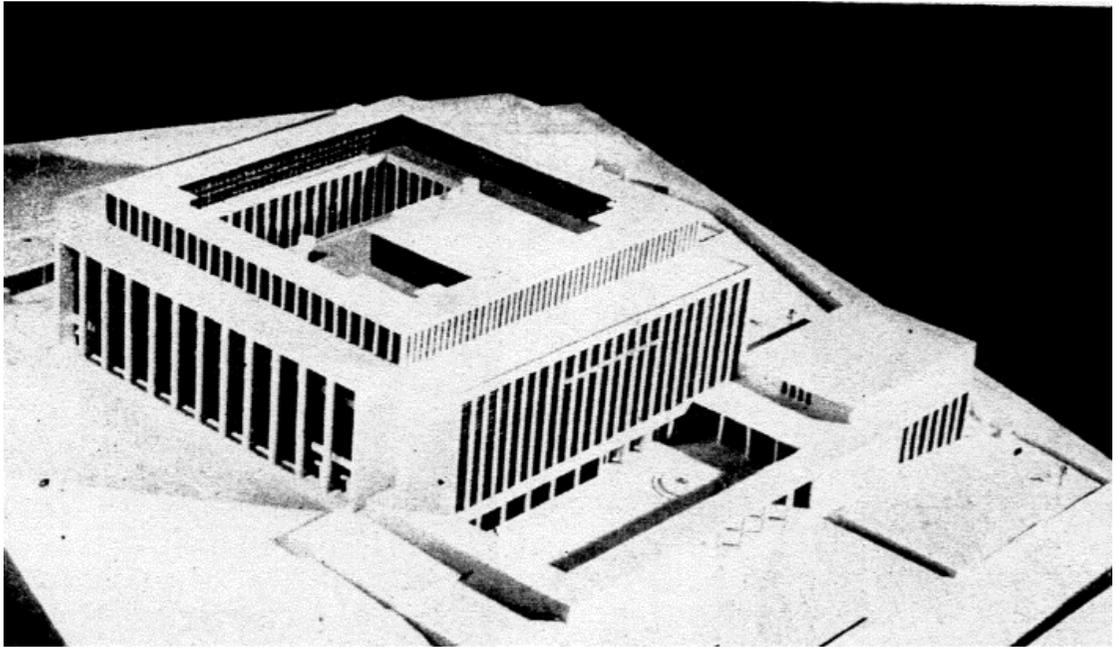
* 野生司義章、緑川正夫、正木一郎「全く異なる二つのゆきかた：国会図書館入選設計をめぐる批判と提案」『国際建築』21(8)、1954年8月号、pp.36-37

²²⁷ 例えば建築設計事務所員懇談会「さらに前進のための協力を：国会図書館競技設計の経過を批判する」『国際建築』21(8)、1954年8月号、pp.8-9

²²⁸ 吉川清作「審査について」『建築文化』1954年8月号、p.33

²²⁹ 例えば近江 1986:154-164

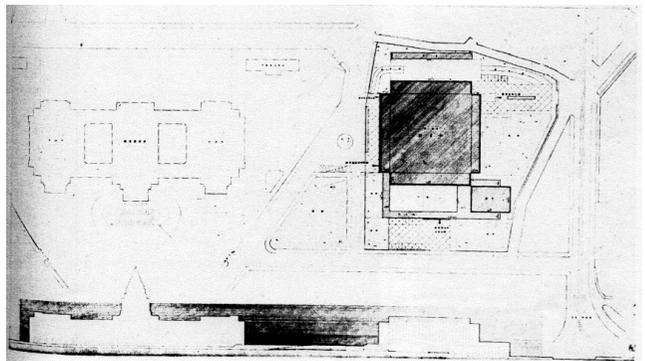
²³⁰ 谷内田章夫「国立国会図書館余燼」『建築設計競技選集 1945-1960』(前掲)、p.136

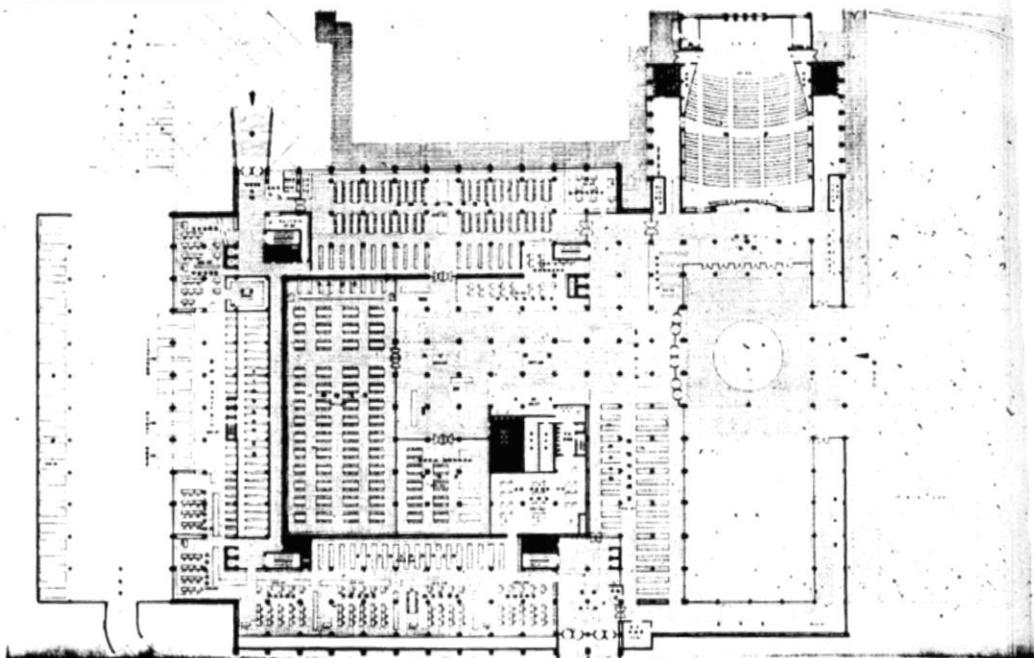


国立国会図書館建築設計 競技（2等入選）

設計：都市建築研究所 吉川清作ほか2名

図 212（上） 模型写真、図 213（中） 立面・
断面図、図 214（下右） 配置図
次頁：図 215-216 1階・2階平面図



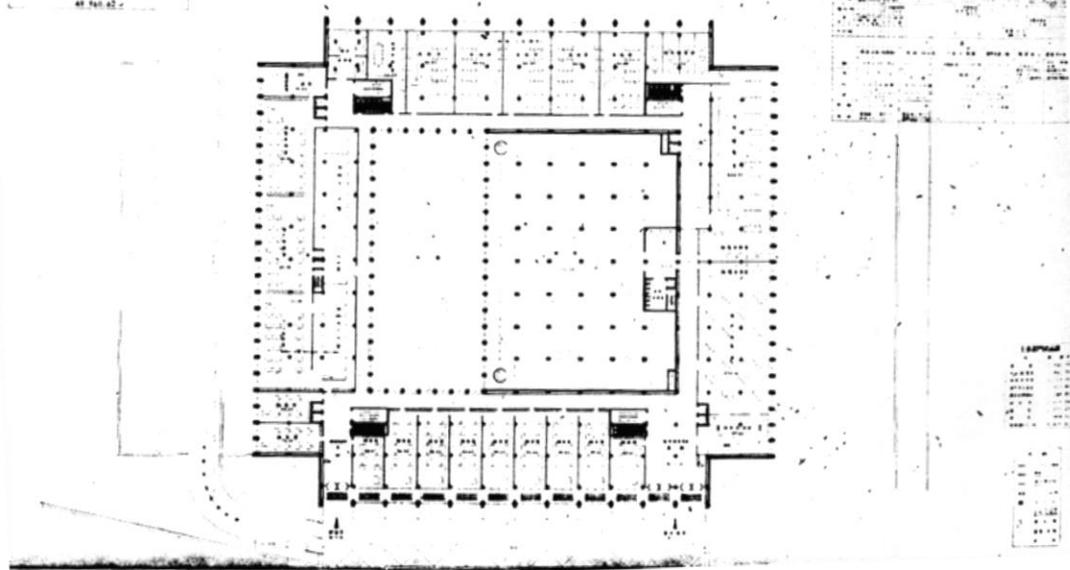


1 階平面図

2 階平面図

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----



『国立国会図書館三十年史』はこの間のことを「幾多のむずかしい局面を経て」²³¹と言葉を濁すが、MIDO 同人の田中誠が明らかにしているところによると、その経過は以下のようなものであった。

そもその発端は、募集規定中の当選者の設計への関与を認めない条文が問題になった際に、建築学会談話室での一部の建築家代表と館長の会合の結果、「基本設計及び実施設計に関しては、当選者を当該建築の設計者として関与せしめるよう、また設計変更等の場合は、設計者の意見を十分配慮するよう努力する」²³²という言質を引き出しただけで妥結し、その内容に具体性が欠けていたことにある。²³³

〔昭和〕29年の7月、当選者として図書館当局との第一回会合の際、我々としては当然最大の関心事として、此の参与の程度の問題を持ち出して、これに対して、明瞭な回答を要求した。処が図書館側からは設計競技に附する以前から決定されていた根本方針として、

1) 「基本設計は国立国会図書館がこれをまとめる責任を持ち、この基本設計に基づく実施設計は建設省が担当する」という事

2) 基本設計及び実施設計を外部に委託するための費用については、既往に何等予算措置がなされていない事

3) 募集当時の建物の規模は15,000坪であつたが、実際には第一次計画を8,000坪とし、将来15,000坪に増築する方針で、8,000坪の計画の中に図書館の機能を一応全部果たし得るように立案せねばならぬ事、

此の三つの重大な点が明らかにされた。斯くの如き重要な事項は当然競技設計の規程の中に明瞭に記載すべき性質のものであるが、我々としては紛糾を避ける意味もあつて、一応このような事態に出来るだけ即応する立場をとり、取り敢えず「基本設計だけは当選者に委せて貰いたい、実施設計^{マダ}えの関与の問題はさ程重要とは見ない、相談相手（consulting architect）の程度でもやむを得ない」と言う申し入れをした。図書館側はこれに対して主旨としての反対は表明せず、基本設計に要する費用を算出せよとの事であつた。

〔中略、基本設計費は設計監理協会の規定に基づいて1232万円と算出したが〕

処が大蔵省ではこれに対して

1) 競技設計の応募案は当然基本設計である。

2) 若し改めて基本設計を作る必要があるならば、企画の当初から、これに要する費用については、予算要求をなして置かるべきであつた。

3) 仮に改めて設計委託費を必要とするとした場合でも、設計監理協会制定の規定は法律でないから、大蔵省としてはこれに従う義務はない。

と言つた見解をとり、前期要求額を全然受付ようとはせず、29年10月になつて200万円ならば工事費の転用を認めるがそれ以上の要求には応じないとの回答があつたもので、図書館側は大蔵省の強硬な態度に屈して、これを受諾し我々に対しては、此の間の事情を明かにすると共に、将来工事費に附随する事務費の中から、総額400万円程度は支払うから、表向きは此の200万円の基本設計を引受けるようにと再三の申入れがあり、我々がこれに応じないまま、30年の4月に到つた。

〔中略〕

され此の200万円は昭和28年度よりの繰越金であつたため、4月には図書館としては此の金額を不要額とするかを最終的に決定せねばならず、我々に対して最後通牒的の申入れがあつ

²³¹ 『国立国会図書館三十年史』（前掲）、p.82

²³² 『国立国会図書館三十年史』（前掲）、pp.78-79

²³³ 田中誠「国立国会図書館問題の経過」『設計と監理』1(4)、1955年10月号、p.2

た。我々は各方面への影響、つまり審査員（建築家の）、建設省の建築か、それに図書館建築部の立場等を充分検討はしたが、一時的に直接関係者に多少の迷惑をかける事はあつても、将来に重大な禍根を残すよりは良いとの認識に立つて、此の時明確に此の金額の受取りを拒絶した。我々としては「当選者としての権利は放棄しない」と言い、図書館では「辞退と見做す」との一方的な言分を残して物別れとなつた。²³⁴

基本設計料をめぐる協議が不調であることは、1955年のはじめには一般にも伝えられていた²³⁵。吉川は、この頃日本建築設計監理協会の展覧会委員を務めており（第1章第3節）、この間の実情について漏れ聞くところもあったであろう。

吉川はこの問題に直接関係する立場にあつたわけではないが、大いに感じる場所があつたらしく、1955年5月30日、金森図書館長に陳情書を提出し、翌31日には中根副館長宛に申し送られた²³⁶。

この陳情の内容は明らかでないが、設計監理協会では「その時期が適当でなく、本会の会員規約違反していることを通告し一応会長から戒告することに決定」²³⁷し、7月11日に「吉川清作氏の来所を求め、中村〔傳治〕会長、石原〔信之〕常務理事等が一応同氏の陳述を聴き、それを書面として提出するよう依頼し提出せられたが、文意不明確の点もあり本会においても十分調査の上さらに同氏の説明を求めることにした」²³⁸。11月の理事会では、会長交代に伴い「山本〔寿郎〕会長の名を以つて文章で、遺憾の意を申し送ること」²³⁹となり、12月5日に「会長より会員吉川清作氏に対し、国会図書館設計依頼に関して同士のつた行動は会員規約にもとり甚だ遺憾であるから今後充分自重されたい旨書面で申送った」²⁴⁰。

この件については建築界でも相当な反発を買つたらしく、神代雄一郎からは「〔この作家には〕なにか一本大切なものが欠けているように思われる」と言われ²⁴¹、山口文象からは「国会図書館に関する噂が本当だとすれば彼の如きは建築家という呼称をやめていただきたい」と非常に辛辣な批難を浴びている²⁴²。

吉川が基本設計料問題をめぐって、何を考えて、何を求めて陳情したかを直接示す資料はない。しかし、このような建築界の潮流の中にあつて、なにがしかの違和感を覚えていたらしいことはわかる。折しも吉川は、この騒動のさなかに、「乞食の家」という作品を提示して、やはり批判を浴びている。この2つは当然、同じ問題意識の中にあつただろう。国会図書館において吉川が訴えようとした内容は、この「乞食の家」の検討の中に求めなければならない。このことは次節で検討しよう。

²³⁴ 田中 1955:2-4。下線強調は原文ママ

²³⁵ 「CURRENT NEWS:国会図書館の設計料問題」『建築文化』(99)、1955年2月号、p.46

²³⁶ 「本会記事」『設計と監理』1(1)、1955年、p.46

²³⁷ 同前

²³⁸ 「本会記事」『設計と監理』1(4)、1955年、p.39

²³⁹ 「本会記事」『設計と監理』2(5)、1956年、p.39

²⁴⁰ 同前

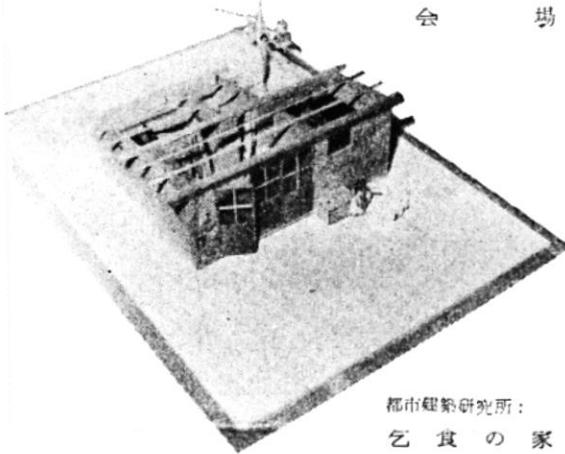
²⁴¹ 神代雄一郎「コジキの家と坐れぬ椅子：建築展覧会のありかたを考へてみる」『建築文化』10(11)、1955年11月号、p.3

²⁴² 山口文象による年末アンケートへの回答『新建築』1955年12月号、p.65

第20節：「乞食の家」（第5回建築サロン出品作品）—1955年



会場



都市建築研究所：
乞食の家



乞食の家にいる人達

図 217-219 建築サロン会場風景、乞食の家、乞食の家に
見ている人達

第1項：「乞食の家」について

「乞食の家」は、日本建築監理協会が主催する第5回建築サロンに出品された作品である。建築サロンとは、デパートに会場を借りた一般向けの建築展覧会で、会員事務所の作品と、建材業者のサンプル展示で構成されていた。吉川は、1955年度の建築展覧会委員であり、運営を直接担う立場にあった²⁴³。第5回建築サロンは、日本橋三越7階で1955年10月4日から9日まで、その後愛知県文化会館で同年12月7日から12日まで開催された²⁴⁴。

その中で、吉川が提示した「乞食の家」は、来場者の注目を浴び、新聞でも取り上げられた²⁴⁵。その詳細は断片的にしか伝えられていないが、総合すると「古煉瓦造ではあるが5坪で6万円4人まで住めるという瀟洒な感じの『人間生存最低限の住宅』をうたつた」小住宅で、『人間がいかに小さなスペースの中で生存できるか、又それがいかに簡単に建築できるか』を追求したものであり『住宅問題への一つの新しい道を切開くことになる』と信じていた²⁴⁶。

先の国会図書館基本設計料問題で揺れる最中に発表されたこの作品は、「間借生活にくたびれた市民の心を休ませ、文字通り『狭いながらも』の楽しい夢を描かせてくれるのにこよないものであつた」²⁴⁷が、建築界では好意的に受け止められず、批判を受けた。神代雄一郎は次のように述べる。

「その一つは建築サロンの「コジキの家」の吉川清作氏である。問題はそれが新聞でも話題となり、会場でも人を集めたにもか

²⁴³ 『設計と監理』2(7)、1956年、p.36 役員名簿による

²⁴⁴ 「1955 建築サロン 記録」『設計と監理』2(5)、1956年、pp.33-35

²⁴⁵ 神代 1955:3。主要な全国紙を調査したが、該当する新聞記事は発見できなかった。

²⁴⁶ 一言居士「乞食の家」『新建築』1956年1月号、p.9

²⁴⁷ 同前

かわらず、建築家には一笑にふされるようなものだというところにある。僕はある建築家のあつまりで「この頃のコジキは6万円という金をもつてるのだろうか、これが6万円をもっているものに対する建築家の提案だろうか」といつて、この出品に対する僕のクソマジメな態度が失笑を買ったのをお知らせしておこうと思う。作者ははじめから人を喰つてかかっているというのである。これが6坪住宅に融資するといつた、スラムをつくるような住宅政策を助長するものだ、などとマジメに考えるのはすべて作者の思うツポにおちるものだというのである。しかし僕は、同じ建築家の出品物を一笑にふさなければならぬ建築家をあわれに思うのである。建築家には建築家の社会的地位を通じて、互いにある相互扶助が存在すると僕は思っている。日本のように、建築家の仕事がまだまだ一般に認められていないようなところでは、一層、「建築家とはこんなものか」と、さげすまれたくないものである。おなじ作家が先の国会図書館の設計料問題のときに取つた態度、また同氏がやっている女子建築研究所などの内容などを考えあわせると、なにか一本大切なものが欠けているように思われる。建築外の人から「コジキの家」についての意見を求められたとき、僕たち建築家は一体何と答えたらいいのだろうか……。」

248

また、『新建築』読者欄にも、匿名の人物からの手厳しい批判がある。

かつて、新制作展に出品された木造のローコストハウスが多数の耳目を集めながらも「雨風の心配」にさらされたことを思い出す。最小限住居の追求は必要だし、ローコストも大いに研究されねばならぬ。しかし、設計者はこのような作品を提示することが現在の世の中でどんな意味をもつてくるかを考えたことがあるだろうか、政府の6坪住宅に非難が集中し、住宅問題に対する関心がようやく高まつて来ているとき、この5坪住居は、たとえいかに苦心(?)してつくつたものでもジャーナリズムに話題を提供し、事務所の宣伝に役立つものでこそあれ、住居への正しい理解を深めることや建築文化の向上とは無縁である。²⁴⁹

さらに、かつて新制作展で雨風の心配にさらされるローコストハウスを提案した張本人である山口文象からの非難は「吉川清作氏のコジキの家は今年度馬鹿の骨頂でしょう」²⁵⁰と非常に辛辣である。

この背景には、政府が改善の進まない戦後の住宅難に対応するために打ち出した478万戸の建設計画（鳩山内閣による住宅建設十箇年計画、昭和30年）に伴い計画された6坪の母子住宅案が批判にさらされていたことがあるらしい²⁵¹。

しかしながら、「乞食の家」におけるローコスト住宅の提示を、単に政府の政策に迎合して最小限住宅を目指したものとみるのは適当であろうか。「乞食の家」を、国立国会図書館の基本設計料問題と併せてみるならば、建築界への吉川の憤りの現れとしても読み取りうるだろう。

²⁴⁸ 神代 1955:3

²⁴⁹ 一言居士「乞食の家」『新建築』1956年1月号、p.9

²⁵⁰ 山口 1955:65

²⁵¹ 例えば幸島礼吉「六坪の母子住宅：“安かろう、せまかろう”でよいか……」『朝日新聞』（東京）、1955年5月26日（朝刊）、p.3

第2項：「乞食の家」と国立国会図書館をめぐる一「建築の主体性」

第19章第3項でみたように、「35億の国民の血税を使って成り立つ建算」の国会図書館は、建築家の著作権確立運動の道具となってしまった。そこにおいて問題となったのは、結局のところ、1等当選案が実現されるかどうかであり、そのために幾ら支払われるかということであった。

しかし、市民のための建築は、決して、建築家の職能を確立することによって生まれるのではない。建築著作権運動を、建築の民主化という文脈から取り上げるとき、それは建築設計という行為・建築家という存在そのものが、ひどく特権的であるという事実を胡麻化しているともいえるだろう。それは一般市民に対して建築を開くものではなく、建築家の中における機会均等を目指すものだからである。

吉川はこのような国会図書館をめぐる一連の騒動を、忸怩たる思いで見えていたのではないだろうか。それが建築家の保身のための道具となっていることを嘆き、金額の大小の争いに帰結していることに憤ったのではなからうか。

「乞食の家」は、建築家不在の作品である。それは、居住者が古レンガを拾い集め、焼トタンを拾い集めることによって成り立つ住居である。ここで「乞食」は、自身の家のために素材をあつめ、行動する主体として想起されている。彼は困窮しており、周囲から蔑まれることもあるが、だからこそ一戸の住居を必要としており、そのために努力すべき対象である。建築家は自身の理論を振りかざすのではなく、個々の人間それぞれの「主体的に自らの生活を組み立てる力」に奉仕することがその使命なのでないかというのが、吉川のここでの問題提起ではなかつたらうか。

「建築家には建築家の社会的地位を通じて、互いにある相互扶助が存在すると僕は思っている。日本のように、建築家の仕事がまだまだ一般に認められていないようなところでは、一層、『建築家とはこんなものか』と、さげすまれたくないものである」²⁵²と神代雄一郎が述べる時、それは強い階級意識に支えられており、そのために建築が担い得た多くの可能性が切り捨てられている。

吉川の「乞食の家」は、そのように切り捨てられた主題の再発見であり、建築界が、いつの間にか、対外的な闘争（社会改善）から自己の保身へと転化していく過程に対する激しい告発の弁であったのではなからうか。「乞食の家」は、そのような反省にもとづいた、人間の建築への転回ではなからうか。あるいは吉川の言葉を借りて「建築の主体性」の問題だと言ってもいいだろう。その主人はあくまで「乞食」なのである。

²⁵² 神代 1955:3。もっとも、その保守性をすべて神代の責に帰するのは行き過ぎであろう。当時、国会図書館コンペのような問題が起きたのは、建築界の不統一が原因であり、きちんとした職能組織（欧米のような Architect's Association）を持つことが、その唯一の解決であると感じて疑われなかったのである。その後、総評会館・造船会館における協働設計の失敗、五期会内部の「事務所派」と「自立派」の対立などを経て、建築界が一枚岩ではありえないことを悟るまで、しばらくの時間を要することになる。（参考：松井昭光、本田昭一『近代日本建築運動史』ドメス出版、2003年、p.171以下）

第21節：紫カントリークラブハウス—1961年

国立国会図書館と乞食の家をめぐる騒動からほどなくして吉川は設計から身を引く。最後に実現した作品であり、吉川の作品の中で最も大規模な紫カントリークラブハウスにおいては、ファサードをシンメトリーでまとめながらも、下総の自然の中にそのおおらかな造形を見せている。

第1節：紫カントリークラブハウスすみれコース—1961年

紫カントリークラブは千葉県野田市にあるゴルフ場である。1961（昭和36）年4月にすみれコースが、同年8月にあやめコースが開場した²⁵³。そのうち、すみれコースクラブハウスは、実現したことが知られる吉川の作品の中ではもっとも規模が大きい。

紫カントリークラブが野田市に誕生した経緯は、同クラブの30周年記念誌『むらさきの30年』によると以下のようなものであった。

紫カントリー・クラブの誕生のきっかけになったのは昭和34年1月、地主たちが野田市の市議会議長を勤め、野田醤油の監査役をしていた茂木七郎治氏（現紫カントリー・クラブ理事長）への陳情であった。

当時を知る人の話によると、野田にはすでに千葉カントリー・クラブの野田コースと川間コースの二つがあり、やれ「きょうは巨人軍の川上選手がきていた」とか、「千葉茂選手も見えていた」といった具合にプロ野球選手や芸能人、それに財界の名士たちが訪れていて、ゴルフ場ができたというだけで何となく活気を見せるようになっていた。そんなことから地主たちも広大な山林を遊ばせておくことはないじゃないか、知名人、都会的な考え方の人が大勢くればもっと刺激を受けて、市民の民主化、活性化に役立つのではないか、ということになって、市民から絶大な信頼を受けていた前記、茂木七郎治氏に相談をもちかけたというのがそもそもの発端だとしている。

この相談を受けた茂木氏は、同じ千葉カントリー・クラブのメンバーで、東都製鋼社長の藤川一秋氏の相談役として知られていた渡辺喜三郎氏にこの話を伝えた。茂木氏は以前、渡辺氏から「藤川さんがゴルフ場をもちたがっている」という話を聞いていたからである。

ここで茂木氏と藤川氏が結びつき、やがて、この計画に藤川氏の読売新聞社時代の盟友、竹内四郎報知新聞社社長が加わる。藤川氏は当時、鉄鋼大手の東都製鋼の御大として君臨していたが、その藤川氏は若い頃、読売新聞社に一時籍を置いたことがあり、そこで竹内四郎氏と知り合ったといわれている。

竹内氏もまた当時スポーツ新聞としてはトップの販売部数を誇る報知新聞社の社長の職にあったが、親会社の読売新聞社がすでに東京と大阪にゴルフ・コースを所有していたこともあって、報知新聞も親会社同様、ゴルフ・コースをもちたいという希望を胸に秘めていた。スポーツ新聞社の社長であれば、そういう希望をもつのも当然であるし、氏自身も「いつかゴルフはスポーツの中でもメインになる」とにらんでいただけに、盟友藤川氏からのこの誘いに二つ返事で参画することに決めたといわれている。

²⁵³ 紫カントリークラブすみれコース「クラブ沿革」<http://www.murasaki-cc.co.jp/sumire/history.html>、2017年11月3日閲覧。

こうして茂木氏を窓口とする地元の野田、東都製鋼社長藤川氏、報知新聞社長竹内氏の三実力者が結び付いたわけである。²⁵⁴

吉川は、報知新聞社とは戦前を中心に縁があったほか、社主である藤川一秋邸を 1952 年に手掛けている。すみれコースには、各ホールのティーグラウンド付近に異なる動物像が置かれており、一つの特徴をなしているが、これらを彫刻家の今里龍生に依頼したのは藤川であるという²⁵⁵ので、建物についても同じように藤川から吉川に依頼があったものであろう。

この建物については、吉川の言があるので、それを引こう。

緑一色の芝の陽光満つる中でクラブをふるうゴルフは、リクリエーションの最良のものである。そのゴルフ場の中のクラブハウスの建築とその施設はその趣旨を生かした設計であることは当然である。

紫カントリークラブハウスの設計は、広々としたゴルフ場のどんな遠いところかでも望景でき、かつ親しみを与え、さらに喜びをかんきするハウスの外形と色彩を与えることを考えた。そのためリズムミカルな三角屋根をかたどり、屋根にはピンクを加味する親しめる赤色として緑のコースとの階調をもたせた。

この三角屋根のアウトラインはまた紫カントリークラブの頭文字をも併せて表す含みをもっている。

〔中略〕

三角のがくぶちで向かい側の青空を見せる 3 階のスペースは、少しも実用性を加味しない最高価なスペースである。それは設計者の喜びである。²⁵⁶

明るく清潔な芝生は、吉川が特に愛好したものであり、戦前の震災記念建造物コンペ案、朝日住宅から、戦後の藤川一秋邸に至るまで、度々登場している。紫カントリーにおいて、まさに芝一面の環境の中に設計できたことは、特に吉川をして喜ばせたであろうことは想像に難くない。

第 2 節：紫カントリークラブハウスあやめコース—1961 年

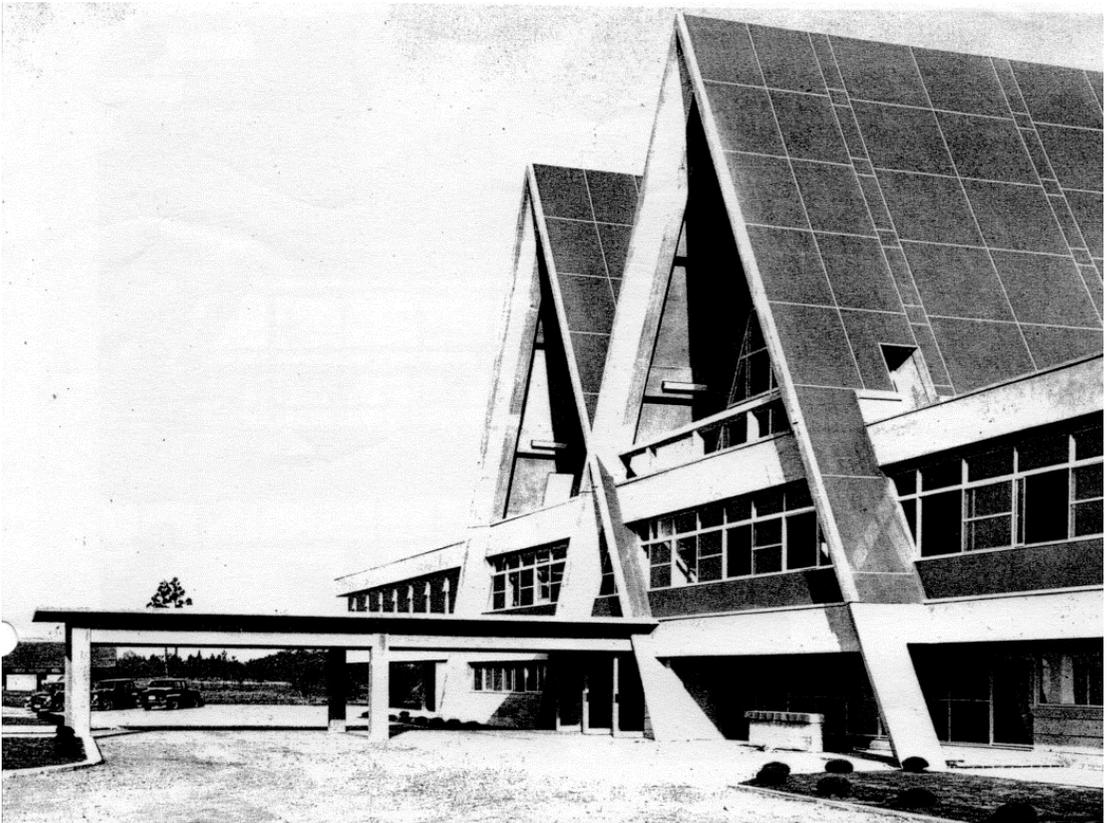
すみれコースとは対照的に、大きな円弧を描く屋根が特徴的な建物である。現在のあやめコースクラブハウス（紫あやめ 36）の南隣にあったが、1984 年頃に建て替えられ、現存しない²⁵⁷。

²⁵⁴ 紫カントリークラブ「すみれコースの 30 年：誕生から 30 周年まで紫 CC の歩んだ道」『むらさきの 30 年』非売品、1991 年、pp.50-51

²⁵⁵ 『『すみれ』の動物像誕生秘話：若さと気迫で完成させた 18 の動物たち』同前、p.69

²⁵⁶ 「紫カントリークラブ・ハウス」『新建築』36(6)、1961 年 6 月号、p.68

²⁵⁷ 1984 年撮影の国土地理院航空写真（CKT842-C4-42）に、建替工事の様子が映り込んでいる。



紫カントリークラブハウス（すみれコース）

設計：都市建築研究所（吉川清作・窪田保彦・吉川晴夫）

施工：株式会社 竹中工務店

竣工：1961（昭和36）年

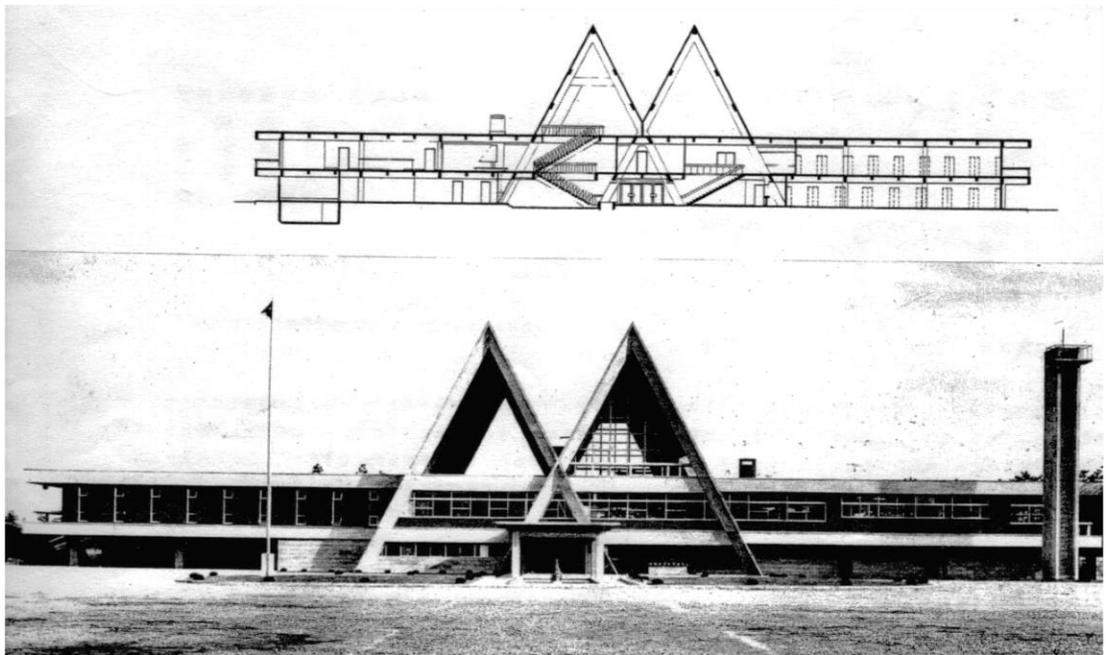
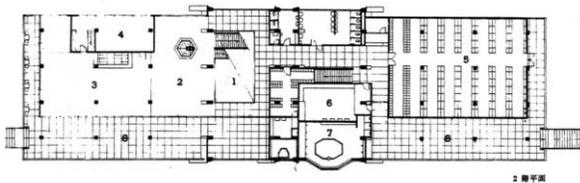
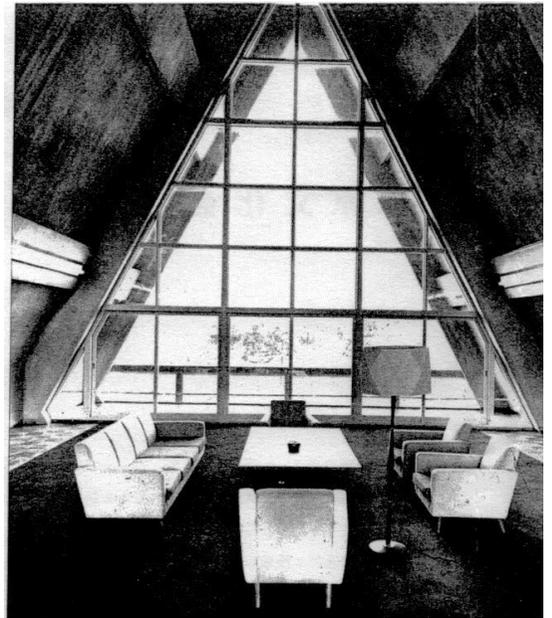
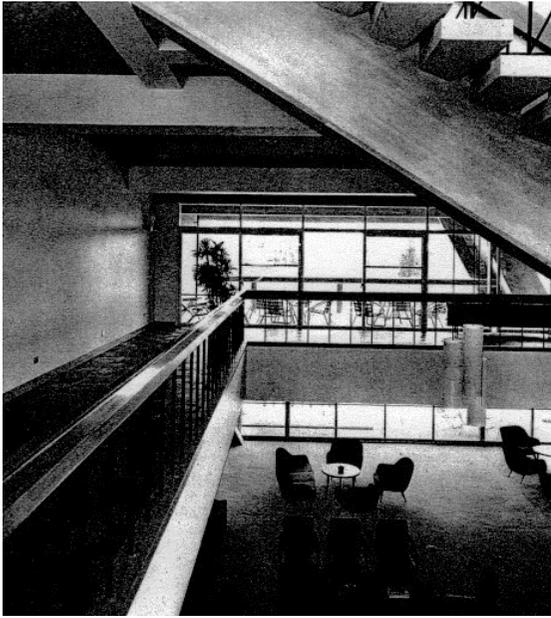
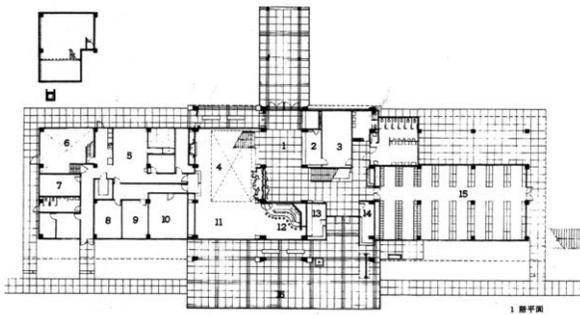


図 220（上） 北側外観、図 221-222（下） 断面図・北側正面



- 2 階 1 吹抜け
- 2 ロビー
- 3 食堂
- 4 廊
- 5 コッケー室
- 6 ボイラー室上部
- 7 電気室
- 8 理容室
- 9 会長・理事室
- 10 小委員会
- 11 社交室
- 12 バー
- 13 プログラム室
- 14 キング・マスター
- 15 コッケー室
- 16 クラス
- 17 自転車庫



- 1 階 1 玄関ホール
- 2 フロント
- 3 事務室
- 4 上層吹抜け
- 5 役員会議室
- 6 ボイラー室上部
- 7 電気室
- 8 理容室
- 9 会長・理事室
- 10 小委員会
- 11 社交室
- 12 バー
- 13 プログラム室
- 14 キング・マスター
- 15 コッケー室
- 16 クラス
- 17 自転車庫

図 223 (左上) 1 階ロビー吹抜
 図 224 (右上) 3 階特別室 (現在の様子は口絵 7 を参照)
 図 225 (中左) 1 階ロビー現況
 図 226 (中右) 2 階プライベートルーム現況 (旧浴室)
 図 227 (下左) 竣工平面図
 現況写真はいずれも 2017 年



紫カントリークラブハウス (あやめコース)

設計：都市建築研究所

(吉川清作・窪田保彦・吉川晴夫)

施工：小原建設 株式会社

竣工：1961 (昭和 36) 年

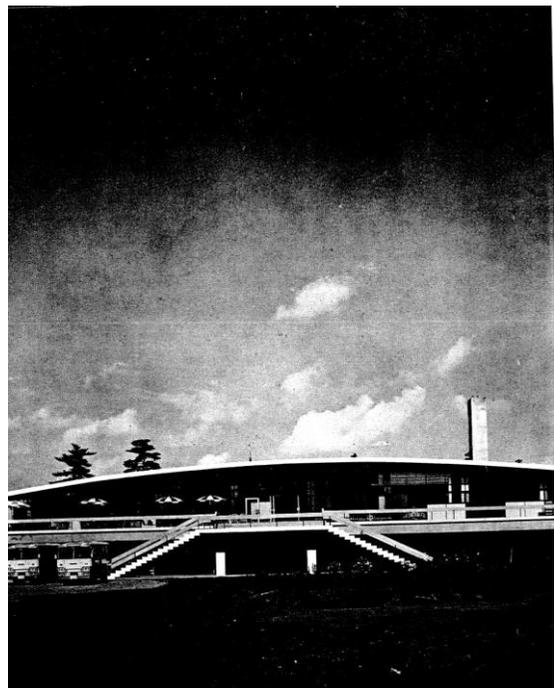


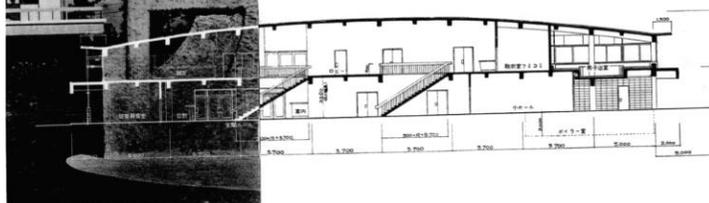
図 228 (上) 南東側全景

図 229 (左) 南側正面からみる



図 230 (左上) 南側階段
 図 231 (左中) 北側外観
 図 232 (左下) 現在のあやめコースク
 ラブハウス (紫あやめ 36)
 図 233-234 (右上・中) 内観
 図 235 (下中) 屋外彫刻
 図 236 (下右) 南側階段詳細
 図 237 (同) 断面図

左：南側外観 上：階段（2階へのアプローチ） 図 縦断面図
 left: S. side view above: approach to 2nd floor drawing: section



第2節：その他の作品

この他にも、吉川の作品であることが判明しているが、詳細が不明となっている作品がいくつか存在する。

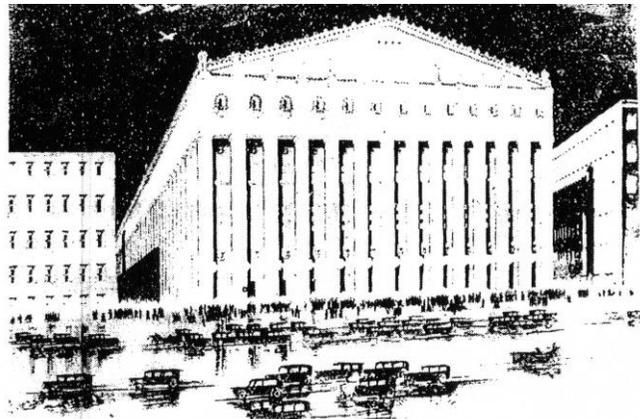
第1項：報知新聞社住宅懸賞図案（1等入選案）、浅草デパートメント設計、銀座劇場新築設計―

1929年以前

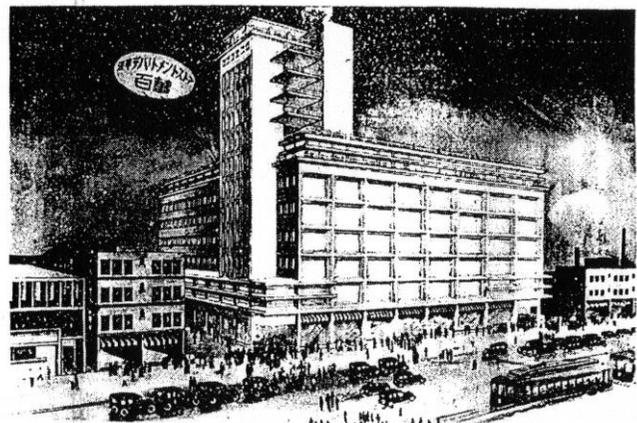
これらは『合理派建築』²⁵⁸の作品リスト中に取り上げられているものである。リストには村山・荻島の作品も含まれているが、掲載順序より吉川の作品であることは間違いないと思われる。

そのうち「報知新聞社住宅懸賞図案（一等当選）」については、リストの最初に挙げられていることからかなり古いものと思われるが、その正確な年代は定かでない。1915（大正4）年秋には報知新聞上で「報知懸賞住家設計図案」と題した設計競技が開催されているが、関連はなかった²⁵⁹。よって、吉川が当選したという住宅懸賞が何であったかは、未だ判明していない。ただし、吉川が報知新聞社主催の設計競技に当選したこと自体は、東京市庁舎コンペ当選時の新聞記事にも記載があり、また、1934（昭和9）年11-12月に募集された報知新聞社懸賞募集「山の住宅」では吉川が審査員を務めている²⁶⁰ことから、間違いないと思われる。時期としては、このリストが作成された1929年までのどこかの時点であるとしたか限定できない。

「浅草デパートメント設計」および「銀座劇場新築設計」もリストの頭にある作品で、吉川の作品中最初期にあたると思われるが、具体的な時期については不明である。いずれも透視図1枚のみが知られている。



銀座劇場



浅草デパートメント

図238（上）銀座劇場、図239（下）浅草デパートメント

²⁵⁸ 『合理派建築』（前掲）

²⁵⁹ 「報知懸賞住家設計図案」は1915（大正4）年8月28日の報知新聞上に要項掲載、同年9月30日締め切り。一等村上晴吾、二等堀内恒夫、三等阿部太郎、選外松淵清助、荒井敏郎、選外佳作は横田、福田安三郎、林道行、青木慎一、片倉豊吉、伊東東次郎、中沢幸市、清水留吉、前田佐一郎、栃木県庁土木営繕、岡田鷹谷、須田正次郎、小山立志、忍見平造。応募総数は561通。コンペへの応募案のうち佳作は、翌年出版された『報知懸賞住家設計図案』（佐藤功一編、大倉書店、1916）に匿名で収録された。

²⁶⁰ 報知新聞社編『山の住宅』洪洋社、1935年

銀座劇場について、1928年の新聞記事によると「百萬圓を投じて地下室とも四階建の鉄筋コンクリート總建坪二千八百六十二坪のくわう荘なものでこれも觀客席三千百人といふ設計」²⁶¹であったが、周囲に競合する映画館が多く計画は難航したらしい²⁶²。その後、1938年12月になってようやく「銀座二丁目グランド銀座跡」に開業するが、これは吉川のデザインとは異なるものようである。

浅草デパートメントについては、その詳細は明らかにならなかった。

第2項：国際コンクール出品作品（住宅の合理化と小・中住宅）—1950年建築サロン出品

『設計と監理』中の、1950年建築サロンを伝える記事²⁶³の中で、吉川の作品として触れられている。テーマは住宅の合理化と小中住宅であり、国際コンクールに出品されたという。その他の詳細は不明である。

なお、渡邊朱美さんによると、吉川は何らかの国際コンクールに入賞したことがあり、その際に撮影された、吉川が笑顔で授賞式に臨む写真を見たことがあるというが、それはこの時のものであるかもしれない。

第3項：伊東の別荘—1961年以前

吉川清子さんによると、吉川は伊東に別荘を所有していた。切妻屋根を伏せたような三角形をしており、これも吉川の作品であったという。かなり古いものであり、終戦直後まで遡るかもしれないというが、時期ははっきりしない。

第4項：星野温泉の客室棟—時期不詳

吉川は、星野温泉が今のように大きくなる前に、その建物を手掛けたことがあったという。渡邊朱美さんは、吉川清作（もしくは晴夫さん）と吉島保と三人で、現場に出かけたことがあった。池のほとりの、客室棟のような建物であったという。また、吉川清子さんによると、星野温泉の何某からもらった聖書が家に置いてあったという。

第5項：藤山愛一郎邸—時期不詳

渡邊朱美さんの回顧によると、吉川は政治家・実業家の藤山愛一郎²⁶⁴邸も手掛けていた。渡邊朱美さんはこの建物を訪れたことがあり、純和風で、増築のようであったという。温室もあった。

²⁶¹ 「我れ劣らじと出来る大劇場」『朝日新聞』1928年8月4日、p.2

²⁶² 「丸の内劇場と銀座劇場との合併は喧嘩別れ」『読売新聞』1928年10月26日、p.12

²⁶³ 「1950年建築サロン」『建築文化』（48）、1950年11月号、pp.30-31

²⁶⁴ 「藤山愛一郎(1897～1985) 父は藤山雷太。慶応義塾大学法学部中退。大日本製糖、日東化学工業社長。昭和16年(1941)日本商工会議所会頭に就任。戦後は、経済同友会代表幹事、日本航空会長も務めた。公職追放解除後、32年民間出身で岸内閣の外相となり、日米安保条約の改定交渉にあたる。33年自民党から出馬し衆議院議員当選。以後当選6回。経済企画庁長官、自民党総務会長を歴任。池田勇人、佐藤栄作と総裁の座を争ったが敗れた。日中貿易促進議員連盟、日中国交回復促進議員連盟の会長を務め、日中関係の改善に尽力した。」『近代日本人の肖像』国会図書館 <http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/382.html?cat=56>、2017年11月4日閲覧

第23節：小結

これまで吉川の作品について時系列順に検討を加えてきた。以下では、本章で取り上げた事柄のうち、重要な事項について整理する。

第1項：葵館での協働

第3節第2項では、葵館における協働のありかたについて、意匠上の特徴より解明することを試みた。その結果、次のような結論を得た。

① 荻島安二は正面レリーフ以外に、客席背面、客席仕切り、喫煙室柱などのデザインに関与しているらしいことが推定できる。

② 村山知義は、緞帳、客席背面壁画、廊下壁画、喫煙室のほかに、正面歩道上の柱のデザインを担った可能性がある。

③ 吉川清作は、その余の建物全般を担ったものと思われる。特に客席側面上部の連続アーチは、吉川のデザインになるものと考えてよい。

同節第3項では、吉川清作・荻島安二・村山知義が葵館の仕事に参加した時期について、葵館における担当箇所の相違より明らかにすることを試みた。その結果、吉川と荻島の方が先行し、村山の参加は工事が佳境に入ってからであるとの結論に至った。

第2項：二重生活の克服

吉川の主要な問題意識として、「和洋の二重生活をいかに克服するか」ということが挙げられる。このことは、戦前の『現代の住宅』から、戦後の一虎園に至るまで、形を変えながら通底するテーマとして存在していた。本項で改めて整理しよう。

(1) 様式混交への挑戦—『現代の住宅』

まず、和洋の二重生活は、端的に様式上の問題として立ち現れた。在来の和風木造建築と外来の洋風建築をいかに調和させるか（あるいはどちらを重視するか）という問題は、明治期の議院建築における様式選択問題に端を発して、『現代の住宅』が刊行された大正期にも建築界の主要な問題であった。これに対し、吉川は「和と洋を併置する」、「和を洋で包む」、「洋を和で包む」、「面によって様式を変える」といった様々な方法を住宅に適用し、この二者を調停することを試みた。（第1節）

(2) 新生活への期待—「結婚住宅」の提唱

しかし、このような二重生活を解決する「合理的『点』」を探る試みは必ずしも成功したわけではなかった。吉川は、その理由について、「住居の主体」である居住者が保守的であるからであると考えた。

そこで吉川は、座式と立式の対立を調停する「合理的『点』」を求めのではなく、まだ柔軟な思考を持つ若者が購入できる安価な合理的住居を作ることにより、一気にこれを乗り越えようとした。（第11節第1項）

(3) 「住居の主体性」から離れて—一虎園での試み

戦後の一虎園で行われたのは、以上とは全く異なるアプローチである。「住居の主体」である居住者を想定しなければ、その生活の保守性も考慮する必要がなくなるのである。一虎園は、あくまで接客応接

のための座敷であったがゆえに、これらの問題を離れて、まったく純粋に近代的な和風住宅の設計に注力することが出来た。(第16節第2項)

第3項：建築の主体性—国立国会図書館基本設計料問題と「乞食の家」

国立国会図書館の基本設計料の額をめぐって、建築界と国会図書館・大蔵省の間で、学界をも巻き込んだ駆け引きが繰り返されていた時、吉川はそこからひとり抜け出して陳情書を提出した。その内容は明らかでないが、MIDO 同人案を実現させようとする建築界の努力に水を差すものであったと見え、それにより建築界の重鎮から痛烈な批判を浴びた。(第19節第3項)

しかしながら、同時期に発表された「乞食の家」の内容を併せて考えると、それは「建築の主体」がどこにあるかを問うものであったように思われる。「35億の国民の血税を使つて成り立つ建算であり、国民全体の共有物」であるはずの国会図書館が、建築家の職能を確立するための政争の具に成り下がっていることに気づいたとき、吉川はある悲しみと憤りを覚えたのではないだろうか。

「乞食の家」は、建築家不在の建築である。すなわち、その「建築の主体」は古レンガを集め、焼トタンを集める“乞食”である。しかし、建築の本質は、建築家の輝かしい理論の中に、図面のなかに、特権的地位の中にあるのではなく、貧しいなりに生活を向上させようとする、その地道な努力の中に存在するのではないか—それが吉川の間いかけではなかつただろうか。(第20節第2項)

第3章：合理派建築会結成史

吉川と荻島・村山の出会いについては、第2章第3節にて検討したほか、その協働になる作品については、第2章の個々の節で取り上げた。本章では、第2章で明らかになった事柄を踏まえて、合理派建築会の結成の経緯について仔細に検討する。

その中で重要になるのは、いずれも1929年に竣工した「山の手美容院」と「朝日住宅」である。

第1節：合理派建築会結成の前夜一山の手美容院

合理派建築会の結成の素地を用意した作品として、1929年初めに竣工した山の手美容院を考えたい。この作品は、第2章第8節でみたように、村山知義が設計を担当したものであり、細部に至るまで、デザインが透徹していることが伺える。本橋も「村山知義の建築作品として最も有名な作品であり、最も建築に携わることが出来た作品であったと思われる」²⁶⁵と評価している。

ところで、村山は建築教育を受けた人間ではなく、建築作品の設計施工にあたっては、建築技術者の何らかの支援が必要であったと思われる。事実、山の手美容院においても「請負師」が存在し、施工にあっていたことが知られる²⁶⁶。本橋は、これが吉川ではないかと推察するが、その当否はともかく、次のようなことが言えるだろう。

美術館の客席後壁のようにペンキで壁画を描くだけであれば、施工については特段の技術は要さないが、建築自体をデザインの対象として、高度な芸術性を備えた作品として実現するには、施工上の技術的な問題を解決する能力が必要である。特に丸窓・端部の曲面ガラスなどの、一般的でない意匠が要求される場合にはそうである。さらに、山の手美容院は、細長い鋭角の土地に3階建となっており、構造上の条件は非常に厳しいものがあった。このような条件下においては、特に十分な建築知識を持つ者が技術的な援助を行わなければ、意図したデザインを実現することはできなかつただろう。それを与えたのが「請負師」か、吉川か、それとも第三者か明らかではないが、村山は本作品の工事の中で、高度な建築設計・施工技術を目撃したはずである。

このような経験は、村山に、建築をして芸術として十全な質を持たせるためには、高度の建築技術・知識を有する人間を自らのうちに抱え込む必要を実感させたであろう。

第2節：合理派建築会結成の瞬間一朝日住宅設計

山の手美容室と時を同じくして、1929年5月に吉川が、朝日新聞社の中小住宅建築設計競技に1等入選した。この際の記事や『図案集』などには吉川以外の名前は見えないから、吉川が個人的に応募したことは、ほぼ間違いない。しかし、これが朝日新聞社の負担により、実際に建設されることを知った村山は、自身の建築活動を大々的に展開する好機ととらえただろう。そのために結成されたのが合理派建築会ではないだろうか。

合理派建築会の結成を主導したのが誰かを示す直接的な証拠はないが、少なくとも吉川清作が乗り気ではなかったことは、後年、「大震災直後、朝日新聞社主催の中小住宅図案を懸賞募集した際応募して、当選した案を東京郊外成城学園の朝日村に建設した。〔中略〕その時は、作者自らそのコンクリート住宅を施工しなければならぬ破目になつた」²⁶⁷と述べていることから知られる。

²⁶⁵ 本橋 2008:36

²⁶⁶ 同前

²⁶⁷ 吉川 1950:59。傍点強調は引用者。

荻島安二については、ブロードエイ、サイセリア、シルバースリッパーなど、銀座の 20 余りのカフェ・酒場の内装設計をしたことが知られており²⁶⁸、建築設計に意欲を持っていたことは考えられるが、自身で芸術団体を組織したことはなく、また、頼まれれば何でも引き受ける押しに弱い人物だった²⁶⁹。

以上のことからすると、団体結成を主導したのは、村山知義であると考えるのが妥当であろう。

その結成の契機にして当面の目標は朝日住宅 4 号型の施工を引受けることにあったのは明らかである。特に、電気工事まで引き受けていることは、施工に関する意欲が非常に強くあったことをうかがわせる。(第 2 章第 9 節)

想像するに、村山は、前節に挙げた経緯から、芸術性を持った高質な建築作品を作り出すためには、自身のうちに高度な建築技術を有する者を引き入れることが必要であることを認識しており、そのために、設計から施工までを一括して請け負える組織として、合理派建築会を立ち上げたのであろう。

また、朝日新聞社から施工を請け負うためには、相応の組織を持っていなければ信用が得られないという考えもあったかもしれない。

合理派建築会は「村山知義、荻島安二、吉川清作、江藤唯夫、藤松操一、関忠孝」がメンバーとして知られている。このうち、後者 3 名については未詳となっており、本橋 2008:21 では、「関忠孝」は「放射線の研究者」もしくは『『世界短編小説大系』の訳者』であると推測されていたが、次の記事よりこの二者が同一人物であることが判明した。

関忠孝（都職労教育宣傳部長）

明治から大正にかけて、朝日新聞社に三大記者と目される人達がいた。関如来、牧放浪、鳥井素川がそれで、皆非凡な識見と抱負を持った人達だったが、仲でも関如来は美術評論家として一家をなしていた。関忠孝はその息子である。弟妹には、声楽家の関鑑子、関種子、舞台照明家関忠果、関忠良などがいて、彼の血管には生来そうした芸術家、新聞記者の激しい血が流れているのである。にも拘らず、彼は永いこと大久保病院時代からレントゲン室あたりに燻つて、好きな酒ばかり飲んでいて。²⁷⁰

関は美術に強い関心を持っていたらしく、1924 年前後には『中央美術』に複数の論考を寄せている²⁷¹。

「江藤唯夫」「藤松操一」は現在まで未詳である。次節でみるように合理派建築会においては施工を強く意識していたことを考えると、施工関係の技術者であったかもしれない。

²⁶⁸ 前村 2005:36。付け加えると、ロリガン、マッターホルンも荻島の設計によるという（『合理派建築』（前掲）pp.4-5）。

²⁶⁹ 「君は頼まれれば何んでも引きうけて世話をして呉れた。〔中略〕君の友達の中には僕みたいなのが澤山みた。別の言葉でいへば君は被害者で僕は加害者であつたかと思ふ。」清水 1939:531-532。

²⁷⁰ 「人物素描」『都政人』都政人協会、1949 年 12 月号、p.14

²⁷¹ 関忠孝「帝展詣り」『中央美術』10(11)、1924 年 11 月号、pp.78-86 および同「二つの傾向」『中央美術』11(11)、1925 年 11 月号、pp.136-137

第3節：『合理派建築』再読—設計施工への意欲



図 240 『合理派建築』表紙

以上から、本橋が発見紹介した合理派建築会のリーフレットである『合理派建築』を再読してみたい。

表紙は、吉川清作の朝日住宅4号型の模型写真となっている。一見すると、これは不思議なことである。村山・荻島・吉川の作品の中で考えるならば、村山のバー・オララや山の手美容室の方が、芸術的にはふさわしいだろう。しかし、吉川の4号型が、合理派建築会が設計・施工を一貫して担った初めての作品であり、そして最新の作品であることを知っていれば、その理由はすぐに了解される。

また、発行年にも注目しよう。『合理派建築』の発行された1929年秋とは「朝日住宅展覧会」が開催された時期である。もう少し待てば、吉川の4号型の写真も掲載することができただろうが、そうしなかったのはなぜか。裏を返せば、それは、朝日住宅展覧会に間に合わせるために、このリーフレットが制作されたということである。これを片手に、村山らの主張したかったことは、恐らくこのようなことだったろう。

——私たちは、小さな住宅くらいなら、自分たちで設計から

施工までできるんです。実を言うと、この家も、自分たちで建てたのですよ、そうです、コンクリートを練るところから、電気工事まで、庭の設計も、もちろん——

だからこそ、『合理派建築』の表紙には、吉川の4号型の模型写真が自慢気に掲げられているのだ。そして、裏表紙に「建築設計」と同じくらい大きな文字で「工事施工」とあるのは、まったく伊達ではない。あとがきにも、その気合が窺える。

喫茶店、バー、美容院、レストラン、小店舗等の建築は、就中、新しく、美しく、客をチャームすることが必要です。

私達の全能力を特にこの方面に捧げたいと思ひます。建築する私達にとつても、盡きない興味と欣びがあるからです。

既に私達はかなり多くのカフェー、バー、美容院その他を設計し、施行し、各方面から認められてをります。前に掲げた私達の仕事を御覧下さい。僅かばかりの改造で、見違へるほど立派になつたものもあります。

どうぞ私達に、あなたの御用を仰せつけ下さい。改造や増築にも、御遠慮なく、私達を御相談相手におえらび下さい。

手のこんだのでも、簡単なのでも、荘重なのでも、軽快のでも、…私達は私達の全力を盡して、御役にたちたいと存じます。²⁷²

ここからは、村山の建築制作への意欲が切々と伝わってくる。特に商店建築を強く求めているのは、それまでの作品のうち大多数を占めるということもあろうが、荻島の得意分野であるマネキンなどを生かす意味もあっただろう。

²⁷² 「合理派建築會の趣旨と仕事」『合理派建築』（前掲）、p.9

その直後の 1930 年 5 月には、村山は治安維持法違反で逮捕されてしまい²⁷³、合理派建築会としての活動は終わったものと見えるが、少なくとも朝日住宅 4 号型において、その地歩の一步目を築いたのである。

第 4 節：小結

本章においては、合理派建築会の結成の素地および契機について考察し、以下の結論を得た。

①村山知義は、山の手美容室を代表とする諸建築作品の設計にあたって、芸術性を兼ね備えた高質な建築作品を実現するためには、高度な建築施工技術・知識が必要であることを痛感したものと思われ、それが合理派建築会結成の素地となったものと思われる。(第 1 節)

②合理派建築会は、吉川の設計した朝日住宅 4 号型が実際に建設されることを契機として、その施工を請け負うことを目的に結成されたものと思われる。特に電気設計までを請け負っていることは、設計施工への強い意識を感じさせる。(第 2 節)

③『合理派建築』において吉川の朝日住宅 4 号型が表紙に採用されたのは、合理派建築会において設計から施工まで一括して行った最初の作品であり、発行当時の最新の作品であったからである。『合理派建築』は、その表紙写真が模型写真であるところから見て、またその発行年より考えて、「朝日住宅展覧会」の会場にて配布することを考慮に入れて制作されたものとみられる。その文面からは、自身で設計施工を一括して担うことへの意欲が強く感じられる。(第 3 節)

²⁷³ 本橋 2008:24

第4章：吉川清作と人について

第1節：都市建築研究所の所員について

都市建築研究所に在籍していた所員としては吉川晴夫、吉島保、遠藤正巳、片岡靖忠、窪田保彦、岸本洋子、近藤洋子、田中温子、加藤友子、岩下綾子らの名前が知られている。

吉川晴夫は、吉川清作の長男であり、その後都市建築研究所を引き継ぐ人物である。

吉島保は大正頃から建築学会の准員となっており、その経歴を知ることができる。それによると、出身は工手学校（現 工学院大学）で、警視庁工手、日本郵船会社支店建築係を経て大正10年頃に曾禰中條建築事務所に入所している²⁷⁴。ちょうど吉川が在籍していた時期にあたり、この時に知り合ったものであろう。その後、昭和11年頃には石本建築事務所に移り、オリンピック視察のため3ヶ月余りをかけて訪欧している²⁷⁵。昭和14～18年までは関東軍経理部牡丹江派出所勤務となっている。いつ頃帰朝したかは定かでないが、古参の所員であったようであり、渡邊朱美さんの回顧によると、戦前から鶴見のアトリエ（第2章12節4項）に出入りしていたという。『コンクリート住宅図集』においては「コンクリート施工の要領」²⁷⁶と題した文章を寄せているほか、『建築文化』に「新しいコンクリート工法」²⁷⁷というアメリカの施工事情の紹介記事を書いており、主に技術的な側面を担当していたらしい。

遠藤正巳は浜松工業学校（現 静岡県立浜松工業高等学校）の出身で、大正13～昭和2年頃には東京市技師の職にあった²⁷⁸。もともと土木が専門だったのか橋梁デザインについての連載記事や、構造力学についての解説記事を雑誌に多く寄稿している。その後、昭和14年頃に建築学会の准員となったらしく姓名録に名前が見える。その時は山口文象（蚊象）建築事務所に勤務していたが、昭和18年には山口県光町光駅前山口文象建築事務所光支所勤務となっている。都市建築研究所に入所した時期は定かでないが、1950年の『コンクリート住宅図集』では、既に透視図を多く担当していたことが図中のサインから知られる（第2章第15節第2項）。設計能力も相応にあったようであり、1952年から1954年にかけて、個人名でS.T.邸²⁷⁹、N邸・Y邸²⁸⁰、高台の小住宅(RC-MH3)²⁸¹を発表している。

窪田和彦は最晩年まで吉川を支えた所員であり、「ルーフガーデンを持つF氏邸」（1952）から「紫カントリークラブハウスあやめ・すみれコース」（1961）まで名前が見える。特に、「Nさんの家」（1955）では、他の所員らの指導担当として名前があり、吉川の信頼を得ていたらしいことが知られる。都市建築事務

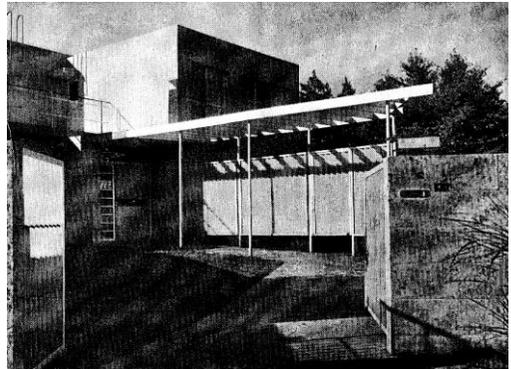


図 241 遠藤正巳「S.T.邸」（1952年）

²⁷⁴ 建築学会『建築学会会員住所姓名録』大正元年から昭和18年までによる

²⁷⁵ 吉島保「鷗洲の建築金物に就て」『建築設備』4(1)、1937年1月、pp.13-19

²⁷⁶ 吉島保「コンクリート施工の要領」『コンクリート住宅図集』（前掲）、p.63

²⁷⁷ 吉島保「新しいコンクリート工法」『建築文化』（42）、1950年5月号、pp.35-37

²⁷⁸ 遠藤正巳「メモ(1)」『都市工学』6(4)、1927年4月、pp.48-50 ほか雑誌記事より

²⁷⁹ 「S.T.邸」『建築文化』7(11)、1952年11月号、pp.18-21

²⁸⁰ 「低廉住宅二題」『建築文化』9(9)、1954年9月号、pp.22-23

²⁸¹ 遠藤正巳「高臺の小住宅」『建築文化』（89）、1954年4月号、pp.10-12、同「コンクリート小住宅・五反田」『国際建築』21(5)、1954年5月号、pp.42-43

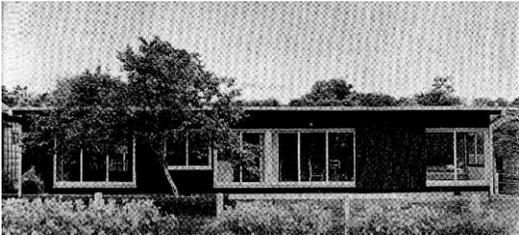


図 242-243 窪田保彦「喫茶店ピエン」(1956年)、
「安井君の家」(1954年)

所の仕事と並行して、他でも仕事を請け負っていたらしく、1954年に「安井君の家」²⁸²が個人名で発表されているほか、1956年には石川建築設計事務所において「喫茶店・ピエン」²⁸³を担当している。

片岡靖忠は『コンクリート住宅図集』において「アウトドアリビングを持つ住宅」²⁸⁴を担当しているほか、「木造住宅と同じ工費で建て得るコンクリート造住宅」という文章を寄せている²⁸⁵。担当した実作は明らかでない。

岸本洋子および田中温子は「ルーフガーデンを持つF氏邸」(1952)の担当者として知られる。特に岸本は色彩設計を担当していた(第2章17節参照)。同年の「一虎園」の担当者として近藤洋子の名があるが、これは岸本洋子と同一人物であろうか²⁸⁶。

岸本洋子、加藤友子、岩下綾子は「Nさんの家」(1955)を窪田保彦の指導の下に設計した人物であり、女子建築研究所の所員かとも思われる(第2章18節)。

なお、「ルーフガーデンのあるF氏邸」では岩本篤という人物も担当者の中にあるが²⁸⁷、これは施工を担った岩本建設株式会社の関係者と考えられる。

第2節：クライアントについて

吉川の交友範囲は非常に広がった。戦前から協働関係にあった村山知義・荻島安二に始まり、いずれも国会議員を務めたことのある佐藤三吉、藤川一秋、藤山愛一郎の3人の邸宅を設計しているほか、実業家である渡邊隆と懇意にしており、星野温泉の星野嘉助とも知り合いであった可能性がある(第2章第22節)。戦後の紫カントリークラブハウスの仕事を依頼されたのは、藤川一秋の紹介によるものと考えられる(第2章第21節)。

その他にも、写真家の勝田康雄、作曲家の高木東六など、多くの文化人とも知り合いであったことが知られる。次節に挙げる木曜会という会の存在もその一つである。

²⁸² 「安井君の家」『建築文化』9(7)、1954年7月号、p.29

²⁸³ 「喫茶店・ピエン」『建築文化』11(4)、1956年4月号、pp.26-27

²⁸⁴ 『コンクリート住宅図集』(前掲)、p.50

²⁸⁵ 『コンクリート住宅図集』(前掲)、p.63

²⁸⁶ 「一虎園」(前掲)、p.6

²⁸⁷ 「ルーフガーデンのあるF氏邸」(前掲)、p.15および『建築文化』1950年4月号、pp.32-33

第3節：文化人との付き合い—木曜会

その他に、鶴見に在住する文化人・財界人による社交団体として、「木曜会」という集まりがあった。吉川のほか、渡邊隆、高木東六、旭硝子社長の渡辺喜市²⁸⁸などが集い親睦を深めていたという²⁸⁹。地縁と人脈を軸にした吉川の交友関係の一端を窺うことができる。

第4節：小結

本章では、吉川清作とその周囲の人について個々に検討を加えた。第1節では、所員の在籍時期と担当作品について、第2節ではクライアントの側面から検討した。第3節では、木曜会と呼ばれる集まりの存在を述べた。必ずしも詳述出来たとは言えないが、これをもって攷筆したい。

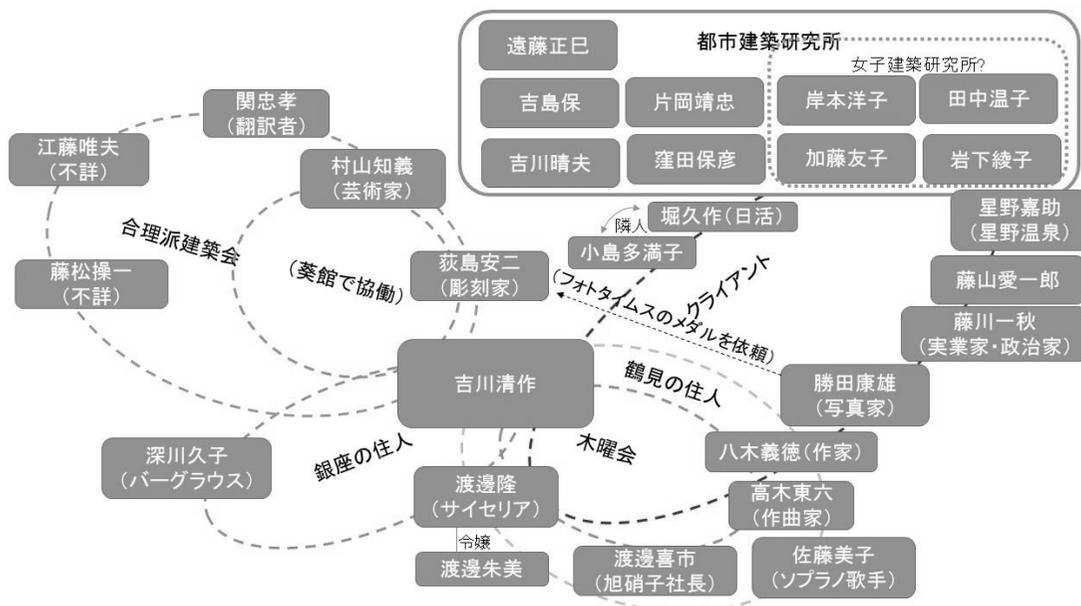


図 244 吉川清作 関連人物相関図

²⁸⁸ 渡辺喜市は、旭硝子の第8代社長を1950年6月～1952年2月まで務めた（「会社情報・製品情報」旭硝子株式会社、<http://www.agc-glass.com/ir/library/outline/pdf/sankou.pdf>、2017年11月5日閲覧）

²⁸⁹ 吉川清子さんによる

あとがき

本研究にあたっては、多くの方々にご協力いただきました。特に吉川清作氏の三男・敏夫氏の夫人である吉川清子様には、突然の訪問にも関わらずお話を聞かせ下さり、また何度も丁寧なお手紙をいただきました。

現在も吉川清作氏が設計した住宅にお住いの渡邊朱美様には、数次にわたりインタビューにご協力いただいたほか、貴重な写真を複写させていただきました。ここしばらくご体調がすぐれないとのことですが、ご快復を祈念して止みません。

一般社団法人 大和郷会 副理事長の伊東久信氏、会史編纂委員の岩間みどり様には、一緒に地図をめぐりながら吉川作品の敷地の特定にご協力いただいたほか、大部の資料をお譲りいただきました。

K 氏邸計画案に関しては有山房徳様に、星野温泉に関しては株式会社 星野リゾート広報の瀬田知子様に調査のお手間をお掛けしました。

紫カントリークラブすみれコース 副支配人の中村昭広様には、御多忙中にも関わらず、現在も改修を続けながら使い続けておられるクラブハウスの内部を見学・撮影させていただいたほか、資料閲覧の便宜をお取り計らいいただきました。

京都国立近代美術館の本橋仁さんには合理派建築会と村山知義について度々ご教示いただきました。

その他、所在地調査にあたって多くの方にお声がけをしましたが、その度に皆様に親切にいただきました。

皆様のご厚意に感謝いたします。

平成 29 年 12 月

落合 悠斗

参考文献

- Cees de Jong and Erik Mattie, *Architectural Competitions:1792-1949*, Taschen, London, 1994
- LSTY 「「サイゼリヤ」の由来について、僕が至った結論」『啓蒙かまと新聞』
<http://lsty.seesaa.net/article/235164980.html>、2018年3月21日閲覧
- 赤岩州五編『銀座 歴史地図散歩：明治・大正・昭和』草思社、2015年
- 有馬英次「過ぎたるは及ばざるが如し」『新建築』1955年11月号、p.75
- 安藤更生「銀座細見」『文学地誌「東京」叢書 第12巻』大空社、1992年
- アンデルセン「即興詩人」森鷗外訳『定本限定版 現代日本文学全集 13 森鷗外集（二）』筑摩書房、1967年（青空文庫所収、
http://www.aozora.gr.jp/cards/000019/files/4376_19283.html、2017年11月4日閲覧）
- 一言居士「乞食の家」『新建築』1956年1月号、p.9
- 五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』スカイドア、1995年
- 上田武夫「佐藤三吉：日本最初の外科医の泰斗」『郷土にかがやくひとびと』岐阜県、1970年
- 上野伊三郎「モダンマンネリズム」『インターナショナル建築』(2)、1930年、pp.3-5
- 牛原虚彦『虚彦映画譜 50年』鏡浦書房、1968年
- 遠藤正巳「橋梁と外観(1)」『土木建築雑誌』3(7)、1924年7月、pp.253-255
——「橋梁と外観(2)」『土木建築雑誌』3(8)、1924年8月、pp.302-304
——「橋梁と外観(3)」『土木建築雑誌』3(9)、1924年9月、pp.342-343
——「橋梁と外観(4)」『土木建築雑誌』3(10)、1924年10月、pp.381-382
——「橋梁と外観(5)」『土木建築雑誌』3(12)、1924年12月、pp.457-459
——「メモ(1)」『都市工学』6(4)、1927年4月、pp.48-50
——「メモ(2)」『都市工学』6(5)、1927年5月、頁数不明
——「メモ(3)」『都市工学』6(6)、1927年6月、pp.24-29
——「小住宅図譜」『新住宅』(12)、1948年2月号、pp.33-34
——「高臺の小住宅」『建築文化』(89)、1954年4月号、pp.10-12
——「コンクリート小住宅・五反田」『国際建築』21(5)、1954年5月号、pp.42-43
- 大川三雄、川嶋勝「建築専門出版社・洪洋社の出版活動について：その1 編者と出版物の変遷」『学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』日本建築学会、1997年、pp.93-94
- 大熊善邦先生関・吉川清作君案・洪洋社編集局編『現代の住宅』洪洋社、1920年
- 近江榮『日本近代における競技設計の成立と展開：近代建築史上における評価』日本大学博士論文、1970年
——『建築設計競技』鹿島出版会、1986年
- 小川信子「建築サロン展をみて」『住宅』1955年11月号、p.31
- 荻島安二「奉賛微絨展覧会彫刻室にての感想」『アトリエ』3(6)、1926年6月、pp.36-40
——「マネキン」『アトリエ』12(9)、1935年9月、pp.40-41
- 片岡靖忠「アウトドアリビングを持つ住宅」『建築文化』1950年4月、p.32
- 片山三男「明治・大正・昭和初期の道路交通史：二輪車を中心に」『国民経済雑誌』192(3)、2005年、pp.41-58
- 金子隆一「新興写真研究会についての試論」『東京都写真美術館紀要』(3)、2002年、pp.13-28
- 川上義弘「金属溶射被覆（メタリコン）に就て」『鉄と鋼』10(3)、1924年3月号、pp.147-159
- S・カンドウ述『文化の普遍性について：東西意識の超克（青年アジア協会叢書1）』青年アジア協会日本本部、1955年
- 蔵田周忠「『朝日住宅展』を見る」『朝日住宅写真集』pp.14-18（内田青蔵編『住宅建築文献集成第17巻』柏書房、2011年、pp.536-540所収）
- 建築学会『建築学会会員住所姓名録』大正元年～昭和18年
- 建築設計事務所員懇談会「さらに前進のための協力を：国会図書館競技設計の経過を批判する」『国際建築』21(8)、1954年8月号、pp.8-9
- 幸島礼吉「六坪の母子住宅：“安かろう、せまかろう”でよいか……」『朝日新聞』（東京）、1955年5月26日（朝刊）、p.3

神代雄一郎「コジキの家と坐れぬ椅子：建築展覧会のありかたを考えてみる」『建築文化』10(11)、1955年11月号、p.3

————「英国風紳士 中条精一郎」『新建築』1962年5月号、pp.181-183

————「『誰かのためにした』外柔内剛の長野宇平治」『新建築』1963年4月号、pp.187-189

郡菊夫「建築サロン日記 1954年度」『設計と監理』1(1)、1955年1月、pp.9-10

国際映画通信社編『日本映画事業総覧 昭和5年版』国際映画通信社

————『映画年鑑 昭和編I1 (大正15年版)』日本図書センター、1994年

国立国会図書館編『国立国会図書館三十年史』国立国会図書館、1979年

小林一郎『経書大講 第7巻 詩經中』平凡社、1938年

斎藤素巖「荻島安二氏のこと」『美の国』15(5)、1939年5月号、p.62

佐藤仁「国立国会図書館の機能と計画の基本的な問題」『新建築』1954年9月号、pp.11-14

櫻井忠温「朝日住宅の住心地：気軽な家」『朝日住宅写真集』pp.1-5 (内田青蔵編『住宅建築文献集成第17巻』柏書房、2011年、pp.523-527所収)

佐藤美弥『都市社会における文化活動の研究：兩大戦期の創宇社建築会を中心に』一橋大学博士論文、2010年

佐藤雪夫「葵館のこと」『aoi weekly』(52)、p.5

関忠孝「帝展詣り」『中央美術』10(11)、1924年11月号、pp.78-86

————「二つの傾向」『中央美術』11(11)、1925年11月号、pp.136-137

鈴木重三郎「私のアオイ館に：1周年記念に寄せる」『aoi weekly』(52)、pp.6-7

高木東六「銀座とぼく」『銀座百店』(179)、1969年10月、pp.32-34

————『愛の夜想曲』講談社、1985年

高木圀夫『高木東六ファンタジア』文園社、2002年

高田秀三「第二回建築サロンを見て」『土建情報』4(9)、1950年9月、pp.27-29

高野宏康「震災の記憶」の変遷と展示：復興記念館および東京都慰霊堂収蔵・関東大震災関係資料を中心に」『年報非文字資料研究』(6)、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2010年、pp.37-75

武基雄「国民建築の夜明け前：国立国会図書館設計競技にみる低迷」『新建築』1954年9月号、pp.15-17

田中一郎『郷愁の東京』田中スタジオ、1997年

田中誠「国立国会図書館問題の経過」『設計と監理』1(4)、1955年10月号、pp.2-5

東京住宅協会『港区北部』1960年

塚塚忠躬『史学概論』東京大学出版会、2010年

東京震災記念事業協会編『大正大震災記念建造物競技設計図集』洪洋社、1925年

東京都写真美術館監修『日本の写真家』日外アソシエーツ、2005年

都市建築研究所『コンクリート住宅図集』彰国社、1950年

都市美協会『建築の東京』1935年(復刻：不二出版、2007年)

土木学会誌編集委員会『合意形成論：総論賛成・各論反対のジレンマ』土木学会、2004年

永井荷風『溷東綺譚』新潮社、1951年(青空文庫所収、http://www.aozora.gr.jp/cards/001341/files/52016_42178.html、2017年11月5日閲覧)

中江泰子、井上美子『私達の成城物語』河出書房新社、1996年

南條生「東京映畫瞥見」『キネマ旬報』(178)、1924年11月21日、p.30

日本建築士会編『コンクリート造アパート図集：民間企業としての鉄筋コンクリート造アパートメントハウス懸賞競技設計図集』彰国社、1950年

日本住宅公団20年史刊行委員会『日本住宅公団20年史』日本住宅公団、1975年

野生司義章「1955年建築サロンを省みて」『設計と監理』2(5)、1956年、pp.6-7

野生司義章、緑川正夫、正木一郎「全く異なる二つのゆきかた：国会図書館入選設計をめぐる批判と提案」『国際建築』21(8)、1954年8月号、pp.36-37

野口孝一『銀座カフェー興亡史』平凡社、2018年

美術研究所編『日本美術年鑑』1940年版

兵庫県立兵庫工業高等学校「沿革」<http://www.hyogo-c.ed.jp/~hyogo-ths/intro/history.html>、2015年8月23日閲覧

深水正策「荻島安二の輪郭」『みづゑ』(412)、1939年5月号、pp.529-537

藤井正一郎、鶴巻昭二『日本建築家職能の軌跡：新日本建築家協会の設立まで』日刊建設通信新聞社、1997年
藤谷陽悦「大和郷住宅地の開発」『郊外住宅地の系譜 東京の田園ユートピア』鹿島出版会、1987年
——「田園の100年」『建築雑誌』114(1447)、1999年12月号、pp.26-29
——「成城学園前住宅地と『朝日住宅展覧会』」『住宅建築文献集成第17巻』柏書房、2011年、pp.543-571
藤森照信『タンポポ・ハウスのできるまで』朝日新聞社、2001年
藤森照信、初田亨、藤岡洋保『写真集 幻影の東京』柏書房、1998年
古田保『藤川一秋 犬丸徹三 波多野元二 奥村政雄伝』東洋書館、1955年
法貴顕貞「日本興行会社概論」『日活の社史と現勢』日活の社史と現勢刊行会、1930年
報知新聞社編『山の住宅』洪洋社、1935年
堀野正雄「仕事(1)」『フォトタイムス』7(1)、1930年1月号、pp.116-118
本田晃子『天体建築論：レオニドフとソ連邦の紙上建築時代』東京大学出版会、2014年
前村文博「境界領域としてのフィギュール：清水三重三と荻島安二」『構造社 昭和初期彫刻の鬼才たち展』キュレクターズ、2005年、pp.32-39
松井昭光、本田昭一『近代日本建築運動史』ドメス出版、2003年
三宅周太郎『演劇五十年史』鱒書房、1942年
三國一朗『徳川夢聲の世界』青蛙房、1979年
紫カントリークラブ『むらさきの30年』(非売品)、1991年
紫カントリークラブ『紫カントリークラブすみれコース』(手帳型小冊子)、発行年不明
紫カントリークラブすみれコース「クラブ沿革」
<http://www.murasaki-cc.co.jp/sumire/history.html>、2017年11月3日閲覧
紫カントリークラブすみれコース「2020日本オープンゴルフ選手権開催へ」
<http://www.murasaki-cc.co.jp/sumire/open.html>、2017年11月4日閲覧
村嶋歸之「カフェー考現学」『大正昭和の風俗批評と社会探訪：村嶋歸之著作選集第1巻』柏書房、2004年
村松貞次郎『日本建築家山脈』鹿島出版会、1965年(2005年復刻)
村山知義「荻島安二君の彫塑小展を観る」『アトリエ』2(6)、1925年6月、pp.178-180
——『演劇的自叙伝 2』東邦出版社、1971年
村山知義研究会編『村山知義の宇宙：すべての僕が沸騰する』読売新聞社、2012年
本橋仁「建築イデオロギーの意識的拡張：村山知義と合理派建築会」早稲田大学卒業論文、2008年
本橋仁、中谷礼仁「建築イデオロギーの意識的拡張：村山知義と合理派建築会について」『学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』日本建築学会、2009年、pp.229-230
森田茂介「この秋の二つの“建築展”を見て」『建築文化』1955年11月号、p.5
八束はじめ『思想としての日本近代建築』岩波書店、2005年
山岡真澄、丹羽和彦「明治末期から大正期の中流住宅案にみられる『ハッチ』について」『日本建築学会中国支部研究報告集』(21)、1998年、pp.485-488
山崎晶子、鯉坂徹、松田宏、土谷耕介、小幡一隆「成城地区における近代住宅と街並みの保存再生に関する研究」『住総研研究年報』(30)、2003年、pp.65-76
山口文象 年末アンケートへの回答『新建築』1955年12月号、p.65
大和郷会『人名録』昭和9年頃
大和郷会 会史編纂委員会『大和郷遠近物語：大和郷会90年のあゆみ』大和郷会、2015年
吉川清作「結婚住宅の提唱」『住宅』20(222)、1935年4月号、pp.269、271
——「新コンクリート住宅」『建築文化』1950年4月号、pp.32-33
——「コンクリート住宅について」『建築文化』1954年4月号、p.1
——「審査について」『建築文化』1954年8月号、p.33
——「建築批評の片手落ち」『建築雑誌』70(819)、1955年2月号、p.47
吉阪隆正「建築設計及び都市計画の競技規定の必要」『新建築』1954年9月号、p.17
吉島保「鷗洲の建築金物に就て」『建築設備』4(1)、1937年1月、pp.13-19
——「新しいコンクリート工法」『建築文化』(42)、1950年5月号、pp.35-37
吉原健一郎、大濱徹也編『増補版 江戸東京年表』小学館、2002年

和田清美「戦前期住宅地開発の展開とその特質：日暮里渡辺町、駒込大和郷の事例を中心として（その一）」『応用社会学研究』（26）、立教大学社会学部、1985年、pp.141-160

著者名不明（発行年順）

「K氏邸」『建築写真類聚 第4期 第21回 文化住宅』洪洋社、1924年、pp.101-111

「神田日活館・京橋日活館」『建築写真類聚 第14 活動写真館』洪洋社、1924年

「神田日活館・京橋日活館」『建築新潮』5(7),(8)、1924年、洪洋社、口絵

「日活の假移轉」『キネマ旬報』（147）、1924年1月1日、p.13

『マヴォ』第3号、1924年9月

「映画常設館見聞さまざま その一 葵館」『キネマ旬報』（182）、1925年1月11日、p.34

「K氏邸」『建築新潮』6(2)、1925年2月号、口絵

「國際聯盟會館建築競技設計に就いて」『建築雑誌』40(488)、1926年10月号、p.979

「我れ劣らじと出来る大劇場」『朝日新聞』1928年8月4日、p.2

「丸の内劇場と銀座劇場との合併は喧嘩別れ」『読売新聞』1928年10月26日、p.12

『朝日住宅図案集：懸賞中小住宅八十五案』朝日新聞社、1929年

「朝日住宅四號型」『婦人之友』23(12)、1929年12月号、p.5

「すぐ参考に、八十五の住宅案」『朝日新聞』（東京）1929年5月17日（朝刊）、p.11

『合理派建築』合理派建築会、1929年

「朝日住宅展」『アサヒグラフ』1929年11月6日、pp.16-17

「朝日住宅展売約続々」『朝日新聞』（東京）1929年11月21日（朝刊）、p.7

『朝日住宅』合評會『建築画報』21(1)、1930年、pp.7-19

「朝日住宅4號型外觀と平面図」『建築画報』21(1)、1930年、fig.13-14

「フォトタイムス芸術賞牌 荻島安二作」『フォトタイムス』8(4)、1931年4月号、広告

『東京市庁舎建築設計懸賞競技入賞図集』東京市、1934年

「輝く金の・1万円 東京市庁舎設計当選発表」『朝日新聞』（朝刊）1934年6月2日、p.11

「新市庁舎設計当選者決る」『読売新聞』（朝刊）1934年6月2日、p.7

「東京市庁舎建築設計競技審査報告書」『官報』1934年6月11日、p.282

「放浪から転向『生活の設計』姿を消してみた吉川清作君千円十五坪の家に」『朝日新聞』1934年12月19日、p.13

「ウィーン派の人々の新住宅」『住宅』1935年1月号

「建築家・吉川清作氏の住宅」『住宅』20(222)、1935年4月号、pp.230-233

「渡邊氏邸」『住宅』20(222)、1935年4月号、pp.234-235

「報知新聞社懸賞募集『山の住宅』について」『住宅』20(224)、1935年6月号、pp.406-407

「勝田氏邸」『住宅』20(233)、1935年10月号、p.329

「カメラアート大賞牌：荻島安二氏製作」『カメラアート』4(5)、1936年11月号、広告頁

「伊藤谷藏氏死去」『読売新聞』（夕刊）1943年8月4日、p.2

「第一回建築サロン懸賞競技募集規定」『建築と社会』1949年7月号、p.34

「市街地に建つ鋼筋コンクリート造アパート懸賞競技設計」『建築文化』1949年10月号、pp.8-17

「人物素描」『都政人』都政人協会、1949年12月号、p.14

「輕鋼コンクリート造住宅」『建築文化』（38）、1950年1月号、pp.14-17

「1950年建築サロン」『建築文化』（48）、1950年11月号、pp.30-31

「1950年度建築サロン」『建築雑誌』65(768)、1950年11月号、p.31

『日活四十年史』日活株式会社、1952年

「ルーフガーデンを持つF氏邸」『建築文化』1952年7月号、pp.14-19

「高台に建つF氏邸」『建設情報』6(9)、1952年9月号

「S.T.邸」『建築文化』7(11)、1952年11月号、pp.18-21

「一虎園」『建築文化』8(11)、1953年11月号、pp.6-10

「建築サロン-1953-」『建築文化』8(12)、1953年12月号、p.29

「K氏邸計画案」『建築文化』9(4)、1954年4月号、p.2

「安井君の家」『建築文化』9(7)、1954年7月号、p.29

「国会図書館の設計競技終る」『国際建築』21(7)、1954年7月号、p.54

「国立国会図書館懸賞競技設計入選案」『建築文化』1954年8月号、p.22

「低廉住宅二題」『建築文化』9(9)、1954年9月号、pp.22-23

「会員動静」『設計と監理』1(1)、1955年、p.41

「本会記事」『設計と監理』1(1)、1955年、p.46

「本会記事」『設計と監理』1(4)、1955年、p.39

「CURRENT NEWS:国会図書館の設計料問題」『建築文化』(99)、1955年2月号、p.46

「Nさんの家」『建築文化』(99)、1955年2月号、pp.1-5

「本会記事：国立国会図書館建築設計に関する意見書」『建築雑誌』1955年7月号、p.69

「しんけんちく・にゅーす：『建築サロン』名古屋に進出」『新建築』1955年11月号、p.5

「1955 建築サロン 記録」『設計と監理』2(5)、1956年、pp.33-35

「本会記事」『設計と監理』2(5)、1956年、p.39

「本会記事」『設計と監理』2(7)、1956年、p.36

「喫茶店・ビエン」『建築文化』11(4)、1956年4月号、pp.26-27

『佐藤三吉先生伝』佐藤三吉先生記念出版委員会、1961年

「紫カントリークラブ・ハウス」『新建築』36(6)、1961年6月号、pp.68-72

『日活』現代企業研究会、1962年

『日活五十年史』日活株式会社、1962年

「紫カントリークラブハウス」『近代建築』1962年2月、pp.61-68

「自由業にも独禁法適用 建築家協会に違反審決」『朝日新聞』（東京）、1979年9月20日（朝刊）、p.1

『モダン東京狂詩曲 図録』東京都写真美術館、1993年

『建築設計競技選集 1945-1960』メイセイ出版、1995年

「紫カントリークラブ紫あやめ36」『商店建築』56(3)、2011年3月号、pp.186-189

「藤川一秋」『デジタル版日本人名辞典大辞典+Plus』（コトバンク所収）、
<http://kotobank.jp/word/藤川一秋-1105190>、2014年11月5日閲覧

『生誕100年 写真家・濱谷浩』クレヴィス、2015年

「加藤静夫」『デジタル版 日本人名大辞典+Plus』（コトバンク所収）
<https://kotobank.jp/word/%E5%8A%A0%E8%97%A4%E9%9D%99%E5%A4%AB-1066012>、2016年9月17日閲覧

「堀久作」『20世紀人名辞典』（コトバンク所収）、<https://kotobank.jp/word/堀+久作-1654550>、2017年11月1日閲覧

「藤山愛一郎」『近代日本人の肖像』国立国会図書館
<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/382.html?cat=56>、2017年11月4日閲覧

「空に補助線を…。：マッチ・コレクション/東京・銀座 クラブ『サイセリヤ』（CLUB SAISERIYA）」
<https://auxiliarylines.wordpress.com/2017/05/08/>、2017年11月5日閲覧

「空に補助線を…。：マッチ・コレクション/喫茶・レストラン『サイセリヤ』」
<https://auxiliarylines.wordpress.com/2016/10/27/>、2017年11月5日閲覧

「会社情報・製品情報」旭硝子株式会社、
<http://www.agc-glass.com/ir/library/outline/pdf/sankou.pdf>、2017年11月5日閲覧

「Café littéraire」Wikipedia（フランス語版）、https://fr.wikipedia.org/wiki/Café_littéraire、2018年3月19日閲覧

『銀座15番街 加盟店紹介』http://www.ginza15.jp/inter_166.html、2018年3月26日閲覧

図版出典

- 口絵 1-2 東京震災記念事業協会編『大正大震災記念建造物競技設計図集』洪洋社、1925年、図 29-31
- 口絵 3 『東京市庁舎建築設計懸賞競技入賞図集』東京市、1934年
- 口絵 4 『朝日住宅図案集：懸賞中小住宅八十五案』朝日新聞社、1929年
- 口絵 5-7 筆者撮影（2017年）
- 口絵 8 「Nさんの家」『建築文化』（99）、1955年2月号、p.1
- 図 1 「放浪から転向『生活の設計』姿を消してゐた吉川清作君千円十五坪の家に」『朝日新聞』1934年12月19日
- 図 2 吉川清子さん提供
- 図 3-27 工学博士大熊善邦先生閱 吉川清作君案 洪洋社編集局編『現代の住宅』洪洋社、1920年
- 図 28-33 『建築写真類聚 第14 活動写真館』洪洋社、1924年
- 図 34 『朝日新聞』1924年5月14日（夕刊）、p.2
- 図 35 『建築新潮』5(8)、1924年、洪洋社、口絵
- 図 36 神田日活館『日活週報』第34号、1924年、表紙
- 図 37 『日活五十年史』日活株式会社、1962年、p.15
- 図 38-39 『KANDA NIKATSU』No.1、1929年7月13日発行
- 図 40 『日活の社史と現勢』日活の社史と現勢刊行会、1930年、口絵
- 図 41-42 建築写真類聚刊行会編『建築写真類聚 第14 活動写真館』洪洋社、1924年
- 図 43 『朝日新聞』1924年3月31日（夕刊）、p.2
- 図 44-47 建築写真類聚刊行会編 1924
- 図 48 三國一郎『徳川夢聲と世界』青蛙房、1979年、p.133
- 図 49-54 建築写真類聚刊行会編『建築写真類聚 第5期 第16 活動写真館巻2』洪洋社、1926年
- 図 55-56 村山知義研究会編『村山知義の宇宙：すべての僕が沸騰する』読売新聞社、2012年、p.123
- 図 57 三國 1979:139
- 図 58 村山知義『演劇的自叙伝2』東方出版社、1971年、口絵
- 図 59 『構造社 昭和初期彫刻の鬼才たち展』キュレーターズ、2005年、p.67
- 図 60-61 『合理派建築』合理派建築会、1929年、p.5
- 図 62-64 村山知義研究会編 2012:121, 123
- 図 65 建築写真類聚刊行会編 1926
- 図 66 「映画常設館見聞さまざま その一 葵館」『キネマ旬報』（182）、1925年1月11日、p.84
- 図 67 『建築の東京』都市美協会、1935年、Fig.257（復刻：不二出版、2007年）
- 図 68 『aoi weekly』（78）、1926年4月16日、表紙
- 図 69 『aoi weekly』（61）、1925年12月18日、表紙
- 図 70 『aoi weekly』（49）、1925年9月25日、p.8
- 図 71 大和郷会会史編纂委員会『大和郷遠近物語：大和郷会90年のあゆみ』大和郷会、2015年、p.33
- 図 72-82 『建築写真類聚 第4期 第21回 文化住宅』洪洋社、1924年、pp.101-111
- 図 83 藤谷陽悦「大和郷住宅地の開発」『郊外住宅地の系譜：東京の田園ユートピア』鹿島出版会、1987年、p.149
- 図 84 『佐藤三吉先生伝』佐藤三吉先生記念出版委員会、1961年、口絵
- 図 85 大和郷会会誌編纂委員会 2015:52-53 に加筆
- 図 86-87 東京震災記念事業協会編『大正大震災記念建造物競技設計図集』洪洋社、1925年
- 図 88 「【1940年】アルコールバー（昭和15年）▷「バー・サイセリア」（西銀座）」『ジャパンアーカイブス 1850-2100』<https://jaa2100.org/entry/detail/050259.html>、2018年5月2日閲覧
- 図 89 前村文博「境界領域としてのフィギュール：清水三重三と荻島安二」『構造社 昭和初期彫刻の鬼才たち展』キュレーターズ、2005年、p.38
- 図 90 『合理派建築』（前掲）、p.4
- 図 91 渡邊朱美さん提供
- 図 92 田中一郎『郷愁の東京』田中スタジオ、1997年、p.62
- 図 93 『モダン東京狂詩曲 図録』東京都写真美術館、1993年、p.94

- 図 94 『生誕 100 年 写真家・濱谷浩』クレヴィス、2015 年、p.54
- 図 95-98 渡邊朱美さん提供
- 図 99-100 「空に補助線を…。：マッチ・コレクション/東京・銀座 クラブ『サイセリヤ』(CLUB SAISERIYA)」
<https://auxiliarylines.wordpress.com/2017/05/08/>、2017 年 11 月 5 日閲覧
- 図 101 『合理派建築』(前掲)、p.7
- 図 102-103 村山知義研究会編 2012:125
- 図 104-106 『朝日住宅図案集：懸賞中小住宅八十五案』朝日新聞社、1929 年
- 図 109 『婦人の友』23(12)、1929 年 12 月号、p.5
- 図 110-112 『建築画報』21(1)、1930 年 1 月号、口絵
- 図 113-118 『朝日住宅写真集』朝日新聞社、1930 年(復刻：内田青蔵編『住宅建築文献集成 第 17 巻』柏書房、2011 年、pp.417,447-451)
- 図 119-121 藤谷陽悦「成城学園前住宅地と『朝日住宅展覧会』」同書、pp.548-549,556
- 図 122-123 『東京市廳舎建築設計懸賞競入選圖集』東京市役所、1934 年
- 図 124 「放浪から転向「生活の設計」姿を消してみた吉川清作君千円十五坪の家に」『朝日新聞』1934 年 12 月 19 日、p.13
- 図 125-137 「建築家・吉川清作氏の住宅」『住宅』20(222)、1935 年 4 月、pp.230-233
- 図 138 吉川清子さん提供
- 図 139 渡邊朱美さん提供
- 図 140 高木罔夫『高木東六ファンタジア』文園社、2002 年、p.9
- 図 141-145, 148 「渡邊氏邸」『住宅』20(222)、1935 年 4 月号、p.234
- 図 146-147, 149-151 渡邊朱美さん提供
- 図 152 吉川清子さん提供
- 図 153-154 「勝田氏邸」『住宅』20(233)、1935 年 10 月号、p.329
- 図 155 『フォトタイムス』8(4)、1931 年 4 月号、広告
- 図 156-158, 160-163 「軽鋼コンクリート造住宅」『建築文化』(38)、1950 年 1 月号、pp.14-16
- 図 159 筆者撮影
- 図 164-173 都市建築研究所『コンクリート住宅図集』彰国社、1950 年
- 図 174-189 「ルーフガーデンを持つ F 氏邸」『建築文化』1952 年 7 月号、pp.14-19
- 図 190-202 「一虎園」『建築文化』8(11)、1953 年 11 月号、pp.6-10
- 図 203 古田保『藤川一秋 犬丸徹三 波多野元二 奥村政雄伝』東洋書館、1955 年、口絵
- 図 204 「K 氏邸計画案」『建築文化』9(4)、1954 年 4 月号、p.2
- 図 205-206, 208-211 「N さんの家」『建築文化』(99)、1955 年 2 月号、pp.1-5
- 図 207 筆者撮影
- 図 212-216 「2 等：吉川清作君外 3 名」『建築雑誌』69(813)、1954 年 8 月号、pp.33-35
- 図 217-219 神代雄一郎「コジキの家と坐れぬ椅子：建築展覧会のありかたを考えてみる」『建築文化』10(11)、1955 年 11 月号、p.3
- 図 220-224, 227 「紫カントリークラブ・ハウス」『新建築』36(6)、1961 年 6 月号、pp.68-72
- 図 225-226 筆者撮影
- 図 228-231, 233-237 「紫カントリークラブハウス」『近代建築』1962 年 2 月、pp.61-68
- 図 232 筆者撮影
- 図 238-240 『合理派建築』(前掲)、表紙および p.8
- 図 241 「S.T.邸」『建築文化』7(11)、1952 年 11 月、p.19
- 図 242 「喫茶店ビエン」『建築文化』11(4)、1956 年 4 月、p.26
- 図 243 「安井君の家」『建築文化』9(7)、1954 年 7 月、p.29
- 図 244 筆者作成

表紙・裏表紙：建築写真類聚刊行会編『建築写真類聚 第 5 期 第 16 活動写真館巻 2』洪洋社、1926 年

吉川清作（都市建築研究所）作品リスト

ここでは、文献から確認できる吉川清作および都市建築研究所の作品をまとめた。

年	名称	構造・建坪	現況	敷地	掲載誌・備考
1920	『現代の住宅』<1> (上流住宅)	平屋一部2 階建・日本 館 355+洋 館 184+土 蔵 13.75 坪	計画案		現代の住宅 p.1
	『現代の住宅』<2> (上流住宅)	平屋一部2 階建・洋館 90+日本館 225+土蔵 15 坪	計画案		現代の住宅 p.2
	『現代の住宅』<3> (上流住宅)	平屋一部2 階建・洋館 87.25+日本 館 225+土 蔵 15 坪	計画案		現代の住宅 p.3
	『現代の住宅』<4> (上流住宅)	2 階建・221 坪	計画案		現代の住宅 p.4
	『現代の住宅』<5> (上流住宅)	2 階建・洋 館 39.5+日 本館 173+ 土蔵 8.75 坪	計画案		現代の住宅 p.5
	『現代の住宅』<6> (邸宅)	2 階建・ 76.75 坪	計画案		現代の住宅 p.6
	『現代の住宅』<7> (邸宅)	2 階建・78 坪	計画案		現代の住宅 p.7
	『現代の住宅』<8> (邸宅)	2 階建・79 坪	計画案		現代の住宅 p.8
	『現代の住宅』<9> (邸宅)	平屋建・84 坪	計画案		現代の住宅 p.9
	『現代の住宅』<10> (邸宅)	2 階建・84 坪	計画案		現代の住宅 p.10
	『現代の住宅』<11> (邸宅)	平屋建・ 98.25 坪	計画案		現代の住宅 p.11
	『現代の住宅』<12> (邸宅)	2 階建・98 坪	計画案		現代の住宅 p.12
	『現代の住宅』<13> (邸宅)	平屋建・ 129.5 坪	計画案		現代の住宅 p.13
	『現代の住宅』<14> (邸宅)	平屋建・ 130 坪	計画案		現代の住宅 p.14
	『現代の住宅』<15> (邸宅)	平屋建・ 137.5 坪	計画案		現代の住宅 p.15

『現代の住宅』 <16> (邸宅)	2 階建・ 138.25 坪	計画案		現代の住宅 p.16
『現代の住宅』 <17> (邸宅)	2 階建・建 坪記載なし	計画案		現代の住宅 p.17
『現代の住宅』 <18> (邸宅)	平屋建・ 179.75 坪	計画案		現代の住宅 p.18
『現代の住宅』 <19> (中流住宅)	2 階建・36 坪	計画案		現代の住宅 p.19
『現代の住宅』 <20> (中流住宅)	平屋建・39 坪	計画案		現代の住宅 p.20
『現代の住宅』 <21> (中流住宅)	2 階建・41 坪	計画案		現代の住宅 p.21
『現代の住宅』 <22> (中流住宅)	平屋建・ 甲:41.25 坪 乙:39.75 坪	計画案		現代の住宅 p.22
『現代の住宅』 <23> (中流住宅)	平屋建・42 坪	計画案		現代の住宅 p.23
『現代の住宅』 <24> (中流住宅)	2 階建・ 50.5 坪	計画案		現代の住宅 p.24
『現代の住宅』 <25> (中流住宅)	平屋一部 2 階建・55 坪	計画案		現代の住宅 p.25
『現代の住宅』 <26> (中流住宅)	2 階建・ 52.5 坪	計画案		現代の住宅 p.26
『現代の住宅』 <27> (中流住宅)	平屋建・ 58.25 坪	計画案		現代の住宅 p.27
『現代の住宅』 <28> (小住宅)	2 階建・9.5 坪	計画案		現代の住宅 p.28
『現代の住宅』 <29> (小住宅)	平屋建・11 坪	計画案		現代の住宅 p.29
『現代の住宅』 <30> (小住宅)	2 階建・16 坪	計画案		現代の住宅 p.30
『現代の住宅』 <31> (小住宅)	平屋建・ 16.5 坪	計画案		現代の住宅 p.31
『現代の住宅』 <32> (小住宅)	2 階建・ 20.25 坪	計画案		現代の住宅 p.32
『現代の住宅』 <33> (小住宅)	2 階建・24 坪	計画案		現代の住宅 p.33
『現代の住宅』 <34> (小住宅)	2 階建・24 坪	計画案		現代の住宅 p.34
『現代の住宅』 <35> (小住宅)	2 階建・25 坪	計画案		現代の住宅 p.35
『現代の住宅』 <36> (小住宅)	2 階建・ 26.5 坪	計画案		現代の住宅 p.36
『現代の住宅』 <37> (小住宅)	平屋建・26 坪	計画案		現代の住宅 p.37
『現代の住宅』 <38> (小住宅)	平屋建・27 坪	計画案		現代の住宅 p.38

	『現代の住宅』 <39> (貸住宅)	平屋建・甲 6.25 坪・乙 7.5 坪	計画案		現代の住宅 p.39
	『現代の住宅』 <40> (貸住宅)	2 階建・7.5 坪	計画案		現代の住宅 p.40
	『現代の住宅』 <41> (貸住宅)	2 階建・8 坪	計画案		現代の住宅 p.41
	『現代の住宅』 <42> (貸住宅)	2 階建・9 坪	計画案		現代の住宅 p.42
	『現代の住宅』 <43> (貸住宅)	2 階建・9.5 坪	計画案		現代の住宅 p.43
	『現代の住宅』 <44> (貸住宅)	2 階建・ 10.5 坪	計画案		現代の住宅 p.44
	『現代の住宅』 <45> (貸住宅)	2 階建・12 坪	計画案		現代の住宅 p.45
	『現代の住宅』 <46> (貸住宅)	2 階建・ 12.25 坪	計画案		現代の住宅 p.46
	『現代の住宅』 <47> (貸住宅)	2 階建・14 坪	計画案		現代の住宅 p.47
	『現代の住宅』 <48> (貸住宅)	2 階建・15 坪	計画案		現代の住宅 p.48
	『現代の住宅』 <49> (貸住宅)	2 階建・16 坪	計画案		現代の住宅 p.49
	『現代の住宅』 <50> (貸住宅)	2 階建・18 坪	計画案		現代の住宅 p.50
1924	神田日活館		非現存	表猿楽町 25 (現 神田神保町 1-6- 1)	建築新潮 5 年 8 号口絵 建築写真類聚活動写真館
	京橋日活館		非現存	京橋区具足町 5(現京橋 3-7-6)	同上
	葵館		非現存	東京赤坂葵橋 (現東京都港区 赤坂 1-1-17)	大正期新興美術運動資料 集成 p.367 建築新潮 6 年 1 号口絵 村山知義・荻島安二と協 働
	K 氏邸 (加藤静夫邸)	W・2 階 建・46.5 坪	非現存	小石川大和村第 6 区 175 番地 (現本郷 6 丁 目)	建築新潮 6 年 2 号口絵 建築写真類聚 文化住宅 第 4 期巻 3 (類聚が 1924.9 発行)
1925	大正大震災記念建造物競技 設計 (佳作)		計画案	東京市本所区横 綱町二丁目横綱 公園 (陸軍被服 廠跡、現東京都 慰霊堂)	大正大震災記念建造物競 技設計図集 図 29-31
1925- 26 頃	銀座サイセリア (初代)		不詳	不詳	合理派建築 p.4 設計: 荻島安二

1927	ジュネーブ国際連盟会館設計競技案		計画案		読売新聞（朝刊） 1934.6.2 p.7 合理派建築 pp.6-7
1928	佐藤三吉邸		非現存 （戦災により 焼失）	小石川大和村第 10区229番地 （本郷6丁目）	合理派建築 目次 佐藤三吉先生伝
1929 以前	報知新聞社住宅懸賞図案 （一等案）		計画案		合理派建築 目次 詳細不明
	米山米吉邸		?	小石川大和村第 7区209番地 （本郷6丁目）	合理派建築 目次
	浅草デパートメント設計		計画案?		同上
	銀座劇場新築設計		?		同上
1929	山の手美容院（吉行あぐり 美容室）	W・モルタル 塗・30坪 程度	非現存 （戦中 に取壊し）	市ヶ谷駅前	大正期新興美術資料集成 p.194 村山知義と協働？ ※吉川が関与した直接的 な証拠はない
	朝日住宅設計 （4号型）（乙種金賞） （前田美容室/前田実愛 邸）	RC・12.375 坪	非現存 （1956- 1963年 の間に 取り壊し）	東京都世田谷区 成城5丁目10-7 付近	朝日住宅図案集 pp.21- 27 朝日住宅写真集 住宅設計：吉川清作 電気設計：合理派建築会 建築請負：合理派建築会
1930 年以 前？	バー・サイセリア	?	非現存	銀座西五丁目三 番地（現 東京都 中央区銀座5丁 目4-7付近）	インテリアは荻島安二？ 吉川が建物を設計？（渡 邊朱美さんによる）
1934	東京市庁舎設計懸賞競技 （2等）		計画案		東京市庁舎建築設計懸賞 競技入選図集 pp.9-13
1935	吉川清作自邸（第1期/下 の家）	W?・2階 建・15坪	非現存	神奈川県横浜市 鶴見区豊岡町付 近	住宅 1935年4月号 pp.230-233 朝日新聞 1934.12.19 p.13
	渡邊隆邸（高木東六邸）	W?・2階建	非現存	神奈川県横浜市 鶴見区寺谷 ⁽³⁾	住宅 1935年4月号 pp.234-235 渡邊朱美さんによる 施工：青木工務店？
	勝田康雄邸	W?・2階 建・14.62 坪	?	東京府砧村	住宅 1935年5月号 p.329
1935 頃？	住宅	2階建	非現存	神奈川県横浜市 鶴見区寺谷付近 ⁽³⁾	吉川清子さん提供の写真 による

	吉川清作アトリエ(小屋)	W・2階建	非現存	神奈川県横浜市 鶴見区豊岡町付 近	渡邊朱美さんによる ※ただし吉川の設計かど うかは明らかでない
戦中- 1950 頃?	吉川清作自邸(第2期/初代 上の家)	?	非現存 (1961 年まで に取壊)	神奈川県横浜市 鶴見区寺谷 ⁽³⁾	吉川清子さんによる 白く四角い家
1950	国際コンクール出品作品ー 住宅の合理化と小・中住宅 (1950年建築サロン出 品)	?	?	?	建築文化 1950.11 (No.48) p.30 詳細不明(受賞した可能 性あり)
	テスト住宅その1(新コン クリート住宅)	RC・平屋 建・12坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 pp.6-8 建築文化 1950.4 p.32 設計:吉川清作
	テスト住宅その2(軽鋼コ ンクリート造住宅・渡邊朱 美邸)	RC・平屋 建・7.5坪	現存	神奈川県横浜市 鶴見区寺谷 ⁽³⁾	コンクリート住宅図集 pp.9-11 建築文化 1950.1 pp.14- 17 設計:吉川清作・吉島保 施工:青木工務店
	タタミの寝室のある住宅	RC・平屋 建・18.5坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 pp.12-13
	道より高い土地にある住宅	RC・平屋 建・16坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 pp.14-15
	プランタムのある住宅	RC・平屋 建・30坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 pp.16-17
	コンクリート造の特徴を現 す住宅	RC・2階 建・29.8坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 pp.18-19
	成長する新婚住宅	RC・平屋 建・11.5坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 pp.20-21
	連続するメートル	RC・2階 建・28坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 p.22
	標準型住宅	RC・平屋 建・17坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 p.23
	ピロティーで2階を突出し た住宅	RC・2階 建・29.5坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 pp.24-25
	5つの寝室をもつ MODERNE HOUSE	RC・2階 建・73坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 pp.26-29
	感覚的なサロン	RC・平屋 建・28坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 pp.30-31
	四つの寝室をもつ住宅	RC・2階 建・36坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 pp.32-33
	進出する美しい KICHEN	RC・平屋 建・25.25 坪	計画案 ⁽¹⁾		コンクリート住宅図集 pp.34-35

	外塀を利用した住宅	RC・平屋 建・24坪	計画案 ¹		コンクリート住宅図集 pp.36-37
	夫婦本位の住宅	RC・平屋 建・10坪	計画案 ¹		コンクリート住宅図集 pp.38-39
	ソーラーハウス	RC・平屋 建・19坪	計画案 ¹		コンクリート住宅図集 pp.40-41
	能率的な朝食堂	RC・平屋 建・25坪	計画案 ¹		コンクリート住宅図集 pp.42-43
	空中住宅その1	RC・平屋 建・22坪	計画案 ¹		コンクリート住宅図集 pp.44-45
	空中住宅その2	RC・2階 建・17.5坪	計画案 ¹		コンクリート住宅図集 pp.46-47
	ギャラリーとテラス	RC・2階 建・26坪	計画案 ¹		コンクリート住宅図集 pp.48-49
	アウトドアリビングを持つ 住宅	RC・平屋 建・25坪	計画案 ¹		コンクリート住宅図集 p.50 建築文化 1950.4 p.33 設計：片岡靖忠
	ルーフガーデンの楽しさ	RC・2階 建・46.3坪	計画案 ¹		コンクリート住宅図集 pp.51-53
	試作的なプラン	RC・2階 建・28坪	計画案 ¹		コンクリート住宅図集 pp.54-55
	バルコニーのある2階建て 住宅	RC・2階 建・37.7坪	計画案 ¹ (²)		コンクリート住宅図集 pp.56-57
	子女教育型のプラン	RC・平屋 建・29坪	計画案 ¹		コンクリート住宅図集 p.58
1952	ルーフガーデンを持つF氏 邸（藤川一秋邸）	RC・3階 建・150坪	非現存	東京都港区赤坂 7丁目5-27（現 パインクレスト 赤坂）	建築文化 1952.7 pp.14- 19、建設情報 6(9) 設計：都市建築研究所 （担当：吉川晴夫、窪田 保彦、岩本篤、田中温 子） 施工：岩本建設株式会社 家具：大林工業株式会社
	一虎園（一虎庵）	W・平屋建	非現存	同上	建築文化 1953.11 pp.6- 10 設計：都市建築研究所 （吉川清作、窪田保彦、 近藤洋子） 施工：直営、大工棟梁 斎藤周三郎、左官 松村 政吉、建具 佐藤周三、 サッシュ 不二サッシ ュ、屋根瓦 花川一英、 植木 丸山林蔵 工費：坪当たり 14 万円 着工：昭和 23 年 3 月？

					竣工：昭和 27 年 9 月？
1954	K 氏邸計画案（小島邸）	RC・2 階建	非実現	東京都千代田区 一番町 29-3（現 進興ビルディング）	建築文化 1954.4 p.2 有山房徳さんのお話による
	国立国会図書館建築設計競技 2 等案	RC	計画案	東京都千代田区 永田町 1-10-1	国際建築 1954.6 p.54 新建築 1954.9 p.11
	N さんの家（中島篤志邸）	W・平屋 建・22.77 坪	非現存 （1984 年取壊）	東京都世田谷区 赤堤 3 丁目 12-8	建築文化 1955.2 p.1 担当：岩本（岸本？）洋子、加藤友子、岩下綾子 指導：窪田保彦 着工：1954 年 10 月 22 日 竣工：1954 年 12 月 29 日
1955	乞食の家（第 5 回建築サロン出品作品）	煉瓦造・平屋建・5.5 坪	計画案		建築文化 1955.11 p.3
1961 以前	吉川清作別荘	2 階建	非現存	伊東	吉川清子さんの話による切妻屋根を伏せたような形の別荘。三角形のモチーフを多用
1961	紫カントリークラブハウスすみれコース	RC・3 階建	現存	千葉県野田市目吹 111	新建築 1961.6 pp.68-72 読売新聞 1970.11.8 p.27
	紫カントリークラブハウスあやめコース	RC・中 3 階建・425 坪	非現存	千葉県野田市鶴奉 463-1	建築文化 1962.2 pp.61-66
1965 頃	吉川清作自邸（第 3 期/2 代上の家）	RC・3 階建	非現存 (2012 年取壊)	神奈川県横浜市鶴見区寺谷 ³	吉川清子さんの話による
?	星野温泉の建物	?	実現？	軽井沢	同上 星野温泉（現星野リゾート）の社長と知り合いの縁で、当地に星野温泉関係の建物を建てたという。 渡辺朱美さんのお話によると、吉島という建築家と吉川の共同設計になるらしい。朱美さんは、吉川清作氏（もしくは晴夫さん？）と吉島と一緒にこの建物の建設中に星野温泉を訪ねたことがあったという。今のように星野温泉が大きくなる前で、池の近くの、客室棟

					のようなものであったという。
?	藤山愛一郎邸	純和風・増築?	実現?	白金台	渡辺朱美さんへのヒアリングによる 温室もあったという
以下、吉川清作が直接設計したものではないが、関係のあるものについて補記する。					
1934	報知新聞社懸賞募集「山の住宅」		審査員として参加		報知新聞社編『山の住宅』洪洋社、1935年 吉川は佐藤功一、土浦信子と審査員を務めた
1946頃	クラブ・サイセリア		不詳	銀座7丁目2番地（現 東京都中央区銀座7丁目8-17 虎屋銀座ビル付近）	バー・サイセリアが戦後に移転したもの
1948	小住宅図譜		計画案		遠藤正巳設計 新住宅(12), 1948.2
1949	市街地に建つ鋼筋コンクリート造アパート懸賞競技設計（2等当選）（日本建築士会主催・第1回建築サロンにて展示）		計画案		吉川康夫設計 建築文化 1949.10 pp.10-11
1952	S.T.邸（関忠孝邸か？）	コンクリートブロック型枠造・2階建・42坪	実現	?	遠藤正巳設計- 建築文化 1952.11 (Vol.7 No.11) pp.18-21
1954	安井君の家	W・平屋建・18.416坪	実現	浦和	窪田保彦設計 建築文化 1954.7 p.29
	N邸（低廉住宅二題）	W・平屋建・12坪	実現	東京・練馬	建築文化 1954.9 (Vol.9 No.9) p.22 遠藤正巳設計、直営
	Y邸（低廉住宅二題）	W・平屋建・13.5坪	実現	東京・練馬	建築文化 1954.9 (Vol.9 No.9) p.23 遠藤正巳設計、直営
	高台の小住宅	コンクリートブロック造・平屋建	実現	東京・五反田	遠藤正巳設計、金尾勇工務店施工 建築文化(89), 1954.4 国際建築 21(5), 1954.5
1956	喫茶店・ピエン	内装設計	実現	東京・駒込	1955年頃には都市建築研究所員であった窪田和彦が石川建築設計所の担当者として設計した作品。 建築文化 1956.4 pp.26-27

1) これらは写真や実現した旨の記述が確認されていないため、計画案として取り扱っている。中には実現したものが含まれている可能性もある。また、図面表現を見るとかなり技法が様々だがあとがきに「若い研究所員の最も時宜にかなったテーマ良い研究テーマだと思ったので快諾した」「(既存の書物を参照するのではなく)全部新しい設計図を作ることにした」とあるから、この話があってから、それぞれの所員が書き起こしたものと思われる。正確な時期は分からないので、出版年の1950年で統一した。

2) この建物については、クライアントの主婦の話として「客を此処へ案内すると変化があって面白いと喜ばれます」とあるが、これも同様に創作と思われる。

3) 個人宅のうち現存するもの、および現在もご遺族の方が当地付近にお住まいの場合は、住所表記の一部を省略した。

凡例：

W:木造 RC:鉄筋コンクリート造 ?:未確認もしくは不正確な情報

初出一覧

本稿は2017年度早稲田大学創造理工学部建築学科卒業論文「吉川清作の生涯と作品：特に合理派建築会結成に際して果たした役割について」および以下の論考を改稿したものです。

「吉川清作と乞食の家(1)」『建築都市文化史誌 aft』第1号(2015年11月)

「吉川清作と乞食の家(2)」同 第2号(2016年2月)

「吉川清作と乞食の家(3)」同 第3号(2016年5月)

「吉川清作と乞食の家(4)」同 第4号(2016年9月)

建築都市文化史誌 aft 特別増刊：建築家 吉川清作の生涯と作品

発行日：2017年12月1日 / 発行人：落合悠斗 / 発行所：明日の建築会

〒630-8227 奈良県奈良市林小路町1-1 KBK 高天ビル 412号

Eメール：asunokenchiku@yahoo.co.jp ウェブサイト：<https://sites.google.com/site/aftkenchiku/>

Twitter：@asunokenchiku / 印刷所：株式会社 栄光

Print ISSN 2189-5600 / OCLC No. 931926534

本書は CC-BY-NC-ND 4.0 国際ライセンスのもとで自由に利用することができます。ライセンスの詳細については <http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>を参照するか、Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA までお問い合わせください。

